

一橋基督教青年会

～130 年史～



2020 年 1 月完成予定「YMCA 一橋ホール(前面)」予想図(実際のものとは多少異なります)

一橋大学基督教青年会 130年史 目次				
序文		齋藤 金義	理事長	P2
一橋YMCAの132年		山本 通	編集委員長	P4
関係者 ご寄稿	「わたしが示す地に行きなさい」	神崎 清一	日本YMCA同盟	P38
	一橋大大学基督教青年会創立130周年に寄せて	徳久 俊彦	東大YMCA	P39
	一橋大学基督教青年会と東京キリスト教青年会	齋藤 實	YMCA史学会	P41
	聖書研究での新発見、再発見	水口 功	桜ヶ丘教会牧師	P44
	神のみ心のままに寮母十余年	佐藤 信子	元寮母	P46
	寮母としての思い出	野澤 毬寿恵	元寮母	P48
	YMCA一橋寮増改築について	田代 洋志	建築家	P50
会員ご 寄稿	在素知贅（ざいそちぜい）	大平 正芳	昭11学	P59
	キリスト教との出会い			P60
	大学生活—忘れ得ぬ恩師たち			P61
	教会に支えられて	速水 優	昭22学	P63
	国立の四季（城山三郎）	杉浦 英一	昭27学	P74
	一橋大学基督教青年会130年史に寄せて	堀地 史郎	昭30商	P75
	「小さき愛の館」YMCA一橋寮と瀧浦満氏のこと	高橋 真司	昭40経	P78
	一橋YMCAへの感謝と抱負	中村 正俊	昭46社	P81
	寮生活1年目のころ	寺師 並夫	昭49社	P84
	旧寮と新寮に住んで	中山 泰吉	昭55社	P86
	私の人生にとってのYMCA一橋寮	盛岡 邦夫	昭57社	P90
	YMCA一橋寮から世界へ！	稲永 祐樹	昭60経	P93
	寮生活とクリスチャン人生	滝澤 英一	昭60法	P94
	YMCA一橋寮の思い出	佐藤 公彦	昭61社	P97
	One Generation	大溝 日出夫	平1法	P99
	YMCA一橋寮の思い出	鈴木 宗徳	平3社	P101
	YMCA一橋寮の思い出	岡 秀樹	平15社	P104
	寮を振り返って	杉山 晶彦	平18商	P105
	My Faith in God as the Law of Fairness	張 中飛	平19商	P107
	YM寮は「広い世界」であり、その先の「広い世界」の扉だった	中村 翔平	平20法	P110
	初心貫徹と聖書のことば ～箴言とヘブル書3章、4章～	東 哲郎	平21経	P112
	YMCA一橋寮で得た繋がり	宮崎 祐也	平26社	P114
座談会	130年史記念 聖職者座談会 —聖職の仕事を選んだ自らの人生の歩みを語る—	津村俊夫、江藤直純、阿久戸光晴、伊藤淳、山本信義		P115
当会の会員について		編集委員会		P136
会報目次索引	会報 表紙と目次 第50号（（2008年12月）～第71号（2019年7月）	編集委員会		P154
当会のこれまでの足跡と今後の課題について		齋藤 金義	理事長	P198
あとがき		山本 通	編集委員長	P226

序文

理事長 齋藤金義

当会創立から今年で132年の時が経過した。本来であれば125周年の2012年が節目としては四半世紀ということで、望ましかったであろう。しかし、7年前は丁度公益法人化を目指していた時期であり、130年の節目の2017年はYMCA一橋寮再建の諸事多忙な時であった。今年、2019年は平成から令和になり、天皇家の代替わりの節目の年であり、また、台風による強烈な自然災害が猛威を振るい、人々の記憶に永く留められる年でもある。こうした中で当会は公益財団法人となり、長年の懸案であったYMCA一橋寮増改築が行われ、新たにYMCA一橋ホールを与えられた。正に一時代を画す時期に、130年史を刊行できたことは思い返しても感無量であり、大きな慶びである。32年前、100年史の刊行に努力された弓削達委員長、中島省吾副委員長、実務の作業を多く担われた瀧浦満委員、若手の丹野泰樹委員、4人とも天に召されたが、この130年史の刊行を心待ちにされていたことであろう。「天にあって、共に喜び下さい」そうお伝えしたい。当会を愛し、YMCA一橋寮での生活、学び、友情と、そして信仰の種を何よりも大切に思っ下さる多くの諸先輩、同輩、後輩の皆様に、この130年史をお手元にお届け出来る慶びを分かち合いたいと思う。

特に、山本通編集員長には、編集全般の企画と推進の他に、「YMCA一橋の132年」という通史を執筆頂いた。当会の132年の歴史を9つの時代に区分し、当会の歩みを振り返りつつ、総括して頂いた。経済史の専門家でもある山本編集員長のその力量とご努力に感謝したい。また、今回、多くの皆様に編集委員を一方的に委嘱し、ご協力を賜った。ITスキル・電子メール時代と言えればそれまでであるが、リアルな世界で顔を合わせることが簡単には出来ない中、制約と限界はあるものの電子的な繋がりの中で、多くの編集委員、理事、評議員など関係者との情報共有を行い、ご協力を賜った。この結果、多くの寄稿文をお寄せ頂くことができたことは誠に有難いことであった。寄稿をお願いしたのは、これからの当会を担って頂くことになる昭和の後半から平成時代の若手の皆さんが中心である。後に続く若い皆さんに引き継いで頂きたい気持ちからでもある。また、過去の会報の中から、幾つかを再掲した。大平正芳、速水優、杉浦英一(城山三郎)の著名人の遺稿や若手を含め7名の方の寄稿文である。その意味するところは、過去発行された会報のうち、電子ファイルが残っている会報第50号(2008年12月発行)から2019年7月発行の第71号までをHP上に電子版として掲載し、それらを全てお読み頂けるように、参考として目次を巻末に掲載した。これにより130年史の中で掲載しきれない玉稿を皆様にお読みいただけるようにした。

また、当会関係者以外から、東大YMCAの徳久様、YMCA同盟の神崎様、YMCA史学会の齋藤様、長年聖書研究会のチューターをして下さっている水口牧師や元寮母様、増改築工事の設計家田代洋志氏にご寄稿を頂いた。多くの方々により当会と寮が支えられていることの証である。130年史刊行の最大の意義は、これがこれからも続く後輩諸兄への大きな励みとなるメッセージが沢山込められていることだ。何代も続く後輩諸兄に読み継がれることをとおして、当会の素晴らしい伝統を改めて確信し、それを継承し、維持発展させる意欲、動機の土台となるものだ。毎年発行される会報は、その都度読まれるが、その内容は短期間で忘れ去られることが多い。しかし、30年に一度の年史は、紐解く機会は少ないものの、数十年間にわたり読み継がれて行くものである。歴史を語るとき、一番難しい課

題は、時間を共有できないという厳然たる事実である。先輩、後輩の繋がり、時間を共有できない、時空の壁の中で、共通の、普通の、変わることのない価値を探しだし、それを継承することでもある。その時間の壁を、どこまでこの130年史が埋めてくれるか、どれだけ我々の今の思いを、後輩諸兄の心の琴線に触れる形で、これを伝えることが出来るか、これらは全て後世の諸兄に評価を委ねたい。願わくは、後に続く諸兄が、当会がこれまで守り育て、育んできた大切な宝をさらに磨き、これを飛躍させて下さることを心から願いつつ、私の序文と致したい。

一橋大学基督教青年会 130年史刊行 編集委員会 顧問・編集委員一覧			
1	顧問	堀地 史郎	昭30商
2	顧問	川勝 高宏	昭43社
3	顧問	宮岡 五百里	昭43社
4	委員長	山本 通	昭45経、昭47修経、昭50博経
5	副委員長	齋藤 金義	昭46経、昭48法
6	編集委員	寺師 並夫	昭49社
7	編集委員	生原 伸夫	昭53経
8	編集委員	中山 泰吉	昭55社
9	編集委員	盛岡 邦夫	昭57商
10	編集委員	稲永 祐樹	昭60経
11	編集委員	滝澤 英一	昭60法
12	編集委員	佐藤 公彦	昭61社
13	編集委員	大溝 日出夫	平1法
14	編集委員	川浦 秀之	平3経
15	編集委員	鈴木 宗徳	平3社、平5修社
16	編集委員	山本 信義	平5法
17	編集委員	田代 信吾	平9商
18	編集委員	堀口 洋次郎	平12商
19	編集委員	吉田 護	平12社
20	編集委員	岡 秀樹	平15社
21	編集委員	岩見 至哲	平16法
22	編集委員	杉山 晶彦	平18商
23	編集委員	南 弘毅	平20社
24	編集委員	中村 翔平	平20法
25	編集委員	東 哲郎	平21経
26	編集委員	宮城 康智	平24法
27	編集委員	堀内 晴来	平25商
28	編集委員	岡本 政之	平28経
29	編集委員	建内 瑛貴	平31社
30	編集委員	前田 雄飛	経済学部4年生、前寮長

一橋 YMCA の 132 年

山本 通(編集委員長:1970:昭 45 経)

目次

はじめに

第 1 期＝草創期(1887～1910 年)

第 2 期＝流転期(1910～1920 年)

第 3 期＝中野寮時代(1920～1935 年)

第 4 期＝国立寮の戦時期(1935～1945 年)

第 5 期＝戦後の躍動期(1945～1951 年)

第 6 期＝安定成長期(1951～1964 年)

第 7 期＝成熟期(1964～1979 年)

第 8 期＝新一橋寮での活動(1979～1997 年)

第 9 期＝新展開(1997～2019 年)

おわりに

はじめに

公益財団法人一橋大学基督教青年会(2016 年 9 月 1 日認可)の前身は一橋基督教青年会である。『一橋会雑誌』第 104 号の年表に「明治二十年一橋基督教青年会生る」と記されているという。明治 20 年は西暦 1887 年であるから、当会は 2017 年をもって 130 周年を迎えたわけであり、この度、2 年遅れでそれを記念する文書を発行することになった。本稿では、この長い歴史を青年会の寮舎の変遷を基準として 9 の

時期に区分して記述する。その記述のための基本資料は『一橋基督教青年会—百年史—』(1987 年)中の中島省吾および弓削達之文章と、1964 年から発行されている『一橋基督教青年会会報』(50 号から名称を『一橋大学基督教青年会会報』と改称、以下、『会報』と略記)の 1 号から 70 号までである。その他には『一橋基督教青年会五十年史』(1937 年)、『一橋基督教青年会七十周年記念集』(1958 年)、奈良常五郎『日本 YMCA 史』(1959 年)、日本基督教団国立教会『恩寵の憶い出—国立教会式拾五年史—』(1972 年)などを参照した。なお、以下の叙述では「基督教青年会」を「YMCA」と略記する。

第 1 期＝草創期(1887～1910 年)

『一橋会雑誌』(1903 年発刊)の記事は一橋 YMCA の成立年次を 1887 年(明治 20 年)とする有力な証拠であるが、『五十年史』の中の「卒業年度別会員一覧」によれば、第 1 期卒業生は梅田信五郎と江口定條の 2 名であり、ともに明治 20 年に本科を卒業している。したがって、当会の活動はすでに明治 20 年以前から始まっていたと考えられる。しかし、その具体的な設立の経緯はよく分からない。1888 年(明治 21 年)に東京高等商業学校に入学した山本邦之助は『五十年史』に寄せた一文の中で、次のように述べている。「自分のクラスには学生六十六名の内十数名のクリスチャンありて(中略)、当時のク

リスチアンといえば学力優秀なるものの代名詞であった」(78 頁)と。時はまさに「鹿鳴館時代」であり、多くの知識人も学生も西洋文化を代表するキリスト教に惹かれたのである。『五十年史』に寄稿した東京高商の元教員たちの記事によれば、これらのクリスチャン学生を集めてYMCAを成立させた最大の功労者が神田乃武男爵であったことは、容易に想像できる。神田男爵は明治初期に米国アーマスト・カレッジに留学し、卒業後帰国して東京商業学校(1887年に東京高商に昇格)の英語教員となったが、1882年(明治15年)における東京YMCAの創立メンバーでもあったからである。

設立当時における一橋YMCAは、日本人の牧師・教師をはじめ、外国人宣教師を中心として毎月何回か一定の時を選んで組織的な聖書研究を行っていた。初代会長は1887年に東京高商を卒業してその教員になった江口定條である。江口はその後教職を辞し、後には三菱財閥の重鎮となり、貴族院議員にもなったが、終生一橋YMCAへの援助を惜しまなかった。宣教師としては、米国から海外に派遣された最初の主事であったジョン・T・スウィフト氏(1888年来日)が、当会集会所の図書室のための資金援助に尽力し、また後には東京高商の英語教師として教鞭を執った。一橋YMCAは、1889年に来日したウィッシャード氏が京都の同志社で開催した日本最初のYMCA夏季学校に5名の会員を派遣した。これは他の官立の高等教育機関に比べて多人数なので、新島襄氏が記念講演の中で東京高商YMCAを名指して、その信仰状態を讃えたといわれる。

1890年代初め(明治20年代中頃)から、わが国では反動的に国粹主義的な傾向が強くなり、キリスト教に対する世間の風当たりも強くなった。しかし日本のYMCA運動と一橋YMCAは、そうした風潮の中でもしっかりと地歩を固めていった。この頃全国の専門学校で青年会が次々と組織されたが、1896年のモット博士の来日を機に翌年(明治30年)に全国学生青年会同盟が成立した。一橋YMCAは早速これに加盟した。さらに全国学生青年会同盟は、東京、大阪、神戸、名古屋の4都市の青年会の連絡協議会であった市青年会同盟と2005年(明治36年)に合併して日本YMCA同盟を成立させたが、当青年会はこれにも直ぐに加盟した。一橋YMCAの会員数は、日露戦争後に急増した。戦争が知識人青年たちに人生と死の意味を考えさせる契機となったからであろう。1908年(明治41年)には卒業生会員数は16名、学生会員数は36名となり、学舎の一部を借りて行われる毎週の聖書研究会、早天祈祷会や例会は、参加者が多すぎて困るほどだった。

1905年(明治38年)頃から、会員の学生の間には、寄宿舍生活を望む声が大きくなった。協同友愛の信仰生活を目指して当初飯田町の借家で自炊していた会員たちが、同年に上六番町に移り4名で「寄宿舍」と称して共同生活を始めた。ただし、その維持は財政的に困難を極めた。しかし1907年(明治40年)に、東京YMCA主事の山本邦之助から補助金交付の申し出があった。交付の条件は、東京YMCAの学生数人を一緒に住ませ、一橋YMCAと並べて東京YMCAの看板を掲げることであった。当会はこれを承諾した。山本邦之助は学生時代に一橋

YMCA の会員であったが、卒業後は日本郵船において経理畑で仕事に打ち込んだ。しかし、1902 年(明治 35 年)正月に回心を体験し、銀座教会で受洗した。その 3 年後に 36 歳の山本は日本郵船の経理課長の前途洋々たる要職を捨てて、東京 YMCA 主事となったのである。山本は同会の第 2 代総主事として 18 年間奉仕し、同会の発展のために多大の貢献をした(奈良本『日本 YMCA 史』170～2 頁、なお、初代総主事は丹羽清次郎氏である)。

ところが、上六番町の寮舎はやがて閉鎖されてしまった。閉鎖の理由はよくわからないが、1908 年(明治 41 年)には小石川の川合信水氏の邸宅に数名の一橋 YMCA の会員が寄宿し、ここに当青年会の看板を掲げて活動の拠点としたという事実がある。川合氏は前橋市の共愛女学校の校長を務めた人であるが、当青年会に対して好意的に接してくれたのである。この事実を踏まえるならば、当青年会の会員たちは、上六番町の寮舎よりは、むしろ独自の寮舎を持つことの方を望んだと推測できる。

1909 年(明治 42 年)には、一橋大学の学園史上で非常に重要な申酉事件が起こった。『七十周年記念集』20 頁以下の浅原丈平氏による詳しい記述を要約して、これを紹介しよう。まず日露戦争後に商科大学設置の運動が起こり、国会で商科大学設置建議書が決議された。これを受けて一橋の東京高商は現行の予科 1 年本科 3 年専攻部 2 年の通計 6 年を予科 3 年本科 3 年とすべしとした。ところが文部省は明治 41 年、東京帝大の法科大学に経済科を新設する国会の建議案に応えろとともに、一橋の改革案を抑圧しようとした。ここで東京高商の専攻部学

生が中心となって商科大学設置請願書を草した。学生たちのロビー活動が功を奏して、国会は強硬な商業大学設置建議案を可決した。ところが文部省は、単科大学の制度が存在しないのを理由として、東京帝国大学の法科大学に商科を新設し、一橋の専攻部の廃止を決定する省令を發布した。これにどのように対処するかを決定するために、東京高商の全校委員会が開かれたが、結論は出なかった。ついに明治 42 年 5 月 11 日に学生大会が開かれ、学生たちは文部省の横暴に対する抗議をこめて全員が東京高商を退学することを決議した。その「校を去るの辞」を作成したのは、一橋 YMCA 会員の武井大助であった。そして全員が校門前に並び、母校万歳を唱え喪章をもぎ棄て、あるいは校門に接吻して惜別した。うしろの路を隔てて 2 階の窓から凝視していた外語(現在の東京外国語大学の前身)の学生たちは、同情の拍手を送った。東京高商学生たちの予想外の行動に驚愕・狼狽した文部省は、あらゆる手段を尽くして学生たちの翻意を謀った。そしてついには、本学の生みの親である渋沢栄一男爵が事態の収拾に乗り出した。23 日には、在京のほとんどの学生が神田美土代町の YMCA 会館に集められた。卒業生たちや渋沢男爵の説得の結果、学生一同は涙を吞んで 24 日から復学して、所期の目的の達成に粘り強く取り組むことを決定した。他方文部省は、事態の収拾のために先の省令を撤回した。東京帝国大学の法科大学に商科は新設されたが、一橋専攻部は恒久的に持続と改められた。そして大正 8 年には大学制度が改正されて単科大学の存在が認められ、翌大正 9 年には東京高等商業学校は真っ先に昇格されて、東京

商科大学となった。一橋大学の「自由と自治の伝統」はここに始まったのである。(なお、大正8年に東京帝国大学では分科大学が廃止され、法・医・工・文・理・農・経済の7学部制となった)。

ところで申酉事件が起こったこの年に、一橋YMCAには東京YMCA主事の山本邦之助から朗報がもたらされた。それは、日本の各地にYMCA寮を建設するための資金として米国YMCAがモット博士に託した寄付金10万円のうちの1万5千円を、当青年会専用の寮舎の建設のために提供する、との申し出であった。この1万5千円に東京市青年会の募金1千円と当青年会の募金1千円を合わせて、建設資金とした。新寮舎「一橋寮」は、神田美土代町のYMCA会館(1894年5月完成)の裏手の空き地に1910年(明治43年)11月に建設された。『七十周年記念集』の中で石田祐六は、この募金活動にライオン歯磨初代店主の小林富次郎氏が多額の寄付で応じてくれた事実を記している。美土代町の寮舎は木造3階建て、居室20(6畳、4畳半、3畳)、食堂、集会室、読書室、浴室を備えた立派なものだった。

美土代町一橋寮は学生による自治制を採ったが、1911年4月に学生役員の経理事務上の杜撰さが発覚して、入寮を許された未信者の多くがこれを不満として退寮した。これを機に、役員会の組織替えが行なわれた。しかし、在寮未信者が受洗するケースが増え、神戸高商から東京高商の専攻科に入学した信者学生が入寮するなどして、1911年(明治44年)末には寮舎の運営は軌道に乗った。その翌年には、東京高商の教員をYMCAの各種集会に初めて受け入れ

た。また、寮生である未信者をも当青年会の会員に編入することになった。『五十年史』中の布施公平の「一橋寮の今昔」によれば、当時の寮生の大部分は植村正久牧師の富士見教会(長老派)か海老名弾正牧師の本郷教会(組合派)に所属していた。しかしながら1913年には、美土代町のYMCA会館の増築計画のために、一橋寮は1年以内に移転しなければならなくなった。

第2期＝流転期(1910～1920年)

美土代町の一橋寮に代わる新しい寮は、東京市YMCAが選定した小石川茗荷谷の一角に建設されることになった。1914年(大正3年)7月に完成した茗荷谷の一橋寮は、緑の木立に囲まれた郊外の理想的な寮舎であり、当時都下随一のものでいわれた。同年9月には、山室軍平・デヴィス両氏の講演会を開き、中断していた週間祈祷会が再開された。この当時の寮生の多くは、海老名弾正牧師の本郷教会(組合派)に所属していたと言われる。ところが茗荷谷一橋寮は、1917年(大正6年)10月1日に、台風による暴風雨によって無残にも倒壊してしまった。幸い寮生には一人の怪我人も出なかったが、寮生は四散することになった。この年は一橋YMCAの創立30周年に当たるが、その記念式典は11月23日に神田美土代町のYMCA会館で行われた。このときに一橋YMCAの会則が大幅に改革されたが、新会則は「憲法」と題して『五十年史』に収録されている。

茗荷谷一橋寮から四散した寮生たちの内には、数名ずつで共同の信仰生活を再建しようとし

た3つのグループが生まれた。しかしその試みは、いずれもまもなく頓挫した。すなわち、竹早町寮舎は間もなく立ち退きの必要に迫られ、堀江園寮舎はあまりに辺鄙なところにあったので次第に当青年会との関係を失い、市ヶ谷寮舎は在校生の卒業と共に当青年会との関係を失った。こうして、再び一橋青年会に寮舎のない時代が訪れた。しかし青年会員たちは、この時期においても、互いに励まし合い、規則正しく例会を開催し、聖書講義、祈祷会さらには講演会を開催して活発に活動した。

そしてついに当青年会員たちは、1919年(大正8年)に芝公園六番地の保母寄宿舎として使われていた建物を賃借し、これを一橋YMCA本部とした。この寮舎は茗荷谷一橋寮よりも多くの学生を収容し、その寮生活は信仰に基づく充実したものであった。寮生福田敬太郎が宗教哲学に基づく連続講演を行ない、外部からは山室軍平氏や田川太吉郎氏を招いて講演会を催すなど、寮生は活発に活動した。しかしながら、ここも同年末には立ち退きを要請された。

第3期＝中野寮舎時代(1920～1935年)

ちょうどその頃、東京市青年会は市外中野野宇園三一七番地に寮舎を建設中だった。この寮舎は5棟からなり、中央に共同食堂、賄所、礼拝所を擁する1棟があり、それを囲んで5・6名の寮生を収容する4棟が配置された。当会はこの情報を得るとすぐに東京市青年会と交渉して、そのうちの2棟を賃借した。他の2棟は東京外語と東京歯科医専のYMCAが使用した。こうして1920年2月に中野寮舎時代が始まった。

当初は寮の雰囲気はかなり自由で活気のあるものだった。朝夕の礼拝の他に日曜日には共同の礼拝、さらには近所の子供を集めた日曜学校、各当番校が工夫を凝らした盛んなクリスマス会などが、学生たちによって自治的に営まれていた。なお前述のように、わが東京高等商業学校が東京商大に昇格したのは、同年の4月であった。

しかし、このような充実した共同の信仰生活を揺るがす力が外から加えられた。まず、第一次世界大戦とロシア革命を機に発生した新しい思想運動の影響があった。一方でダダイズムの頹廢的・享樂的傾向が生まれ、他方ではマルクス主義の革命思想が多く若者の心をとらえた。このような無神論の興隆と共に、キリスト教信仰の中でも、ヒューマニズムに宗教的な着色をしたようになりべらるな信仰に対して、神の絶対的權威を強調して人類文化の現状を厳しく批判する危機神学の挑戦があり、さらには純福音主義的信仰が説かれる一方で、キリスト教社会主義が力を増すなど、複雑な様相が現れていた。このような状況の中で、一橋YMCAは基本的に福音主義信仰の立場を保持したといわれる。

次に、1923年(大正12年)9月の関東大震災の影響がある。中野の寮舎にはほとんど損傷は無かったが、神田一橋にあった母校の校舎は全焼し、学部・予科・専門部のそれぞれの校舎が別々に移転することになった。それまで3部門の学生が緊密に協力し合う体制にあった当青年会の組織と運営は大きな変更を迫られた。まず予科が1924年に石神井に移転したが、これに伴い予科YMCAが予科に設立され、積極的に活動を開始した。しかし予科青年会の活動的な学生たちが学部に進学し、その指導に当たって

いた舟橋教授と木村徳蔵教授が1928年(昭和3年)に相次いで予科を離れた後は、予科青年会の活動は急速に沈滞していった。他方、東京商大専門部は1927年(昭和2年)4月に国立に移転したが、専門部のYMCAの学生たちは中野寮舎や予科青年会とは別に、専門部の教官たちの援助を受けつつ、独自に活動を続けた。

大学の教育施設の分散によって一橋YMCAの活動が分散すると、やがてその本拠地である中野寮の活動は衰退していった。そして、正確な時期は不明であるが、昭和3ないし4年頃に、家主である東京市青年会が介入して中野寮の運営組織を変革した。その事情については『五十年史』の中の小宮孝「中野寮回顧」が詳しい。東京市青年会は中野寮の自治的運営について3点において不満を抱いた。第1に、未信者が増加して寮内で公然と喫煙するなどの精神的弛緩が現れた。そこで、市青年会は寮舎生活の憲法を制定した。第2の問題は、学生が請負制度によって賄人に厨房を任せる仕組みの経理上の不透明さである。市青年会は、同会と直接に雇用契約を結んだ賄人に厨房を引受させることにした。最大の問題は、3校の青年会の家賃滞納であった。東京市青年会は、3校による自治的運営を止めさせ、舎監を送り込んで、市青年会が3校の青年会員の入舎を個別的に選考し許可することにした。その結果、東京外語の寮生が増え、一橋青年会の学生数は減退し、その活動は衰微していった。実際『五十年史』中の文の中で、清水貞助は「昭和4年頃はほとんど青年会の活動は無かった」と述べているのである。

一橋YMCAが再び活気を取り戻す契機は、外から与えられた。1930年(昭和5年)に東京商大の学部が国立に移転したが、その翌年の9月に国立在住者、野島新之丞氏から、商大キリスト者学生の集会のために自宅を開放する用意がある、との申し出があった。野島氏は退役軍人で、国立の町内会長であり、熱心なクリスチャンであった。また『五十年史』の印刷者なので、恐らく都内小石川町の野島好文堂の所有者だったのであろう。当青年会は野島氏のこの申し入れを喜んで受け入れ、以後、学部・専門部・教員養成所のYMCA会員合同の十数名から成る会合が、毎月1回、例会の形をとって野島邸で開かれることとなった。以後約3年間、野島氏が一橋YMCAの活動拠点になったのである。

1932年(昭和7年)9月の例会では、学部青年会部長の村松恒一郎教授を迎えた懇談会で寮舎建設の問題が取り上げられ、11月に如水会館で開かれた先輩学生懇談会では、寮舎建設についての先輩側の了解と援助の約束が取り付けられた。そして翌昭和8年の先輩学生懇談会では、櫻内篤彌、大石善四郎、石田祐六、布施公平の4名が委員として任命され、その具体化に向けて歩み出した。さらに、この年の9月には東京商大の予科が石神井から小平に移転し、大学3部間の緊密な連携が可能となった。また、国分寺在住の吉村末吉牧師が野島氏邸で牧会活動を開始したのも、この年のことであった。機は熟していた。

1934年(昭和9年)春からは、先輩有志と学生たちが毎週のように会合し、敷地の選定などについて意見を交換したが、同年秋には東京商大の佐野元学長の好意的な斡旋を受けて、国立

の現在の土地に寮舎を建設することを決定した。予算は支出が、敷地購入費 3,100 円、建築費 12,500 円、その他 400 円で合計 16,000 円。収入は、当青年会が中野に所有していた土地の売却代の 10,500 円を当て、差し引き 5,500 円は先輩その他の理解者に寄付金を仰ぐことになった。以後半年間、学生たちによる熱心な募金活動が展開されたが、後に内閣総理大臣になった大平正芳も、学生としてこの時の募金活動に尽力した。なお、当青年会が中野に所有していた土地については、『五十年史』中の布施公平の「一橋寮の今昔」が示唆的である。すなわち、大正 6 年に茗荷谷の寮舎が倒壊した後、YMCA 同盟はその土地と破損材の売上金の全部に当たる 6,000 円余りを当会に寄付して、寮舎再建の資金に充てさせた。そして当会は、中野寮舎を賃借した 2 年後の 1922 年に、その金を元手に中野に土地を購入していた。当時中野駅は中央線の終着駅であったが、その後中央線は西に延長されたので、国立に土地を購入する頃には中野の土地は高く売れたのである。

第 4 期＝国立寮の戦時期(1935～1945 年)

新寮舎の設計監督は尾崎久助技師が担当し、1935 年(昭和 10 年)4 月に木造 2 階建ての美しい洋風建築の YMCA 一橋寮が完成した。この寮舎は 1 階に広い吹き抜けのロビー、食堂と厨房と寮母の居室、そして広い風呂場、2 階には美しいステンドグラスの窓のあるチャペルを持ち、1・2 階に寮生用の居室を 9 室持っていた。最初の寮生は多くの希望者の中から選ばれた学部生 5 名、予科生 2 名、専門部生 2 名の合

計 9 名であり、初代の寮母には故大堀篤牧師の未亡人である大堀しげ様が就任した。寮生たちは毎日の朝拝と週に一度の聖書研究会を励行した。そして日曜日には一橋寮のチャペルで吉村牧師の司式によって礼拝集会が持たれることになった。

国立の YMCA 一橋寮が完成する以前に、国立の野島新之丞氏がその邸宅を当青年会の集会所として提供したことは既に述べたが、1933 年(昭和 8 年)春からは、ここで吉村末吉牧師が牧会活動を開始した。吉村牧師はかつて早稲田奉仕園で学生への伝道活動に従事していたが、渡米のためにこれを辞し、帰国後は病を得て国分寺で静養中であった。しかし、野島氏邸でのキリスト者の集会を知って牧会活動を再開されたのである。その礼拝集会には東京商大の学生以外にも、地元住民や国立音楽学校の学生も加わって、野島氏邸に溢れるほどになった。そこで一橋 YMCA は、野島氏への恩返しの意味で新設の一橋寮のチャペルを日曜礼拝のために提供したのである。1935 年 11 月 22 日の野島氏邸の集会において国立基督教連合教会が成立したが、この教会には特定の教会堂が無かった。基督教連合教会の看板が一橋寮に掲げられたのは、そのような事情による。

国立の一橋寮は中野寮に比べて、信仰的な生活の場としての色彩を濃くした。都下の YMCA 同盟との交流も復活し、そのために無教会派の影響が強くなった。矢内原忠雄が再三招かれて講演を行ない、その『通信』(晩年は「嘉信」に名称変更)が会員に広く読まれた。また『内村鑑三全集』や『藤井武全集』が購入されて、国立一橋寮に備えられた。1936 年(昭和 11 年)11 月

には小平の予科と国立の専門部・養成所の YMCA が、学部青年会から独立した。予科青年部部長には山田欽一教授が、専門部・養成所の部長には田上穰治教授が就任し、国立一橋寮はこれに学部青年会を加えた 3 部の活動の母体となった。またこの時に、寮生の他教会への出席の自由が明確化され、毎月、寮生が希望する講師を招聘できることが決まった。同年 12 月には政池仁牧師を国立に、翌 1937 年 1 月には賀川豊彦氏を小平に招いて講演会が開催された。なお、予科青年会は、小平在住者の安松五男氏夫妻の好意を受け、1938 年(昭和 13 年)5 月以来、同家で開かれた石川三郎牧師の聖書研究会に出席するようになった。

1937 年の 4 月と 7 月に神田如水会館で開かれた先輩・学生懇談会では、50 周年記念事業についての話し合いが行われ、感謝礼拝と祝賀会以外に、50 年史の編纂発行と、大講演会が企画された。『五十年史』は翌年 1 月に刊行されたが、大講演会はそれに先立って 1937 年 11 月に榊原巖教授と矢内原忠雄教授の両氏を招いて、国立の学部校舎内で開催された。この大講演会は学生たちに大きな感銘を与えたので、その内容が『五十年史』に詳しく紹介されている。特にこの講演会の翌日に、矢内原教授の著書『民族と平和』が発禁処分になり、同教授が東京帝大に辞表を提出するという「事変下初の筆禍事件」が起こったことが、その「自由と統制」と題する講演を忘れ難いものとした。この時期から日本の軍国主義は次第に猛威を振るい始めるのである。

日中戦争から太平洋戦争の終戦に至る暗い時期における一橋 YMCA の内外の状況について

では、『七十周年記念集』中の後藤省爾の「最近二十年史」が優れている。執筆時(1958 年)に後藤は法学部 3 年生であったが、事実関係を詳細に調査して書かれたこの文の筆致は、とても学生の手になるとは思えないほどである。また、敗戦前後の約 10 年間については、当時の寮生であった弓削達による『百年史』中の記録が貴重である。1937 年(昭和 12 年)の盧溝橋事件を機に日中戦争が始まると、日本軍は中国大陸の奥地にまで侵攻し、虐殺と侵略を繰り返した。日本軍は 1940 年には、さらにインドシナ半島北部にまで侵攻した。弓削によれば、この時期には侵略戦争から獲得された利得が国民の目を曇らせ、日本国家の歩む方向についての批判は出しにくい状況になっていた。天皇制を頂点とする戦争指導部は、巧みに思想統制を強め、1938 年(1938 年)には国家総動員法が公布された。労働組合や無産政党はすべて解散させられ、マルクス主義者や社会主義者だけではなく、リベラリストの言論も封殺された。東京商大においても 1938 年(昭和 13 年)頃から軍事教練への出席が厳しく促されるようになった。

1941 年(昭和 16 年)12 月の真珠湾奇襲によって太平洋戦争が始まると、物資統制令が相次いで発布され、国民の衣食は完全に政府の統制下に置かれるようになった。同年には小学校は国民学校と改称され、天気予報や気象通報も禁止された。1942 年には大日本言論報国会が結成されて、自由な言論は全く封殺された。そしてプロテスタント各派は政府の圧力によって日本基督教団に合同させられた。キリスト教は敵国の宗教と見做され、教会にも特高刑事が

潜入して、牧師の説教をチェックした。実際に、ホーリネス系教会の牧師が、数名検挙された。

このような状況の中でも、一橋 YMCA は寮を中心に、信仰に基づく自治的な活動を維持した。一橋寮の2階のチャペルでは毎朝の礼拝が守られ、毎週の聖書研究会が続けられた。毎月1度の聖書研究会は、外部講師を招いて大学の学生集会所で行われた。これは学内伝道の性格を併せ持ったが、その他に毎年数回のキリスト教講演会が開かれた。当時の青年会の学生たちは、パスカル、ドストエフスキーそしてヒルティーなどの著作を愛読した。『百年史』中の弓削達の文によれば、当時の青年会の信仰のあり方は「福音的」であり、行動的ではなくアカデミックになっていった。その原因の1つは、東京商大当局の教学的姿勢にあった。彼らは大学に対する国家の軍国主義的要求に安易に屈することなく、学生たちが束の間の青春を、勉学と思索に費やすことを可能にさせた。もう1つの原因は、その少し前の時期に社会的基督教運動(SCM)が挫折したことの影響である。この時期に形成された福音的でアカデミックな信仰のあり方は、その後のYMCA 一橋寮の伝統的な性格になっていく。

『百年史』中の一文によれば、1942年に入寮した大木英二にとってYMCA 一橋寮は「荒野で見出したオアシス」であった。大木は「この寮生活で、ひもじい思いをしたことはない」と断言するが、その裏には寮母大堀しげ様の大変な努力があったに違いない。弓削によれば、1987年の当会の百年史事業の募金に応じた卒業生総数80名のうち、昭和14年から17年までのわずか4年間の卒業生だけで18名を数える。この時期の青

年会の学生たちの一生にとって、青年会での生活が重要な意味を持っていたことが推察される。

1942年6月のミッドウェイ海戦の敗北を境に、米国の圧倒的な経済力がその底力を発揮し始め、戦局は逆転して太平洋の各地で日本軍の全滅(玉砕)が続いた。政府は、兵力を補充するために、大学・専門学校の文系学生の徴兵猶予を廃止し、1943年(昭和18年)10月21日には出陣学徒の「壮行会」を神宮外苑競技場で行なった。東京商大の兼松講堂は中島飛行機KKの工場として接收され、国立の専門部校舎は兵営と化し、学生は徴兵されるか、軍需工場での勤労に徴用された。このような状況の中で、大学での講義も次第にまばらとなり、当YMCAの活動もますます内向的にならざるを得なかった。この時期に寮生の信仰的指導に当たったのは、学内の教官の方々と吉祥寺教会の竹森満佐一牧師であった。竹森牧師は聖書研究会のために毎週、寮に足を運ばれた。また、予科の学生は日本神学校の山永武雄教授を招いて、トレルチの『キリスト教諸教会と諸グループの社会教説』の一部をドイツ語の原文で読んだ。

予科から学部に進んで1943年に一橋YMCA寮に入寮した弓削達は、総務担当学生の部屋に掛けられた1枚の短冊の詩に心を動かされた。弓削が『百年史』の中で「それ以後40数年忘れたことがない」というその詩は、

「割りきれぬ心のままに征くべしと 師ののたまうは厳しくもあるか」

というものであった。これを弓削は次のように評する。「この『師』とはゼミナールの先生であったのか、牧師さんであったのか知る由もない。しかし、

一義的な真理求道の生活から、理屈ぬきで戦場に引き出される一学生に、何と言って説明してよいか言葉に窮している『師』の姿が悲しいほど無力なものとして浮かんでくる」と。

この詩の作者は、YMCA の国立一橋寮で信仰に目覚めて受洗し、学徒出陣し、復員後に神学校に進んで牧師になった、前述の大木英二である。そしてこの「師」とは、『会報』54 号(2010 年)中の大木の「学問と信仰」という文によれば、弓削の恩師となるドイツ中世史の大家、上原専禄教授だったのである。弓削はこの事実を、何時知ることになったのだろうか。ともあれ、上原専禄教授は戦後において「日米安保協定」反対運動の旗手の一人となった。それは、戦時中のこのような辛く悲しい思いを、二度と繰り返したくなかったからではないだろうか。

1944 年 6 月のマリアナ沖海戦で日本海軍は空母と航空機の大半を失い、7 月にはサイパン島守備隊 3 万人が全滅し、同月に東条内閣が総辞職した。さらに同年 10 月のレイテ沖海戦の敗北によって、日本近海の制海・制空権も米軍の手に落ちた。最早日本の敗北は避けられない事態となったが、天皇をめぐる戦争指導部は、国体維持のために戦争を続行し、おびただしい数の人々を無意味な死に追いやった。10 月に神風特攻隊の出撃が始まり、11 月には東京が初めて空襲された。翌 1945 年(昭和 20 年)3 月には硫黄島の激戦によって 2 万 3 千の守備隊が全滅。同じ 3 月の東京大空襲で 10 万人以上の民間人が死亡し、罹災者は 100 万人に達した。5 月 7 日には同盟国のドイツが連合国に無条件降伏したが、日本の政府は戦争遂行を宣言し、6 月 8 日に天皇は「本土決戦準備」を命じた。4

月に始まった凄惨な沖縄戦は日本軍の全滅に終わり、軍人と民間人をあわせて約 20 万人が死亡した。7 月 26 日のポツダム宣言を黙殺した日本に対して、ソ連が宣戦布告して「満州国」に侵入し、米国は広島と長崎に原爆を投下した。戦争が生み出す人間の狂気が日本全土に、またアジアと太平洋の至るところに地獄を出現させた。

東京商大は 1944 年には東京産業大学と改称されたが、同年の夏からは授業はほとんど行われなくなった。翌年の 3 月には 1 年間の授業停止が政府によって決められた。空襲の結果、都市部での生活は困難になり、農村部への疎開の大移動が続いた。YMCA 一橋寮の学生数も激減し、1944 年の末には裏得郎と弓削達だけが残留していた。寮母の生活を保証することができなくなったので、2 名は卒業生先輩である布施公平と相談の上、一時的に YMCA 一橋寮を株式会社勝呂組(後の住友建設)に社員寮として貸与し、経営と建物管理一切をまかせることにした。2 名の学生はここに同居する形になったが、これを機に大堀しげ寮母様は職を辞し、御家族と共に敷地内の小邸に住まわれることになった。そして裏は翌年の春に家族と共に秋田県に疎開していった。1945 年(昭和 20 年)8 月 15 日の終戦の日に寮に残っていた一橋 YMCA の学生は、弓削達ただ一人であった。

第 5 期＝戦後の躍動期(1945～1951 年)

弓削はすぐに一橋 YMCA の再出発の準備に取り掛かった。まず勝呂組と相談して、1946 年(昭和 21 年)3 月まで勝呂組による現状の管理

体制を続け、4 月に一橋 YMCA に寮を再開することが決まった。1945 年 9 月末までには、桜井欣一郎と裏得郎が寮に戻り、10 月からは吉祥寺教会の竹森牧師による毎週の聖書研究会が再開された。次に解決すべき問題は寮母問題であった。弓削が恩師村田四郎氏に相談すると、氏は数年前に急逝された馬場牧師の未亡人であり、東大 YMCA の寮母を経験したことのある馬場尚美様を紹介して下さった。疎開先の埼玉県岩槻にお願いに上がった一橋青年会員 3 名に対し、馬場様は翌年 4 月からの寮母就任を快諾された。1946 年 3 月には、復員してきた元会員の中島省吾が入寮し、4 月からはクリスチャンや求道者の学生たちが入寮して、YMCA の寮生活が再開された。

一橋 YMCA 会員たちが次に取り組んだのは、国立の教会の再建である。前述のように 1935 年 11 月に吉村末吉牧師が司牧する国立連合教会が野島氏邸で成立して、まもなく国立 YMCA 一橋寮がその礼拝集会所となっていた。しかし、『恩寵の憶い出』中の野島喜美氏(野島新之丞氏夫人)の文によれば、吉村牧師は 1942 年ないし 43 年に召天され、戦争末期の混乱の中で国立連合教会は自然消滅していた。教会再建を志す一橋 YMCA 会員たちは、何よりも指導力のある牧師を欲したが、村田四郎牧師がその要請に応えた。1946 年 4 月 7 日から、毎日曜日の午前中に寮 2 階のチャペルで礼拝集会が開かれ、同年 10 月 7 日には日本基督教団東京教区において、同集会は教会としての設立申請を認められた。その事情については、同年 12 月 10 日の『教団新報』の「東京教区の復興と

新設の教会：国立教会」という記事が、次のように記している。

「東京商科大学の講師で教団教学部長たる村田四郎氏が国立市在住の少数の信徒を基礎に今夏以来集会を続けてきたが、其の集会者の数は近日著しく増加し、目下毎回五十名内外に達するに至り、教勢極めて活発である。その会員、求道者に由って愈教会を組織することとなり、去る一日(中略)其の建設式を挙行し、村田四郎の牧師就任式も同時に行はれた。同教会は適当な地域を物色し、一百万円の大会堂を建設する意気込みを以て、その計画を進めつつある」(『恩寵の憶い出』5 頁に引用)と。

この記事は、国立教会が YMCA 一橋寮において成立した、という重要な点に触れていない。また、ここで言及された国立教会の教会堂は、その 5 年後まで完成しなかった。それまでは、一橋 YMCA 寮が国立教会の教会堂の役割を果たしたのである。寮生たちは、日曜日になると一階の食堂とロビーをぶち抜いてチャペルとし、椅子を用意した。また聖日礼拝の前後には、礼拝集案内のビラ配りや、週報の印刷などでも忙しく立ち働いた。国立教会の初期の歴史については、中島省吾が『恩寵の憶い出』と『国立教会五十年史』に貴重な記録を記している。中島は、特に国立教会の教会学校の運営のために奮闘した。1947 年に国立の YMCA 寮を退寮して練馬や赤坂に転居した後も、教会学校で奉仕するために毎週国立を訪れた。また、国立教会の教会堂が完成した後にも、中島は教会の長老としてその運営のための奉仕を続けた。一橋 YMCA 学生会員のこのような熱烈な信仰と献身的な働き

無くしては、国立教会は成立・発展しえなかったのである。

終戦直後の再建期のこれらの一橋 YMCA 会員たちは、東京基督教学生会の運動にも深く係わった。この運動の詳細については、弓削達「敗戦直後の歩み—東京基督教学生会の喜びと悲しみ—」『学生キリスト者』第 11 号(『会報』52 号、2009 年に転載)に詳しい。この運動の発端は、早稲田と東大の YMCA の学生たちが準備し 1945 年(昭和 20 年)10 月 28 日に東京女子大学礼拝堂で開かれた学生礼拝であった。一橋 YMCA からは、弓削、桜井、裏の 3 名が参加したが、男女合わせて 450 名もの多数の学生を集めた礼拝会は非常に感動的であり、参加者たちの記憶に長く残るものであった。礼拝後、各大学の学生 1 名ずつ、合計約 30 名が残って情報交換し、この礼拝集会を今後どのように発展させるかが話し合われた。毎月の礼拝集会を各大学の責任持ち回りで続けることが決まったが、その外に、学生への伝道を展開するための会合が毎週のように続けられた。そして 1946 年初めには、この運動体の名称と規約が定められた。「東京基督教学生会」と名づけられたこの会は、既存の諸組織から独立した、キリスト者学生の個人参加の運動体として性格付けされた。また同会は、求道者学生を対象とするキリスト教入門講座を、宮本武之助牧師を講師として、同年夏ごろまで継続した。

東京基督教学生会の会員は増え続けた。その勢いは 1946 年 7 月に鷺ノ宮ルーテル神学校で 4 日間にわたって開催された修養会において頂点に達した。参加者は約 200 名であり、全体の進行は主題別のグループ毎に進められ、委員

的な学生は各グループに分かれた。学生たちは各グループの指導者として、宮本武之助、山本和、北森嘉蔵、酒枝義旗、今中次麿、大塚久雄を招いた。この修養会は大成功であった。参加者の多くに感激的な感銘を与えたというだけではない。弓削によればこれは、暗黒の戦時下をいかに生きるかに苦しんだキリスト者学生たちに、戦後期を乗り切ることのできる知性を備えた信仰者のあり方を教えたのである。

しかし、この修養会を転機として、学生会の運動は分解してゆく。その一つの原因は、既存の組織である YMCA と YWCA が復活し始めたことである。YWCA 学生部は、男女合同の運動体であるという理由で、東京基督教学生会に一貫して批判的であった。他方、YMCA はその点については不問に付したうえで、学生会を自らのうちに取り込もうとした。第二の原因としては、修養会で形成された諸グループが分裂し始めたことであった。特に大塚久雄グループと山本和グループは、それぞれに勉強会として発展し、運動の中核であった酒枝グループは孤立していった。第 3 には、戦後の秩序の回復とともに、学生のエネルギーが学業やその他のことに向かうようになったからであった。このような種々の原因によって、東京基督教学生会は発足 1 年余りで YMCA 同盟に吸収されていった。1949 年 4 月には、来日した J・R・モット博士を囲んで、YMCA 同盟主催のキリスト教指導者協議会が御殿場の東山荘で開催された。100 名ほどの参加者の中には一橋 YMCA から中島省吾、阿部志郎、寺田武男らが参加した。こうして学生への伝道活動は再び勢いを盛り返した。東京基督教学生会の理念は、その後、YMCA 同盟の学生部の指導の下で

「学 Y」つまり、全国的な学生 YMCA の連絡会に受け継がれていった。

戦争によって、日本の経済は全く疲弊した。1946 年(昭和 21 年)初めの日本の鉱工業生産指数は、1930 年代中頃の 20%にまで落ち込んでいた。生活必需品の不足によって激しいインフレが起こったが、同年末から政府は傾斜生産方式を導入し、1948 年には GHQ が企業合理化三原則を提示し、その翌年 3 月にはドッジラインを導入するなどして、日本経済の復興が進んだ。さらに 1950 年 6 月に始まる朝鮮戦争が戦争特需を生み出し、政府も同年以降、産業合理化政策を実施したために、鉱工業生産指数は 1951 年には 1930 年代中頃のレベルに回復して、日本経済は成長軌道に乗った。

しかし、工業国としての日本の再生は、米国による日本の占領政策の転換を反映したのもであった。終戦直後、米国は日本を平和な非武装の農業国にしようとしていた。その具体的な現れが、1946 年 11 月 3 日に公布された日本国憲法であり、財閥解体、労働民主化と農地改革からなる経済民主化であった。しかし、1947 年のトルーマン・ドクトリン発表とコミンフォルムの創設、1948 年 4 月のベルリン封鎖開始、その翌年の NATO と COMECON の結成、同 11 月の中国での中華人民共和国の成立などを経て、米国を中心とする自由主義諸国とソ連を中心とする共産主義諸国の東西陣営の対立が深まった。「冷戦」である。このような世界情勢の中で米国は日本を、軍事力と工業力を備えた従属国として成長させる方針に転換した。1949 年には独禁法が緩和されて、公職追放が解除され、労働運動や政治活動の制限が行なわれ、その翌年には

沖縄の恒久基地化が GHQ によって宣言された。そして 1951 年(昭和 26 年)に多数講和(ソ連など共産圏を含まない)と言うべきサンフランシスコ講和条約と、同時に調印された日米安保条約によって、日本は完全に東西冷戦構造の中に組み込まれ、軍事的・政治的に米国の従属国としての地位を固定化されたのである。

戦争末期に東京産業大学と名称変更された東京商科大学は、1947 年には元の名称を取り戻した。さらにその 2 年後には東京商科大学は一橋大学に改組されて、商学部、経済学部、法律社会学部が設置された。そして、1951 年には法律社会学部が法学部と社会学部に分離して、一橋大学は 4 学部構成となった。このような状況の中での一橋 YMCA の学生会員の生活は、どのようなものだったのだろうか。前述のように 1951 年まで日曜日には寮は礼拝集会所として開放された。またそれ以外に、聖書研究会が毎週開かれた。食糧や必需品は全く乏しかったけれども、馬場寮母様とそのお嬢様たちを中心とする寮の生活は家族的で温かいものであった。また、速水優、磯部浩一、阿部志郎、寺田武男らの多数の寮外生会員が一橋 YMCA の活動を盛り上げていった。弓削によれば、会員すべてが平和の喜びと求道の熱心に燃え、寮生・通学生が協力して青年会の活動に励んだ。

この時期の一橋 YMCA 学生会員の多くが、卒業後に大学で教鞭を執った。昭和 22 年(1947 年)に卒業した弓削、裏、桜井の 3 名は当会の先輩桜井信行(昭和 15 年学部卒)の世話で青山学院に奉職し、昭和 22 年卒の中島省吾と昭和 24 年卒の阿部志郎は明治学院に奉職した。昭和 21 年に入寮した無教会派の

内田芳明は、信仰上の考えの相違が原因で弓削達と激しく衝突し、在学中に退寮した。そして大学卒業後に神奈川大学に奉職した。昭和27年卒の杉浦英一は愛知学芸大学に奉職したが、その後、城山三郎というペンネームの小説家に転じ、経済小説のジャンルを切り拓いた。『七十周年記念集』中の吉田政親の文によれば、昭和30年の時点で、土屋晃朔、渡部峻明と英明が大学院博士課程で学んでいた。一橋YMCAのアカデミックな特徴が戦後に受け継がれたとも言えるが、終戦直後の状況下では企業への就職に不安があったのかもしれない。他の卒業生たちは日本銀行(速水優)、第一銀行(成田政俊)、第一物産(八木繁治)、倉敷紡績(大津寄勝典)などの一流企業に就職した。速水優は後に日商岩井の社長、会長や経済同友会幹事などを経て日銀総裁になり、戦後初めてのゼロ金利政策を採用した。

第6期＝安定成長期(1951～1964年)

『百年史』に倣って、1951年から1964年の第一回総会開催までを一括りにして、一橋YMCAの「安定成長期」と名付けよう。この時期は、世界の東西冷戦構造の中で、米国への日本の軍事的・政治的な従属化が進展し、その状況の下で高度経済成長が始まる時期にあたる。

1951年に日米安保条約に調印した吉田茂内閣は、翌年には破壊活動防止法を公布し、1954年(昭和29年)には防衛庁と自衛隊を発足させて再軍備路線を推進した。そして、これに対する批判的な言論を圧殺するために、鳩山一郎内閣以後の自民党政府は教員の勤務評定や教

科書検定の強化を進めた(1955年11月に保守合同が行なわれて自由民主党が結成された)。1957年(昭和32年)に首相に就任した岸信介は軍拡と日米安保強化の準備を強力に推進した。日米安保条約を改定する新安保条約は、国民的規模の反対運動にも拘らず、警官隊を導入した衆議院で、1960年5月19日に自民党単独で強行採決された。これに抗議する6月15日の安保改定阻止第2次ストには全国で580万人が参加した。この時、全学連主流派は国会に突入して警官隊と衝突し、混乱の中で東大生樺美智子がデモの混乱の中で圧死した。新安保条約の自然成立後に岸内閣は総辞職し、代わって「寛容と忍耐」を看板にし、「所得倍増」政策を掲げる池田勇人内閣が成立した。GDPが毎年実質10%前後の成長を達成する日本経済の「高度成長」は1955年頃から1973年まで続く。その間に日本人の生活状態は著しく改善されていった。

60年安保闘争に頂点を迎えるこの「政治の季節」に、一橋YMCAには組織的な政治的動きはなかったが、学生会員たちは個々に政治活動に参加した。1949年(昭和24年)入学の鈴木孝夫やその1学年下の岸田尚治は民科グループに属し、破防法反対闘争などの革新的政治活動に参加した。また滝浦満によれば、60年安保闘争の時には一橋大学の学生たちも進んでデモに参加し、また中央線の各駅に陣取って強行採決への抗議を表明した。YMCAの寮生たちも、思い思いにその中に加わった。滝浦自身も、国会周辺のフランスデモに加わって、水溜りを避けきれずに靴1足を駄目にしたという。

この時期の一橋 YMCA 寮の生活を知るための資料としては、『70 周年記念集』所収の吉田政親(1955 年卒)の文、『百年史』所収の中内恒夫(在寮期間は 1952～59 年)、須部浩右(1958 年卒)、後藤省爾(1959 年卒)、佐藤耕一(1962 年卒)、滝浦満(1965 年卒)の文と『会報』28 号所収の堀地史郎(1955 年卒)、同 50 号所収の高橋眞司(旧姓城取 1965 年卒)、同 52 号所収の滝浦、湯川久義(1962 年卒)、三堀浩(1964 年卒)の文などがある。国立教会の教会堂が 1951 年に完成したのちには、日曜礼拝は一橋 YMCA 寮では行われなくなったが、この時期の寮生の大部分はクリスチャンであり、聖書研究会や毎日の夕拝が続けられた。学生たちの多くが寮のオルガンを演奏して楽しんだが、これは戦前の卒業生布施公平が寮に寄贈したものであった。また、1959 年(昭和 34)年に卒業して三菱電機に就職した渡辺一雄が、電気洗濯機を寮に寄贈して、寮生たちを洗濯の重労働から解放した。洗濯物は寮の広い庭で、洗濯物用のロープに天日干しされた。山田欽一教授や田上穰治教授は戦前に引き続いて、よく学生の指導に当たられた。1953 年(昭和 28 年)6 月には宮本信武之助氏が国立教会の第 2 代の牧師に就任されたが、宮本牧師もしばしば寮を訪れて学生の指導にあたられた。1954 年(昭和 29 年)には、学生会員の努力で一橋 YMCA 会員名簿が作成・印刷された。

この時期の一橋 YMCA の活動の充実ぶりを示す 3 つの事例がある。第 1 は、中内恒夫が 1955 年(昭和 30 年)に世界的に著名な神学者であるエミール・ブルンナー博士の兼松講堂での講演を成功させたことである。元チューリヒ大学

学長のブルンナー博士は当時 ICU に客員教授として招かれていたが、中内は ICU でその講義を聴講した後、無謀にも直接に一橋大学での講演をお願いした。その熱心さにほだされて博士が申し出を承諾されたので、中内は一橋大学当局に、大学主催でブルンナー博士の講演会を開催することを願い出た。中山伊知郎学長はこれを承諾し、送迎車、会場、謝礼、懇親会までの一切を一橋大学が引きうけた。兼松講堂の階下は満員となり、「現代の危機に解決ありや」と題する講演会は大成功に終わった。その後、中内は大学院に進み、次いで ICU に奉職することになる。

第 2 には、須部浩右が 1957 年(昭和 32 年)に YMCA 学生代表として同志社大の野村氏と共に約 1 カ月半、フィリピン YMCA の農村ワークキャンプに参加して奉仕した。一橋 YMCA の学生会員が海外の YMCA 学生会員と交流した戦後初の事例であろう。第 3 は、滝浦満が 1960 年(昭和 35 年)にストラスブルで開かれた世界学生基督教連盟 WSCF の教育集会に、日本の YMCA 学生代表の 1 人として選ばれて参加したことである。この教育集会は「エキュメニズム」を先駆的に取り上げていた。ローマ・カトリック教会では、ほどなく第二バチカン公会議が開催されて、ラディカルな改革が始まった。遅れて日本でも、キリスト教の多様なグループを結集した聖書の共同訳の試みが始まる。わが一橋 YMCA は滝浦を通して、その息吹をいち早く感じることができたのである。第 2、第 3 の事例は、一橋 YMCA の会員たちがいわゆる「学 Y」(全国の学生 YMCA の連絡会)活動に積極的に関わっていたことの証拠である。

この時期の寮生活にとっての悲痛だったのは、母と慕う馬場寮母様が1959年(昭和34年)春に脳血栓で倒れられたことである。馬場寮母様は入院加療の後、武蔵境に引っ越され、佐藤耕一や柏倉誠が用心棒として一緒に住み込むような事態となった。寮はしばらく完全自治制となったが、夏近くになって、先輩の桜井信行が阿佐ヶ谷教会の信徒である松本和子様を寮母候補者として紹介して下さった。松本寮母様は未亡人であり、1924年(大正13年)に青山学院の女学生時代に受洗された方であった。松本寮母様は、寮生たちの願いを聞き入れて新しい寮母となり、寮に住み込まれ、国立教会に転籍された。

この時期に大学院に進んだのは中内恒夫と(古代ギリシャの)ヘロドス研究者の熊田長生(1956年卒)と、増田四郎ゼミの高橋眞司(1965年卒)であった。その他の学生会員は、ほとんどが民間一流企業に就職した。昭和28年から昭和37年までのほとんどの卒業生の就職先を、中内が『百年史』49～50頁に記している。彼らはやがてそれらの幹部となり、「キャプテンズ・オブ・インダストリー」として活躍することになった。

1956年(昭和31年)秋の寮祭の時に、一橋寮の土地建物の名義問題が提起された。国立の一橋YMCA寮の名義は、設立当初から江口定條(明治20年本科卒)の名前になっており、すでに江口は故人になられているので、このまま放置してはいけないと判断された。卒業生の木本茂三郎(昭和2年卒:当時東京YMCA総主事)を中心に、この問題を検討する委員会が設置され、会合を重ねた結果、一定の条件下で寮をYMCA同盟に寄贈することが決定された。その

条件とは、①同盟は単なる形式上の所有者者であって、寮の管理運営は一橋YMCAの自主性に委ねる。②贈与手続費用や公租公課は一橋YMCAが全額負担する。③一橋YMCAが法人資格を取得したあかつきには、一橋YMCAに寮の所有権を返還する、以上であった。YMCA同盟は一橋YMCAのこの条件を快く受け入れた。所有権移管の手続きを実際に役所に出かけて行なったのは寮生たちであるが、その手続には半年を要した。寮生たちは、この苦労を通して実務的にかなり鍛えられたことであろう。それからちょうど60年後、つまり創立129年目にあたる2016年には、齋藤理事長の努力によって一橋YMCAは公益財団法人の資格を取得した。土地建物の所有権を取り戻すための条件は今や整っている。

1964年に一橋YMCAが、卒業生と在学生在を糾合し、理事会を戦略会議として持つ組織として発足したことは、当会史上の重要な画期の1つである。第1回の総会(会員総会)は同年の11月23日に国立一橋寮で開かれ、会則が定められ、理事会は毎年『会報』を編集・発行することが決定された。会則は当会の目的と事業について、次のように規定している。それは「学内および社会に対する福音の証しを目的とし、同時に、会員相互の交流親睦、一橋大学基督教青年会および同一橋寮への援助、その他の事業を行なう」というものであった。最初の理事には、卒業生から武井大助(明治42年卒)、君塚茂太郎(大正11年卒)、木本茂三郎、桜井信行、中島省吾、須部浩右、永井孝平(昭和36年卒)が、教官からは山田欽一教授(昭和5年卒)、学生からは渡辺徹と津村俊夫(共に当

時学部3年生)が選任された。監事には卒業生から飯島権蔵(大正3年卒)と日比野清次(昭和5年卒)が選任された。

理事たちは同年12月19日に神田一橋の如水会館で第1回理事会を開き、初代理事長として武井大助を推挙し、卒業生の小宮孝(昭和4年卒)と秋山東吾(昭和15年卒)を理事として追加選任した。また年度および総会について決定し、会員登録の手続きについて定め、会員名簿の作成を行なうことを決定した。会員の年会費は1千円、終身会費は1万円と決定された。会費制は、国立の新しい寮が建設された後の1981年5月まで続けられた。『一橋基督教青年会会報』第1号は1965年1月20付で発行されたが、翌年8月15日発行の第3号までは学生の手によるガリ版印刷であった。1967年1月発行の第4号からは、文教タイプ印刷によって印刷されて、読み易くなる。

第7期＝成熟期(1964～1979年)

第1回総会が開催された1964年(昭和39年)は、東海道新幹線が開通し、東京オリンピックが開催された年でもある。翌年から1970年まで「いざなぎ景気」が続き、その間に日本はGDPで米国に次ぐ資本主義諸国第2位の経済大国になった。そして1973年の第一次石油ショックから79年の第2次石油ショックまでに、日本経済は安定成長の状態に移行する。しかし、この一橋YMCA史の第7期、特にその前半は、政治的には、国内外の大変動の時代であった。学生生活の視点から、これを簡単に見てみよう。

1964年8月にはトンキン湾事件が起こり、翌年2月から米軍による北ベトナム爆撃が開始され、沖縄はB52型爆撃機の発進基地となった。また日本本土の米軍基地はベトナム戦争のための補給・整備に多忙であった。立川基地や横田基地に近い国立でも、上空を飛ぶ米軍機の爆音が頻繁に聞こえた。1967年にはすでに47万人の米軍兵力がベトナムに投入されていたが、ベトナムでボール爆弾や枯葉剤が使用され、大量虐殺が行われるといった実態が明らかとなり、米国内でも学生を中心とした反戦活動が盛んになった。日本でも1965年に「ベ平連」が結成され、多数の市民や学生がベトナム反戦運動を展開した。1960年代の後半には、また、高度成長の副産物としての「公害」の問題が噴出した。四日市ぜんそく訴訟は67年に、イタイイタイ病訴訟はその翌年に行なわれた。69年11月には厚生省が、熊本県水俣病と新潟水俣病を公害病と認定した。都市部の光化学スモッグ公害や、駿河湾のヘドロ公害も深刻であり、公害をめぐる住民運動が全国で展開された。1970年には国会で公害関係14法案が可決された。

いわゆる「大学紛争」は、それぞれの異なった事情によって1968年に始まった東大紛争、日大紛争および東京教育大紛争が発端となり、ベトナム反戦運動と重なって、全国に広がっていった。60年安保闘争において生まれた様々な過激な小政治グループが職業的な活動家を大学に送り込み、学生寮に巢食い自治会から活動の資金源を吸い上げたことが、学園紛争を深刻化させた。全学団交で活動家たちによって吊り上げられた大学管理職の教授たちは、まことに気の毒であった。活動家たちは「大学解体」を叫

びながら、中国文化革命の紅衛兵を真似ていい気になっていたのである。大学を「自由と自治」の行なわれる治外法権の領域とする各大学の教授会は、大学の研究教育の機能が麻痺しても、警察機動隊を学内に導入することをためらった。しかし、1969年1月には東大安田講堂の封鎖が解除され、2月には日大の封鎖が解除され、4月には中教審が大学臨時措置法を国会に上程した。これに対して国大協は反対したが、8月に国会で抜き打ち採決されて、年度内にはほとんどの大学の紛争は終結した。一橋大学でも69年5月に本館と図書館が全開委を名乗るグループによって封鎖されて授業ができなくなったが、10月には別の学生グループによって解除された。大学紛争を経て大学は、産学協同体制のもとで「期待される人間像」を生み出していく高等教育機関としての基盤を確立した。その間に、もっと大きな問題であるベトナム戦争反対闘争と日米安保条約自動延長反対闘争は、その推進力を弱めてしまった。

1970年代は米国とソ連という二大超大国の力が弱まり、世界政治の多極化が始まる時代であった。ニクソン米大統領は1971年に米ドルと金との兌換を停止し、73年には為替を変動相場制に移行させた。72年には大統領として初めて中国を訪問し、73年1月にはベトナム和平協定に調印した。その後、東西冷戦の「緊張緩和」が訪れる。

この1964年から79年までの一橋YMCAの活動については、『百年史』の中の津村俊夫、栗生澤猛夫、川勝高宏、山本通、江藤直純、山本秀明、生原伸夫の回顧文と「会報」52号(2010年)中の中村正俊(1971年:昭和46卒)

の文、「会報」54号(2010年)中の伊東新祐(1967年:昭和42卒)の文、そして「会報」56号(2011年)中の齋藤金義(1973年:昭和48年卒)、青崎敏彦(1977年:昭和52年卒)、石塚弦一郎(1978年:昭和53年卒)の文が参考になる。とりわけ1970年1月に発行された『会報』10号の中に加藤順(1972年:昭和47年卒)の文からは、敬虔なクリスチャン学生が当時の状況の中で真剣に悩み苦しんだ姿がくっきりと浮かび上がる。再び訪れたこの「政治の時代」において、YMCA会員たちが周りの状況に振り回されて右往左往しながら、当青年会内部で宗教・政治問題について徹底した討論をすることができなかったことを、加藤は悔やんでいる。しかしながら当会は、1968年69年と2年続けて小平祭で靖国神社国営化問題を取り上げて、その反対署名運動を繰り広げた。また、1968年の小平祭ではベトナムの戦傷児に医薬品を送るための募金活動を繰り広げた。これらの活動は、十分に評価されるべきだろう。

この第7期に一橋YMCAの活動は、以前に比べて一段と活発になった。寮生の大部分はクリスチャンであり、儀賀裕理(昭和46年卒)や関和義(昭和50年卒)らのクリスチャン寮外生が活動に積極的に参加した。一橋YMCAが学園祭に定期的に参加するようになったのは、この時期からであり、それは1965年小平祭を嚆矢とする。6月の小平祭では熊沢義宣氏講演会(1965年:昭和40年)、宮本武之助氏講演会(1966年、67年)、公開読書会:キルケゴール「死に至る病」(1968年)、新谷敬三氏講演会(1970年)、北森嘉蔵氏講演会(1971年)、石原正巳氏指導の討論会(1972年)、御子柴道夫氏講

演会(1973年)、中野記偉氏講演会(1974年)、牧野力氏講演会(1975年)、斉藤忠利氏指導討論会(1976年)が行なわれた。他方11月の一橋祭では、宮本武之助氏講演会(1966年)、八木誠一氏講演会(1967年)、浅野順一氏講演会(1970年)、大木英夫氏講演会(1971年)、長幸男氏講演会(1973年)、門脇佳吉氏講演会(1974年)、熊沢義宣氏講演会(1975年)が行なわれた。

小平祭は前期1・2年生が担当し、一橋祭は後期3・4年生が担当したが、講演会の準備のために学生会員は数か月前から熱心に読書会を開いて、大学祭の折には文集を発行した。また、新入生歓迎合宿を寮外の施設で行ない、キリスト教関係のテキストを全員で勉強して討論した。その他に、毎年のように寮外の施設で講師を招いて修養会を開催した。この時期の一橋YMCAの年間スケジュールは、新入生歓迎合宿、総会、読書会、小平祭、読書会、修養会、一橋祭、クリスマス会、予餞会と続いた。朝拝ないし夕拝は毎日続けられ、聖書研究も毎週土曜日の夕方に行われた。聖書研究会は、従来、学生たちだけで行われていたが、1967年からはプロテスタントの牧師先生の指導の下で行なうようになった。これによって、学生たちの聖書理解が深まったことは言うまでもない。『百年史』中の中山泰吉(1980年卒)の文中には、中山が1年生のとき(1976年)、湯田さんという熱心なクリスチャンがよく寮を訪問し、その後、山本秀明(1977年卒)や石塚弦一郎(1978年卒)らと学内伝道を展開した、という記事がある。この時期のYMCA一橋寮は江藤が言うように「求道者集団の学びの舎」として位置づけられよう。

第2に、一橋YMCAは外部との接触を維持した。滝浦はYMCA同盟の傘下にある学Yの常任委員として活躍したが、その任務は栗生沢、川勝、松田、山本、江藤、加藤と引き継がれた。『百年史』中の栗生沢の文によれば、当時YMCAの組織を持つ東京の大学はそれぞれ1名の常任委員を選出し、全体で常任委員会を組織していた。その主な活動は、各大学の青年会の状況についての情報交換や問題点の検討と並んで、東山荘での夏季学校開催に向けての準備であった。1964年(昭和39年)の夏季学校のテーマは「学Y共同体とわたし」であった。翌1965年の東山荘の夏季学校については『会報』第2号で川勝高宏が詳しく報告している。校長は九州大学教授の高木暢也氏であった。聖書研究は佐竹明先生の指導で行われ、「学Y運動の停滞・無目的化」という総合テーマの下で、隅谷三喜男、神島二郎、藤田若雄の3先生が講演を行なった。川勝は一橋YMCAで夏季学校の報告を行なった。ただし、その後の記録は無い。そして、『会報』10号中の江藤の文によれば、1969年の夏季学校では、全国委員会の解体宣言が出て、会合は混乱のうちに終わった。その後、夏季学校は夏季セミナーに姿を変えたが、一橋YMCAが学Yと接触した記録はその後しばらく途絶える。

1969年には、長らく一橋YMCAの部長を務められた山田欽一教授が一橋大学を退官されたので、代わってアメリカ黒人文学の研究者であり敬虔なクリスチャンである斉藤忠利一橋大学教授が当会の部長に就任された。斉藤忠利先生はその後、長く聖書研究会のチューターを務められた。国立教会の宮本信之助牧師は1967年

度から一橋寮に来られて、聖書研究を指導された。また、1966年6月から69年3月まで国立教会の教師・副牧師として宮本信之助牧師を助けられた岩本修一氏も、1969年9月に国立教会の牧師に就任された穴戸達氏も、よく一橋寮を訪れて、聖書研究会などで寮生たちの指導にあたられた

この時期に国立一橋寮の老朽化が深刻な状態になった。階段の手すりぐらぐらし、雨が降るとあちこちで大量の雨漏りがしたが、1969年には1階の1室の天井が崩落した。これを機に、補修工事が実施され、寮生中心に募金運動が始まった。1970年6月の総会において第2代の理事長に選出された木本茂三郎は、早速寮の改築問題に取り組んだ(木本茂三郎については、本書に収録された齊藤實氏の文が詳しく紹介している)。翌年には、寮改築計画と建築資金の募金活動を一橋YMCAとして実行することが決まって、寮再建委員会が立ち上げられた。多くの卒業生会員が募金に応じたが、建築費の高騰によって建て替えが困難になった。そのため、寮の南側の土地115坪を分譲して資金源とし、なんとか1977年9月に5,400万円の建設資金が用意できた。国立一橋寮は1978年5月に解体され、新一橋YMCA寮は同年6月3日に着工された。新寮の建設期間中、寮生は四散し、YMCAとしての活動も中断された。旧寮は12名の学生を収容したが、1979年1月に竣工した新寮は16名分の個室を持つものだった。新寮建設の詳細については『百年史』中の加藤順の文を参照されたい。

この時期の卒業生の進路は極めて多岐に亘る。津村俊夫(1966年:昭和41年卒)は大学

卒業後に渡米して神学と聖書学を学び、聖書学者になった。江藤直純(ルーテル神学大学学長)は卒業後、ルーテル神学大学で学び、神学者・牧師になった。阿久戸光晴(1973年卒、聖学院大学理事長)は卒業後住友化学に勤めたが、召命を受けて神学大学で学び、神学者・教育者として活躍している。一橋の大学院に進学して研究・教育者になったのは、栗生沢猛夫、山本通、鈴木一策(1970年卒)、桜井直文(1971年卒)、大芝亮(1976年卒)である。国家公務員になったのは鈴木望(1973年卒、厚生労働省、のち磐田市長、衆議院議員)、岩谷滋雄(1973年卒、外務省、オーストリア大使)、飯島健司(1974年卒、財務省)と宮城勉(1977年卒、経済産業省)である。裁判官になったのは市村陽典(1974年卒、東京高等裁判所判事)、公認会計士になったのは西浦道明(1972年卒)。秋山武夫(1969年卒)は丸紅を退社した後、米国NY弁護士になり、如水会NY支部長を務めた。青崎敏彦(1977年卒)と山本秀明(1977年卒)はともに一橋大学卒業後に他大学の医学部に入り直して勉強し、医者になった。その他のほとんどは、民間の一流企業に就職してその幹部になった。退職後、川勝高宏は福祉関係の事業で活躍し、宮岡五百里(1968年卒)は家事調停委員を務める傍ら、少年事件に関わる少年たちの更生のためのボランティア活動に携わった。このように、第2の人生を福祉分野の仕事に捧げている人が多いのも、当会の特徴であり伝統である。

第8期＝新一橋寮での活動(1979～1997年)

新一橋寮が完成した1979年(昭和54年)から堀地史郎が理事長に就任する1997年(平成9年)までを一橋YMCAの第8期とするが、これは世界史的に見れば、米ソの2大超大国が政治的・軍事的にも経済的にも力を弱めた結果、多極化が始まった時期である。1970年代の2次の石油ショックの影響によって西側諸国には構造的な不況が訪れ、1975年以後、毎年先進国首脳会議(サミット)が開かれるようになった。とりわけ、米英の経済的衰退と日独の経済成長が顕著であり、この動きを緩和するためのプラザ合意(1985年)や日米構造協議(1989以後)が行なわれた。西ドイツやフランスを中心に結成されていたECの1991年の首脳会議は、1999年までに欧州連合EUを創設することに合意した。東西冷戦の西側の周辺国では、韓国の光州事件(1980年)やフィリピンでのマルコス大統領の追放(1986年)に見られるように、民主化運動の波が広がった。

東西冷戦の東側でも同様の動きが見られた。ソ連では官営企業の非生産性が露呈してきた上に、1979年からのアフガニスタン戦争の泥沼の中で国力が衰えた。85年にソ連共産党書記長に就任したゴルバチョフは、88年にアフガン和平協定を結び、87年に米国との間にINF全廃条約を結び、東欧諸国の民主化運動を容認し、91年にはソ連共産党を解党した。89年にはベルリンの壁の撤去が始まり、翌年10月に東西ドイツが国家統一された。91年12月にはソ連邦が消滅して独立国家共同体となった。中国共産党は89年6月の天安門事件に象徴されるように、国内の民主化の要求を武力で押さえつ

け、共産党の一党独裁制の下で社会主義市場経済という名の経済成長路線を突き進んだ。

この時期には、ブラジル、ロシア、インド、中国のBRICs諸国、韓国、台湾、香港、シンガポールのアジアNIEs諸国、インドネシア、マレーシア、タイのASEAN諸国で顕著な経済成長が見られた。他方、この時期に複雑な政治状況を呈し始めるのは、中近東地域である。1979年にはイラン革命が成功してイスラム教シーア派のホメイニ師が最高指導者になり、親米派のパーレビ国王は亡命した。このイランと隣国イラクとの間に翌年から戦争が始まり、88年まで続いた。米国はフセイン大統領のイラクを支援したが、イラクが1990年8月に隣国クウェートに侵攻すると、米国は多国籍軍を率いてイラクを攻撃した(湾岸戦争)。

このような世界情勢の中で、日本経済は1980年代前半まで安定成長を続けた。貿易摩擦を緩和するために日本の製造企業は海外への直接投資を進めた。1980年代後半のバブル景気は1990年の株価暴落によって収束し、以後が「平成不況」の時代となる。政治的には日本の自民党政府は米国に軍事的に依存しつつ、着々と右傾化を進めていった。中曽根首相は1983年に日本列島の「不沈空母」化に言及し、86年には防衛費をGDPの1%を超える規模に引き上げた。そして湾岸戦争時の1991年には、自衛隊が初めて海外に派遣された。1989年1月には裕仁天皇が死んで昭和時代が終わり、平成時代が始まった。その翌年、フェリス女子大学長として弓削達は、大嘗祭を国事として執り行うことへの反対声明を出した。ある元右翼活動家が、威嚇のために弓削の自宅を銃撃した。

このような、国内外の状況は、一橋 YMCA の活動にはほとんど影響を及ぼさなかった。YMCA 学生会員のみならず、一般的に大学生たちは政治に無関心になっていた。強いて言えば、バブル崩壊の前と後とで学生の就職状況が変化したこと、そして就職後の海外赴任の機会が増加したことが指摘できよう。一橋 YMCA の歴史のこの第 8 期はさらに、木本理事長が退任して中島省吾が第 3 代の理事長に就任した 1992 年を境に 2 つの小さな時期に分けることができる。

16 名の学生を収容できる快適な住環境の新しい寮に戻ってきた旧寮生は、4 年生の諸遊哲彦、野上政郎、佐藤周一と 3 年生の中山泰吉（1980 年卒）だけであった。すぐに新しい寮生の募集が行なわれて、3 年生から 1 年生までの 9 名が入寮した。4 年生は 3 か月後に卒業し、4 月に 1 年生が 4 名入寮した。唯一の旧寮経験者である中山が、旧寮時代の YMCA 活動を新寮生たちに伝達する重要な役割を果たした。新入生歓迎合宿、朝拝、聖研、総会、小平祭、会報の発行、一橋祭、クリスマス祝会、予餞会の実施が正しく守られていったのは、中山の功績である。寮生の中のクリスチャンの割合は 1970 年代に次第に低下してきたが、新寮においては、寮生全員のうち 1・2 名と極端に少なくなった。寮生募集のあり方に問題があったのではないだろうか。しかし、キリスト教的な兄弟愛に基づく自治的な寮運営の伝統が生き続けたのは、幸いである。

これまで住み込みで寮生たちの生活を支えてこられた松本和子寮母様は、旧寮の解体と共に退任され、新しく富田信子様が寮母として奉仕して下さることになった。富田様は卒業生で理事の

加藤順が所属する牛込払方町教会の信徒であった。ご主人は建設事務所を運営しておられ、お二人に子供は無く東久留米にお住まいであった。そこで富田様は、一橋 YMCA 寮まで毎日食事の用意をするために通われたのである。当初は暫定的にご奉仕いただくという条件であったが、これが 10 年間も続くことになった。

第 8 期の前期の一橋 YMCA の活動については、『会報』の第 24 号から第 32 号までに記されている。クリスチャンの入寮生が少ないために、毎年の新入生歓迎合宿はキリスト教の入門書の勉強会という性質のものになった。1980 年には秋田稔『聖書の思想』、81 年には三浦綾子『新約聖書入門』、82 年には内村鑑三『後世への最大遺産』、83 年には遠藤周作『イエスの生涯』、84 年には佐藤陽二『キリスト教入門』、85 年には高橋三郎『絶望と希望』、86 年には土岐林三『神はわがやぐら』、87 年には新井智『聖書：その歴史的事実』が読まれた。合宿所としては八王子青年の家、狭山青年の家、リーベンゼラ福音の家、相模湖艇庫合宿所などが利用され、毎年斉藤忠利先生がチューターとして奉仕された。また聖書学者の一橋大学教授の土岐健治先生も、時々チューターとして参加された。

学園祭への参加も、引き続いて行われた。小平祭においては、1980 年はキリスト教に関する文集の発行、81 年は斎藤忠利先生をチューターとする討論会、82 年は映画上映会「塩狩峠」と文集の発行、83 年は文集の発行、85 年は文集発行と聖書の配布、86 年はチャリティー・クッキー作り、87 年は文集発行と聖書の配布が行なわれた。一橋祭では 1980 年には平野保牧師の講話「いきいきと生きるには」による伝道会、81 年

には漫画を入れた文集の発行、82年は映画上映会「ジーザス・クライスト・スーパースター」と文集の発行、83年は映画上映会「ブラザー・サン・シスター・ムーン」と文集発行、84年は映画上映会「炎のランナー」と文集発行、85年は映画上映会「カッコーの巣の上で」と文集発行、86年は映画上映会「ゴースト・バスターズ」と文集発行。しかし、学園祭参加の準備のために勉強会が行なわれた形跡はない。

聖書研究会について見ると、1980年には「コリント人への第1の手紙」、81年には「使徒行伝」、82年には「ルカ福音書」、83年には「ヨハネ福音書」、84年には「マルコ福音書」、85年には「ローマ人への手紙」、86年には「ルカ福音書」、87年には「ヨハネ福音書」が取り上げられた。チューターとして国立教会の穴戸達牧師と斉藤忠利教授が交代で奉仕された。

1981年総会において会員制が廃止され、卒業生からは会費ではなく寄付金をいただくことになった。盛岡邦夫(1982年卒)によれば、寮生たちは協議の上で1980年から、寮費を月額3,000円値上げした。これは、将来の寮の増改築を見込んで今後50年間で2,880万円を積み立てる、という計画に基づいていた。1980年度の寮会計収支報告書には、確かに支出の「留保金」に935,173円が計上されている。寮生たちは物価に応じて寮費をスライドさせることも考えに入れていた。これは大変立派な心がけであったが、この年代の寮生たちの意向は、理事会にも下級生にも正しく伝わっていなかったのも、バブル期の物価上昇の背景の中で、寮費増額分はいつの間にか他に流用されて消滅してしまった。

1987年は一橋YMCAの創立100周年にあたり、10月に国立一橋寮で100周年記念式典が行われた。また、一橋大学の国立本館201番教室で、「現代社会とキリスト教」と題する隅谷三喜男氏の記念講演会が行なわれた。また10月末には、中島省吾・弓削達・滝浦満の編集による『一橋基督教青年会—百年史—』が刊行された。ところがその後、1989～91年までの3年間、『会報』は発行されなかった。記録がないのだから、この期間には新入生歓迎会も、学園祭への参加も行なわれなかったのだろう。また、この時期の総会の記録さえも残されていない。『会報』の空白は、富田寮母様が、御両親の介護のために1990年に寮母を辞められて、その後2年間、寮母不在が続いたことと関連していると思われる。寮生たちにとっては、寮母不在の中で秩序ある生活を保つことだけで大変だったのだろう。しかし、この『会報』の空白期間を直ちに「暗黒時代」と見做すことはできない。これに関して参照すべきは、本書に収録された鈴木宗徳(1991年卒)の文である。これによると、この時期にも聖書研究会は毎週行われていた。チューターは斉藤先生、穴戸牧師、そして国立教会の増田琴伝道師であった。鈴木や山本信義によれば、斉藤先生は1988年ないし89年に退職されて土岐健治先生が顧問に就いてくださった。阿久戸光晴もこの間2年ほど聖研のチューターとして奉仕した。また、鈴木によれば寮生たちは互いに敬意を以て付き合い、誰もが立派な進路を選んで寮を巣立っていった。鈴木同期の山本信義は一橋大学卒業後に東京神学大学に進み、現在は日本基督教団の牧師として活躍している。また注目すべきは、鈴木宗徳が1988年から89年

にかけて学 Y の活動にのめり込んだ、という事実である。鈴木は学 Y 主催の夏季セミナーの準備などのために、しばしば早稲田奉仕園や信愛学舎に出かけて、他大学のクリスチャンと交流した。一橋 YMCA の学 Y での活動は、実に 1970 年以來のことであるが、鈴木大学の卒業と共に、学 Y との繋がり再び途切れてしまったようである。

第 8 期の後半は、1992 年の中島省吾の第 3 代理事長への就任に始まる。一橋 YMCA では、その後の数年間にさまざまな変化が起こっている。まず、しばらく休刊状態にあった『会報』が再び発行されるようになった。次に 1980 年以來久しぶりに 1992 年から入寮費と寮費が値上げされた。そして理事会会計と寮会計の方式が変更された。次に新しい寮母の着任である。1992 年 4 月に寮母になられた山口朝子様は桜ヶ丘キリスト教会(フリー・メソヂスト)所属のクリスチャンであり、国立 YMCA 寮には住まわれず、自転車で寮に通って寮生たちの食事の用意をされた。『会報』48 号中の堀口洋次郎(2000 年:平成 12 年卒)の追悼文によれば、山口寮母様は「おっとりした方」で堀口の在学中に寮母を辞められ、2006 年 12 月には召天された。さらに、1992 年 8 月からは、野澤毳寿恵様が身体の弱い山口様を助けて寮母として奉仕された。野澤様は同じ教会の山口様から「1 週間だけ手伝って」と頼まれて、通って来られたのだが、2009 年春まで実に約 16 年間に亘って奉仕を続けられた。

もう 1 つの大きな変化は、1995 年から寮生を複数の班に分けて聖書研究を行なうようになったことである。『会報』36 号の池田太郎(1999 年卒)の文によると、従来聖書研究会は寮生全員

16 人が 1 つのテーブルを囲んで聖書テキストを丁寧に読む方式であったが、新方式では興味・関心の近い者同士がグループを作ることとした。山本信義によれば、一つの契機は、クリスチャンではないグループが哲学研究を行いたいということで、2 つのグループになったと証言している(聖職者座談会における山本信義の発言)。こうして聖書研究会についての試行錯誤が数年間続いた。具体的に見ていくと、1992 年は穴戸達牧師を迎えて「ローマ人への手紙」を読み、93 年、94 年は土岐健治教授を招いて「ローマ人への手紙」を読み、月 1 回は柏江教会の加藤智牧師に来ていただいて「使徒信条について」という講話をうかがった。そして、1995 年には第 1 分科会では「マルコによる福音書」を読み、第 2 分科会ではルターについて学んだ。ただし、ヘーゲルについて学んだ、という証言もある。1996 年には第 1 分科会で「ルカによる福音書」、第 2 分科会で「マルコによる福音書」が読まれた。1997 年には第 1 分科会で泉隆氏のチュートリアルで「マルコによる福音書」、第 2 分科会では阿久戸光晴のチュートリアルで「使徒行伝」が読まれた。こうして 1997 年に至って、福音書を読む第 1 班と聖書のその他のテキストを読む第 2 班からなる 2 班方式が確立され、1・2 年生は第 1 班、3・4 年生は第 2 班というのが、その後の一橋 YMCA 聖書研究会の伝統となっていくのである。

新入生歓迎合宿や学園祭への参加も再開された。1993 年、94 年、96 年、97 年には相模湖艇庫合宿所で新入生歓迎合宿が行われた。小平祭においては、1992 年は太田修司氏の講演会「使徒パウロ」が行なわれ、聖書神学校の笠原義久氏がコメントをされた。93 年にも講演会

が行なわれた。95年には江藤直純氏の講演会「近代国家とキリスト教」が行なわれた。一橋祭にも1992年に参加した。93年の一橋祭では泉治典氏の講演会「聖書をどう読むか：ヨハネ黙示録の世界」、94年には小林稔氏の講演会「正統主義は正当か」、95年には高橋義人氏の講演会「魔女とキリスト教」、97年は原恵氏講演会「讃美歌の歴史」が行なわれた。学園祭の準備のために勉強会を行なった形跡はなく、文集も発行されなかった。

第9期＝新展開(1997～2019年)

一橋YMCAの第9期は1997年から現在までであるが、世界経済の上では多極化がさらに進展した。中国の経済的躍進は目覚ましく、最近まで毎年10%近い実質経済成長率を示して、2011年にはGDPで世界第2位の経済大国になった。米国とロシアは、それぞれIT産業と石油精製業の躍進を中心にして経済状況が回復した。サブプライム・ローンを組み込んだ証券の不良債権化に端を発して米国で2008年9月にリーマンショックが起こり、これが世界経済に混乱を引き起こしたが、米国の「金融安定化法」やG20の開催などを通して、混乱は沈静化した。中東地域の政治的不安定さはこの時期にさらに増した。2001年にアルカイダによる9・11同時多発テロが米国東部で起こり、これに報復するためにブッシュ(子)大統領はアフガニスタンへの空爆を開始した。ブッシュは、さらに2003年3月にイラクに軍隊を投入してフセイン政権を倒し、イラクに民主的國家を建設させた。しかし、イラク軍の残党が、のちにIS國をイラク北部とシリアにまたがる

地域に建設することになる。2010年の12月に始まるチュニジア国民の民主化要求運動は欧米諸国の支持を得て成功し、民主化運動が周辺諸国に広がって「アラブの春」が訪れた。エジプトのムバラク政権とリビアのカダフィー政権が倒されたが、その後の軍部の台頭などにより民主化の運動は挫折した。アラブ諸国の民主化要求運動はアルジェリア、イエメンなどにも及び、一定の成果が得られた。やや遅れて国民の民主化運動が起こったシリアでは、内戦状態が続き、多くの難民が国外に逃れている。

日本では、2009年9月に民主党が政権を奪ったが、2012年末には自民党が政権を取り戻した。民主党政権は国民の大多数の期待に応えられなかったのである。2011年3月には東日本大震災が起こり、それによって引き起こされた津波と福島第一原子力発電所の事故が、東北地方の人々に甚大な被害をもたらした。2012年に首相の座についた安倍晋三は「3本の矢」からなるアベノミックスという政策を打ち出して経済成長の幻想を振りまいたが、「平成不況」は長引いた。超低金利政策と為替の円安誘導政策、そして改正労働者派遣法は企業利潤の内部留保を増やしただけであり、国民の生活に改善は見られなかった。2009年に日本の貧困率は先進諸国中最大の15.7%に達していたが、その後も非正規雇用労働者の比率が増加して、国民の間での所得格差が広がっている。民主党は2030年代に日本の原子力初発所を全廃するという目標を掲げたが、安倍は首相就任早々、この目標を撤回した。

1998年以後、とりわけ安倍首相の在任中に対米従属を前提とした政治的・軍事的右傾化が

着々と進行した。このことは、自民党が国会で成立させた法案を列挙するだけで明らかになる。1999年の国旗・国歌法、2001年のテロ対策特別措置法、2003年の有事法制関連3法、2004年の有事法制関連7法、2006年の改正教育基本法、2007年の「日本国憲法の改正手続きに関する法律」、2013年の特定秘密保護法、2015年の安全保障関連法(集団的自衛権容認を含む)、2017年のテロ等準備罪法などである。戦後の日本は何故、ドイツと違って、近隣諸国と真に友好的な関係を築けないのか。そして何故、核兵器と原発の全廃に向かって踏み出せないのか。それは、日本ではキリスト教の理念に基づく強力な政治政党が育たなかったからではないだろうか。クリスチャンであり、自民党リベラルであった大平正芳の政治姿勢と、現在の安倍首相のそれとは大いに異なる。2000年に森喜朗が「日本は天皇を中心とする神の国」と発言し、2013年には麻生太郎副総理が「憲法改正についてはナチスの手口に学んだらどうか」と発言した。安倍政権の閣僚の大部分は神道政治連盟と日本会議に所属しており、自民党政治はこの二つの宗教団体の意向を実現することを目指しているように思える。

さて、一橋YMCAでは1997年5月の総会において、堀地史郎が第4代理事長に就任した。ここから現在までの第9期も、齋藤金義が理事長に就任した2007年の前と後で二分できよう。『会報』39号(1998年)において、当時の副寮長の磯尾健司は、一橋YMCA寮の現在の問題として、寮の老朽化、キリスト教色の低下、学生自治意識の欠如の3点を挙げている。これらの問題は以前から存在していたであろうが、『会

報』において明記されたのは初めてである。堀地理事長が最初に取り組んだのは、築18年にして初めて行われる新YMCA一橋寮の大規模な改修工事である。そのために卒業生たちを対象に行なわれた募金活動は功を奏して、1997年には138万円、98年には170万円、99年には118万円の寄付金が集まり、1998年には大改修が行われた。2001年には理事会財政の改善のために、寮敷地内に乗用車5台分の駐車場が建設された。この際に環境保全に注意が払われたことは、言うまでもない。また同年にYMCA一橋寮のホームページが開設され、2003年には寮内に無線LANが設置された。そして2004年の総会において、堀地理事長は多くのメンバーの参画を得たタスクフォースを立ち上げた。課題とされたタスクは寮の保全とOB・学生間の交流の活性化であり、タスクフォースのメンバーには、齋藤金義監事と加藤順理事を中心に、吉田護理事(2000年卒)、堀口洋次郎理事(2000年卒)、中村研太(2002年卒)が選ばれ、すぐに活動を開始した。タスクフォースには、さらに若干の若手OBと学生幹部が加わった。この年(2004年)に、1992年以来久しぶりに寮費が引き上げられた。

2005年の総会で堀地理事長は退任し、「2年だけ」という約束で須部浩右が第5代理事長に就任した。この総会では吉田護理事(2000年卒)によって、タスクフォースの活動報告が行われた。この中で吉田は、タスクフォースの中間答申として次の4点の必要性を強調した。①寮の外壁補修、②新たな収益事業、③適切な法人格の取得、④OB向けの一橋YMCAとしてのホームページの開設。これらのうち①は寄付金によ

って2005年に実施されたが、②～④の課題は次の理事長の代に先送りされた。またこの時期に、寮財政にとって大きな事件が起こった。前述のように、1957年にYMCA寮の土地は日本YMCA同盟に寄託されたのだが、1997年に国立市は突然土地に対する課税を通告してきた。再三に亘る免除交渉も実らず、一橋YMCAは以後毎年50万円余りを固定資産税として国立市に払ってきた。しかし2005年3月に日本YMCA同盟主事の本田真也氏の尽力と国立市議大和祥郎氏の支援を得て、営業駐車場を除く寮土地に対する固定資産税の免除が認められた。

学生によるYMCAの活動は、前の時期と同じように続けられた。1997年の新入生歓迎合宿は相模湖合宿所で行われた。99年のそれは青梅青年の家で行われ、チューターとして津村俊夫が招かれた。2000年と2001年、2002年、2004年、2005年、2006年には相模湖合宿所で「新入生への聖研イントロダクション」が行われた。2003年の新入生歓迎会は小平合宿所で行われた。

学園祭への参加も引き続いて行われた。1997年の小平祭では、山岡健氏による「死海文書はセンセーションか」と題する講演会が開かれた。1999年、2000年、2001年、2002年、2003年、2004年、2005年の小平祭では模擬店が出展された。1997年の委一橋祭では原恵氏による「讚美歌の歴史」と題する講演会が開かれた。1999年の一橋祭では阿久戸光晴による「死刑制度とキリスト教」と題する講演会、2000年の一橋祭では、ミッションバラバ講演会「親分はイエス様」が開かれた。2001年には犀川一夫氏の「ハンセン

氏病と聖書のらい」と題する講演会、2002年には棟方信彦氏の「宗教とマーケティング」と題する講演会、2003年には日銀総裁を退任した直後の速水優の「日本の明日を考える」と題する講演会、2004年には津村俊夫の「聖書考古学と聖書の世界」と題する講演会、2005年には「クワイ河収容所の奇跡：To End All Wars」の上映会が行なわれ、2006年には右近勝吉氏の講演会が行なわれた。

なお、1999年からは11月の寮祭において卒業生に講演を依頼するようになった。これは学生と卒業生との交流のために大変役立つ企画であり、現在も続けられている。1999年には裁判官になった市村陽典(1974年卒)が「司法制度の現状と改革」と題する講演を、2000年には精神科医になった青崎敏彦(1977年卒)が「脳と心の問題」と題する講演を行なった。2001年には長期信用銀行を退職して大学教員になった千保喜久夫(1972年卒)が「どうなる、どうする、あなたの年金」と題する講演を行ない、2003年には哲学者になった明治大学教授の桜井直文(1972年卒)が「オランダについて」と題する講演を行なった。2005年には三菱電機のアメリカ子会社社長在任中にボランティア活動の重要性に目覚めた渡辺一雄が「フィラソロピーと社会」と題する講演を行なって、聴衆に感動を与えた。2006年には野村証券のベンチャーファンドのJAFCOに就職し、その後もベンチャーファンド関連の仕事に従事している本村天(1999年卒)の講演が行われた。

聖書研究会も続けられた。1997年の聖研第1分科会は「マルコによる福音書」を読み、チューターは泉隆氏、第2分科会は「使徒行伝」を阿

久戸光晴のチュートリアルで読んだ。1999年には分科会制をとらず、前半は泉隆氏の著書『日本人と聖書の世界』の輪読、後半は「マルコによる福音書」を泉隆氏のチュートリアルで読んだ。2000年の聖研第1分科会は「ルカによる福音書」を泉隆氏のチュートリアルで、第2分科会は「ローマ人への手紙」と「エペソ人への手紙」を金成孝悟氏のチュートリアルで読んだ。2001年の聖研第1分科会は「マタイによる福音書」を泉隆氏のチュートリアルで、第2分科会は「コリント人への第1の手紙」と「ガラテア人への手紙」を山本信義牧師のチュートリアルで読んだ。2002年の聖研第1分科会は「マルコによる福音書」を泉隆氏のチュートリアルで、第2分科会は「使徒言行録」を山本信義牧師のチュートリアルで読んだ。2003年の聖研第1分科会は「ヨハネによる福音書」を水口功牧師のチュートリアルで、第2分科会は「ローマ人への手紙」を山本信義牧師のチュートリアルで読んだ。2004年の聖研第1分科会は「ルカによる福音書」を水口功牧師のチュートリアルで、第2分科会は「コリント人への第1の手紙」を山本信義牧師のチュートリアルで読んだ。2005年の聖研第1分科会は「マタイによる福音書」を水口功牧師のチュートリアルで、第2分科会は「使徒言行録」を山本信義牧師のチュートリアルで読んだ。2006年の聖研第1分科会は「マルコによる福音書」を水口功牧師のチュートリアルで、第2分科会は「ヘブル人への手紙」を山本信義牧師のチュートリアルで読んだ。

また、学生の動きで注目すべきは2006年に、4年次生のうち3名が同時に世界各地に留学したことである。中村翔平は米国マイアミのセント・ト

マス大学に、成富太郎は豪州タスマニア島ホバートの大学に、南弘毅はカナダのトロントの大学に留学した。その経験は彼らにとって一生の宝となったであろう。また、日本の文部省から奨学金を給付されて一橋大学に留学してきたテキサス大学の学生、ケン・モンゴメリーが中村翔平と交代する形で、2006年の2月から約半年間、一橋YMCA寮に在寮した。一橋YMCAの活動は、このあたりから大変国際的になってくる。

第9期の後半は2007の総会における齋藤金義の第6代理事長就任から始まる。齋藤は2007年の総会における就任挨拶の中で、一橋YMCAの課題として、寮生・OBの受洗者を増やすこと、財政基盤の更なる強化、OBと学生の交流の活発化を挙げた。就任時に59歳の若さであった齋藤は、これらの課題にエネルギーに取り組んでいった。

齋藤理事長は、財政基盤の強化のために当会の法人化に取り組み、これによる財政基盤強化の前提の下で寮建物の再建を展望した。まず2010年に一橋YMCAは一般財団法人を設立した。さらに2016年9月には一橋YMCAは公益財団法人として東京都から認可された(『会報』66号を参照)。これらの認可申請の手続きは大変煩雑だったが、齋藤理事長は使命感を持って献身的に奮闘努力を続けた。もちろん、当会の渡辺徹(1966年卒)をはじめとする理事たちや堀地評議員長の協力が不可欠であったことは言うまでもない。

齋藤理事長は当会の一般財団法人認可の直後から、寮建物の再建問題に着手した。2011年11月には宮岡五百里(1968年卒)を委員長

とする「一橋寮の将来ビジョン検討委員会」が立ち上げられ、2013年4月21日付でその答申が公表され、同年6月の評議委員会で「一橋寮再建についての決議」が行なわれた。さらに同年10月の臨時評議員会では、西浦道明を委員長に「一橋寮再建募金推進委員会」の設置と、寮費(部屋代相当額)の1千円から7千円への引き上げが決議された。(以上については『会報』60号を参照)。次いで2016年6月の総会では岩谷滋雄(1973年卒)を委員長とする「一橋寮再建企画委員会」が設立された。この再建企画委員会での検討の結果、寮舎の全面再建の方針は取り下げられ、2017年の評議会において大規模な増改築工事を実施することが決定された。その後、卒業年次毎に募金推進委員をお願いし、昭和40年以前の卒業生には堀地史郎氏が、41年以降卒業生には齋藤理事長と西浦委員長が司令塔となって働きかけ、目標80百万円の募金を5年間でほぼ達成することが出来た。その中には、元理事長の中島省吾氏による多額の遺贈金や堀地史郎元理事長や瀧浦満氏未亡人雅子様などの大口寄附金による貢献があった。こうした募金活動が概ね順調に進んだ結果、増改築工事資金のめどは2019年3月末には立って2019年の春休みに寮舎の改築工事が開始された。設計は一級建築士・JIA登録建築家の田代洋志氏にお願いしたが、田代氏の熱意と努力は一橋YMCAの当事者たちを勇気づけてきた。建設費の高騰と人手不足の状況の中ではあるが、この12月にはYMCA一橋ホールの新築工事など一連の増改築工事が完成する見込みである。

齋藤理事長は、次いで『会報』を1年に2回、学生主体とOB主体のものを発行することによる『会報』の充実を図った。齋藤は『会報』50号の巻頭言の中で、卒業生号を「これまで以上に多くのOB会員のご参加を得て、広く先輩・後輩の思索・情報の交換、また教育の場として活用するものとして企画した」と述べている。卒業生号は2008年12月末発行の50号から始まり、瀧浦満がその編集の仕事に献身的に尽くした。すでに電子メールが普及していた時代であるが、瀧浦は多くの卒業生に天賦の達筆で寄稿依頼の手紙を送り、原稿が自筆の場合にはそれを自らワードに打ち込んだ。その内容は理事長挨拶、随想、論考、読書感想文、講演記録、「理事会からのお知らせ」などである。また、52号以降3年に亘って「学生キリスト教運動の歴史回顧」と「キリスト教の宗派と教会活動」の二つの特集が組まれた。卒業生号の内容は質・量ともに非常に充実していた。50号は21名の卒業生による24点の文を収録して全体で43頁。52号は34名の卒業生による36点の文を収録して全体で89頁。54号は27名の卒業生による32点の文を収録して全体で93頁。56号は27名の卒業生による32点の文を収録して全体で104頁であった。卒業生たちの質の高い寄稿文によって『会報』はあたかも文芸雑誌のように興味深い内容のものとなった。

しかしながら、『会報』を充実したものとして発行し続けることは、その後困難になった。その原因の1つは、2011年の11月末に瀧浦が事故に遭って、編集の仕事を続けられなくなったことにある。しかし、『会報』の沈滞の本当の理由は、その一時的で爆発的な成功にあった。つまり、『会報』に

書くべき内容を持っている卒業生たちの多くは、56号までにそれを公表したので、その後はもはや書くべき内容を持たなくなったのである。『会報』編集の仕事を引き継いだ山本通は、川勝高宏、中村研太、杉山晶彦(2006年卒)の助力を得ながら、主に若手卒業生に寄稿依頼を行なったが、原稿の集まりは悪く、58号以降は後述の海外研修の報告文を収録して体裁を整えるようになった。

『会報』の学生号は2008年夏発行の49号から始まる。編集者は毎年の広報担当の学生であり、その内容は、理事長の巻頭言(挨拶)、活動報告(総会報告を含む)、数点の卒業生近況報告、そして在学生のエッセイから成る。53号からは学年ごとにテーマを決めて、寮生全員がエッセイを書くことになったが、そのためにエッセイの内容は次第に没个性的なつまらないものになっていった。したがって、卒業生号は卒業生だけに、学生号は学生だけに読者が限定される傾向が強まった。『会報』の年2回発行は、卒業生と学生との相互交流にはあまり役立たなかったのである。『会報』の編集・発行のあり方は、今や問い直されている。

齋藤理事長就任のすぐ後に、一橋YMCA関係の人事に2つの大きな変化があった。1つは寮母の交代である。16年に亘って寮母として一橋YMCAに奉仕された野澤毬寿恵様が2008年3月末をもって退任され、4月から氏家和本様が寮母に就任された。氏家様もクリスチャンであり、住込みの寮母として夕食の用意をはじめ、寮生のお世話をされた。また当会の顧問の土岐健治教授が2009年に一橋大学を退官されたので、クリスチャンで国立教会に所属されている葛

野尋之法学部教授に当会の顧問に就任して頂いた。但し、正式の要請と受諾が行なわれたわけではない。今後は、公益財団法人として顧問もしくは部長職への就任の正式な合意の形成と責任体制の構築を行う必要がある。

一橋YMCAの定例の活動は、前の時期よりも低調になった。新入生歓迎合宿は2008、2009、2010年と行なわれた。学園祭については、小平祭では2008、2009、2010年に模擬店を出店している。一橋祭について見ると、2008年には福音歌手の久米百合子(芸名:久保田早紀)さんの講演会が行なわれた。2009年には衆議院議員の木俣佳丈氏の講演が行われ、2010年には新免貢氏の講演が行われた。2011年には宮本武典氏が「キリスト教と自然科学」と題する講演を行ない、2012年には大田俊寛(1997年卒)が「オウム真理教とはなんだったのか」と題する講演を行なったが、その後は一橋祭に参加しなくなった。

一橋YMCAが大学祭に参加する本来の意義は、学内伝道である。それが難しくなっていることについて、『会報』58号の49頁に寮長村山透悟の注目すべき報告がある。2011年一橋祭の講演で宮本武典氏が、信仰を重視するあまり科学研究の意義を軽視する発言をしたことが一橋祭実行委員会によって問題視されて、当会が警告を受けて罰金を徴収されたというのである。大学祭主催者や世間一般の人々には、1990年代にオウム真理教が引き起こした数々の恐ろしい事件の記憶が残っているのだ。しかし日本人の大部分は依然として無意識的に、神道に基づく宗教的世界に包まれて生活している。また、「幸福の科学」の信者数が1千万人を超

え、さまざまな新宗教が教勢を誇っている実情を見れば、多くの日本人が心に救いと癒し、そして神なる絶対者を渴望していることは明らかである。したがって、福音伝道そのものではなくて、福音伝道の方法に問題があるのだろう。しかし学生たちにとっては、困難な状況の中で福音を伝道することは至難の業であろう。そして、そもそも、寮生の中にはクリスチャンがほとんどいなくなっている。そのような状態では、無理をして学園祭に参加する意味は無い、と言えよう。

課題はむしろ、一橋 YMCA から外への伝道ではなく、内部での教育と伝道に移っている。実際、齋藤理事長をはじめとする卒業生有志は、幾つかの新しい企画を提供することによって寮生たちを指導し教育してきた。それらの企画とは第1に、日本 YMCA 同盟が企画するプログラムに寮生を参加させること、第2に、卒業生有志と学生有志からなる海外研修旅行の実施。第3に、寮生と卒業生を対象とする講演会であり、それは寮祭、クリスマス会、総会にあわせて実施された。

まず、日本 YMCA 同盟が主催・後援するプロジェクトに、一橋 YMCA は2013年まで毎年数人の学生を派遣した。2007年には成富太郎が「学生 YMCA 夏季ゼミナール」に参加し、片桐豪隼と畠山順丞が2007年「アジア・太平洋 YMCA 大会」に参加した。2008年には高橋知治が「チェコ・プログラム参加」し、2009年には荒浜優貴が「YMCA 地球市民育成プロジェクト」に、永井一樹が「韓国学生 YMCA 訪問」に、小原幹康が「YMCA 寮関係者協議会」にそれぞれ参加した。2012年には岡本政之が「ジャグジャカルタ・ワークキャンプ」に参加し、2013年にも岡本政之

が「YMCA ヨーロッパ・フェスティバル」に参加した。これらの内容は『会報』の中で報告されている。

さらに齋藤理事長は卒業生や外部の経済研究会の協力を得て、一橋 YMCA 寮生たちのための海外研修旅行を企画し、自ら引率した。上海万博が開催された2010年には中国の経済視察旅行を企画し、寮生からは宮城康智と永井一樹が参加し、また OB では渡邊一雄夫妻や理事長夫人も参加した。2012年にはオーストリア大使である岩谷滋雄(1973年卒)の助力を得てヨーロッパ視察研修旅行が企画され、学生からは荒浜優貴、岡田健太郎、吉永裕登が参加した。もともとは、岩谷滋雄オーストリア大使を訪問する企画が岩谷の前後の年次の OB 夫婦5組、10名で企画されていたが、その際、寮生有志を引率したという経緯であった。この時は、未だ如水会国際交流支援基金の援助金を貰える要件を満たしておらず、専ら当会の海外研修の支援制度で旅費費用を補助していたが、それ以降、如水会から30%の補助が加わったことで、学生の負担金は少額となった。2014年には韓国舞鶴教会訪問が行なわれ、また、ソウルにある日中韓三国協力事務局長になった当会 OB の岩谷滋雄を訪問した。学生からは高橋純平と山田哲也が参加した。2015年には中国経済金融研修交流会が行なわれ、北京の人民大学、上海の上海财经大学との学生相互交流も行われた。この交流の契機は、如水会北京事務所の紹介である。学生から祖根昂大、建内瑛貴、二瓶琢也、川村勇太、岡本政之が参加した。2016、17、18年にはアジア経済金融問題研究会との合同海外研修が行われた。2016年には

香港、シンガポールを訪問。学生からは建内瑛貴、二瓶琢也、田村勝裕、三品直輝が参加した。17年には香港、マニラを訪問し、建内瑛貴、前田雄飛、川畑輝が参加。18年には香港及びジャカルタを訪問し、現地企業視察では如水会ジャカルタ支部にお世話になり、学生では大城幹雄、建内瑛貴、三品直輝、今川明人、小林莉季、鳥居大朗、松原悠紀が参加した。これらの内容も『会報』の中で報告されているが、寮生の外部社会を見る目、とりわけ国際感覚を身に付ける上での貴重な体験になったに違いない。また、これらとは別に、2011年3月11日の東日本大震災に関して、同年4月に宮城康智が自分の所属する教会の東北での支援活動に参加した。

第3に、寮生と卒業生を対象とする講演会である。2007年11月の寮祭ではUBSグローバル・アセット・マネジメント(株)の崔勇(1990年卒)が「資産運用ビジネスの現状」と題する講演を行なった。2008年10月には如水会館で神奈川県立保健福祉大学学長の阿部志郎(1949年卒)が「人生の歩み」と題する講演を行ない、同年11月の寮祭では三井不動産の儀賀裕理(1971年卒)が「ハワイでのハレクラニホテル事業の体験について」と題する講演を行なった。2009年10月には如水会館で前磐田市長(その後衆議院議員)の鈴木望(1973年卒)が「地方自治の現状と課題」と題する講演を、2010年11月の寮祭では当会顧問の葛野尋之教授が「刑事罰強化と社会的弱者の受刑者」と題する講演を行なった。2011年7月の総会では聖学院大学院長・理事長の阿久戸光晴(1973年卒)が「現代キリスト教教育の現状と課題について」

と題する講演を、同年11月の寮祭では神奈川大学の山本通(1970年卒)が「近代工業化社会はなぜ英国で始まったか」と題する講演を行なった。2012年12月の一橋YMCA125周年記念会ではカルメル修道会の中川博道神父が「キリスト教は現代に生きる私たちに何を語りうるか」と題する講話を行なった。

また、2014年のクリスマス会では、中村正俊(1971年卒)が「私とYMCA 一橋寮」と題する講話を行なった。2015年の総会では、大平正芳記念財団理事長の大平裕氏が日本古代史についての講演を行ない、同年9月の特別聖書研究では阿久戸光晴が「聖書と実社会とのつながり」と題する講話を、同12月の特別聖書研究では江藤直純(1971年卒)が「喜ぶ人と共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」と題する講話を行なった。また同年12月のクリスマス会では岩谷滋雄が「隣国といかに付き合うか」と題する講演を行なった。翌2016年の総会では元東京海上副社長の堀地史郎(1955年卒)が「私の歩んだ道」と題する講演を行ない、同年の特別聖書研究会では伊藤淳神父(1984年卒)が講話を行なった。2016年12月の特別聖書研究ではカルメル修道会の中川博道神父が「キリスト教の根底を流れるもの」と題する講話を行ない、2017年6月の総会では、山本通が「資本主義形成精神的支柱」と題する講演を行ない、同年7月の特別聖書研究会では宮城康智(2012年卒)が「マタイの福音書、第16章第13節から」と題する講話を行なった。また、同年12月のクリスマス会では佐藤周一(1979年卒)が「大分県(豊後国)におけるキリシタン遺跡」と題する講演を行なった。2018年6月の総会では、今回の一橋

YMCA 寮の増改築を担当された一級建築士の田代洋志氏による講演が行なわれた。そして2019年の総会では阿部志郎による「愛し、愛されて」という著書を巡って、自らの人生の歩みを語る講演が行われた。

聖書研究会もチューターの先生の献身的なご協力を得て続けられている。2008年度の第1班は「ルカによる福音書」、第2班は「コリント人への手紙」、2009年度の第1班は「ヨハネによる福音書」、第2班は「創世記」、2010年度の第1班は「マタイによる福音書」、第2班は「出エジプト記」を読んだ。2011年から2013年までの聖書研究会についての記録は無い。しかし学生たちが『会報』の学生号の中で「聖書を読み続けて思うこと」という統一テーマでエッセイを書き続けていることを見れば、聖書研究が依然として行われていることが推測される。また、本書に収録されている「聖職者座談会」の中の山本信義(1993年卒)によれば、山本は2001年から2014年まで、南大沢チャペル教会の水口功牧師と共に一橋YMCAの聖書研究会のチューターとして奉仕した。水口牧師は福音書を読む班、山本牧師は旧約聖書を主として読む班のチュートリアルを担当した。そして山本牧師が千葉県の八千代台教会に転出してからは、代わって当時の国立教会の宮寄薫伝道師(後に牧師、主任牧師)が当会の聖書研究会のチューターを引き受けられて、現在に至るのである。

おわりに

一橋YMCAの現在の会員は、学生を含めて約250名であり、物故会員を含めると約700名

である。当会はその132年の歴史において、数多くの多彩な卒業生たちを社会に送り出した。卒業生の中で最も多いのは、金融機関、流通サービス業、報道機関、鉄道業、製造業といった民間企業である。一橋大学は元来「キャプテンズ・オブ・インダストリー」の卵を引き取って、大事に温めて孵化し、その雛を実業界に送り出すことを使命としてきたのだから、これは当然のことであろう。しかし、すでに何度か触れたように、企業を退職した後に社会福祉の事業に身を捧げる者が多い。これは当会が誇りとするところである。その極めつけは、20年間の社会人生活の後に、私財を投げ打って社会福祉法人子持山学園を設立した中沢英三(昭和6年専門部卒)であろう(『七十年史』を参照)。

国家公務員は2018年発行の名簿の中で7名確認でき、そのうち3名が現役である。また、地方公務員の現役は2名確認できる。裁判官、弁護士、会計士は6名で、その内5名が現役。内1名は米国で弁護士になった。現職のNHKの職員は2名、政府・省庁の外郭団体に勤務中が数名いる。

国会議員は物故会員を含めて5名確認できる。江口定條と村田省三(明治33本科卒)は戦前の貴族院議員。村田省三は大阪商船社長を経て貴族院議員に列し、戦前の日本で国務大臣になった。戦後では北条秀一(昭和5年学部卒)が衆議院議員になった(『七十年記念集』39頁)。鈴木望は厚生労働省から磐田市長を経て、衆議院議員になった。そして大平正芳(昭和11学部卒)は大蔵省、衆議院議員を経て第68代の内閣総理大臣になった(『会報』70号の「先人の足跡を尋ねて」参照)。

大学の教員になったものは数多い。2018 年発行の名簿では定年退職者を含めて 15 名が確認できるが、物故会員まで含めると少なくとも 40 名に上ると推測される。学究の道への流れは太く、現在も 5 名が大学院に在籍している。当会のアカデミックな伝統の表われである。大学教員には教師の資質は問われないが、高校教師にはそれが必須である。教師の資質と使命感を持つ者が高校教師になったが、現役の者は 2 名確認できる。他方、大学卒業後に他大学の医学部で学んで医者になったものが 4 名確認できるが、これらは皆現役である。そして、聖職者になった者としては、浅野順一（大正 10 年本科卒）、平野保、大木英二、津村俊夫、江藤直純、阿久戸光晴、伊藤淳、山本信義を挙げることができる。また、YMCA 同盟との関係では、山本邦之助が東京 YMCA 同盟の第 2 代総主事として、木本茂三郎が第 6 代総主事として奉仕したが、その他にも中島省吾、須部浩右（横浜 YMCA ワイズマンクラブ）、後藤省爾その他多くの卒業生が YMCA の発展のために貢献した。

一橋 YMCA が 132 年間に亘って存続し、そこでイエス・キリストの福音が述べ伝えられてきたことは、素晴らしいことである。寮舎が定まらずに流浪した時期、関東大震災の影響で専門部、予科、本科が別々の土地に移転した時期、第二次大戦末期に学生が召集されていった時期などに、本会は存亡の危機に晒された。しかしこれらの危機は神の恵みによって克服された。神の恵みは、いつも人の働きを通して与えられた。つまり、確固たる信仰と強靱なリーダーシップを備えた弓削達や江藤直純に代表される在学生たち、スウィフト氏や山田欽一教授、斉藤忠利教授な

どの教員、寮母の皆様、野島新之丞氏のような近隣にお住いの信者の方々、近隣の教会の牧師の先生方、YMCA 同盟の方々、そしてすでに所々で触れてきた卒業生たちの総力によって克服されてきた。卒業生のうちの多くの有志が、理事長や理事、監事、講演会の講師、さらには聖書研究会のチューターなどを無償で引受け、在学生の活動のために惜しみなく寄付を続けてきたことは、忘れられてはならない。

一橋 YMCA の現状についての最大の問題は、当会の学生の中でクリスチャンの数が減り続け、ついに全くなりなくなったことである。もちろん、16 名収容の寮が、キリスト教的友愛を実現する共同体として現に存在し、そこでさまざまな思想的営為が続けられてきたことは一定の評価に値する。しかし 1970 年代まで、当会の成員は半数以上がクリスチャンであり、その全体が「求道者集団」であった。特に、当会の諸先輩が第二次大戦後の「躍動期」にキリスト教信仰の熱い思いを国立教会の設立にまで繋げたことを思えば、寮の現状は何とも寂しい。現在は、「団塊の世代」を中心とする卒業生たちが学生たちを指導している。しかし、その教育と宣教のための努力は実を結ぶのだろうか。まず検討されるべきは、当会に入会する学生の資質のレベルを高めることである。1 学年に少なくとも 1 名のクリスチャンが欲しい。そして、入寮した多くの学生が求道者になって欲しい。一橋 YMCA の活動の柱は聖書研究であるが、聖書に知的にアプローチするだけでなく、感性と霊性において、キリスト教と聖書に向かい合う環境が寮に用意される必要があるのである。

(追記) 本稿の作成にあたり、堀地史郎、川勝高宏、宮岡五百里、齋藤金義、加藤順、山本信義の皆さんが、色々な貴重な情報やアドバイスを与えてくださった。特記してお礼いたします。

「わたしが示す地に行きなさい」

(創世記 12:1～7) 感謝

日本 YMCA 同盟 総主事 神崎清一

一橋基督教青年会 130 周年を迎えられましたことに、心よりお祝いと感謝、そして何よりも、これまで歴史を積み重ねてこられる中で、その時宜に応じて学生 YMCA のみならず日本の YMCA、キリスト教界に多大な貢献をされ、更には多くの人財を輩出されてこれられましたことに敬意を表します。

私自身は 2 年前まで関西の都市 YMCA に所属しており、YMCA 同盟での経験が少ないこともあり、このたび改めて貴青年会の百年史ならびに YMCA 史学会の会報誌などを通して学ぶ機会が与えられました。

貴会は設立の当初より、東京基督教青年会との「人、建物、活動」などが相互に影響しあい、ある時は補完しあいながら歴史を創ってこられたこと、そのうち学生基督教青年会同盟の発

足、更には日本 YMCA 同盟の設立には他の学生 YMCA、都市 YMCA と共に、様々なご貢献をされてこられました。

また、何度も変遷を経ながらも、学生 YMCA の中核である寄宿舎を一貫して運営して来られ、青春の多感な時代に生活を共にし、同じ信仰に生きたことは、それぞれが相互に影響を与え、その後の生き方に影響を及ぼすものとなったことは云うまでもありません。更には、活動拠点として学内外の場所としての役割を果たすとともに、戦争や大学紛争後においても他の学生 YMCA と同様に、学生 Y 活動の維持、再生にとって大きな原動力であったことが記念誌を通して鮮明に伝わり、あらためて学生 YMCA の意義を学ばせていただきました。

そして、貴会は夏季学校を始めとした学びにも、設立直後にもかかわらず京都の同志社で開催された時にも多くの学生を積極的に派遣されるなど、共同体験を通しての磨きあいを大切にされてこられたことが、多くの方々のメッセージや、今日の夏期ゼミナールや日韓交流をはじめとしたアジアでの学びなどの機会に参画するなど、積極的に取り組んでこれられましたことに気づかされました。

日常的な寮の運営、寮母(寮監)さんの方々の尊いお働き、聖書研究会・祈祷会など大切にされてこられたことから、多くの人財を社会に、キリスト教界や YMCA 内外に多くの人財を送り出して来られたことにも改めて教えられました。

そして、このように貴会の歴史を学ぶなかで、私自身が大いに気づき励まされましたことは、これまでの歴史の中で、幾度となく、その時代の社

会環境などに翻弄され、決して望んだことではない形やタイミングでの「寮」の存続、移転、改築などの課題に直面され、そのたびごとに先達をはじめとした多くの知恵が結集され、解決策を見出してこられたことです。

振り返りますと 2000 年から 2008 年にかけての公益法人制度改革は、日本最古かつ最大の NGO/NPO である YMCA にとって多岐にわたる多様な事業の公益性を改めて世に示す大きなチャレンジでありました。日本 YMCA 同盟はその成り立ちから都市 Y、学 Y によって構成され、全国 11 の学生 YMCA 寮のうち 9 の寮は同盟の特別財産として位置付けられ、特に固定資産税の減免他、微力ながら寄与してまいりました。この改革を機に、社会的意義の大きい自治寮の運営と土地建物の将来計画に関する責任主体としてのガバナンス、理事会のありようを明確にする時宜と捉え、学生部委員会では各大学寮でも法人化の検討を進めて頂くようお願いしてまいりました。貴会ではいち早く、当時学生部委員であった須部元理事長、齊藤理事が法人化の検討を開始され、全国に先駆けて一般財団法人化、そして公益法人化を実現されました。その特筆すべきリーダーシップに敬意を表し、後に続く、全国の学生 YMCA の寮のモデルとして今後も牽引をお願い申し上げる次第です。なお、貴会の土地は引き続き公益財団法人日本 YMCA 同盟の特別財産に留まっており、貴会に無償使用貸借をしている形となっているところです。ぜひ、更なる将来展望の中で、貴会に帰属される形をご検討頂けましたら幸いです。

日本の学生 YMCA の存在が、アジアのみならず世界の YMCA にとっても、尊いものであり、神様が示してくださっている道の一つである「YMCA」そのものであることを誇りに思います。数多くの変革の時を、その時宜に応じて乗り越えてこられた一橋大学基督教青年会が、先達である卒業生の皆様と現役の学生の方々が協働して、次の 140 年 150 年に向けての計画が進められますようにお祈りいたします。そして神様の祝福が貴会の上に、連なる皆様の上にありますようにと、感謝してお祈りいたします。

一橋大学基督教青年会創立 130 周年に寄せて

東大学生キリスト教青年会

理事長 徳久俊彦

創立 130 周年おめでとうございます。

このことは、予てより承知しておりましたが、昨年齊藤金義理事長からも、祝辞の依頼を頂いておりました。

一橋大学基督教青年会は 1887 年(明治 20 年)学校が東京高等商業学校と名称変更された、その年までに本会が成立していたと「一橋

基督教青年会—百年史—」に記されています。それから勘定すると今年、創立 132 年を迎えることになります。此の頃一高でも学内集会が行われていたようです。帝大Yではその翌年 5 月 13 日に創立されたことが記録に残っています。

此の頃、教会内の「青年会」とは別に各地の専門学校、大学に学生青年会が創立されました。これが教派を超えた青年学生の連帯に繋がったのでした。時代は鹿鳴館時代に追い風を受けたキリスト教が井上哲次郎らによって攻撃されるようになり、天皇制を確立した明治憲法が公布される前夜でもありました。また直接的には米国 YMCA から派遣された、JT スイフト (1861—1928) の熱心な指導により、各校にバイブルクラスやキリスト教講座が開かれた時代でもありました。スイフトは最初 1888 年、米国の「海外英語教師派遣委員会」の第一号教師として来日、明治学院で島崎藤村や戸川秋骨などを教えました。一旦帰国し翌年、北米 YMCA の協力主事として再来日し、大学、専門学校、高校を訪れて上述の活動を精力的に展開しました。そして 1880 年創立の日本初の都市 YMCA である東京 YMCA が最初の会館を建設するに当たり、私財を投げ打ってこれに協力しました。その後 1898 年、北米 YMCA 同盟と対日政策の相違が原因で辞任しますが、帰国してイエール大学で哲学と文学を学び直した末、また来日し東大、東京高商、東京高師で教え、齋藤惣一、齋藤勇、木本茂三郎の各氏もその教えを受けたと言います。木本さんは一橋Yの先輩で理事長を務められた方ですが、スイフト先生の思い出を伺ったことがあります。スイフトは心底から日本とその若者を愛し、日本で亡くなり、夫人と共に横浜の外

人墓地に眠っておられます。毎年 8 月初旬 YMCA 関係者が墓前礼拝を守って謝意を表しています。

一橋大 YMCA は、創立直後 1889 年に同志社で開かれた学生 YMCA 最初の夏季学校に五名の学生代表を派遣し、その勢いに新島襄から「官立では珍しい」と褒められたとのことでした。その後一高、東京英和 (後の青山学院)、二高、三高、同志社、京都医学校 (後の京都医大)、立教、五高に学生 YMCA が発足し、1897 年には学生青年会同盟が結成され、一橋青年会もこれに率先参加しています。寄宿舍は学校が神田にあった関係から、神田美土代町に始まり、小石川、茗荷谷、芝、中野と変遷しますが学校の小平、国立移転に伴い、最終的には国立に建設され今日に至ります。この間、一橋 YMCA の学生たちが中心となって「国立教会」を設立するなど、独特の歩みがあります。このような歴史の中で、多くの人材が産まれました。それらの方々は異口同音に学生時代の YMCA 活動に大きな影響を受けたと言いついて残しておられます。それは歴年の会報にも記されています。

最後に、私の出会った一橋Yの方々との出会いを記して、お祝いしたいと思います。一橋Yの先輩で私が最初に出会った先輩は阿部志郎さんです。私は 1953 年の卒業ですから阿部さんは少し先輩です。しかし阿部さんは私を一橋の後輩の如く接して下さり、私が東大青年会から誕生した「賛育会」という社会福祉法人の理事長で苦勞している際には「陰で」支えて下さいました。阿部さんと同じ先輩でお世話になったのは、桜井信行さんです。桜井さんは私の学生時代 (1950—1953 年)、宮本武之助、北森嘉蔵、

松村克己、隅谷三喜男の諸先生と共にYMCA同盟の学生部委員として我々を指導して下さいました。心の暖かい方で個人的にも、お勤めの青山学院へ伺ってご指導頂いたこともありましたが、癌のため突然召されてしまい、残念な思いが残っています。一橋Yで今でも一番親しいと言えるのは、寺田武男さんです。寺田さんは戦後東京での学生YMCA再興の生き証人で、1945年12月の東京女子大に於ける東京基督教学生会の成立に立ち会い、その後続いた勉強会を支え、再びYMCA同盟の学生部に戻る迄を支えた一人です。私より1-2年先輩ですが、「仲間」のように付き合っして下さい、今も時々食事を共にする間柄です。兼松に就職、ニューヨーク駐在時代には同地に於ける東京Yの活動を応援して下さいました。堀地史郎さんとは東京海上時代、同業者として知り合い、その後も東京女子大の理事としても苦労を分かち合いました。また、阿久戸光晴先生には聖学院時代東大青年会の聖研の指導をお願いしましたが、先生の該博な知識と学生を心から愛し、様々な集会にも出て下さる等、本当にお世話になりました。私も理事として其の片鱗に触れました。そして齋藤金義さんです。私が長年関わって来たYMCA同盟の職員年金基金等の運用委員に齋藤さんが加わって下さり、古くからの「粹」に捉われ易い我々の目を覚まさせて下さっています。

私が接することが出来たのは以上の方々ですが、有名な方では総理大臣をされた大平正芳氏、それに日銀総裁をされた速水優さん、「志」ある人物を取り上げて来られた、城山三郎(杉浦英一)さんがおられます。またそれ程有名でなく

とも、夫々の働き場で良き働きをされた方々も多いと思います。

このような良き先輩を生んで来られた一橋大学青年会が、時代の変化に対応して、今後その使命をどのように果して行かれるのか？ どのような人材を産み出して行かれるのか？ その前途に大いに期待してお祝いの言葉と致します。

一橋大学基督教青年会と東京キリスト

教青年会 — その人物連関 —

YMCA史学会 理事長 齊藤 實

一橋基督教青年会(以下一橋YMCAと略記)の会員であり、また、東京キリスト教青年会(以下東京YMCAと略記)の運営に貢献された幾多の人物の中で、一橋YMCA第2代理事長であった木本茂三郎について語ろうと思う。本来は、敬意を込めて木本さん、と語るべきであるが、ほかの方々も含め、敬称を省くことを許していただきたい。

私が、勧められて前職から転じて東京YMCAに主事として奉職すると決めたとき、「そうか、来てくれるか」と喜んで迎え入れてくださったのが、当時は副総主事として敗戦直後の東京YMCAでその復興業務全般を指揮しておられた木本茂三郎であった。総主事菅儀一は、進駐

米軍に接收された神田のYMCA会館でGHQとの連絡に当たっていたからである。1946年夏のことである。

木本茂三郎副総主事は、機会を得ては母校のYMCAつまり一橋YMCAについて語っておられた。学生時代のYMCA生活の記憶から、「今」に活かす知恵を手繰り寄せる、そんな気配であった。一橋YMCA会員であった多くの仲間が戦前からの東京YMCA会員として奉仕しておられたことにも力づけられていたからと思われる。

木本茂三郎が提供し東京YMCA資料室が保存している「東京商科大学一橋基督教青年会」発行の『一橋基督教青年会五十年史』巻末に、「卒業年度別会員一覧」がある。その「明治二十五年(1892年)[東京高等商業学校本科卒業会員]欄」に7名の仲間とともに記されているのが山本邦之助で、1905年から1923年秋までの19年間を東京YMCA第2代総主事として指導された。日露戦争や第一次世界大戦に際しては、日本YMCAによる軍隊慰問事業に積極的に参画した一方で、YMCA会員として登録している者だけではなく、市民一般対象のプログラムをも開発している。そのひとつが1922年6月に開講した「YMCA市民自由大学」である。これは、1921年11月に上田市に土田杏村らが設立した「信濃自由大学」と軌を一にするものであったか。時代の必然的産物とも言うべきか。山本邦之助は、このように青年成人の持つ社会的向上心を良く引き出された。また、総主事就任の翌年1906年には麹町六番町東郷坂の借家に第一号を設けてからは、1910年11月には神田美土代町の東京YMCA会館裏に建て

た木造の一橋寮など、市内に幾棟かの学生寄宿舎を開設し、更に、日本初の室内温水プールを擁する総合体育館を建てた。しかし、1923年9月に起きた関東大震災からの復興計画が山本邦之助の東京YMCA総主事職からの転身を余儀なくした。この山本邦之助を、私は、戦前・戦中・戦後の140年間に東京YMCAで総主事職を務めた人物の中の第一とし、第二の人物として挙げるのが、木本茂三郎である。

木本茂三郎は、1951年に管儀一の後任として東京YMCA第6代総主事に就任し、1966年までの16年間在任している。関東大震災から復興して神田美土代町に完成した「第2代会館」が開館した1930年に主事となり、アジア太平洋戦争で敗戦国となって直面した未曾有の国難期からは、副総主事として東京YMCA運営の全責任を負って立った。

その敗戦の年の暮、1945年12月19日、時のGHQ(連合国軍最高司令官総司令部。最高司令官は米国陸軍元帥ダグラス・マッカーサー)は、外務省を通して神田美土代町の東京YMCA会館の接收を通告してきた。関東大震災から復興して得たこの第二代会館では、戦時を堪えて会員活動を展開したのであったが、この活動本拠である神田の会館を離れさせられたのであった。あわただしくはあったが、幸いなことに、移転先として千代田区富士見町の日本基督教会館が与えられた。こうして、木本茂三郎指揮下での東京YMCA富士見町時代が始まる。日本は連合国軍による被占領国として、GHQの指示に抗するすべを持たなかった時期の話である。一橋大学YMCAに思いを寄せれば、その歴史を刻んだ130年という歳月の前半は、東京YMC

Aと同じこの国日本が大日本帝国であった時代を共に歩んでおり、また、敗戦に続く被占領国日本時代を経て迎えている日本国を生きるYMCAなのだということを覚え踏まえ続けたい。

1946年1月、被占領国となって移ることを余儀なくされた富士見町の東京YMCAは手狭であった。しかし、この施設での新展開を手がけたその矢先、1946年2月17日に、政府は「金融緊急措置令」を発した。まことに急な指令であった。「新円を発行し、旧円預貯金は封鎖。即日施行」という、待ったなしの事態であった。あと2カ月で42歳になるという木本茂三郎副総主事は、予想もしなかった大きな苦難を背負うことになったのであった。なんとしても乗り越えなければならぬこの事態に直面して、今思えば、木本茂三郎は金融界・実業界に席を置いていた一橋YMCAの友人たちから、知恵を授かったりしたのではなかったろうか。この事態は、YMCAだけが負った苦難ではなくて、「敗戦国日本」のすべての国民や団体が負わされた「日本再建」への試練の第一段階だったのであった。

こうした事態に直面することになった木本茂三郎なのだが、生まれたのは1903年4月11日、福井県若狭熊川である。京都市立第一商業学校を経て上京した。1971年5月に発行された日本基督教団九段教会の教会報『まじわり』に、木本は「受洗五十年を顧みて」という一文を載せて過ぎ去った日々的一端を記している。

その記述によると、「わたしは、大正10年(1921年)12月17日、京都の日本メソヂスト中央教会で近藤良董先生より洗礼を受けた。」「時に京都市立第一商業学校YMCAの会員

であり、翌年は幹事となった」という。その生涯を通して見れば、言わば、根っからの「YMCA人」というべきであろう。

上京した木本は、「一橋YMCA会員となったがその中野寮に入らず、主として旧藩関係の牛込矢来町の講正学舎に住んだ。九段教会に転会した。教会は牧師荻原明先生を師とし、共励会の全盛時代を築いた。その中心は聖書研究会で、牧師によるケムブリッジバイブル・マルコ伝のサイドラインの部分をわたしが訳し、謄写版をすって配ったり、また、ベンゲルのグノモン5冊を買い、大勉強した。学問としては「キリスト教と経済」に興味をもち、図書館の本もだいぶ読んだ」という。

学生時代からの読書家であった木本は、1932年に『新興基督教』という評論雑誌の同人に加わっている。これが、木本の読書熱を一層深めている。「書評を毎月三冊、三、四年もつづけたのであろうか。イギリスのゴアの『キリストと社会』は、社会的な信仰に落ち着きを与えてくれた」という。戦時中の東京YMCA機関誌『東京青年』には書評欄があって、毎号書評を載せた。1937年9月号には玖村敏雄著『吉田松陰』を書いて、言う。「私は平素松下村塾を青年運動として、また、吉田松陰を青年指導者として見たいとの念願を有している」と。「この書より受ける松陰の印象は先ず第一に彼は実践家であったということである・・・実践的性格は只概き黙視するに忍びず、村塾を興し先ず唱えたことは郷党の向上であった」と。

こうした時期の学びがあつてか、敗戦の直後に『日本再建と青年運動』を上梓している。1946

年9月5日、太平公社発行、配給元は日本出版配給株式会社であった。敗戦であわただしいときであったが、116 ページという小冊子に諸国の青年運動の実際を紹介し、日本での展開への所論を纏めている。1949 年には再版して書名を『新しい青年運動』としたが、その中で一つの提唱を掲げた。「聖書輪読運動」であった。日本YMCAが戦後復興の全国運動として1950年から55年にかけておこなった「五カ年前進運動」では、木本の提唱で、重要な項目として全国のYMCAが進めるべき課題として、各職場で展開すべき「聖書輪読運動」を挙げた。市内の諸会社が昼食後の僅かな時間を用いて続けた。

木本茂三郎の、東京YMCA総主事としての最大の貢献は、YMCA活動拠点の分散であった。東京の神田にだけ拠点を据えるのではなく、都内にはランチを開設し、首都圏には中小都市にYMCAを設立する。こうすることによって、新拠点を置くその地域在住の人々に「YMCA活動でのリーダーシップ発揮の機会」を開発提供したのであった。今日、東京都内と首都圏内の各地にYMCA活動が広がっているのは、木本茂三郎の「YMCA発達原理」の実践成果なのである。木本茂三郎は、松陰を「実践家」と観たところに、自身を実践家に仕立て、また、「郷党の向上」をも実践したのであった。

YMCA 一橋寮 130 周年記念に寄せて

聖書研究での新発見、再発見

水口 功(東京フリー・メソジスト教団

桜ヶ丘教会主任牧師)

YMCA 一橋寮 130 周年、おめでとうございます。学生時代に一橋寮で過ごされた多くの卒業生が、今も神さまから遣わされている国内外で活躍しておられることは、まことに喜ばしく、素晴らしいことです。私はこの YMCA 一橋寮の聖研に 2003 年からチューターとして関わらせていただいています。きっかけは当時、寮母を務めておられた野澤さんと同じ教会であったという関わりから、声をかけていただいたことによりました。あれから今年で早、17 年目を迎えています。その間、おもに福音書班のチューターとして歴代の寮生とともに 4 福音書を読んできました。

4 年 1 サイクルとなるわけですが、今年読んでいるルカの福音書は、私にとりましては実に 5 回目の通読の機会となっています。私は牧師として聖書を語り、自らも聖書を読むことを日々続けている者ですが、聖書の魅力は何度読んでもあきることがない、不思議にも新発見と再発見ができることです。先日はルカの福音書 10 章を、現役寮生とともに読んでいました。その時の聖書研究の時間が私にとりましても、とても新鮮な感動の時となりましたので、その様子をお裾分けいたします。卒業生の皆さんが、寮生時代に体験された聖

書研究の時間を振返っていただく一助となれば幸いです。

1) ルカ 10 章 17～24 節

イエスに派遣された 72 人の弟子たちが、喜び勇んでイエスのもとに報告のために戻ってきました。それは彼らが、イエスから与えられた悪霊を追い出す権威を用いて悪霊に勝利できたからでした。しかし、その時イエスが言われた言葉が「むしろ、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい」(20 節)でした。弟子たちが喜んだことは「何ができたか」という doing の世界であり、一方イエスが弟子たちに喜ぶように勧めたことは、名(存在)が天で覚えられていること、つまり being の世界でした。私たちは子どもの頃から being より doing を重んじる価値観の中を歩んできました。それゆえ「できた」時は満足感があっても「できない」時、「できなくなる時」、また「うまくいかなかった時」などには落ち込み、甚だしい自信喪失を味わうこともあるでしょう。ここでイエスが喜ぶように勧めたことは、人として何が大事であるか、自らの存在が天の神に覚えられているという安堵感こそ、生きていく上でのエネルギーとなることを教えています。

ところでこの日の聖研では、20 節以降の段落の内容が 20 節と深いつながりがあることに気づけたことが大きな喜びとなりました。それは弟子たちに being の喜びを勧めたイエス自身が、聖霊によって父なる神との関係(存在)を喜んでおられた、という発見ができたからでした。イエスはこの地上でのわざを「父から任されている」(22 節)ことを喜んでおりました。ここに父、御子、御霊の神(三位一体の神)の、愛と信頼に基づいた美しい関

係、being の世界を心から喜び、満足しておられるイエスの姿を見ることができました。この箇所から、一人の寮生が「『見ている』(23 節)『聞いている』(24 節)」ということも being ですね」と発言したことも印象深い出来事でした。

2) ルカ 10 章 25～37 節

この箇所は良く知られている「善きサマリヤ人のたとえ」です。イエスがこのたとえを話した直接の相手は、当時のイスラエルの宗教指導者であった律法の専門家でした。彼がイエスに質問した内容、「何をしたら…」(25 節)とは、まさに彼らの関心が doing にあったことを示しています。一方、このたとえ話でサマリヤ人に例えられているイエスの姿にも doing「『傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに乗せ、宿屋に連れて行って介抱した』(34 節)」の行為が重ねられていることがわかります。ただ、これらの doing の動機が、半殺しにされた旅人を見て「憐れに思った」(33 節)という心、相手の being を見て彼の心(being)が憐みに満たされたことによることがわかります。ここから聖書は doing を否定し、being を主張している、といった単純な区別ではなく、being に基づいた doing で、隣人を大事にしていく生き方を教えている、と読み取ることができました。

3) ルカ 10 章 38～42 節

ここに登場しているマルタとマリアの姉妹は、実に対照的に描かれていると良く言われます。マルタはイエスをもてなす doing、マリアはイエスのみもとで「聞き入る」being を優先した。だから「マルタよりマリアのように生きましょう」と解釈されがちです。しかし良く読むと、マルタも初めはイエスの存在(being)を喜んだ結果のおもてなし(doing)をした

のです。ただこの時マルタには、おもてなしをしなかったマリヤを見て、不満な心が生じたことがわかります。そしてイエス自身は(これもこの時の学生の素晴らしい発見でしたが)、「マルタ、マルタ」(41節)と彼女の名を2度に渡って呼んだ。つまりイエスはマルタの being に目をとめ、彼女がイエスに尽くしたおもてなし(doing)を、決して否定されませんでした。この話からも being に基づく doing の幸い、being を重んじ、その生き方を選びとる幸いを教えられたことでした。

現代社会は doing に満ちていて、being を問う暇などないと言われるかもしれません。しかし being を重んじる中でこそ、豊かな doing が可能となること、また doing だけの世界では、満ち足りる体験ができないのではないのでしょうか。今の世相は、1980年代までの、いわゆる右肩上がりの時代ではありません。年金問題一つとっても、若い世代に未来への希望が感じられなくなっています。そのような中で、政府の対応は、相変わらず景気回復という doing に躍起になっているように思えてなりません。人の幸せとは、一体何でしょうか。それは今から約500年前に、カトリックのイエズス会の創始者となったイグナチオ・ロヨラが、彼の著書「霊操」で記したように、「富、良い評判・名声、高慢」の道でなく、「清貧、辱め、謙遜」というイエス・キリストのたどった道を選んで being を喜び、そこから生じる doing に粉骨砕身して生きることではないのでしょうか。

学生時代にこのイエス・キリストの生き方が、豊かに説き明かされている聖書を学んだ卒業生のお一人お一人が、今、置かれたところで幸せに過ごされることを祈念いたします。

神のみ心のままに寮母十余年

佐藤 信子 (元寮母)

私は、牛込払方町教会の教会員です。牛込払方町教会の開設に、私の祖父が尽力した関係で、当然ながら信者の両親に連れられて、幼少のころから、同教会に通わせて頂いています。中学、高校、大学ともキリスト教系の学校に通いました。このような環境でしたから、キリスト教はごく自然な存在であり、なんの疑いもなく神のみ心のままに、今まで自然体で過ごしてきた気がいたします。教会においては、それほどアクティブに活動をしたわけでもありませんが、それなりに真面目に神にお仕えてきたのではないかと振り返っています。

この教会の教会員に加藤順氏(昭47社)がおられます。40年前の1979年に加藤氏から“一橋大学YMCA学生寮が開寮して寮母を探しているが、見つかるまでの2～3か月の間、臨時で寮母の仕事をしてくれないか”と打診がありました。一橋大学におけるキリスト教関係については、クリスチャンである田上穰治氏(当時、法学部教授)から臆気ながら漏れ聞いたことがありましたので、何となく親しみを持っておりました。私の父

の姪が田上の夫人に当たり、私の子供の頃は近所(三鷹)に住んでおられたこともあり、“ジョージおじさん”と言っては可愛がってもらい、田上氏の子息たちとは幼友達、一緒に遊び、ピアノのお稽古など一緒でした間柄でした。

寮の開寮式が、1979年4月1日に行われているようですが、なかなか適当な寮母が見つからなかったのでしょうか、2～3か月という言葉に安請け合いして、その年の少なくとも5月から新米寮母となった経緯は、以上の通りだったと振り返っております。

その後、寮母の募集を毎年していましたが3～4年も過ぎると、もう募集もやらなくなりました。私を当てにしてということでしょうか。臨時としての始まりから、その延長で10余年の寮母を務めるという結果になりました。

当時、私の住居は寮とは比較的近い東久留米にあり、途中で食材など買い込んで昼前後に寮に到着、帰りは主人の分を含めて2人分の寮食を持って午後8時ごろの帰宅でした。主人は、自分で建築事務所を運営し、忙しくしており、毎日帰宅が遅かったです。寮母を始めた時は私が36歳ぐらいだったのでしょうか、若かったし、そこそこの体力もあり、不幸にして面倒を見る子供には恵まれませんでしたし、主人の帰りが遅かったことなどもあり、寮母の部屋には住むことなく、何とか通いで仕事を凌いできました。寮母の部屋には、代わりに誰か寮生が潜り込んでいたようでした。

足りない食材は、寮生を走らせて何とか夕食に間に合ったことは屢々でした。献立と予算をにらみながら細かく記録していました。自分の家庭では、未だに家計簿を一切付けたことは無く、今

思えば未知の分野に、よくも飛び込んだものだと思います。

(生活指導)

寮生の大半は、非クリスチャンでありました。

(寮生の選考)

選考にも立ち会いました。

(聖書研究会)

時折、先生代わりを仰せつかりました。教会の先生方からご教授を受けました。

寮母生活10数年を経たところで、荻窪に住んでいた主人の両親の面倒を見ることになり、寮母の継続を許さない事情となりました。私が関わった卒業生は全部で60～70人になるでしょうか。会社などに就職、牧師の道、また第二の人生プランを抱いてと、それぞれ国内各地に、また海外へと飛び立って行きました。子供のいない私にとっては、子供を送り出す気持ちでした。卒業後も折々に動静のお便りを頂きました。寮母を辞めてからも寮祭、青年会総会、そしてそれぞれの卒業生の集まり、結婚披露宴などにお呼ばれを賜り、懐かしい面々と再会の機会を頂いてきました。お会いするたびに新しい名刺を頂き、それぞれ社会に出て着実に成長のステップを踏んでいる姿を拝見してきました。うれしい限りでした。

主人の両親を見送った後、主人まで病気で失ってしまいました。落ち込んでいるとき、盛岡さん(昭57商卒)を中心にして、“励ます会”を催して頂きました。大変な力を頂きました。今も、盛岡さんを中心とした会合には、お呼ばれを頂いております。

主人を亡くしてから10年が経った頃、教会の関係者からご縁を頂き、再婚することになりました。それで、姓が富田から佐藤に替まりました。婚約式、結婚式は牛込弘方町教会の山本信義牧師(平5法卒)に執り行っていただきました。山本牧師は、私の寮母時代の寮生、皆よりかなり多くの時間をかけて卒業後、牧師の道を歩まれ、この時はこの教会の牧師として在任されていました。かつての寮生が私の師となり、私たちの結婚を導いて下さったわけでありす。これも神のみ心と思っております。

私が寮母として、いかばかりの役割を果たし得たか、自信はありません。何の事前の経験、資質もないまま、ずるずると臨時の延長で、気がついたら十余年が経ってしまった、これも神のみ心のままの十余年というのが実感です。引き受けた以上は、私なりに一生懸命に努めてきたつもりであります。これも、寮に対する愛着が、時を経れば経るほど増していったからだと思ひます。さしたる問題も起こることなくこられたのも、毎年入れ替わりますが、質の高い寮生、卒業生そして寮の運営に関わった関係者の皆様に支えられたものと、深く感謝申し上げます。後期高齢者となった今に至るまで、毎年“母の日”にカーネーションを送って下さる元寮生がいらっしゃる。臨時の寮母として始めたことですが、今で言う非正規寮母から正規寮“母”と、認めて頂いたものと密かにうれしく思っているところです。神のみ心のままの寮母生活でした。

寮母としての思い出

野澤 毬寿恵

皆様ご無沙汰しております。70才で寮母を退いてから、もう10余年が経ちました。月日の経つのは早いものです。

私は正式な手続きを経て寮母になったわけではありません。いわば、もぐりの寮母ですと自分では言っています。平成5年くらいだったと思ひますが、同じ教会の山口朝子姉から、自分は一橋寮の寮母を引き受けているのだけれど、大変なので週一日だけ手伝ってもらえないかと頼まれました。当時私は病氣療養中で、まあ週一回だけだったらリハビリになるかと思ひ引き受けました。もちろん、どんな学生さんがいるか、あまりお顔も知りませんでした。ですから寮食だけ作ってさっさと帰宅しておりました。それからしばらくして週二回となり、身体之余り丈夫でなかった山口姉がだんだん休みがちになり、私も食事のない学生さんが気の毒になり、自分の健康も守られてきたので、いつの間にか私が寮母のようになってしまいました。しばらくして、理事の内藤さんと契約のようなものを交わした記憶があります。考えてみればそれまで何のご縁もなかったのに16年余りも働かせていただいたことは本当に神様のなさることは不思議です。“神のなさることは、すべて時にかなって美しい。”(伝道者の書3:11)

寮母の仕事は大変なこともあるかもしれませんが、大体においてやりがいのある楽しいものでした。その理由を考えてみますに、第一に、若者が大きく育つ大切なこの時期にそのお手伝いができ

る寮母と言う仕事は神さまから与えられたものであり、16人の学生を託されているという思いがずっとあったことがあげられます。

第二に、毎年入学する学生の親御さんから「息子をよろしく」と折々に感謝と励ましをいただき、私も頼まれたからには、この子の卒業まで頑張ろうという思いの連続だったように思います。

第三に、これが一番大きいかもしれませんが、「寮生に恵まれたこと」で、肉体的にはしんどい時があっても総じて毎日が楽しかったからではないかと思っています。

寮生の多くは地方からの学生で、親元を離れ、自分のことは自分ですることを通して、また、16人が気持ちよく生活するうえでの様々な役割や、聖研でのレポーターや寮生会議を通して4年の間に大きく成長していきます。彼らの優しさ、思いやり、仲の良さはこの寮の特色であり、私が一番うれしく思っているところです。

入寮の一つの条件は必ず聖研に出席することです。そこでの学びを通して、卒業後を含め、信仰をもった人、養われた人が5人近く与えられたことも一橋寮が主に誇ることでできる幸いです。

働いていた16年余りの間、折々の行事(入寮キャンプ、草刈り・BBQ、一橋祭の講演会、寮祭、クリスマス会など)といった楽しいことがいろいろとありましたが、いつ頃からか昼食も作るようになりました。お鍋の関係で、チャーハンかスパゲッティ(足りない人はラーメンなど)を、それも10人分位しか作れないため、お昼になると自分の分があるのかどうか心配そうに走って帰る寮生も居て、それも楽しい思い出です。

寮を離れて10数年になりますが、OBたちとは何かと交流が続いており、先日も私が体調を崩していると聞いた何人かが、お見舞いに伺いたいとのこと。私が「気持ちは嬉しいけれど、しばらく、ちゃんと掃除をしていないので」とお断りしたら、「では聖蹟桜ヶ丘まで」とのことで10数人集まってくれました。その中には卒業以来初めての人もおり、私は病気をするのも悪くないと思わされたことでした。

近々、お子さんにぜひ会ってほしいと何組かのOBが来宅します。今までにかかわった学生は50人を越えましたが、様々な分野で、また、世界中で活躍していることは私にとり大きな喜びです。

気候の変わり目や梅雨時など、学生たちの体調や食中毒の心配など、気を付けなければならなかったことが様々なにありましたが、大きな事故や問題もなく過ごすことが出来たのも神様の御守りと感謝しています。

最後に、中島先生、速水様、堀地様、須部様、阿久戸先生、国立教会の宍戸牧師、お会いしたことはありませんがよく連絡をくださった大木英二様、その他多くの方々にお祈りとご指導をいただき、私の寮母生活も守られ、いまこの様に豊かな老後を過ごさせていただいていることを心から感謝し、お礼を申し上げます。ありがとうございます。

“いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべてのことにおいて感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなた方に望んでおられることです。” (テサロニケ人への手紙第一 5:16～18)

YMCA 一橋寮保存再生

— 伝統の継承と発展のための YMCA

一橋ホール —

ミームズ一級建築士事務所

代表 田代 洋志

[設計趣旨]

聖名賛美。

由緒ある YMCA 一橋寮の歴史を継承するだけでなく、その伝統を踏まえさらに発展させる可能性があるホールが多くの皆様の尊い浄財により実現しました。私はこの事業を成立させた寮の卒業生の皆様に満腔の敬意を捧げる者です。容易に出来ることではありません。

2017(平成 29)年 4 月に増改築設計の候補者として皆様からお声をかけて頂いてから、今般の竣工に至るまで議事録に残る会議で 30 回以上、およそ二年半に渡る会議が開かれ、OB の方々と様々な議論を重ねて参りました。多様な意見・考え方がありますが実現できるものは只一つだけです。したがって全ての皆様の全ての望みを叶えることは無理とは言うものの出来る限りの相反を解決し、止揚するための議論でありました。

ここに皆様の要望と希望を昇華した計画としてようやく竣工に至りました。決して暇に飽かせて無駄な会議を重ねた訳ではありません。世代を重ねて継がれていくべき建物とは本来このような積み重ねが必要なものです。真剣な議論を改めて感謝申し上げます。

公益事業にふさわしくも優れた次世代育成のためには優れた環境が必要です。これは決して豪華に改修するという意味ではありません。事業継承されるべき優れた環境とは、一つは学生が入寮したいという魅力ある寮であり続けること。一

つは卒業しても寮が誇りを持てる場で在り続けること。そしてそれらの環境を維持する OB 会の継続的関与。これらはどれも欠かせない三位一体の要素といえましょう。それを実現できる場所があることが優れた環境という意味です。一橋ホールはそのためのものです。

当ホールは寮の運営を助け、寮費を抑え、寄付金以外の収入の可能性をもたらします。OB 会の活動レベルに関わりなく、有効に寮の運営に資するよう外部への運営委託も可能なプランとしています。これは同時に新設のホールが寮生の勉学を妨げない事を意味しています。

また、寮の改修においては入寮時の負担を減らすよう寮室に備え付けの机・ベッド・照明等を設け入退寮を容易としました。内装・水回りも一新し、給湯を強化しました。寮室のサッシも更新しましたので断熱性は高くなり、居住性能は高まりました。北側廊下のサッシ、結露対策が今後の課題でしょう。

YMCA 会報第一号は木造の旧寮が在った 1965 年 1 月 20 日ですが、当初より OB などが継続して関わらず、在寮生のみの施設運営であったため、伝統の不連続が生じ、寮の保守水準が低くなり寮運営の課題となっていたことが分かっています。今回は当プロジェクトを契機として OB 会の力を集えるような場所をホールとして提案した由縁です。OB にとっても現役寮生にとっても有意義なホールとなって、一橋寮がさらなる世紀を越える存続のために役立つことを願っています。

日本住宅の平均寿命は 30 年程ですが、イギリスでは平均 100 年を越え、古くなる程評価は高くなります。本来建築は世紀を超え、人の寿命を越える存在です。だからこそメモリアルとなり、人々が世代を超えて集えるものになるのです。今後の OB の皆様の協力があつてこの事業は完遂されたといえるでしょう。何卒守り育てて頂けるようお願い申し上げます。

[設計の経緯]

過不足無く適切な改修を行うためには、現状の把握が欠かせません。利用者の現状認識と希望を伺うために現役寮生へのアンケートを行いました。また、同じアンケートを OB である再生委員会の方々にもお願いしました。

アンケートの結果から伺えるのは、近くて安いから入寮し、暮らした結果、共同生活の価値に気がついていることです。実際、寮のイベントを減らしたいと希望するものは 2 割、増やしたいというものが 4 割であり、二倍に達しています。現在ノクリスチャンばかりの寮ですが、意外なことに聖書研究会への抵抗は見え、むしろ研究会を通しての寮生間の交流が大切にされ、これは競合する寮にはない体験となることでしょう。貴重な伝統といえます。

寮生要望として、集会スペースの規模拡大と設備改善、清掃に関する運用の改善が代表的なものでした。

以上の要望を踏まえ A 案～E 案の 5 案の全体計画を提出しました。そのうちホールについてはさらに A,B,C 案各案にそれぞれ異なる提案を行いました。

次に、いずれのプランにしてもさらなる将来のために女子寮などを建設した際との整合性への配慮と現在収入に預かっている駐車施設がどれほど増加できるのかが問われました。その回答を 3 案にまとめて提案しました。その結果、敷地北側への駐車のために安全な車道を確保するため現礼拝堂の撤去あるいは移動が結論され、女子寮の可能性を現敷地内に残しつつ、最大の駐車場を確保するための案が採用され検討をすすめることになりました。

ホールと修景された既存寮の組合せの可能性の追求なども行いながらも、改めて全体から再度見直します。丁寧な設計プロセスはこのように螺旋のように何度も見直ししながら内容を高めていきます。

既存寮のコンクリート壁の改修が少なく済むことから A2 案が採用されました。また、ホールが寮と離れており、寮に対して圧迫感を与え得ないことも A2 案の利点でもありました。また、新築ホールは木造として建設費を抑えると同時に暖かい雰囲気を用意したつもりです。

以上により基本設計としてまとめられ、納める事になりました。

基本設計取りまとめにおいて、建設費用が超過する可能性があったため、以上の案にて確認申請を進める一方、施工会社に見積りをお願いしたのですが中々予算が合いませんでした。

既存寮改修と木造新ホール増築の工事内容が大きく異なるため、両方とも一番工事費が低廉という施工者が現れず、駐車場の解約もあり、既存寮改修の内装工事を先行して発注する事になりました。増築のホール関連ではの予算も更に抑えるため、既存寮の修景を行うルーバーを最低限として、既存寮にかけける二重屋根の中止や、避難用ベランダを避難梯子に替えました。最終的にはホールの収容人員は変えないものの高さも幅も抑え、予算に合わせるよう設計変更を致しました。

しかし悪いことは重なるもので、オリンピック景気により鉄骨用のトルシア型高力ボルトが話題になる程不足となり、高力ボルトが不要な設計変更を重ねて更に余儀なくされたのでした。

確認申請においても、昨年明示された法的解釈による既存寮の法的不備が指摘され、その解消のため工事費の増額が不可避となってしまったのです。

そのような最悪な状況の中、突然齋藤理事長が施工会社を紹介いただき、なんとか予算内で請負っていただける事になりました。これは私にとり天佑としか申せませんでした。そしてようやく着工できたのでした。

[工事の経緯]

さらに試練は続いたのでした。まだ基礎工事しか

終わっていない段階の2019年10月12日には
激甚災害に指定された台風19号に襲われ、多
摩川沿いの川崎・世田谷・武蔵小杉も大きな被
害を受け、建設業界全体が被害対応へ追われ
る事になりました。プレカット工場も被災し、あろご
とか現場監督の自宅も床上浸水被害にあった
のでした。

[田代洋志略歴]

学歴および資格

平成 元年 3 月 東京都立大学大学院建築
工学科修士課程修了

平成 5 年 1 月 一級建築士(第240287号)

平成 18 年 4 月 日本建築学会 関東支部
歴史意匠専門委員

平成18年11月 日本建築家協会 登録建築
家

職 歴

平成 元年 4 月 有限会社湯沢建築設計研
究所 入所

平成 7 年 4 月 ミームズ一級建築士事務所
開設(三菱地所設計協力事務所)

平成 19 年 4 月 株式会社東急設計コンサル
タント 基幹職 リーダー

平成 28 年 11 月 ミームズ一級建築士事務所
代表

平成 28 年 12 月 (株式会社エルティディ 第二
設計部長)

主な業務経歴

平成 元年 4 月 浪合村僻地保育園改築工
事基本・実施設計(建築学会賞)(スタッフ)

平成 6 年 6 月 東京都大島支庁舎新築工
事 基本・実施・工事監理(担当)

平成 7 年 5 月 クーンズスクエア横浜開発計
画監理(協力スタッフ)

平成 10 年 2 月 日本工業倶楽部再開発計
画基本および実施設計(協力スタッフ)

平成 12 年 3 月 明治生命館本館(事務所)・
(テナント)設計(協力スタッフ)

平成 19 年 1 月 ららぽーと柏の葉(常駐設計
監理協力)

平成 19 年 4 月 アデニウム西熱海(リゾートマ
ンション)実施設計・監理(全体統括)

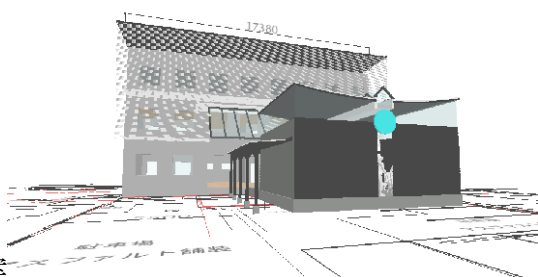
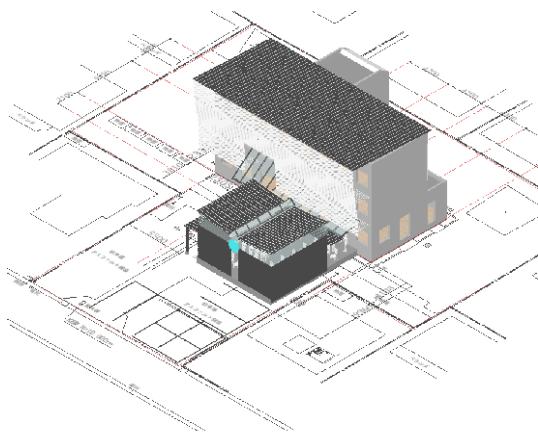
平成 22 年 3 月 京急金沢文庫現業事務所
新築計画基本・設計および監理(全体統括)

平成 23 年 3 月 渋谷ヒカリエ設計監理(ヒカ
リエ低層鉄道接続部担当)

平成 26 年 3 月 都営三田線日比谷駅改良
その他工事基本・詳細設計(全体統括)

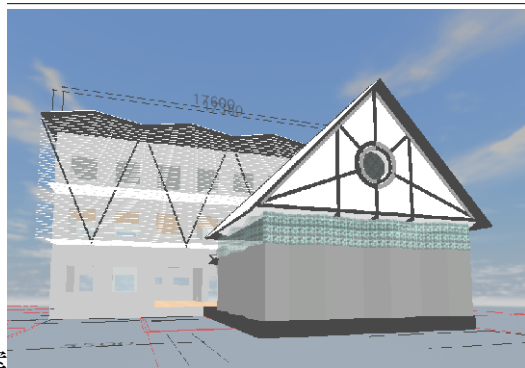
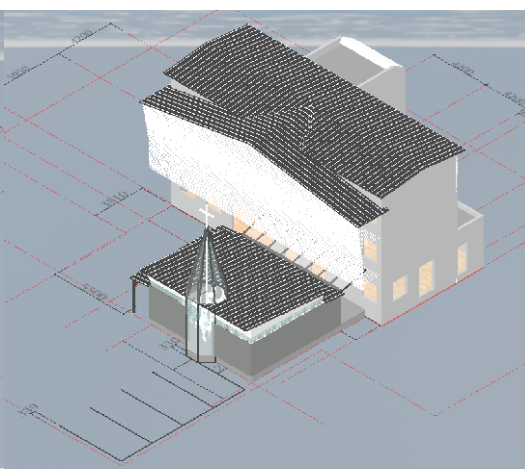
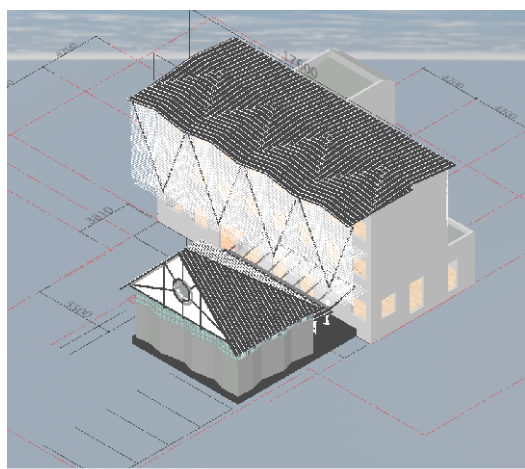
平成 28 年 12 月 日比谷線虎ノ門新駅検討・
実施設計(全体統括)

令和 元年 10 月 虎ノ門ヒルズ駅民地建物
新築基本・実施設計(全体統括)



A 案

B 案



C 案

D 案

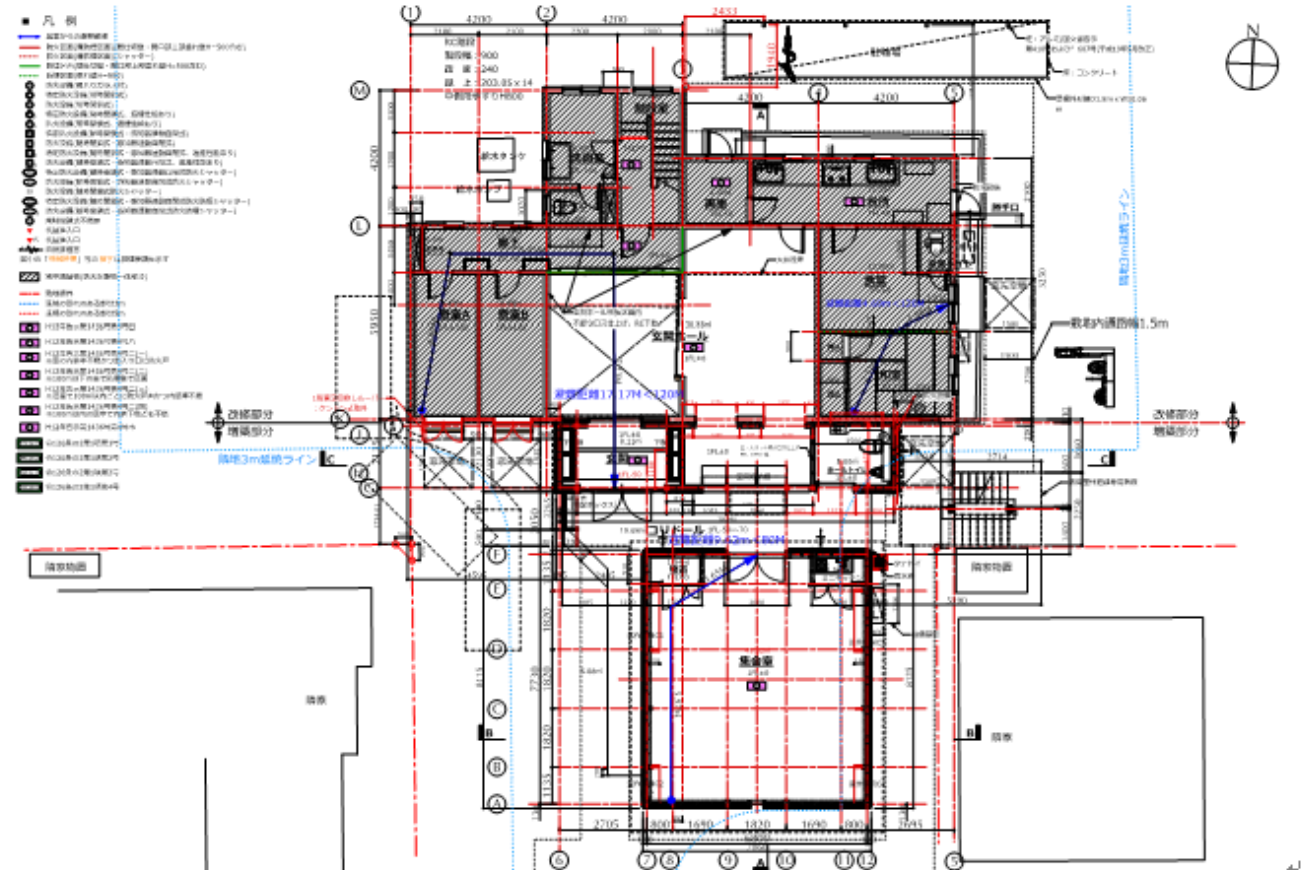
一連の流れは次表の通りです。

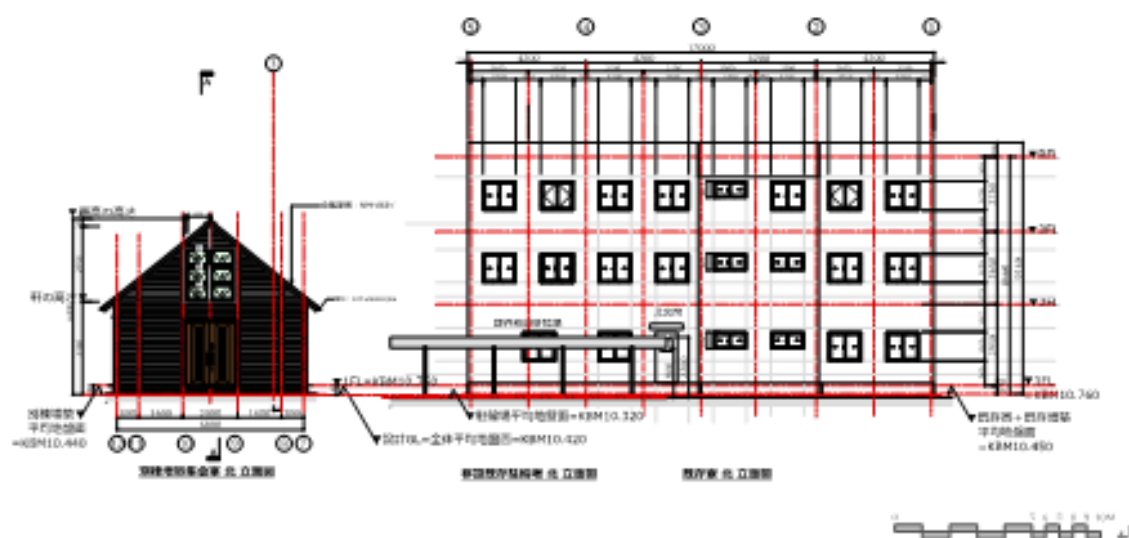
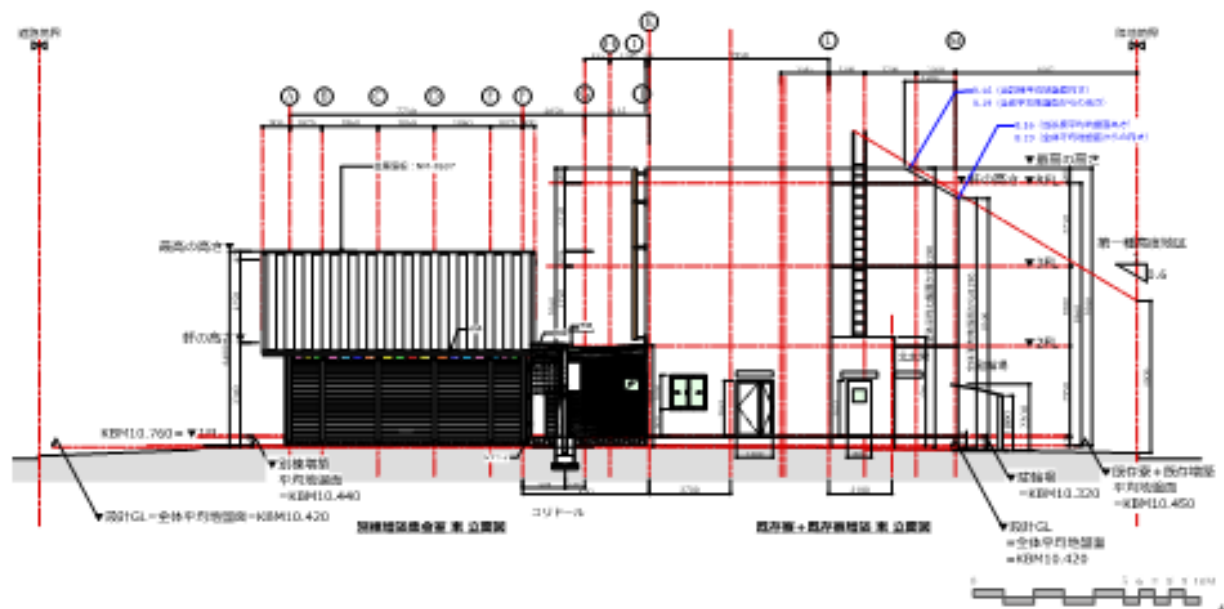
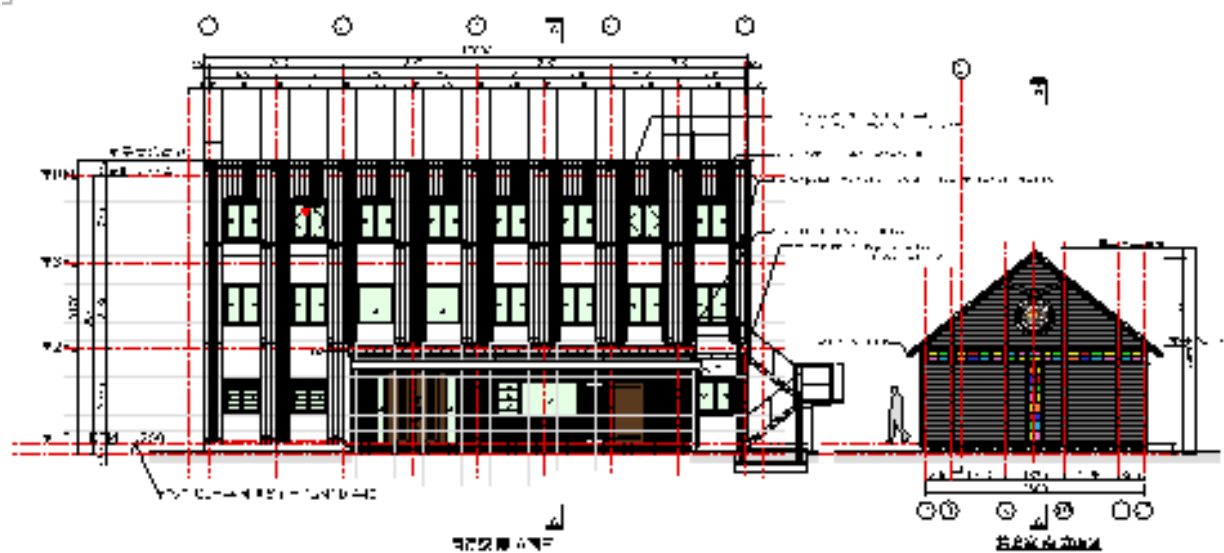
↓

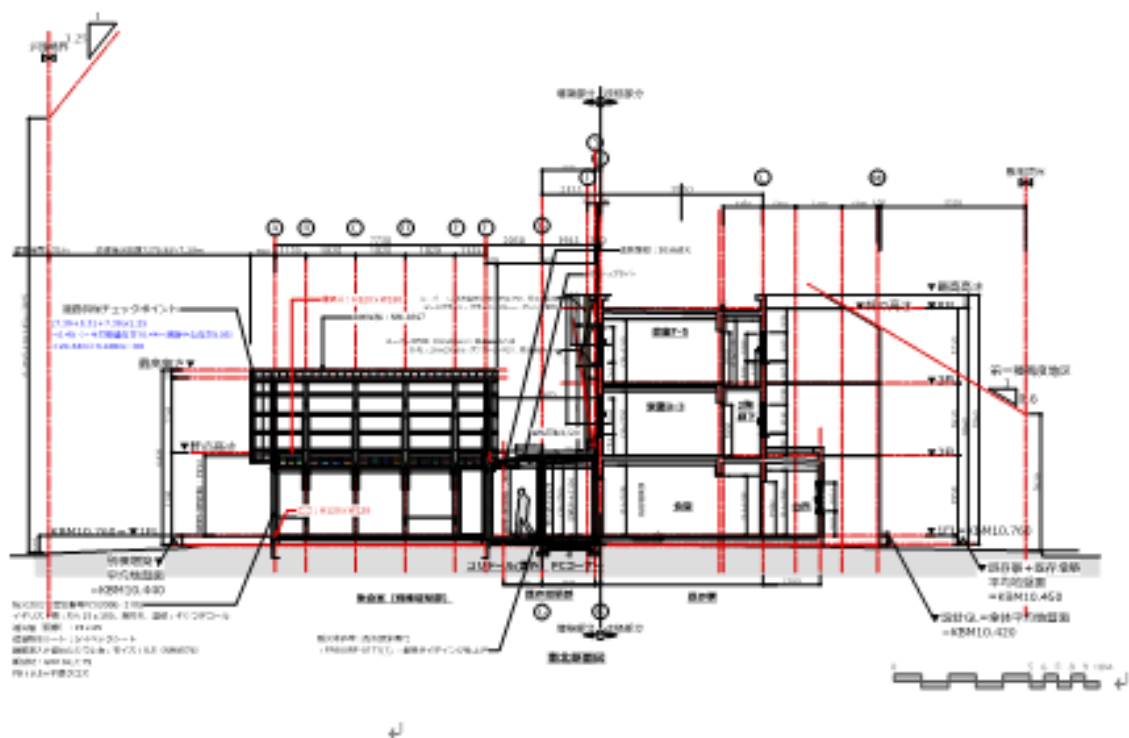
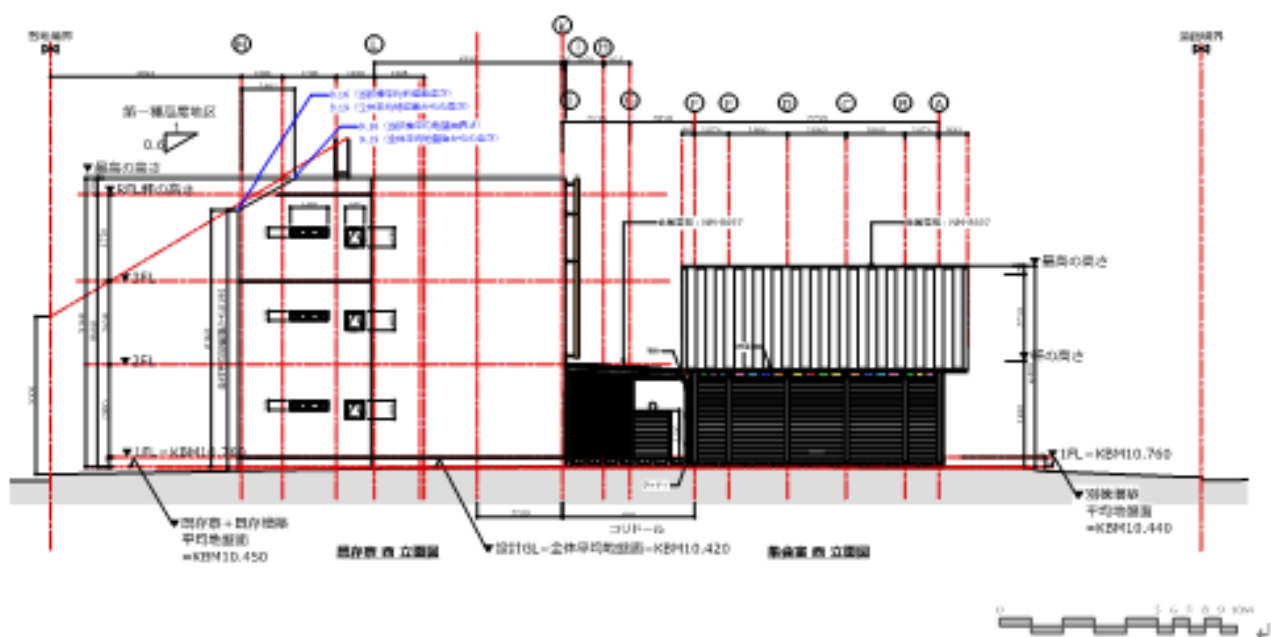
計画全体の流れ													
計画フェーズ	基本計画			基本設計					実施設計			着工	
日時	170727	171001	171101	171118	180209	180318	180415	180520	180812	181123	181211	1～5月	6～8月
案名	A	A			A-2	A-3	A-2プラン決定	A2内外観				1～5月	6～8月
案名	B	B				B3A-D		B内外観				6～8月	9月
案名	C	C						C内外観				9月	～1月
案名	D	D						D1～5内外観				～1月	
案名	E	E	E-2		E-2								
案名	F	F											
案名	G	G		G2	G3	G3							
案名	H			H									
案名	I			I									
案名	J			J		J2							
案名	K							K(A2B)					
備考	5案を3案に			外観A-D提出			内装確定			増築工事見積り			
	ホール3案			2案工事対応案			家計11器備品手配						

↓

予算内とした最終設計案は以下の通り。今後のために記載致します。







在素知贅(ざいそちぜい)

大平正芳 (1936:昭 11 学)

橋畔随想

大学教育と考える力

His was a workshop in which he devoted his life to the training and equipment of the men who won for Japan autonomy and distinction of her commerce with the world.

このセンテンスは、母校の図書館の中にあるブロックフォイス先生の胸像の台に刻まれたもので、故上田辰之助博士がものされたものと聞いておる。明治から大正にかけての母校のユニークな役割、FOB から CIF へという日本貿易の前進に演じたわれわれ一橋の先輩の貢献というものを、結晶させている名文である。

ところで、私が在学したのは昭和8年から11年にかけての期間であったが、その頃の橋畔の雰囲気というものは、日本貿易チャンピオンの養成というような実務的な技術的なものとは程遠かった。商業英語力の訓練、世界人のマーケティングの研究、経営財務の分析と整理、企業の組織と管理等の諸問題を取り扱う講座は、どこか片隅に追いやられていて、誰もそれを不思議に思っていないようであった。学園全体がいわば大いに背伸びして、大学らしい大学の実体を身につけようと苦吟しておるような時期であった。大学というところは本来考える力をどう錬成するか、方法論をどう打ち立てるかにその使命があるのであって、既成の経済学や法律学の解明や解釈をさえ超えて、遠く深く文化哲学の領域の中に踏み込んで行こうともがいているようであった。

もちろん、こういう行き方に対する抵抗や批判がないではなかった。杉村広蔵先生の学位論文に

対する白票事件というのも、こういう行き方に対する一つの批判ととれる一面をもっていたといえよう。しかし、当時、助教授や助手であられた杉村、中山、山田、高島、増田、高橋、板垣等の諸先生の学風には、実務的な技術の習得という色彩よりも、いわゆる方法論の模索という学問的な苦吟が、われわれ学生にも感じられた。

私などは、しかしながら、実務的技術を身につけることもなく、といって方法論の模索を通して、思考力をそれなりに身につけることもなく、中途半端で社会に出てしまった。ところが、その後おりにふれ、恩師の本を読み直してみると、学生時代とは違った味覚を感じずるようになったり、実務の世界で自分自身の意見をかためなければならない破目になって、自分自身の思考力というか、構想力というものの不足を、しみじみかみしめなければならない場合が多くなってきた。英語が身についていないとか簿記会計に自信がない以上に、根本的にみずからの考える力の不足ということをも痛切に考えるようになった。

その人の力量というものは、体力的にはもとより頭腦的にも、その人が二十代において達した水準が決定的であるといわれる。体力の水位については、過般のオリンピックでいやという程実証されたが、囲碁の世界などでは頭腦の水位が二十代で決まることが既に明らかにされておる。私は、在学当時の橋畔を回顧して、その当時ももっとこの領域で自分の頭腦を練っておけばよかったのにと後悔している。語学とか会計というようにわれわれが技術的なものときめてかかっている分野においても、本当はこの考える力を持たないではそれらを身に付けることはできないものようである。

私の在学当時の一橋の学風は、決して間違っていたのではなかった。間違っていたのは私達が中途半端であったことではなかったかと思う。

[初出:如水会会報、昭和40年11月]

キリスト教との出会い

父を失った私の家では、私を上級学校に進学させる経済的余裕などはもちろんなかった。中学4年のとき、海軍兵学校の試験を受けたが、中耳炎のため体格で不適格になった。金のかからない選択はただ一つ、師範学校の二部だけが残っていた。ところが、たまたま私の叔母が、警察官に嫁いで高松市の近郊に住んでいた。「自分のところから通学させてもよいから、高商を受けさせては……」と勧めてくれた。結局、そうすることになり、卒業とともに旧制高松高商に入学した。

私が高商に入学して間もなく、工学博士佐藤定吉先生が来高し、講演を行われた。演題はたしか「科学と宗教」であったかと思う。佐藤博士は東北大学の教授をやめられてから、「イエスの僕会」という学生団体を全国的に結成して、科学を通してみたキリスト教の伝道に専念されていた。キリスト教は、私にとって全く無縁の世界であった。ところが、どうしたものか佐藤先生のお話に感動し、その夏は浅間山麓の研修会に参加したり、秋には青山の青年会館における全国大会にも出席するほど夢中になってしまった。そればかりか、同志とともに、しばしば東京や高松の街頭に立って、信仰の告白をすることも辞さないようになっていた。

しかし、佐藤先生の所説は、われわれに神に対する畏れの念を植えつけるには役立ったが、その神がなぜ「愛」であるかについては、どうしても納得がゆくものではなかった。そのためには、キリスト教の教えをまたねばならなかった。したがって僕会の人々も、その後キリスト者としての道を歩んだ人が多く、先生の科学と宗教についての論説は、キリスト教への呼び水の役割を果たしたものだ。

私の場合も、その後聖書を通してキリスト教に進んだ。もともと、洗礼を受けた観音寺の教会以

外には、特定の教会と関係をもつことなく、内村鑑三先生をはじめとして、その門下の塚本虎二、黒崎幸吉、江原万里等の諸先生の著作に親しんだ。矢内原忠雄先生には、後日、大学に進学してからのことであるが、自由ヶ丘のお宅の「聖書研究会」に参加させていただき、直接教えを受けた。

また、そのころ東松原のご自宅で、聖書の講義をされていた賀川豊彦先生のところにも、学友梅野典平君と一緒に出向いて聴講し、先生心づくしの昼食をいただいたりしたものである。梅野君は高松高商から一橋に進んだ友人で、今では福島県の平市で、農機具を商い、淡々たる村夫子の境涯を楽しんでいる。

私が入学した春、一橋の上田貞次郎先生門下の大泉行雄教授が高松に赴任して、学生の人気を集めていた。先生は、小樽高商時代、恩師大西猪之介先生にたいへん傾倒されていたようで、常時和服を愛好されていたことや、右肩あがりの書体までが、大西教授そっくりだとの評判であった。商業学を、ついでオイケンの経済学を講義されていたが、戦後は永く香川大学の学長として、その発展に尽くされた。

またそのころ、今でも日本共産党でソ連関係を担当されている堀江邑一氏(京大卒、河上肇博士の高弟)は、異色ある若き教授として、堂々とマルクス経済学を講じておられた。最近でも、ソ連関係のパーティー等でお目にかかることがあるが、先生はご高齢にもかかわらず、若き日の情熱をいまだに失われていないようだ。

高商二年の夏、私は湿性肋膜炎にかかり、しばらくの間微熱が続いた。そのころ私は、どうしたものか、社会科学を学校で学ぶこと自体に興味を失いかけていた。たまたま病を得たので、強いて休学しなければならないほどの病状ではなかったが、思い切って休学を決意し、療養かたがた学校を続けるべきかどうか、今後の進路を考えてみることにした。幸いに母も兄も、私のわがままを何と

も言わないで許してくれた。

休学中、私は毎日のように、近くの山に登ることを日課としていた。肋膜炎は幸いに快方に向かった。その間、漱石の小説を読んだり、内村鑑三先生の著作に親しむことができた。そうこうしているうちに再び春になったが、私には転学の決心も、退学の決意もつかないまま復校することになった。

復校してみると、高松中学から無試験推薦で入学した橋本清君が同じクラスにいた。そのころすでに彼は、校友会雑誌に正統学派の経済学説史について、早熟な大論文を書いていた。彼はその後、神戸商大に進み、卒業後、横浜正金銀行(現在の東京銀行の前身)に入行し、正金・東銀を通じておおいに将来を囑目されていたが、不幸にも十年前、健康をそこね、東銀の常務で退職した。私は彼の学殖、とりわけ国際金融に対する造詣を高く評価しているが、とくに物事に真摯に取り組む理想主義的な態度には尊敬と感銘を覚えている。

大学生活―忘れ得ぬ恩師たち

一橋はすでに、都心の神田から国立に、予科は石神井から小平に移転していた。そのころの武蔵野には、国木田独歩の作品にみるようなおもかげが、なお色濃く残っており、武蔵野と「商科大学」との組み合わせには、ややちぐはぐなものがあった。

講義の半ばで、芋掘りに出かけたことも再三であったし、秋から冬にかけては、落葉の散りきるキャンパスの周辺は、ことのほか寂しかった。それに、映画を見るには新宿まで出かけなければならなかったし、古本をあさるには神田へ行かねばならず、ボートをこぐには隅田川にというふうに、往復の電車賃さえとばしい学生のふところには、相当こたえたものである。

一年のときのプロゼミナールでは、経済地理と

商品学を講じておられた故佐藤弘教授の下で、「自然と人間の交互作用」をテーマに勉強した。先生は教授というよりは、珍しく多趣味な友人として、われわれとよく遊んでくれた。三井アルミの川口社長との友情は、このプロゼミにおける交友の産物である。

必修科目のほか、私は杉村広蔵先生の経済哲学、山内得立先生の哲学史、三浦新七先生の文明史、牧野英一先生の法律思想史など、手当たり次第に、欲張って受講することにした。私にとっては、いずれもが難解であったが、受講したおかげで、思想史、とりわけ経済の思想史に若干の興味を覚えるようになった。二年になってからの本ゼミナールを、上田辰之助先生にお願いすることにした背景には、そういういきつもあったのである。

上田先生、経済学者というよりも、むしろ社会学者であり、社会学者である前に実のところ言語学者であられた。したがって、先生のトマス・アクイナスの研究その他のお仕事も、その言語学的な素養を抜きにしては考えられないものであった。

ゼミナールは、たいてい吉祥寺の先生のお宅で行われた。R・H・トーニーの『獲得社会』をテキストとして、彼の経済思想をというよりは、トーニーの英文自体の言語社会学的な解明を教わった。名古屋大学の北川教授も、たまたま内地留学の形で上田先生に師事しておられ、われわれのゼミナールに参加されていた。私は先生から、きびしいしごきを通して言葉を大切にすることを教えられた。一橋の図書館に、わが国における商業英語の鼻祖ブロックホイス先生の胸像があるが、その下に刻まれた献辞が、上田先生のものされた英文であることを知る人は意外に少ない。この文章は、ブロックホイス先生の貢献と、一橋の学校としての使命を簡潔に記したものである。

“His was a mighty workshop in which he devoted his life to the training and equipment of the men who won for

Japan autonomy and distinction in her commerce with the world.”

故杉村広蔵先生は、当時助教授になったばかりの新進気鋭の学者で、左右田喜一郎門下の逸材であった。杉村学説は、要するに経済は手段価値にとどまるものではなく、独自の価値領域を形成すべきものでなければならないことを、思想的に論証したものといえよう。

われわれは、生涯の大半を経済的な実践に投じて悔いするところはない。その中でわれわれは仕事三昧の境地を味わい、人格の充実を覚えている。その世界が、他の目的に奉仕する手段にすぎないものとするのは、われわれにとって我慢できることではない。新しい倫理の世界は、経済社会のうちに根底をもつべきであり、経済における、経済のために、経済を通じて生れた道義でなくては社会の全体文化に妥当する道義とはなり得ない、というのである。先生の短かった生涯は、いわば経済的文化価値の究明に捧げられたものといえよう。先生は天才肌の学究であったが、その学位論文「経済社会の価値論的研究」が、はしなくも「白票事件」(昭和十年九月、論文審査の教授会で賛否不明の白票が投じられたのに対し、大学の学問精神の沈滞を意味するとして、杉村助教授が職を辞して抗議した事件)となって発展し、学の内外で大きい問題となった。先生は退職後、上海の商工会議所などで大陸の経済を研究されていたが、終戦後間もなく他界された。ともあれ、先生の存在とその講義は、われわれにはたまらない魅力であり、天がこの天才を鬼界に回収することをなぜ急いだのか、何としても惜しまれてならない。

中山伊知郎助教授も、杉村先生と並んで学生の中に人気があった。恩師シュンペーターの流れを汲む新進の学究で、われわれは先生から経済原論の講義をきくことができた。や

がてその内容は、「常に変動する経済現象を観察する時、最も特質的なことはその相互の依存関係であり、経済理論の基本部分は、均衡理論のあらゆる形態からなるものであるから、経済学とは均衡理論で貫かれた一体系である」(岩波全書)という立場をとられ、それが純粹経済学として結実したのである。

国立に一橋キリスト教青年会の寮がある。この寮は、一橋のYMCAの同志が、その先輩の喜捨を仰いで建てた学生寮であり、毎日曜日、礼拝がもたれていた。私はこの寮に入寮はしなかったが、この建設のため趣意書をもって、関東、関西各地の諸先輩を歴訪行脚したものである。幸いに一万五千元程度の醸金の確保に成功し、国立の木立ちの中に二階建の寮ができ上がって、大堀さんという親切な信心深い寮母さんを迎えることができた。大堀さんは今日もお元気、時折、玉章を頂いているのはうれしいことである。

[初出:日本経済新聞、昭和53年1月]
(第68代・69代 内閣総理大臣:1910~1980)
(本稿は会報第56号2011年12月に掲載されたものの再掲です)。

教会に支えられて

速水 優(1947:昭 22 学)

はじめに

私の歩んできた道、職業観といったようなことを、少し教会を中心にお話しさせていただきたいと思います。

まず私の歩んだ道や職業観といったものをお話します。そのあとで、阿佐ヶ谷教会で、洗礼を受けてからすでに 59 年過ごしてまいりましたが、その 59 年の間で忘れられないことをお話しさせていただきたいと思います。

最後にキリストにおける新しい生活ということで、今からどういうことをやり、どういうことを考えるかというようなことをお話ししたいと思います。

最初にパウロのコリントの信徒への手紙二 4 章の 7 節から 10 節まで口語訳を引用させていただきます。

「しかしわたしたちは、この宝を土の器の中に持っている。その測り知れない力は神のものであって、わたしたちから出たものでないことが、あらわれるためである。わたしたちは四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害にあっても見捨てられない。倒されても滅びない。いつもイエスの死をこの身に負っている。それはまた、イエスのいのちが、この身に現われるためである。」

ここでいう「土の器」という言葉は、日本ではあまり使われないですが、「素焼きの粗末な土器」のことです。英語の聖書では earthen vessels というような英語を使っております、とにかく、粗末な土器です。それは弱くて力のない人間のことを比喻的に表現した言葉であります。また、「この宝」というのは、パウロが一つ前の節で説明しておりますのは、要するに「神の栄光を悟る光」だと、神様がここへ来て、自

分にこういうことをやらせようとしている神さまの思召し、calling を知らせるものだというふうに説明しております。「こういった宝を、自分のような貧しい土の器の中に神は入れて下さっている。これは自分が並外れた偉大な力を発揮できたにしても、それは神のものであって、わたしたちから出たものではない、つまりわたしたちが非常に大きな仕事をしたり、力強く動いたりしているのは、神がそうやって力を与えて動かしてくれているからなのだから、『四方から患難を受けても窮しない。途方にくれても行き詰まらない。迫害にあっても見捨てられない』」とパウロは言っております。

私は大正生まれで、負け戦しか知らない戦中派後期という部類に入るわけですが、応召し家族も父と兄二人、男三人が直接また間接的に終戦前後に亡くなっております。私の家族は大きな戦争被害を受けたと申していいと思います。

母と戦病死しました長兄は、昭和の初めからクリスチャンでありました。滝野川教会で、かつて東洋英和女学院で寮母・寮監をされた中川咲子先生のご指導を受け、教会に行くようになってから、かなり早い時期に洗礼を受けました。このようになりますと、私の家の中や親戚にも随分教会に行く人が出てきました。「キリストの薫り」という言葉を私は使うのですが、「キリストの薫り」が家の中にあふれるように満ちてくるのです。私はそういう中で、兄とは一回りも歳が違いましたが、小さい時から自転車に乗せられ教会に連れて行ってもらいました。そういう指導をしてくれた兄と母とに今は感謝しております。そうした「キリストの薫り」の中で育つことができたというのは大変恵まれていたと思います。

その兄は短い生涯でありました。東大を出て、高等文官試験も通って非常に若くして世の中に出たのですけれども、三井銀行の大阪

支店にいる時に応召し、主計将校になって中国に派遣されました。昭和17年安慶にいたのですが、浙かん作戦というのに出て、大変雨が降って非常に難しい戦いであったようです。雨や洪水の為に兵士や馬の食べ物を集めることが非常に難しかった、そういうなかで、現地で結核になって、熱が出、白衣で日本へ送還され、高樹町にある日赤病院に入っていました。その兄には家族みなが非常に大きな信頼を置いていましたし、尊敬もしていました。当時一橋大学の予科に入って小平の寮に居た私にも、戦地から何回も色々と手紙でアドバイスしてくれたことを今でも感謝しております。その兄が3月の初めですけれど、急に熱が上がり、そして母や兄弟が見守る中で、昭和18年の3月に天に召されていったわけです。私も一緒に一晚病院で寝たりしたこともあったのですけれども、「もう、無理するな」とか、「こんな所についていてくれなくてもいいんだから」と言ってくれました。ちょうど姉がついております時に熱が出て、急に起き上がって「神様が呼んでいる、あそこにある私の軍刀を出して下さい」と母に言うように言って「あとのことは頼むよ」と言って、その晩亡くなっていました。

急に亡くなってしまったわけですが、兄が残っていた「キリストの薫り」とか、或いはこういう時はこうするものとか、いろいろなアドバイスが心に残ってありましたために、私もこういう道を生きたいと思うようになりました。家族は、阿佐谷東教会の牧師先生が家へ聖書講義にきて下さった関係から阿佐谷東教会に出席していましたし、私自身も阿佐谷東教会の日曜学校で育ったのですが、そのクラスの先生が応召し亡くなってしまったということもあり、戦争中から阿佐ヶ谷教会に時々出て説教を聴いておりました。空襲も非常に盛んになってきた終戦の年の5月25日、中野一帯から目白のほうにかけて、一斉に焼夷弾が落とされまし

て焼けました。家の中にもたくさん焼夷弾が落ちて、それを朝まで水にぬれながら一生懸命消して一服している所へ、大村勇先生(阿佐ヶ谷教会2代目牧師)が自転車で朝早く来て見舞って下さって非常に感謝したことを今でも覚えております。私は空襲の直後に応召し、陸軍の砲兵隊に数ヶ月いて、9月に帰ってきました。それから阿佐ヶ谷教会に一生懸命出ましたし、またキリスト教徒学生会というのがあって、大村勇先生、桜井信行先生(青山学院教授)、そのお二人が非常に積極的に動いておられたことを今でも覚えております。

大学に復員してきた終戦の年のクリスマスに、素晴らしい牧師のいるプロテスタント教会、大村勇牧師が非常に張切って宣教しておられたこの阿佐ヶ谷教会で洗礼を受けました。それ以来もう59年になりますが、同じ教会に籍を置いて地方や海外勤務を含めて、日曜日には教会の礼拝に出席することを慣習化してきたわけです。どんなに忙しい時でも、なるべく日曜礼拝には出席し、聖書を読み、説教を聴き、讃美歌を声高く歌い、共に祈る。さらに私は毎回、この正面にあります十字架、これがキリストを現すものでありますから、この十字架をキリストの象徴と思ってこちらの席から見上げて、神と1対1の直接の話し合いを黙ってすることにしておりました。この神との対面で、過ぎた1週間の自分の行為を反省して、悔い改めて神の前で次の1週間の行動と意志を決めていく。もとより、顔を挙げる元気もないこともあるし、意志が集中できないこともあります。こうして自らをリフレッシュできれば幸いであるというふうに思いました。日銀総裁をやっておりました時も、なるべく出られる時には日曜礼拝に出席して、過ぎた1週間を振り返り、来るべき1週間に備えて心の中、頭の中をリフレッシュするということを習慣として続けてきた次第であります。

もうひとつ感謝しておりますことは、職業観の持ち方であります。私は大学を卒業してからもう56年近いのですが、日銀に入ってから34年、民間企業に出してから17年です。民間のうち初めの10年は経営責任者でかなり忙しく、残りの7年近くは経済同友会の代表幹事、財界のリーダー役の一人となって、財界活動と、それと同時に東京女子大学の理事長とか、国際基督教大学、或いは東洋英和女学院の理事など、私立大学のお仕事をかなりお手伝いしてまいりました。

73歳になった時に突然、日銀に総裁として戻るように要請がありました。新しい日銀法が1998年の4月1日から施行される事になっておりました。これは1942年、昭和17年に作った非常に古い日銀法を全面的に切り替えて、特に独立性と透明性、independenceとtransparencyと、この二つを正面に出して、日銀が政府のやり方にずるずるついていけないで、自分の判断で、この日本経済の良心としてイエス、ノーをはっきりさせて通貨を発行し、通貨の安定を図っていこうと計画されました。

それが日銀の本来の役割ですけれども、そういう新しい日銀法のもとで、総裁になれということだったのです。前の総裁、副総裁が途中で事故があつて急に辞めて、その後任に4月1日の新法施行に間に合うように、返事をくれということでした。考えましたけれども、これは「神の召し」callingではないかと思い、土の器のような本当に役に立たないかも知れないけれども、神がそばについていて道を示してくださるであろうということでお受けしました。

総裁時代には国会に毎年80回ぐらい呼ばれました。国会等で質問を受けても、通貨の安定、経済の発展という立場からイエス、ノーを言っていくというのが新しい法律の建前と言ってもいいかと思います。中央銀行というものはそういう独立性が尊重される、ほかの国はみ

なそのようにしているわけですが、それをなるたけ活かしてイエス、ノーをはっきり言うように致しました。そのために政府筋のほうからは石が飛んできたり、プレスからはいろいろ意地悪をされたりしましたけれども、そういうものをむしろ、石が飛んできたというのではなくて勲章を貰ったと思え、と各国の中央銀行の人たちは考えております。

私自身は、いつも三つのことを心のうちに入れておりました。一つは「主ともにいます」。「懼(おそ)るるなかれ、我なんじとともにあり」(イザヤ書43章5節)という旧約の言葉がございます。そして「主われを愛す」。これは、Jesus loves me, this I know.という、「主われを愛す」(讚美歌461)という讚美歌にあります。それから「主すべてを知り給う」。全部知っておられるのだから、自分が正しいと思う事をやっていったらいいんだ、というこの三つを自らに語って、上を向いて仕事を進めてきたつもりであります。

職業は「神の calling である」。マックス・ウェーバーという人が約100年前、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』という本を出しました。彼はドイツ人ですが、その訳がちょうど私が予科の時代に出て、calling、ドイツ語でBerufというんですが、神さまが呼んでいる(calling)、これが私の職場なんだという考え。これが近代資本主義を非常に大きく育てていった力になっており、このプロテスタントの倫理観、職業観が経済の発展をもたらせて今日に至っているという事なのであります。そのマックス・ウェーバーの大変難しい『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、これを非常に解り易く説明し、また本にしてお出しになったのが、東大の教授をしておられた、クリスチヤンの大塚久雄先生であります。大塚久雄先生は、終戦の翌年、国立市の一橋大学にも来て下さいましたし、私も東大の傍にあるYMCAの寮でなさった講演に出かけたりして、

これからの日本経済の再建に当たってマックス・ウェーバーの線を非常に強く強調して、解り易く説明して下さいました。

特に大塚久雄先生は、次のような話を私どもにして、マックス・ウェーバーの考え方というものを見せてくれたのです。「人はパンのみにて生きるにあらず」、「神の口から出ずる一つ一つの言葉で生きるのだ」というマタイによる福音書4章4節の言葉があります。また同6章33節には「まず神の国と神の義を求めよ。さらばこれらのものはみな与えらるべし」という言葉があります。こういう言葉に対して先生がよく言われたのは、中国の言葉で、「衣食足りて礼節を知り、倉廩充ちて榮辱を知る」という、これは春秋時代の齊の国の管仲という人が言った言葉です。衣食が十分になって初めて礼節というものが分かるんだ、それから、お倉がいっぱいになって初めて榮辱、榮譽とか辱というものが分かるようになるのだと。日本でもよく言われる言葉ですけれども、この二つの事を大塚先生が非常に強調されました。callingというのは、「まず神の国と神の義を求めよ」、「さらばすべてこれらのもの、"衣食住"というのは与えられる」のだと。山上の垂訓などでも言うような言葉が、「衣食足りて礼節を知り、倉廩充ちて榮辱を知る」というのとは全く逆になっているけれども、どちらの国が榮えているかと言ったら、やはり「衣食足りて礼節を知り、倉廩充ちて榮辱を知る」という国は、当時は未だなかなか榮えていくようなものではなくて、「まず神の国と神の義を求めよ」といったようなこの calling の考え方で職についていくという資本主義の近代の動きというものが、これがやはり大きな経済力、生産力を作っていったんだという事を、非常に強く主張されたんですね。これは非常に面白い、いい表現だったと思いますし、私もこれに追隨してやはり神の国と神の義を先に求めようじゃないかという気持ちで洗

礼を受けて教会に来るようになったわけです。大塚先生がその時に言われたのは、ピルグリム・ファーザーズの例を挙げて、イギリスの国教会に満たされないで真理を求めていた人達が、メイ・フラワー号という船に乗って大西洋を横切って北米東海岸のプリマスという所に上陸して、最初に彼らがやったことは何か。山に登って木を切って、礼拝堂を作って、それで神に祈る。礼拝を守る、そして働くというのが、その後の所謂ピルグリム・ファーザーズの子孫、フロンティアスピリットの人たちがアメリカの西部へどんどん出かけていってアメリカの経済をあそこまで大きく育てていったという事を示しているんだというのですね。

それで、経済同友会などは、私はとても出来るだろうかと実際思ったけれども、同友会の代表幹事をやりました。日銀総裁になって、やれるだろうかと思ったけれども、神がついておられる、呼んでおられるんだと引き受けました。callingという言葉は辞書をお引きになればお分かりですが、「職業」という意味もあります。

パウロはコリントの信徒への手紙二4章の7節で「わたしたちは、四方から苦しみられても行き詰まらず、途方にくれても失望せず、虐げられても見捨てられず、打ち倒されても滅ぼされない。わたしたちはいつもイエスの死を体にまもっています、イエスの命がこの体に現われるために」と言っておりますし、少し先の16節辺りからは信仰に生きるということで、「だからわたしたちは落胆はしません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます」と書いております。

特に面白いのは、パウロが言おうとしている所謂この calling の話は6章ぐらいまでずっと続いているのですが、あと2点だけピック・アップ

づさせて頂きます。コリントの信徒への手紙二 5 章 10 節「なぜなら、わたしたちはみなキリストの裁きの座の前に立ち、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていたときに行ったことに応じて、報いを受けねばならないからです」これは審判のことを言っているのですね。

キリストが私たちにこうやって calling を掛けて、私たちに仕事をやらせよう、自分の力を示していきたいと思っているのを受けるか受けな
いか、善であれ悪であれ、めいめい体を住みかとしていた時、生きてきた時に行ったことに
応じて、その報いを、その時に言う通りに動いたかどうかということによって、報いが、審判が
下るんだということをここでちらつかしているのです。これはよく accountability という言葉が使わ
れるのですが、give account その自分が生
きている時にやった事に対して神の前で説明
ができるかと、いうことを訊かれているのです
ね。それに対して accountable, give account が
できるかどうかということが、これからの一つの
大きな課題と私どもは考えるべきだ、そのことを
パウロはここでちらつかせていると思います。

それから 6 章の中ぐらいいまでで calling の話
は終わるのですが、6 章のもう一箇所を読ませ
ていただきます。

「真理の言葉、神の力によってそうしていま
す。左右の手に義の武器を持ち、栄誉を受
けるときも、辱めを受けるときも、悪評を浴びる
ときも、好評を博するときにもそうしているの
です。わたしたちは人を欺いているようでいて、誠
実であり、人に知られていないようでいて、よく
知られ、死にかかっているようで、このように生
きており、罰せられているようで、殺されてはお
らず、悲しんでいるようで、常に喜び、物乞い
のようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、
すべてのものを所有しています」。(7～10 節)

この言葉をパウロはコリントの教会に送っ
て、4 章の 7 節から始まる calling の主張を終

わっています。この calling の考え方について、
私は随分あちらこちらで話をしておりますが、4
章だけではなくて、6 章まで読むと非常に良く
分かります。

それから、職業と関連して社会的な行動を
とっていく時に、あと二つの事を付け加えてお
きたいと思うのですが、偉い人と会って話をす
るというのは、私なんかも随分それで苦勞もし、
うまくゆくと、ああよかったと思うのですが、こ
数年で分かってきたことは、どんなに偉い人と
会って話をする時でも、向うも自分も罪びとで
あり、キリストの十字架によって救われているの
だ、相手がどんなに偉くて、威張っていても、
神の前では罪びとであり、キリストの同じ血で、
同じ十字架で救われているのだと思えば、急
にその人の眼を直接見やすくなるし、肩の力が
さっと抜けるのですね。こういうことはクリス
チャンが社会に出て、強くものが言えるというこ
とはないかと思います。これは私の体験から申し
上げることですが、キリストを信じるということ
はそういうことではないかと思います。よく大村勇
先生が言っておられましたけれども、人間がや
ることは、どんなにいいことであってプラスを積
み上げていっても、全部たして、括弧の前にマ
イナスがついているんだよと、説教でおっしゃ
ったのを今でも思い出します。そういうものなんだ
ということを考えて、謙虚に神に祈りながらその
日その日を過ごしていくことが大切だと思います。

もう一つは、今日私が在るのは神の恵みに
よるのだということです。コリントの信徒への手
紙一 15 章 10 節にある言葉ですが、“By the
grace of God I am what I am”と英語の聖書に
あります。この言葉は、私は本当にこの通りだ
と思います。自分は何ができるか、どんな力を持
っているか分からないけれども、神の恵みによ
って今日このように生きている、在ることができ
るのだ、ということを教えられるのは非常に強い

ことです。今日私が在るのは神の恵みによるのだということが適当かと思います。

次に私には教会で忘れ得ない思い出が幾つかあるので、それを私の信仰、そして教会の力というものと絡めてお話しさせていただきたいと思います。

私は終戦の年に復員して学校へ戻り、その年の暮れに洗礼を受けました。翌昭和21年、終戦の翌年というのは、私の家にとっては大変ひどい年で、私の二人目の兄が、これは東大の航空原動機を出て三菱重工に入っていたのですが、戦争中は、海軍の技術将校で非常に元気に飛び回っていた人です。戦争が終わってやる事がなくなって、会社の寮で食べた物に食あたりして、窒息して死んでしまったのです。8月27日でした。父親が、胃腸が悪くて東大の病院に入院していたのですが、それを聞いて力を落として、10日目に、9月7日だったと思いますが、亡くなってしまいました。それで男が、3年の間に3人死んでしまうということが起こって、私が1人、男として残り、姉と妹そして母をどうやってこのインフレのひどい、ハイパー・インフレの中で養っていけるか、何としてでも早く就職をして、将来の道をつけていかなければいけない、と思い始めたのが昭和22年です。この年、私は卒業の年で卒業論文も書かなければいけないし、姉はこのとき結婚していき、母と妹と一緒に住んでいるという昭和22年当時の日記を昨夜開いて見ていましたら、最初に二つの聖句が書いてありました。「神もし我らの味方なれば誰か我に敵せんや」、ローマの信徒への手紙8章31節の言葉と、「主キリスト・イエスの十字架のほかに誇るところはあらざれ」というガラテヤの信徒への手紙6章14節の言葉、この言葉で今年はもっと頑張って行こうと決めて進んでいったのです。丁度この年の2月23日、

私は洗礼を受けてもう1年余りになるわけですが、大村勇先生に「日曜日の夜の証に君の今の決意を述べてくれ」と頼まれました。

その頃卒論を書こうとしておりましたし、10月に就職が決まるので、それには7月頃に試験にパスしなければいけない、まあどこへ行こうかと迷っていました。桜井信行先生は教会の先輩ですけれども、今、物を作るより人を作ることが大事だから、青山学院で教えろよというようなことを随分勧めて下さったのです。でもそれは力の上でも自信がないし、父からも言われておりましたので、少し実業界に入っていきたいと考えていました。7月には日銀の試験も通ったわけですが、その前に「2月の23日に君の今考えている信仰を証しろ」ということになったわけです。そこで、さきほど申し上げたようなcallingとか、或いは大塚先生が教えてくれた、日本はこれでなければ栄えていかないと盛んにおっしゃったことを、自分もその通りだと思い、そういう話を30人ぐらい出ておられた証会で話したわけです。その話をしたら、大村勇先生が傍へやってきて、「今日の話は面白かった、立派な証だった、原稿を貸して見せてくれ」とおっしゃって、「何かに発表したらどうか、私は経済というものが分からなかったけれども、今日の話で少し分かったように思う」というようなことを言ってくれたのです。これは大塚先生の物の見方が解り易かったからだろうと思うのです。

この証会に、たまたま大村勇先生の弟さんに当る大村善永先生が奥様のきみさんと出席されていました。先生は11歳を頭に子供4人を連れて満州から引き上げて来られていたのです。ほんとうに無一物で引き上げて来られたのです。立派な方で、優れた勉強もしておられた方なのですが、目が悪くて失明しておられました。大村善永先生は大村栄先生（現阿佐ヶ谷教会牧師）のお父さんです。栄

先生はまだ生まれていなかったのですが、そのご夫妻が私の証を聞いておられたのですね。これは大村勇先生が、牧師館のほんとうに狭い所に満州から帰ってきた6人の親子を仮住まいさせていました。これからどうしていくのか考えなさいということであったのだらうと思うのです。あとになって、善永先生の奥様からお手紙をいただきました。それは1984年のことです。私が商社の社長になったお祝いに手紙を送って下さったのです。その手紙の中でお祝いに加えて次のようなことが書いてあります。これは実に証が1947年に起こったことで、手紙を頂戴したのは1984年ですから40年ぐらい経っているのです。

さて話は古くなりますが、昭和22年初めの頃だったと思います(昭和22年2月23日です)。阿佐ヶ谷教会夜の祈祷会の席で優様と初めての出会いを経験いたしました。その頃私どもは旧満州から11歳の子を頭に4人の子供を連れ、失明の夫の手を引いて乞食にも劣らない姿で阿佐ヶ谷教会に引き上げて来たばかりでした。先のことをどうするか、考える心の闇は深くなるばかりで、ただ主のみ手におすがりするより道のなかった私どもでした。鹿が谷川の水を慕い求めるように、御言葉を求めておりました。そのような時、初めて出会った優様の証が私ども夫婦にとってまたとない指針となり、苦しゅうございましたが、伝道者の道を歩むこととなったのです。

その夜、お話下さった内容は、私は今でも鮮明に覚えております。支那の教えに「衣食足りて礼節を知る」という言葉がある、聖書では「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすればこれらのものはすべて添えて与えられるであらう」とある。この二つの言葉を比較検討すると、支那の人間は、衣食を満たされてこそ初めてまともな人間としての生活が出来るようになるものだという。ところが聖書の教えは、まず

創造主なる神を拝し、神の子キリストの心をわが心にして従うときに、生活に必要なものはすべて添えて与えられるものであると。例えとして、ピルグリム・ファーザーズの話もなさいました。上陸後一番先にしたことは、森の木を切って教会を作り、神に礼拝を捧げることであった。アメリカ大陸ならぬ焼け野原の東京に帰り着いて、私どもはまず衣食住のことを考えていました。私は夫に良い仕事が見つからない、見つかることを願い求めていました。ところが数日後夫は東京神学大学に聴講を願い出て許され、通学する身となりました。「まず神の国と神の義を求めよ」のほうを選んでしまったわけです。その後、東京国立盲学校から英語の教師にと言ってきたり、大阪ライトハウスから副館長に是非と言われたりしましたが、夫は振り向きもしませんでした。

学生服を着た青年速水氏の口を通して与えられた御言葉が私どもにとって生涯の転機になったのです。その後のことは申し上げることもございません。小さな働きでしたが、33年の牧会生活を3年前に引退して、今多摩川に近いところに閑静な家を与えられ、老いさらばえた身を養っております。長い間心の内にためておいたものを一気に吐き出した思いで清々と致しました。亡きお母様にもお喜び下さっておられることと存じます。云々

善永先生ご夫妻もこういうことをその時考えておられたのだと、遙か後になって教えて下さり、やはりよく考えて自分の今思っていることを証するということは、それを聴いている人に力を与えることが出来るということを知らされた次第でありました。

それから二つ目には、これも昭和22年、同じ年の8月、この教会で牧愛会の夏期修養会が3泊4日で行われました。当時牧愛会は未だ旧制中学の高等科ということで、人数がかなり多かったのですが、組織としては教会

学校の中学校礼拝を補足する、男女の中等学校生徒の自主的な機関、自主会みたいなものでした。どちらかというと教会の信仰の問題よりも、町の流れに流される可能性が多いというので、私はたまたま牧愛会の教師をやれということで、どうしていけばいいかと心配をしながら連れて行ったわけです。先輩の人たちが動いて再建をはかって、私もその担当教師として夏の修養会ということを非常に重視し、8月初めから、幹部18人の人たちと千葉の外房の鶴原に、ある学校から海浜の寮を借りて、3泊4日の合宿をやったわけです。大村勇先生、加藤信子先生、伝道師の先生もついてきておられました。「イエス・キリストは主なり」というフィリピの信徒への手紙2章11節の言葉を表題にして、聖書研究、信仰問答、福音の神学的な理論を教えて、皆で討議をし、発議をしてもらうというようなことを始めたわけです。初めは硬くなってなかなか本当の討議が出来なかったんですが、昼間に泳いだり、いろいろ話し合っているうちに、だんだんじんできて、最後の日になって、大村先生が奨励で、「自分がキリストに従えるかどうかそれが問題なんだよ、みんなそれをどう思うか答えなさい」と言って答えさせた。そうすると強い奨励に続いて、生徒がみんな、全員が口から堰を切ったように真実の祈りを捧げ始めた。或る人は泣いて祈っていたわけですが、私も聖霊の、まさに奇しき御業を、恩寵をまさに感激をして、全員で、「主よ、今ここに誓いをたて、しもべとなりて仕えまつる」(338)というあの讚美歌を涙を流しながら歌ったのを今でも覚えております。そしてこの修養会が契機になって、牧愛会というのが教会的に変わっていったと思っております。クリスマスにその中から受洗者も出たように記憶しております。この記録は私が『教師の友』に「夏期修養会を顧みて」という題で寄稿したことを覚えております。これな

どは、未だ学生時代でしたけれども、教会の機能が大事であると教えられた機会でありました。

三つ目の教会での体験ですが、昭和22(1947)年に私は日本銀行に入りました。今度は銀行の中に熱心な人がいて、かなり頻繁に聖書研究会を開いてくれていたのです。聖書研究のほか、クリスマスで劇をやったりして自分の信仰を強めてくれたと思います。特に、後に教団の総会議長になられた鈴木正久先生が講師として来られて、定期的にフィリピ書の講解を連続してやって下さいました。これが自分の信仰を固めてくれ、フィリピの喜びの書簡というのを、私も好きになりました。本当によく説明、講義して下さいました。このようになり、2年足らずで私は大阪の支店に転勤になるのですが、寮が千里が丘という所にあつたので、大村勇先生が吹田教会、まだお元気な印具徹先生を紹介して下さいました。この方は関西学院の教授で非常に立派な神学者で、礼拝には学生や若い勤め人などがたくさん来て、礼拝出席が大変楽しかったことを今でも覚えております。皆の勧めもあって、ウィーク・デーの夜に定期的に聖書研究会をやるというので、会員だけで開いて、私が東京の本店で教えてもらった鈴木先生のフィリピ書講解を復習して、そこでご披露したりも致しました。そのうちに、寮が千里が丘から城東線の桃谷に移るのですが、今度はお偉いお年寄りが3人と、私ども若い者が2人天王寺の傍で焼け残った普通の日本の家に、住むようになりました。聖書研究のある日に朝早く起きて準備をしておりますと、お年寄りのお偉方が「よく勉強しとるな」と言って、声を掛けて下さったりしました。桃谷に移ってから、教会は吹田教会に行っていたのですが、大阪支店の近くにある大阪教会で市川先生のコリント書の講解などを聴いたのも非常に勉強になったと思

っております。

大阪支店のほうも昭和 24 年、5 年、6 年、金融市場がようやく動き始めましたし、紡績のほうも復元を始めた大変面白い時期であったわけです。しかし、民間貿易が開始されるというので、外国部に戻って来いということで、2 年で東京へ戻されたわけです。これは余計な話かもしれませんが、吹田教会のメンバー十数人が大阪駅に見送りに来てくれて、『神ともにいまして……また会う日まで』（讃美歌 405）をきれいな混声合唱で歌ってくれたのです。大阪駅のホームで、回りのみんながびっくりするぐらい大きな歌声で見送りをしてくれました。私の学校時代の友達なども来てくれていたのですが、今でも、「あの時は驚いた」といって、吹田教会のコワイアの送りを感心しておりました。これも大村先生が立派な良い教会を選んで紹介してくださったお蔭だと思っております。それから昭和 33（1958）年に最初のロンドン勤務になりますまで、企画という所で中央銀行らしい勉強や企画を一万田総裁のもとでやる事が出来たわけです。

次に、私自身がロンドンで 2 回、ニューヨークで 1 回の海外勤務をし、家族といっしょに海外での教会生活を致しました。これがやはり、私自身にとっては非常に大きな信仰の固めになっていったと思っております。昭和 33（1958）年の暮に、ロンドンに最初一人で勤務したのですが、先ず行くときに、これまた大村勇先生が、メソジストの国際会館の会長さんがミス・ポーターというおばさんでしたけれども、その人に、私が行くから面倒みてやってくれ、ということ英語の手紙で書いて下さいました。はじめ単身で行きましたので、それを持っていくと、クリスマスの前でしたが、地方から出てきて寮に住んでいる人たちを紹介してくれて、ハインド・ストリート・チャーチというリーゼント・パークの少

し南の、ロンドン大学の傍の教会に連れて行ってくれたのです。それだけでなく、「クリスマス礼拝、クリスマスの休日を 3 日間、どうするんだ」と言うから、「予定はありません」と言ったら、「それではクリスチャンの所に泊まって英国のクリスマスを家庭で楽しみなさい」と言って、南の方のエブソンの隣のユエルという町でしたけれど、メソジストの信者を選んでくれました。英国の家庭の中で、本当に家族と同じように、しかも一番立派な部屋に入れてもらって、イギリスのクリスマス、家庭のクリスマスというものを味わわせていただきました。これなど、日本もこれから海外の人たちが来るにつれては、よく心得てやっていかなければいけないことだと思います。

昭和 46（1971）年にもう一度ロンドンへ、今度は家族を連れて行ったわけですが、やはりそのハインド・ストリート・チャーチの牧師をしていたブライアン・ダックワースという、これはオックス・ブリッジ出身の優秀な人でしたけれど、その人が私どもの息子を一生懸命世話をしてくれて、良いパブリック・スクール、ミル・ヒル・スクールを紹介してくれたり、娘のほうもフランシス・ホランドという、これも良い学校で、日本が本当に大事だと思ってる中高時代の個性教育というものを徹底的にやってくれたことを非常に感謝しております。それが今も残って、二人とも海外で Ph.D. をとり学者になって、今日日本の大学で、学問を地味に進めています。こういうことはやはり、イギリスで基礎を与えられたお蔭だと感謝しております。今こそ教育問題、今日は教育の話をする時間はもうありませんけれども、今私は大木英夫先生に頼まれて、聖学院、100 年の歴史をもっている学校ですが、6600 人、幼稚園生から大学院生までいるので、その経営と、先生方の勉強会、或いはレクチャーの時に話すことをやらせて頂いております。これもいつまでやる事が出来るか分

かりませんけれども、新しい私のこれからの生活の一つの方向だというふうに思っております。

大村勇先生も、大宮溥先生(阿佐ヶ谷教会3代目牧師)も、本当に何かあると直ぐ相談に乗って下さるし、電話を下さり、非常に良い教会の中で育ってきました。先生方のお蔭だと思っております。大村栄牧師(阿佐ヶ谷教会4代目牧師)は、伝道師の頃からよく存じ上げております。母が亡くなった後、離れが空いていたものですから、私の家にお入り頂いて、そういうことが私どもの信仰の上でもプラスになっていったと思っております。そういうことを含めてこの教会で色々な経験をさせてもらいましたが、内外の教会のやり方を体で感じて、体験することが出来たというのは非常に良い、恵まれた推移であったと思います。ただ毎年、この1年だけでも、かなり心身ともに老化しておりますし、いつまでやれるか分かりませんが、これからの、キリストにおける新しい生活を、どうやっていくかということを最後に少し触れさせていただいて終わりたいと思います。

私が商社へ移る時に大村勇先生が真っ先に贈って下さった聖句は、ローマの信徒への手紙12章1〜3節です。そこには「キリストにおける新しい生活」という題がついております。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なことであるかをわきまえるようになりなさい。わたしに与えられた恵みによって、あなたがた一人一人に言います。自分を過大に評価してはなりません。むしろ、神が各自に分け与えてくださった信仰の度合いに応じて慎み深く評価すべきです。

これまでの私の職場というのは、神さまから与えて下さったもので非常に恵まれた生涯であったと思います。これからの生活というのは、神さまから与えられたものに対して今度はどういものが神に献げられるのか、ということを考えなければならない時期だと思います。「十字架のほかに誇るものなし」、これはガラテアの信徒への手紙で最後の所に出てくる言葉ですが、信仰という、しっかりした羅針盤をもって神に向っていく。これは日本人ができないことで、日本人は風見鶏のようであって、風の吹く方向にみんな一緒に向いていこうというのが特性ですね。これでないと村の中に住んでいけないで、追い出されたのだらうと思うのですが、何がよいことで神に喜ばれるか、自分の信仰というものは神に向ってどっちが北なのか、ということをはっきりもった羅針盤のようなものを持っていないと古い共同体から脱出していくことはできないと思います。日本の社会の改革にとって大事なことは、クリスチャンのこういった動きではないかと思います。

サミュエル・ハンチントンという、10年ぐらい前に、『文明の衝突』"The Clash of Civilizations"という本を書いたアメリカ人がいます。その本の中で、あのベルリンの壁が崩れて東西南北の対立はなくなって、これからは大きな戦争はない、けれども、どういう争い、対立が起こるのかということを世界を八つの文明に分けて、日本は日本だけだったと思いますけれども、こういう争いがおこってくるということを、それは文明とか宗教とかが中心になるのだということを予告した。私は彼の言うとおりでいいと思います。彼はアメリカ人ですが今度、"Who are we?"という本を書いた。アメリカにメキシコ辺りからたくさん移民が勝手に入ってくる。それがアメリカの中を引っ掻き回している。英語もできないし、キリスト教徒でもない、そういう人達が、1960年ぐらいの時は8百万人

位だったのですが、今はもう毎年数十万人入ってきている。そういう人たちがどういう考えを持ってどういうことをしてるのかが分からない。その本が『分断されるアメリカ』という訳で出て、その中に次のようなチャートがありましたのでこの機会にと思い紹介します。

ご覧になった方もおありかと思いますが、主要国 42 ヶ国で、信仰者、すなわち信仰をもっている人、信仰心のある人が何%いるかというのを表にしたものです。ナイジェリアが一番上ですが、アメリカ合衆国が五番目で、これで 65%ぐらいですね、これが恐らくかつては 80%ぐらいは信仰心があったのだと思います。こういうところに始まってずっと見ていくと非常に面白いのですが、日本は下から三番目で、18%です。これには仏教の人とか、神道の神主さんとか、或いは創価学会の方々も含まれるかも知れませんが、キリスト教徒は恐らくカソリックを入れても 1%あるかないかなのではと思います。これはやはり、戦後の日本の教育が、信仰をもつということを教えない、或いは、かつての「修身」すらなくなってしまっているわけですが、そういう教育で良いのかということです。こういう状況でこのまま行けるのか、ということを私は非常に疑問視しています。これはやはりしっかりした信仰をもつようにならないと、どちらが北か分からないというようなことが出て来るというのは問題だと思います。これからの一つの大きな問題として日本の教育のあり方、今だいぶ大きく変わりつつあると思うのですが、こういうことをどのように育てていくのか、と考えていく必要があると思います。ミッションの学校では、信仰を確立して卒業することは無理としても、在学中に「キリストの薫り」を十分に知って送り出せると良いと思います。

それと、私自身にとっては、「老いの重荷」ということが出てくるわけで、ホイベルス神父がか

つておっしゃった「老いの重荷は神の賜物である」ということ。これも大村先生がよく使っておられた言葉ですが、老いの重荷に耐えてやるべきことはやっていくと、それが神への献げものではないかというように思うわけです。これからの新しい生活と言われても、まあ教会へはなるだけ、礼拝には出席したい。しかし昔のように色々のご奉仕をすることができないので、まことに申し訳ないのですが、息子の代になったということで、私は外でできることをなるだけやっていきたいと思っています。

これで大体、今日お話すべきことは終わったわけですが、私が今ご一緒に仕事をしております、東京神学大学の学長を務められ、現在聖学院院長の大木英夫先生は、ラインホルト・ニーバーに直接ついて、若い時にユニオン神学校でよく勉強された方です。ニーバーのよく言われる「serenity の祈り」、「神よ、変えることのできないものを受け入れてゆく平静さ serenity を、変えるべきものを変える勇氣 courage を、両者を見分ける智慧 wisdom を、これら三つのことをお与え下さい」という「serenity の祈り」。ニーバーの言葉は日本でもよく使われておりますが、もうひとつニーバーの非常に有名な言葉で、こういう言葉を彼は言っているのです。

如何なる価値のあることでも人生の時間の中でそれを成就することはできない。それゆえに我々は、希望によって救われていかなければならないのだ。如何にまことで美しく良きことであっても、歴史の目前の現実の中で、それを明白に実現することはできない。それゆえに我々は信仰によって救われなければならない。如何に有徳なものであっても、人のなすことはただ一人だけでは達成することができないのだ。それゆえに我々は愛によって救われねばならないのである。

こういうことを "Irony of American History" という

書の中で言っておられるのですが、これは考えさせられる言葉だと思います。

それでは最後に、讃美歌 497 番、

あめなる日月はまきさられ つちなる物みなくず
るとも

常世にわたりてすべたもう 主イエスぞ永久に
かわりなき

讃美歌は百番とか二百番代のほうが信仰的なのですが、四百番、五百番代というのはどちらかというとロマンティックですが、わたしはこちらのほうが年と共に好きになってきていますので、今日はひとつこの歌で終わりにしてください。ご静聴有難うございました。

(本稿は会報第 52 号 2009 年 12 月に発行に掲載されたものの再掲です)。

国立の四季

杉浦英一 (1952: 昭 27 学)

春——。YMCA 寮の庭には、桜があったと思う。かなり大きな木で、花吹雪を散らしたはずだが……。いまとなつては、さだかな記憶はない。記憶の悪さを棚上げしていうならば、あまり庭木や花を眺めるような生活ではなかった。少々キザな言い方だが、目はいつも内面を向いていた。せつかくのいい環境を眺めるより思索とか読書とか、心の中の風景にのみ、興味があった。

春らしい感じを持たせるのは、午後早く、銭湯の一番風呂へ出かけられるようになること。がらんとした広い浴場でハダカになっていると、心まで洗われ、さわやかな気持ちで一日をもう一日はじめら

れるような気がするのであった。

夏——。寮生の多くが帰り、静まり返った寮は風通しもよく、ほとんど暑さを感じさせぬ快適な読書の宿であった。「東京の軽井沢」といった趣きがあった。大きな読書目標を定め、一夏かかって取り組んでいると、宇宙がすべてわが人生、という気がした。

秋——。もちろん、灯火親しむの季節。そして祭りの季節でもある。大学でも一橋祭があるが、わたしは、ほとんど関心がなかった。先輩はともかく、ざわざわがやがやと、外部の老若男女が押しかけ、学園の静謐さがみだされ、汚される思いがした。

ただ、YMCA 寮に戻れば、そのざわめきも遠いものになる。大学の学生寮に戻る諸君たちとちがひ、救われた気分になって、わたしひとりだけの世界に沈潜できるのであった。

冬——。国立の寒さはきびしい。それだけに、よけい部屋にとじこもり、本だけに明け暮れる日が多くなる。そして、ひとつだけ色どりとなるのは、駅前に在るエピキュールというコーヒー店へ出かけるとき。山田雄三先生や太田可夫先生を囲んで、学問のこと、人生のこと、天下国家のことを話し合う。いかにも学生らしい浄福を感じさせるひとときであった。

こうしてふり返ってみると、ある意味では、禁欲的、そして、反俗的といつていい生活が可能で、国立の生活であった。そこには、人生の他の季節とはくつきり色を異にした生活があった。

わたしは、いま、それを何より有難いことに思う。一橋、あるいは一橋寮の後輩諸君がどうなのかは知らぬが、いま一般的にいつて、学生生活が他の人生の生活と区別がつかなくなっている。アルバイトにみだされ、レジャーにくもらされ、ゴルフやマージャンにうつつを抜かし……。

そうした生活は、学生でなくとも、また、人生のいつの時期でも、できることである。せつかく与えられた学生時代という貴重な時期を、なぜ、くつきりと

ちがったものとして送らないのかと、わたしは脇から見ていて、齒がゆい気がする。俗の俗、俗より俗なる生活を、学生時代からはじめる必要など少しもないはずである。

幸い、YMCA一橋寮は、地理的にも、規模の上からも、また設立の趣旨からも、孤墨を守り易い立場に在る。いまの国立がどんな風に変貌しているかは知らぬが、その中に在って、反俗の孤島として、自らだけの四季を持って欲しいものである。

(作家城山三郎:1927～2007)

(本稿は会報第56号2011年12月に掲載されたものの再掲です)。

一橋大学基督教青年会130年史に寄 せて

堀地史郎(1955:昭30商)

(1) 寮生活の思い出

私は、1951年(昭和26年)に一橋大学に入学し、最初の一年間は、知己を頼って都内に下宿したが、一年次の終わりに、YMCA一橋寮のことを知り、入寮を希望し認められた。したがって、在寮期間は1952年から1955年までの3年間であった。

時代的には大戦による荒廃から徐々に復興しつつあったが、卒業の翌年の経済白書のタイトルは「もはや戦後ではない」であったから、在学中は戦後の最終期であったといえよう。一橋基督教青年会の歴史を振り返る時、ごく初期の時代から寮の存在に恵まれていた事実には誰しも異論はないと思う。我々の時代には、年一回の寮祭には、卒業生、大学の先生、在寮生、通学生が集まり、盛会であった。また、キリスト教講演会、聖書研究会等には、通学生も加わり、寮はまさに活動の中心であった。

さて、寮生活の思い出としては色々あるが、ここでは、卒業後の私の人生に大きな影響を与えた人々のことを取り上げたい。年齢順に、中島省吾氏(昭和23年卒)、椎名亮氏(旧制昭和28年卒)、中内恒夫氏(昭和29年卒)である。このうち中島省吾氏、中内恒夫氏については会報61号(2014年7月発行)および、58号(2012年12月発行)に、私の名前で追悼記を書いたので、ご覧いただきたい。ここでは、椎名亮氏のことを記したい。

椎名さんが入寮されたのは、卒業の1年か2年前であったと記憶する。これはご自宅が大田区で、卒論作成等の為、通学時間を節約されるためであったと思う。卒業後、三菱銀行に入行され、取締役京都支店長を経て、退任後は関連会社の社長等に就任された。また、東京女子大学理事、評議員等を務められた。大学入学後、田園調布教会で受洗され、以来熱心なクリスチャンの生涯を貫かれた。初対面の印象は、中山伊知郎ゼミの勉強家であると同時に哲学、文学、芸術(音楽、絵画等)をも愛する教養人であり、椎名さんが入寮されて、寮の空気が一変

した思いがした。在寮中は、まだ武蔵野の面影を多く残した近くを有志で散策しながら、大学生活、信仰問題、将来の進路等について語り合ったことが忘れられない。

私は、大学4年の夏、帰省の途中、当時大阪の船場支店に勤務されていた椎名さんを訪ね、就職は東京海上を第一志望にしたい旨をご相談した。椎名さんは賛成され、同期の友人と、親友の父君が東京海上の役員をされているので、二人を紹介するといわれ、すぐ手配をしていただいた。寮の共同生活を通じて、自分のことをよくご存じの先輩のアドバイスに勇気づけられる思いであった。入社してからも時折どんな仕事をしているのかを気にかけていただいた。

さらに結婚にあたっては、椎名さんの奥様の親戚にあたり、元三菱銀行聖書研究会のメンバーであった妻をご紹介くださった。二人とも椎名さんが薦めてくださるのであればとすぐに決断することができた。人生における重大な選択といわれる就職、結婚にいずれも関わって頂いたことになる。私が会社を退任する時には、ご自分が理事をされていた東京女子大学に奉仕するよう勧められお引き受けした。なお、同大学の理事長には、速水優氏、阿部志郎氏と一橋基督教青年会の先輩が務めておられた。

椎名さんは、1999年に69歳の若さで天に召された。在職中は立派な業績を残されたが、何回も長期入院を余儀なくされたのはさぞ心残りであっただろうとの思いを深くする。今、手元に、椎名さんの召天後、椎名さんが主宰された元三菱銀行聖書研究会の有志メンバーが尊敬と惜別の念を持って発行された小冊子がある。この中に、

「主による癒しと平安」と題する椎名さんの文もあるが、闘病の中で信仰を深められたことを述べておられ、胸を打たれる思いである。

(2) 一橋寮増改築プロジェクトの完成と公益財団法人認可

両者は130年史において、特記すべき事項であるが、長い一橋基督教青年会の歴史においても画期的な出来事である。なぜならば、両者は相互に関連が深く、しかもほぼ同時期に達成できたことに大きな意義があるからである。

① 増改築プロジェクトの完成までの経緯

私は、中島省吾氏の後を受けて、1997年～2005年の間、理事長を引き受けたが、1979年1月に竣工した新一橋寮は既に20年を経過していた。そして、玄関ホールの内装の大規模な改修が必要であった。そして、当時の内藤満理事、加藤順理事と寮の今後予想される大修理にどう対処するかを話し合ったことを思い出す。そのため、資金調達をどうするかが課題であり、当時の寮生であった吉田護氏、堀口洋次郎氏等の提案もあり、まず収益事業としての駐車場設置を決定したのも私の理事長時代であった。

さて、一橋寮増改築プロジェクト(当初は新築構想)が機関決定されたのは、2013年6月の評議員会決議であった。これは、齋藤理事長が立ち上げた2011年の将来ビジョン検討委員会の検討結果に基づいて、理事会で議論した結果を一部修正したものであった。ようやく気運が高まってきたが、私個人としてはその後のプロジェクト推進の決定的要因となったのは、2013年夏の

中島省吾氏の1000万円の遺贈申し出であったと考えている。召天される約半年前のことである。

プロジェクト遂行のためにまず求められるのは、資金調達の目的を立てることであり、2014年2月に発起人による「一橋寮再建のための募金趣意書」を配布し、西浦道明氏を募金推進委員長に指名した。募金目標額を8000万円とし、皆様のご協力により達成することが出来たことに改めて深く御礼申し上げる。

プロジェクトの具体的内容については、企画委員会(岩谷滋雄委員長)、続いて建設委員会(儀賀裕理、佐藤周一委員長)で骨子並びに、詳細を詰めて頂いた。積極的に参加いただいた各位に心より御礼申し上げたい。何よりも心強かったのは、田代洋志設計士が熱意と豊富な専門的技術力を駆使して任に当たって頂いたことであり、深く感謝申し上げたい。

② 公益財団法人化

一橋基督教青年会は、2010年に一般財団法人化を実現したが、これはあくまで公益財団法人化への第一歩であった。公益財団法人の認可取得は、2016年9月1日であるからそれまでに長い時間とロードを要したことになる。私としては、公益法人協会の紹介ぐらいしかできず、殆どは齋藤理事長の孤軍奮闘の成果というしかない。会として心から感謝を申し上げたい。考えてみれば、従前の公益法人制度は、天下りと脱税の温床と言われる面が強く、これを根本的に改革する動きが背景にあったということであろう。

公益財団法人になることにより、固定資産税の減免、公益事業と収益事業との損益通算、寄付金に対する所得税、地方税の減免等の優遇

措置を得られるが、これらはあくまでも公益法人の目的と規則に合致していることが前提であり、今後は遵法精神を大切に会の運営を行なっていくことが基本であることは言うまでもない。

(3) 今後の活動方針への期待

今回のプロジェクトについては、全般的に成功したと評価できるが、反省すべき点もある。これらは、いずれ総括して今後の活動に活かしてほしい。最後に、今回のプロジェクトを通じて感じた私の一橋基督教青年会の活動に対する期待を述べたい。

① 会の歴史と伝統を学び、その精神を継承してほしい。

その内容は一言でいえば、キリスト教への求道精神と共同生活によって得られる友情と他に対する思いやりの精神ではないかと考える。

② 共同生活の場としての一橋寮から受けた精神的、経済的恩恵に対する感謝の念を持ち続けてほしい。

これが会費納入や寄付応募に通じると感じるからである。

「小さき愛の館」

YMCA 一橋寮と瀧浦満氏のこと

高橋 眞司(1964:昭 39 経)

1 「小さき愛の館」YMCA 一橋寮のこと

わたしが大学に入学したのは半世紀以上も前、歴史的な 1960 年安保闘争の年であった。寮生募集の知らせをみて、面接日に、国立駅から YMCA 寮への道を歩きながら、わたしは不思議な感覚にとらわれた。ここは、一度ならず母と来たことがあるという、いわゆる既視、「デジャ・ヴュ」(déjà vu)の感覚であった。

旧「満州国」政府経済部に勤めていた父(城取文男)は、終戦の翌年、1946 年 9 月、ようやく抑留を解かれて葫蘆島(ころとう)から佐世保港に引揚げ、郷里の信州・伊那に立ち寄ったあと、すぐ東京に出て首相直轄の経済安定本部に職を得て、為替レートを 1 ドル=360 円に設定する仕事などに携わった、と聞いた。一家は立川のひと駅さきにある日野の、粗末な二階建ての長屋に仮住まいをしていた。敗戦前後の混乱のなかで、五人の幼い子どもを連れて中国大陆から日本へ帰国するための逃避行には、平和の時代を生きてきた世代には想像もつかない恐ろしい体験と尋常ならざる忍耐と労苦があったであろう。そして底辺の民衆、下層の生活者、サバルタン(subalterns)が生きのびるためには、戦争の勝ち負けをこえ、国境をこえた善意と親切もまた数限りなくあったものと思われる。

敗戦と引揚げ、その後の混沌と貧窮のなかで、母は実の父親(わたしの祖父)と生き別れになっていただけでなく、乳飲み子(わたしの弟)を亡くしてもいた。父親の安否を気づかっていた母は、ようやく探しあてた知人から、生き別れの父親

がかの地で亡くなっていたことを知らされた。敗戦と引揚げの二重の苦難、父と子を同時に失うという喪失の悲しみのなかで、母は魂のよりどころを求めている。そうしたなかで、キリストの福音に出逢いきっかけとなったのは、知人の紹介でやってきた武蔵野のおもかげを残した緑の木立のなかで開かれていたキリスト教の礼拝であった。

四歳か五歳のわたしは、母と父に連れられて、日野からおさない兄弟姉妹とともにここに何度かつれて来られたのであった。大学生となったわたしは福岡から上京して、国立のみどりの並木道を歩いて、YMCA 一橋寮の前に立ち、玄関のなかに入ったとき、わたしの既視感覚は、それが仮想・架空のものでなく、現実にあったものであることがハッキリした。

最初の夏休みに帰省して、母にそのことを告げると、母はその奇遇に目を輝かせて驚いていた。そして、神の妙なる計らいに心からの安堵を覚えたようであった。

先年亡くなった母は、こうして国立教会発祥の地である「小さき愛の館」(Parva Villa Amoris)でキリストの福音に出会ったのであった。やがて子どもたち、そして公務にたずさわる多忙な夫をも信仰に導き、喜びをもって神とひとに仕え、家庭を開放し長年にわたって「もより会」を開いて、多くの隣人をキリスト教にみちびいて、愛と信仰に満ちあふれた人生を歩むことができた。

そのことを今、わたしは深い感動と感謝の思いをこめて、ここに書き記すのである。

2 瀧浦氏とバルト「ローマ書」のこと

YMCA 一橋寮に入寮したとき、瀧浦氏はわたしの一年先輩であった。かれは二年留年して、前後六年 YMCA 寮にとどまった。他方、わたしは学部で五年、大学院修士課程で二年、計七年のうち六年間を寮でお世話になった。だから、瀧浦氏とは幸運にも五年間を YMCA 寮で起き臥

しをともにしたのである。とくに最後の年度は、互いに学部留年生であったことも手伝って、好天に恵まれた日には、京王線の分倍河原、あるいは多摩川を越えて京王百草苑また聖蹟桜が丘のあたりまで散歩に出かけたこともあった。そうした長い散策の折には、町なかを歩けば忌中の家があり、家々の軒下近くを歩けば笑いときざめきがあり、時に諍い(いさかい)も耳にした。また、夜を徹して議論をして、朝まだき武蔵野の木々のあいだを散策したこともある。

黒い大きな瞳が印象的な瀧浦氏は、なにごとにも真剣で情熱をもってあたり、知的な、ユーモアに富んだ話術と大きな包容力によって寮生活を牽引した。商学部藻利重隆ゼミナールで経営学を学び、サッカー部、全国 YMCA 委員会に属し、フランスのストラスブールで開かれた「世界学生キリスト者連盟」(World Student Christian Federation)の世界大会に日本代表として参加した。アテネ・フランスでドイツ語を学び、日本フィルのコンサートを聴きに行くといった、多彩な趣味を持ち高尚優雅な生活をしていた。わたしにはまぶしいような存在であった。

しかし同時に、かれはわたしにとって信仰の先達であった。YMCA 寮の定例の聖書研究会で、報告の順番がまわってきたとき、瀧浦氏はわたしに一冊の聖書注解書を貸してくれた。かれがストラスブールの大会で出会ったカール・バルト教授の『ロマ書』、それは生涯ではじめて出会った難解な書物であった。だが、受験勉強を終えて大学生となったわたしには、その硬質の文体と難解であることそれ自体が魅力であった。考えながら読んで、人間は「空洞」であるという言葉に衝撃をうけた。

大学の経済学部に入學はしたものの、自分が何者であるのか、何になりたいのか、エリク・エリクソンのことばで言えば、自分のアイデンティティ(ego identity)について煩悶していたわたしにとって、バルトの、「キリストの霊」がわれわれのうちに宿る

のでなければ人間は「空洞」であると説いた一節は、文字どおり衝撃を与えた。そうして、その衝撃は、大学二年生の夏、わたくに「キリスト者として生きる」決断(受洗)をうながすまでに大きかったのである。

青春の忘れがたい六年間、それぞれに美質をもち個性豊かな青年たちと共に過ごした YMCA 一橋寮を辞去するに際して、とくに所望して瀧浦氏から贈られたふくやかな署名入りのカール・バルト『ロマ書』上下二巻(吉村善夫訳、角川書店、1952-56年)は、今も私の書庫に在る。

3 原罪と原愛

瀧浦氏が湧永製薬に入社した1970年代半ば以降、とりわけ氏が前後十七年の長きにわたってアメリカ合衆国勤務のあいだは、音信の途絶えがちな時期もあった。しかし、かれが定年退職した2005年以降、とくに「一橋大学基督教青年会会報」の編集者となってからは、青年時代とすこしも変わることはない親しい交わりが復活した。

会報の編集にあたった瀧浦氏から寄稿を求められたが、他の原稿の締切りや著書の刊行のために求めに応じることができず、そのかわり、これまでに書いたもののなかから何か適当なものがあれば、それを選んで掲載していただくこととなって『詩集緑色のまなざし』ほかを贈った。すると瀧浦氏からは、会報の編集者としての確かなコメントが寄せられた。なかでも忘れることのできないのは「詩と人生」と題する小文を贈ったときのことである。それは詩との出会い、詩作をめぐって人生を回顧した文章であった。

わたしは大学三年生、二十歳(はたち)のときに国立教会でひとりの女性に出会った。足かけ九年におよぶ青春の歳月を待ちつづけて、1970年、ふたたび国立に舞いもどって大学院博士課程在籍中に、晴れて結婚した。その婚約と

新婚の日々に、わたしは一編の詩「日々新たなるもの」を書いた。しかしながら、詩は完成せず、未完のまま長崎に赴任した。後年、死の問題をめぐってフロイトと精神分析学派の著述を精選して読み進んでいた折に、たまたまオットー・ランクの著書『心理学の彼方へ』(Otto Rank, *Beyond Psychology*, 1941, 1958)のなかに”original sin”と”original love”という対義語に出会った。これを見つけたとき、まったく思いがけず、あの未完の詩一編を完成させるインスピレーションを得た。前者”original sin”は「原罪」でいいとして、後者”original love”をどう訳すか? 「初発の愛」、「原初の愛」などと訳してみたが、しっくり来ない。ならば単純に、「原罪」と対比させて「原愛」と訳してみてもどうか? この「原愛」の一語を得て、詩は完成した。一編の詩を書いて、未完のまま長崎に赴任した青年は三十年の歳月を閲して、すでに熟年に達していた。一編の詩を書くのも生涯の事業だ、と言うゆえんである。

ところで、「詩と人生」(会報 54 号、2010 年所収)をよんで、とくに「原愛」という特異な一語に拘泥して、あるいは何がしかの感銘を受けたと筆者に告げたのは、初出(『緑色のまなざし』草土詩社、2001 年)以来、詩集の版元を引き受けてくれた長崎の詩人・山田かんをのぞけば、瀧浦満氏ただひとりであった。「人間の原罪」でなく、すべてに先立つ「神の原愛」”original love”への深くて繊細な感応^すによって、瀧浦満氏は青年期のみならず熟年期においても私にとって「信仰の先達」であったことを知るのである。

↑ 瀧浦氏は詩集『緑色のまなざし』を受け取ると、礼状を書けなくなってしまった理由をメールで次のように明かしている。『『詩と人生』の中の“原愛”という訳語に遭遇して私は気絶し、今日に至るまであたかも『魔笛』のパパゲーノのようにものが言えなくなって、従って、貴兄にお礼状が書けなくなったのです。いま、少しずつ、どうしてお礼状を書こうか、その材料を蓄積しておりますから、多分

そのうちにお便り出来ると思います。』(2008 年 12 月 6 日付)

4 瀧浦氏からの贈りもの

瀧浦氏とは一橋大学 YMCA 会報の編集作業を通じて、贈答歌ならぬ書籍の贈答があった。上に述べたような事情があつて、わたしが『詩集緑色のまなざし』(聖母文庫、2008 年)を贈ると、瀧浦編集長はそこから「死者の願いに耳をすます—永井隆のばあい」ほかを会報 50 号(2008 年)に掲載してくれた。そして瀧浦氏からは鎌田實『いいかげんがいい』(集英社新書、2008 年)が贈られてきた。「いいかげん」とはこのばあい「深く考えず無責任」な態度を意味するのではなく、言ってみれば湯加減や餅やさかなの焼け具合のように「好い加減」を意味する。その意味では「好い塩梅」に近いだろう。鎌田氏のいう「いいかげんがいい」とは、たとい、やまいや不自由さを持ちながらも、それを受け入れ、くよくよせず、楽観的に、他者のために働いて、なお屈託のない生き方をする。それが鎌田流の「人間関係はいい加減がいい」の提案である。

瀧浦氏がこれを私に贈ってくれた意味は、かれが長く身を置いた実業界における身の処し方に近いものがあつたからであろう。瀧浦氏はみずからの内面に神とかかわる魂の火を生涯持ちつづけながら、世俗の世界、この世に処する生き方として鎌田實氏の「いいかげんがいい」に近いところで生きてきたのでないか。だが、その処世訓の基底には、武蔵野のみどりにつつまれ、朝な夕な山鳩の鳴き声のひびく「小さき愛の館」の寮生であった青春期から七十代なかばでこの世を去るまで、一貫して、神との交わりによって赤く熱した熾火(おきび)が秘められていた、とわたしは確信している。

瀧浦氏から贈られたものは他にもある。学生時代、とりわけ未熟で、自己啓発と自我の確立

に悪戦苦闘していた私にとって、親しい音楽家はベートーヴェンのほかにはいなかった。ロマン・ロラン『ベートーヴェンの生涯』を手始めに、かれの「音楽ノート」や書簡集を読了し、ベートーヴェンの作品をすべて聞くつもりで聞いていったこともある。ただし、ロマン・ロラン渾身の力作『ベートーヴェン 偉大な創造の時期』(全3巻)を読んだのはずっと後のことであった。「フィデリオ、またの名を結婚愛」(Fidelio, oder die eheliche Liebe)と題する厳粛なオペラを作曲したベートーヴェンは、モーツァルトの歌劇「コシ・ファン・トゥッテ (Così fan tutte)」(女はみんなこうしたもの)の音楽的価値は認めても、道徳的・倫理的に容認することはできなかった。

そうしたなかで、瀧浦氏の示唆によって、カール・バルトの「モーツァルト論」を知ったことは貴重であった。モーツァルトの音楽は神の世界創造の音楽だ、というのである。それは、モーツァルトの音楽に関する神学者ならではの独特の解釈で、モーツァルトの音楽の比類のない美しさと価値にめざめさせるに十分であった。

こうして、瀧浦氏のことを思いおこすとき、「小さき愛の館」YMCA 一橋寮と瀧浦氏への感謝と敬愛の念は尽きることがない。

願わくは、瀧浦満氏のたましいが神の御もとで、永遠の平安と至福のうちに憩わんことを、と切に祈るものである。

(長崎大学生涯教育室 客員教授)
(本稿は2014年12月発行会報第62号に掲載されたものを加筆修正したものです。)

一橋 YMCA への感謝と抱負

中村正俊(1971:昭46社)

私は、昭和42年の春の入学から昭和46年の卒業にいたる4年間に亘り、一橋YMCA寮にお世話になりました。YMCA寮に入寮するまでは、私にとって、キリスト教とは、「西洋文明の象徴」としての、単なる一つの文化的要素でしかありませんでした。信仰の世界に於いて、実存的関わりをもつ宗教としてはありませんでした。

しかし、一橋YMCA寮にお世話になり、様々な人々、諸先輩、同僚、後輩の人々との出会いと愛に満ちた交わりを賜ったおかげで、キリスト教は、自分の一部となりました。キリスト教の信仰、教義、哲学、等々に触れ、それらを内在化し、それが、その後の私の人生に与えた影響は、測りしれません。「この世的、地上的価値基準」に対峙する「天上的、キリスト教的価値基準」を学び、培ったことは、当に、「コペルニクス的転回」であり、実社会を生きる上での新たな「バックボーン」を埋め込んでくれた、とも言えます。それは、当に、神の導きと豊かな恩寵でありました。神に感謝する共に、その「出会い」を与えてくれた一橋YMCAに、そして、そこに集った多くの諸兄、兄弟に深い感謝の念を抱く今日であります。

私が在寮した時期におけるYMCA活動は、当時の先輩、同期、後輩の活躍とリードにより、極めて広範・多岐に亘り、且つ、中身の濃い内容でした。熱心なクリスチャンであった江藤兄をはじめとし、齋藤兄、桜井兄、樋口兄、寮外生の儀賀兄は素晴らしい同輩でした。その外、先輩諸兄、後輩諸兄との極めて意義深い、濃厚な交わりの過程で、大きな影響を与えられ、多くのことを学び、培うことが

出来ました。

毎朝の礼拝、毎週の聖書研究会、読書会は千葉の田舎出身の農夫か野人であった私にとり、文化的ショックといえるほど啓発的でした。当時の主な活動内容は、次のような、大変豊かな内容のものであったと記憶しております。

ブルトマン読書会、ブーバー「我と汝」読書会、宮本武之助氏講演「人間の解放」、キルケゴール「死に至る病」読書会、新谷敬三郎氏講演「ドフトエフスキーとキリスト教」、八木誠一氏講演「パウロ思想の展開」、浅野順一氏講演「旧約予言者研究—ヨブ記」、大木英夫氏講演「キルケゴール、マルクス、現代」、等々。皆、「人間は如何に生きるべきか」、「社会は如何に在るべきか」等々の大きく、且つ、難解なテーマに真摯に取り組みました。一橋祭、小平祭等の学内へのアピールも積極的に展開していった時でした。寮の修養会、研修会には、平出亨牧師や国立教会の穴戸達牧師、岩本修一副牧師、一橋大学の山田欽一先生、斉藤忠利先生も参加してくだり、私達学生を指導して下さいました。寮生は、皆、己の然るべき人生を探求する「求道者」として、真剣に意見を戦わせ、議論を重ねておりました。本当に豊かな寮生活でした。

日曜には、松本寮母様や何人かの寮生と国立教会の礼拝に参加しました。そこでも、穴戸牧師、野島様、大堀様、中島先生ご夫妻、初め、多くの教会の方との交わりを持つことが出来ました。また、寮祭、総会、理事会、等々の場を通して、素晴らしい、巨星の様な大先輩の皆様との交流という恵を賜り、深い感銘を受けました。当時は、理事長が武井大助先輩から木本茂三郎先輩に移りました。田上穰治先輩、弓削達先輩、久武雅夫先輩、飯島権蔵先輩、中島省吾先輩、桜井

信行先輩、中内恒夫先輩、堀地史郎先輩、滝浦満先輩等々の諸先輩は、折りに触れ、総会や理事会、予餞会等々にこられ、学生や一橋 YMCA にたいし、慈父のような愛情をもって、導き見守って下さいました。また、私も、当時、会計理事ということで、中島省吾先輩の指導下、雨漏りのする寮の屋根や、崩れかけた軒の補修、トイレの水洗化、等々の寮改築の作業のお手伝いを致しましたが、その改築費用の募金のため、杉浦英一（城山三郎）先輩、渡辺文蔵先輩、阪田正三先輩、速水優先輩、等々の大先輩にも接触させていただくチャンスを賜ったのは、忘れたくない経験でした。このような日本の財界等々で活躍されておられた方々との触れ合いは、電話を通しての会話であっても、その方々の偉大な魂とオーラに揺り動かされる興奮と感動を覚えたものでした。そして、一橋 YMC A の偉大さに感銘したものでした。

このような、一橋 YMCA 寮での生活をエンジョイしながら、前述のような素晴らしい人々との出会いと交わりは、当然のことながら、その方々の考え方や行動を律しているキリスト教に対して、私の志向性とコミットメントを高め、深めていきました。そして、それは、その後の私の社会生活においても、私の内なる深い部分において、ひとたび点火された炭火が、燃え尽きること無く、日々新たな発火を持続させているように、所謂、「Kindling Charcoal」として、今尚、私の人生の基底の部分で、燃え続け、今も、その火力を強めております。大いなる感謝と喜びであります。

大学卒業後、一貫して、グローバルな業務分野に身をおいて仕事をしてきました。世界中の様々な人々と接触する仕事に携わって参りましたが、その過程において、一橋 YMCA で培った哲学、価値観、そして、キリスト教の

信仰、等々が、如何に決定的な要素として、Positive に働いてきたかは、計り知れません。異国の人々との交わりの中でも、共有化できるベースの価値観として、必須の貴重な財産となりました。

川崎製鉄に入社し、その後、米国ミシガン大学、オレゴン大学に学び、更に、フィリピンの実業会社勤務、米国ニューヨークへの2度に及ぶ6年間の駐在生活を経ました。業務は、JFE スチールに至る約20年間に亘る鉄鋼の輸出営業業務で、世界中の顧客、鉄鋼会社幹部、等々との折衝、交流を行ってきました。彼らとのビジネスでは、いつも、次の3つの Principle をモットーとしてきました。「1. Long-term な関係構築。2. 信頼関係をベースとする。3. Win-Win を目指す。」また、お客様には、常に、「私は、あなたの、Humble Servant です。」と言い、相手を、Respect してきました。これらのビジネス哲学は、一橋 YMCA で培ったキリスト教信仰とも相通ずるところがあります。私も、自信と信念を持って、相手にアピールする事が出来、相手の理解を得ることが出来ました。また、仕事やビジネスを越えて、生涯の友といえる人々が、世界の各地に出来、今でも、親しく交流できていることは、感謝に耐えません。

今年の年初、1月20日、ワシントンの連邦議会議事堂前で、バラク・オバマ第44代米大統領が行った就任演説に、次のような一節がありました。

「In the words of Scripture, the time has come to set aside childish things.」

（「聖書の言葉にあるように、今や、子供じみた振る舞いと決別する時が来た。」）

これは、新約聖書の「コリント人への手紙」にある一節を引用しています。オバマ大統領は、それまでのブッシュ政権に至る、「米国一

国主義」「市場原理主義」、「金融資本主義」等々を、「Childish Things」（子供じみた振る舞い）と呼び、それらと決別しなくてはならない、と訴えました。聖パウロが、コリント人への手紙」の中で、「キリスト教徒でなかった時代と決別しなくてはならない。」と訴えたように。米国も、世界も、「己の欲望、Greed に支配され、己さえ良ければよい、とする子供じみた振る舞い」と決別すべきときが来た、と訴えました。

今次の世界金融恐慌を引き起こしたものは、飽くなき利益追求を目指す市場原理主義です。その根底にあるのは、人間の持つ「Greed」、欲望、です。「自分さえ良ければ良い」、とする個々人の「Greed」が大きな流れとなって、制御不能なグローバルな恐慌に発展しました。

今、その、巨大な市場原理主義に、規制の網をかぶせ、制御しようとしています。しかし、個々人の「原罪」的な「Greed」を制御すること無しには、市場の暴走を制御することは容易なことではありません。個々人のレベルで、己の「Greed」をコントロールし、抑制することが必要なのです。それには、個々人の中に、抑制しようとする価値基準、Principle、倫理観、が必要です。フランスの著名な政治学者、ジャック・アタリ氏は預言しています。将来、21世紀の世界は、「他人の幸福を自分の幸福とみなす」、「利他社会」に向かって、大きくパラダイム・シフトして行くことになるだろう、と。そこで重要なのは、個々人の、「利他的」な倫理観、Principle の養成です。私は、その観点から、一橋YMCAの担うMissionは少なくない、と思います。

一橋YMCAは、多くの傑出した人物を輩出し、歴史的に輝かしい貢献をしてきました。21世紀における一橋YMCAは、新しい、パラダイムの転換点にあって、Globalizationの

もたらす「影」の部分、歪みや擦れの部分、を矯正してゆくような役割を担ってゆく余地は少ないと思います。Greed に支配された、「自分さえよければ良い」という「病」のもたらす、社会的問題に真摯に向き合い、対処してゆくとする社会的意志を培って行く、という大きな Mission があるように思います。

一橋 YMCA に集う、学生諸兄や諸先輩が、引き続き、新しい「地の塩、世の光」として、神の豊かな恩寵と恵と導きの中にあって、平安な毎を送られんことを、一橋YMCAに対する深い感謝の念を抱きつつ、心より祈念申し上げます。

(JFE コンテナ株式会社代表取締役副社長)

(本稿は会報第 52 号、2019 年 12 月発行に掲載されたものの再掲です。)

寮生活 1 年目のころ

寺師並夫 (1974: 昭 49 社)

確か合格発表のその日、一橋基督教青年会の入寮案内のチラシが配られた。自宅は千葉の我孫子にあったので通うことはできない。入学したら大学の寮に入れてもらおうかと思っていたが、すでにクリスチャンであった自分にとってこのチラシは大変魅力的で早速応募することにした。テーマは忘れたが原稿用紙 2 枚程度の作文を書

かされ、寮の先輩方から面接を受けた。飯島健司君、長瀬潔君と私の 3 名が入寮を許された。飯島君はロシア正教、長瀬君は日本基督教団のプロテスタント、私は日本バプテスト連盟のプロテスタントであり、同期 3 名がクリスチャンというのも珍しいことだったと思う。

4 年生には江藤直純さん、斎藤金義さん、中村正俊さん、3 年生には、加藤順さん、鈴木望さん、千保喜久夫さん、西浦道明さん、2 年生には阿久戸光晴さん、岩谷滋雄さん、市村陽典さんがおられた。お一人お一人の事を語れば紙数が足りないほど、個性豊かで、学業優秀は当然のこととして、教会での働きに尽くされている方、多彩な趣味を満喫している方、他の部活動に熱心な方々など多士済々であった。当時クリスチャンは我々同期を含めて 7 名、ノンクリスチャン 6 名という寮生の構成であった。

簡潔に当時の寮の雰囲気表現すると、まことに「自由闊達」、「上下関係なし」と言えただろう。週 1 回だったと思うが、聖書研究会がおこなわれ、チューターとして国立教会の穴戸達牧師から聖書の紐解きをしていただいた。聖書理解をめぐって議論が行われるのだが、クリスチャンである無しに関わらず自由に議論が行われていた。また、一橋 YMCA 主催の大学祭での講演会に備えて、勉強会が行われるのだが、先輩後輩関係なく議論が交わされ、聞いている 1 年生である私たちがその激論に驚き、議論の展開に追いつくのがやっということもあった。平日には朝拝が行われ、当日の当番により讃美歌を歌い、聖書を読み、そしてその聖書箇所のコメントが語られる。クリスチャンでない者にとっては当然といえる疑問が提示されることもあり、それが翌日の朝拝でのクリ

スチャンによる応答となることもあった。このコメントや応答のやり取りの面白さに加え、私にとってこの朝拝は教会以外で讃美歌を覚える良い機会となった。当時の松本寮母さんの愛唱歌「むくいを望まで」が心に刻まれたのもこの時である。

「上下関係なし」と先ほど書いたが、寮の毎朝の掃除は上級生のほうが率先垂範で行っており、お互いの名前の呼び方も「さん、君」の呼称をつけていた。このことは社会に出て自分のある意味で規範のようなものとなり、後輩を呼び捨てにしない、また上に立つ者ほど自ら厭う仕事をするものだという考えを当然のものとして仕事に取り組む姿勢となった。この規範は立派なのだが、後輩からは「気さくではない」、先輩からは「生意気だ」と思われた。

江藤さんや阿久戸さんは後年神学者・牧会者・教育者となられた筋金入りのクリスチャンであり、同期の飯島君もロシア正教の教えを語ってくれたし、長瀬君は父上から継承された敬虔なクリスチャンであった。信仰的な意味でいい影響を与えていただいた。阿久戸さんと同じ滝野川教会の棚村重行さんは後年東京神学大学の教授になられた方であるが、時々寮に阿久戸さんを訪ねてこれ、お二人の会話に同席する機会を得た。まことに知的刺激に富んだ会話がなされ、神学、西洋思想史、クラシック音楽など多岐にわたる展開に常に驚きと心躍る思いがしたものである。クラシックについては阿久戸さんと棚村さんにコンサートに連れていかれるなど手ほどきをしていただき、今日にいたるまでの大切な趣味となっている。しかし後年出会った友人の影響で「アキュフェーズ」「B&W」などのオーディオ装置の方の趣味にのめりこんだ時期もあった。

1974年に味の素に入社し、人事、食品営業、マーケティング、広報、物流、購買など事務系の仕事として幅広く経験させてもらった。人を知り、仕事を知るという意味では、最終的に人事を担当する際に大いにこの経験が役立ったと言える。

先ほども書いたように寮生活での経験は、会社での仕事の仕方や人間関係においてある意味での違和感をもって迎えられた。会社は特に事務系の仕事においては体育会的なメンタリティーが喜ばれる傾向がある。中村さんや加藤さんはそれぞれ空手部、剣道部にも所属されていたからその辺りのバランスのとり方をしっかりと会得されておられる。しかし、私の場合は寮生活の経験が染みついている。一般社員のときには様々な葛藤があったが、管理職、役員になってからは寮生活で学んだこの規範がフィットしてきたように思う。部下とのかかわり方や、関係会社、取引先とのかかわり方など、上下関係ではなく、互いの役割を認め人と仕事を尊重する。これはまさにこの寮生活で学んだことである。

今年5月、69歳で仕事からすべてリタイアした。私は千葉市にある日本基督教団土気あすみが丘教会の教会員である。そこでは教会役員を仰せつかっている。教会の財政・会計を担当し、教会堂の管理なども行っている。こまごまとした小さな仕事が多い。何組かで交替で毎週土曜日、翌日の礼拝に備えモップをもって教会堂の掃除をし、敷地の草取りをする。高齢者の多い教会だが、60台、70台の男女でそのような奉仕をしながら奉仕の終わりにはお茶をする。楽しいひ

と時である。またこの4月からはとうとう地元700世帯の自治会の副会長に選ばれてしまった。自治会の役員のなり手がいない。無償の奉仕なのに仕事が多く、自治会員の要求やクレームに苦しむという。何とか役員をやってもらえないかという、80歳台半ばの自治会長の説得に心が動いてしまった。副会長として環境整備を担当することになったのだが、公園清掃を行い、道路の雑草、ごみの不法投棄の対応など行政と連携して対処する仕事である。様々な要望が自治会員から寄せられる。雑草が茂って交通安全上危険だ、調整池のフェンスのつる草がみつともないから刈り取れ、雑木林の木が電線に架かりそうだから対応してくれなどの様々な要望である。行政に対処を依頼し、無理な場合は提起者に理解を求める。道路や公園がきれいに保たれているのは当然の事とも思っていた。実は役員やボランティアによる目に見えない働きによって美化がなされていたことを、役員になって初めて知る。今まで家内に任せきりだった自治会活動に初めて参加しているのだが、ここでも仕事の経歴など全く問われない。みんなの意見に耳を傾け、実行できるかが大事であり、その過程で明るく心地よいコミュニケーションを実践できるかがカギとなる。寮生活で得られた経験や規範は、人生の最終章になっても活きている。

旧寮と新寮に住んで

中山 泰吉 (1980:昭55社卒)

合格後下宿を探しているときチラシをもらって寮のことを知った。クリスチャンではなかったが、両親ともミッション系高校で家に聖書があり、小学生のとき福音書を読んでちょっと関心を持っていた。といっても「ふーん」とか「ほんとうかな」といった程度で、神とか宗教とかは人間の弱い心が作り出した虚構だと思っていた。かといってビッグバンから宇宙が始まったというのも荒唐無稽。全く何もないところでいきなり大爆発が起こり……。私にとって創造説もビッグバン説も信頼度は同じレベルだった。パスカルの「神在りに賭けなさい。勝てば全てを得、負けても失うものはない。」も都合よすぎ、あー一体何が真実なんだろう。

そういった葛藤を抱えていた身には聖研は興味を惹くものだった。入寮資格はクリスチャンまたはキリスト教に興味のある者だったので、こんな不信心な者でもいいのかな、と面接を受け入寮を認められた。

現寮の前の寮で木造2階建て、古びてはいるが潇洒なデザインの趣のある建物で。お風呂はあったが壊れて使えず、建て替えを控えているので修理はされていないということだった。1年生は私を含めて2人、2階のチャペルと牧師控室みたいな小部屋に共同で住むことになった。私は小部屋とチャペルにベッド1台分をカーテンで仕切ったスペースをもらい新生活が始まった。

夕食は松本寮母様が作ってくださり、火曜は聖研でカレー。チューターは宍戸先生。一度「本当に神が(宇宙を)作ったと信じているんですか」とあけすけに尋ねたが、「(私たちの読み方とは)ずいぶん違う読み方をされていますね」と軽くかわされた。「どういう意味だろう。(創世記を)文面通りに受け取るのではなく、背後にある真理を読み取るという意味かな」と思った。土曜は国立教会の清掃奉仕があったが、私は3回ぐらいしか行かず、そのうち自然消滅したように思う。

2年で1階の玄関すぐ前の部屋に移った。新入生の募集は行われなかった。城山三郎さんが訪ねて来られたことがあった。「学生時代よくここに来ていて懐かしい」というようなことをおっしゃられた。

2年の後半に西の下宿に引っ越し、いよいよ建て替えが本格化した。三井不動産(だったと思う。100周年のころはもっと自信をもって書けたのに、30年たつと記憶がこんなに曖昧になるんだと思い知らされた)の加藤先輩がずいぶん骨を折ってくださった。中島先生、他のOBの方々も見えないところで支援をしてくださっていたようだ。

完成は3年の秋ごろだったと思う。竣工検査には4年の諸遊兄と私も立ち会った。引っ越しは佐藤兄が借りてきた軽トラで2人同時に片づけた。4年生は半年ほどしかいられないわけで戻らない先輩もいたが、いつも寮にいらびたっていて寂しくはなかった。

1年から3年まで新たな寮生と富田寮母様を迎えて新寮がスタートした。3年で旧寮経験者は私だけだったので必然的に寮長になった。富田寮母様は家庭があるので片道2時間半くらいか

けて通ってこられたと記憶している。面倒な食費の計算も旧来通りに引き受けてくださり、篤い信仰のなせる業か、どんなに感謝してもしきれものではない。

クリスマス会や学園祭への参加等一通り引き継いだはずだが、はて春合宿ってどうだったっけ。あったと思うのだが、他に所属していたサークルの行事と混同しているのかもしれない自信がなくなってきた。

国立教会の求道者会に出たり、教会学校の合宿に参加させてもらったり、夏休みに帰省した時は江藤直純先輩司牧の礼拝に出席したりと、自分なりに少しは道を求めてみたが、ついに信仰には至らなかった。(教職についてから英語学習の参考にギデオンの英和対訳聖書を希望の生徒に配ろうと申し込んだ。東京に本部があつてそこから送ってくるのだらうと思っていたら、九州女学院院長から電話がかかってきて寄贈していただいた。江藤先輩のお父上だった。)

学生生活は寮抜きには語れない。なぜか夜更けにごそごと食堂に集まって、たわいもないおしゃべりに興じ、そんななかで多面的なものの見方に気づいたり、聖研では真剣に議論したり。個性あふれる面々と触れ合い、毎日が刺激的でホームシックにならないですんだ。卒業後も何度か夢に出てきた。

卒業・教職へ

一橋を出て教師というのは珍しい方だろう。私も入学当初は全くその気はなかった。2年次、有為な人材を育てて社会に送り出す。教職を目指すことに。これには高校時代の恩師の存在も大きかった。今でも足元にも及ばないが。食事の時間も

削って猛勉強し、ついに寝込んでしまった。健康管理も大切と思い知らされた。東京の伯母は「田舎では教師や公務員はいい身分だからあなたの母さんは教師になれと言ったんだろうけど・・・」と、私が母から勧められて誤った選択をしているという意味のことを言った。政治の世界を覗いてみたいと、夏休み雑用をしに熊本選出の代議士事務所に通った。その秘書氏からは、「一橋まで出て何で教師なんだ。税金の無駄遣いじゃないか」とまで言われた。反論はしなかった。ちゃんと真意を説明すればよかったのだが、「優秀な人材を育てて社会に恩返し」などとは気恥ずかしくて口に出せず、心の中でつぶやいていた。

1年に3クラス授業に行けば120人、30年だとのべ3600人。自分さえよければいい、といった利己的な人間ではない、他人のこと、社会のこと、世界のことを考えられる真の意味でのエリートを育てる力がもし私にあれば、それはそれで意味のある人生だと思う。口にするのも恥ずかしいが「一粒の麦」の心境だった。

問いかける力の育成を目指す

昔、「英語には5文型がある」と言われると「なぜ？」と頭に？が灯った。「なんで5なんだ。なぜ4や6じゃない？誰が決めた？いつ決まった？学者が何十人か集まって5にしましょうって言ったのか？」。どの参考書も文型は5つとは言いが、なぜ5なのかは書いてない。十数年前にやっと気づいた。動詞のタイプが5つなんだ。① I walk. 「～する」 ② I am a student. 「～である」 ③ I love you. 「～を・・・する」 ④ I'll give you a C.D. 「～に[]を・・・する」 ⑤ We call the dog

Pochi. 「～を[]と・・・する」。これ以外の動詞はないのだ。文型を5つに規定するのは動詞だったんだ。今頃になってと笑われそうだが、長年の疑問が解決した時はすっきりしたし、嬉しかった。

有名な「クジラの公式」は参考書では「than 以下に明白な誤りをおいて前半も同様に誤りであることを表す表現」というくらいの説明しかない。理由を説明した参考書には出合ったためしがない。

A whale is no more a fish than a horse is.
馬が魚類でないのと同様クジラも魚類ではない。

これは no をゼロと考えればうまく説明できる。
no more than \$1000 は1000ドルより0多い。
 $1000+0=1000$ 、つまりきっかり1000ドル。また比較の文では大抵後半部(than, as 以降)に前に出た語の省略があることも踏まえる必要がある。既出なので言わなくても分かるのに同じ言葉を繰り返すのはしつこいからだ。ここでは a fish が省略されている。

A whale is no more a fish than a horse is a fish. (ね、しつこいでしょ)

than 以下が基準だがここで「馬は魚である」と言っている。誰が見ても間違いだと分かる。その基準と比べて「クジラが魚である」度合いがより高いことはないよ、同じだよ、と言っている。「馬が魚である確率が0パーセントであるのと同様クジラが魚である確率は0パーセント」と言っているのだ。それで「馬が魚類でないのと同様クジラも魚類ではない」という意味になる。

第2公式はその逆。

A whale is no less a mammal than a horse is.
馬が哺乳類であるのと同様クジラも哺乳類である。

省略を補うと

A whale is no less a mammal than a horse is a mammal.

than 以下の基準部 (a horse is a mammal) で「馬は哺乳類である」と言っている。これは百パーセント間違いない。これと比べて「クジラが哺乳類である度合いがより少ないなんてことはないよ、同じだよ」と言っている。よって先のような訳になる。

以上は一例に過ぎないが、ただ覚えろと押し付けるだけの勉強では面白くなく味気ないし、単なる丸暗記ではやがて忘れてしまうだろう。きちんと理解すれば忘れても再現できる。何より分かるってことは楽しい。事象の表面だけ見ておわるのではなく、背後にある本質を見抜くことは知的好奇心を満足させてくれる。学問の始まりは「ゾウさんの鼻はなぜ長い？」ではないか。それを聞いたからといって褒められるわけでもお小遣いがもらえるわけでもない。ただ純粹に知りたい、知ることは楽しい、これがそもその始まりではないか。学ぶことは本質的に楽しいことのはず。それが入試のためとか、他の目的の手段になってしまうと楽しさが失われる。勉強は「強いて勉める」：苦しい。学問は「学んで問う」：楽しい。

生徒には学ぶことの楽しさ、考えることの楽しさ、分かることの楽しさを取り戻して欲しい。そのために折に触れて何故だろう、どうしてだろう、どういうこ

とかな、と問いかけている。やがて自ら問いを発するようになったら、多分しめたもの。問を発するということは教えられたことを鵜呑みにするのではなく、自分の頭で考えながら受け取っている証拠。「あれ、変だな」と気づいて、考えて、調べる。学力は「気付く力」、「考えると力」、「調べる力」の集合体、というのが30数年間の教職生活の結論である。

君子に三楽ありとか。3つ目の楽しみが「天下の秀才を得てこれを教育す」だ。私は君子には程遠いが母校熊本高校で15年勤め、現在私立トップの真和高校に勤務している。それ以外でも進学校勤務が多く、素晴らしい生徒たちに数多く接することができた。生徒からすると未熟な物足りない教師だっただろうが、自分にとっては満足な人生だった。この道に進んで本当によかったと心から言える。そして巡り合った全ての人に感謝。

(補)

近年コミュニケーション力に比重がかけられているが、このように論理的に緻密に考える力を養うにも英語は適していると思う。使える英語を目指すのを practical approach、論理的思考力の養成を目指すのを academic approach と私は勝手に呼んでいる。残りはそう長くはないが二兎を追っていきたい。

私の人生にとっての YMCA 一橋寮

盛岡邦夫 (1982: 昭 57 社)

私は、1979 年 3 月 (現在の 2019 年からちょうど、40 年前) の新寮完成から 1982 年 3 月までの 3 年間 YMCA 寮に暮らせていただきました。入寮動機を振り返ると、1・2 年生の時は、小平キャンパスの近くに下宿していたので、3 年に進級する際に、国立キャンパスの近くに住みたいと思い、親友が YMCA 寮の入寮募集のポスターを見つけて、一緒に応募して入寮したものでした。残念ながら、キリスト教は、知っておきたいと思う程度で、その後もそのまま、熱心な先輩方々には申し訳ない気持ちです。

私にとっての YMCA 寮は、社会の荒波に出る前に防波堤のある港の中で、人生の慣らし運転をしてくれたところだったように思います。私の出身高校は、神奈川県立湘南高校という、世間的には進学校と言われる学校で、湘南地方という同一地域で、昔でいう中流家庭の比較的同質な社会層の子弟が多く、生徒同士でお互いの考え方に戸惑うことが余りない高校時代でした。ところが大学は、全国から色々な学生が集まって、色々な考え方の友人が出来て戸惑うこともありましたが、授業やクラブでは意見の食い違いがあったとしても、その場を離ればそれで終わっていました (私の娘が、この春から青山学院大学に進学していますが、やはり、中高の友達と大学の友達とはかなり異なると話をしています)。

ところが、YMCA の新寮では、新しいハードやソフトに対して色々なルールを皆で話し合い、決

めていくことが必要でした。些細なことが多かったですが、夕食の要否をどのように、いつまでに寮母様に伝えるか、共用部分特にシャワー室の掃除の日時ややり方など、いくらでも決めることはありました (一度決めても、また、変更しなければならぬことも常に生じました)。そのような場合に、人それぞれこだわりがある部分があり (皆、真面目でしたので)、今から考えるとよくまあ、議論したと思うぐらいに、皆で集まり一つ一つ決めていきました。しかしながら、議論の場で対立することはあっても、原則、全員合意を取り付けて、決めた後は皆で協力して、そのルールを守って (そうでもない場合に再議論)、一致協力して寮生活を過ごしていたと思います。特に、議論の対立が後に残ることもなく、犬猿の仲の関係も生じなかったのは、皆のベクトルが同一方向を向いていたからなせる業かと思っています。

会社生活では、三菱商事という世間から見ると何をやっているかわからない会社の管理部門に 30 数年勤めて、営業部門から持ち込まれる案件の意見の対立は日常的に激しくありましたが、寮の時のように皆でベクトルを同じ方向に向くように誘導して、合意を原則的に取り付けて山あり谷ありの会社人生を過ごすことが出来ました。それと比べると、近隣関係や親族関係は厳しいことが多かったです。会社、特に大きな会社は、自分の意見が通らなくても、自分に降りかかることがほとんどないことが多いのですが、近隣関係や親族関係は利害関係がそのまま、個人に降りかかることが多いことと、感情が入るので、大変なことが多かったです。

したがって、新寮で喧々諤々の議論をしても、寮内で良い関係を続けられ、お互いに話をする

ことで相手を知り、自分を知ってもらえ、相手を如何に説得するか訓練の機会を与えてくれたのがYMCA 寮だったかと思っています。今の一橋大学の授業やゼミナールは、もっと進んでいるかもしれませんが、私のころの授業は、ほとんど大教室で行われたので、学生が発言し学生同士で議論して、教授がアドバイスをするような授業形式は有りませんでした。ゼミナールも野口悠紀雄先生という、当時からかなり有名な先生でしたが、余りにも有名で忙しすぎた為、ゼミナールでもあまり、議論をした覚えもありません。唯一、真剣な議論の場としてのYMCA 寮があり、社会に出る前の防波堤に囲まれた訓練の場としての港のような存在だったと思っています。

寮生で議論した中でも、一番、対立があったのは、寮の建築資金を積み立てる為の寮費アップの問題でした。私は、1981 年当時、寮会計を担当していて、寮会計の収支がほぼ均衡していたので、将来の再度の建設に備える必要性を強く、感じました。当時1 か月一人 15,000 円だった寮費を 3,000 円アップして、18,000 円として、この $3,000 \text{ 円} \times 16 \text{ 人} \times 12 \text{ か月} = 57.6 \text{ 万円}$ 、 $57.6 \text{ 万円} \times 50 \text{ 年} = 28.8 \text{ 百万円}$ を元本に複利で運用すれば、受益者負担で建築に備えることが出来ると考えました(当然、物価変動に合わせて、この 3,000 円は将来的にアップを想定)。

残念ながら、これは将来の寮生の良心を信じたのみで、ルール化もしなかった為、残念ながら、その後数年で、私たちの意思は、継続されなかったようです。当時の寮生に語り、かなり議論がありましたが、最後は皆、将来の為に納得してくれました。したがって、この趣旨での寮費アップを覚えている元寮生たちは、今回の寄付要請に対して違

和感を持ったのです。当時の学生として、後の寮生も私たちの思いを忖度してくれると勝手に思い込み、また、仕事の忙しさにかまけて、寮の運営に係らなかったため、今回の積立金不足を招き、真新しい新寮に住まわせていただいた恩義をお返しできなく、大変申し訳なく思っております。

以下は、当時の思い出です。当時の新寮のメンバーは次の通り 14 名で、今さらながら、「懐かしい」の一言です。

この中で、色々な事情により、卒業までの途中で退寮されたのが、小林英彦さん、守田 俊之さんと、また、残念ながら既に亡くなられた方が阿部 周一さん、本田 茂さんです。

在寮期間中の一番の思い出は、寮母の冨田さんの毎日の夕食、YWCAの女子寮とのクリスマス会、最初の聖書研究会の合宿かと思いたします。

大学の語学クラスの連帯感が弱かったのですが、サークル(テニス同好会)とゼミの友人とYMCA 寮の友人は、共に生涯の友人になりました。特に、YMCA では前後の学年の友人が出来て、一晩中でもああでもない、こうでもないと言語明かし、今でも一年に一度は、当時の寮母の冨田さんのお宅に集まっている仲です。それ以外でも、丸の内に勤めていた際は、昼休みに周りに勤めていたYMCAの友人には良く会いました。

特筆すべきは、当時入寮した 14 名の内、阪中 明人さんと下荒神 武さんの 2 名及び、新寮開寮後の翌年(1980 年)に入寮した安井 禎さんの 3 名がその後、医師の道に進めました。更に、安井さんと同年に入寮された伊藤 淳さんは、卒業後、味の素勤務、湘南白百合学園教

師を経て今は、カトリック教会の司祭をされています。新寮開寮直後に特に、多彩な人材がいた理由は、定かではありませんが、事実としてはこのような次第です。

キリスト教への言及がなく、申し訳ない文書となりましたが、これからも、人生の礎を築く大学時代に、クリスチャンでなくてもキリスト教に少しでも触れ

たい学生や、社会に出る前により良い経験が出来る場を求める学生に対して、YMCA 寮が存続できるように少しでも貢献できる機会を持ちたいと思っています。

入寮時の学年	名前	人柄・寮への貢献
4年生	阿部周一さん	一橋祭実行委員長で兎に角、いつも寮にいない。ご逝去されている。
	阪中明人さん	弓道部で、いつも寮にいない、サントリーに入社されるが、比較的直ぐに退職され、今は、精神科の開業医
	安丸徹さん	ボート部でほとんど1年中、合宿で、いつも寮にいない、卒業後、在米20年以上
	中山泰吉さん	寮長として、いつも寮にいる。卒業後、郷里の熊本県で、高校の先生になられる。クリスチャン
3年生	今橋隆さん	商学研究会で交友関係が広く、いつも寮にいない
	本田茂さん	ギター部でよく、ギターの練習をしていた、後に寮長。ご逝去されている。
	盛岡邦夫(私)	比較的真面目に授業とゼミの勉強をして、寮にいた
2年生	小栗真吾さん	最近亡くなられた石弘光教授のゼミで経済学をよく勉強していた、後に寮長として、よく寮にいる。クリスチャン
	小林英彦さん	ISECに属して、いつも寮にいない。後に退寮。
	高橋知史さん	津田教授のゼミで労働関係をよく勉強していたが、弓道部で、余り、寮にはいない
1年生	金子衛さん	ギター部でマージャン好き、後に寮長としてよく寮にいた
	下荒神 武さん	哲学、心理学好き、それが高じて、精神科の医師を目指して、卒業と同時に佐賀医科大学(当時)に入学して今は、開業医
	飛田光利さん	謎の人物、いつも寮にいる
	守田俊之さん	オーケストラ部、情熱家。後に退寮。

YMCA 一橋寮から世界へ！

稲永 祐樹 (1985: 昭 60 経)

YMCA 一橋寮での生活は実に楽しかった。良い先輩、後輩に恵まれた。様々なバックグラウンド、経験値を持つ面々が、生まれて初めての共同生活を営む中で、(喧嘩？もあったが)お互いへのリスペクト、自由・平等・寛容の精神を養ったことが、寮生活の一番の収穫であったと思う。週 1 回の聖研ではクリスチャンもノンクリスチャンも遠慮なく議論を戦わせた。チューターの斉藤教授、土岐教授、国立教会の宍戸牧師からは暖かいご指導を頂いた。寮母の富田さんは我々の若いお母さん。聖研の日のメニューはカレーライスと決まっていたが、お代わりはいつもサバイバルだった。国立のキャンパスで銀杏をいっぱい拾ってきて、凄い臭いの中、一緒に皮を取って焼いて食べた。たまたま歌の好きな寮生が多かったのか、食堂で飲むと良く歌った。歌謡曲が多かったが、賛美歌もあったかと思う。津田塾のクリスチャンサークルを招いてクリスマスパーティをやった際には、余興として有志で男性 4 部合唱のクワイアを結成し、「むさくるシンガーズ」と命名、その後もしばらく活動していた。その他にも、藤沢 YMCA の水泳インストラクターとしてバイトしたこと、バイク泥棒と間違えられて駅前の交番で事情聴取されたこと(他の寮生の援護射撃もあり解放された)、裏の空き家を探検したら、蚤の大群に襲われたこと、サンマルコ広場(305 号室)でのマージャン等々。思い出は尽きない。

卒業後は海外勤務のチャンスが多い旧東京銀行(現三菱 UFJ 銀行)に就職。希望通りロサンゼルス、ロンドン、ニューデリー、モスクワと通算 14 年間の海外勤務を経験することが出来た。そのベースは、在寮中に 1 年間、文部省(当時)の交換留学制度を使ってロンドン大学に留学したこと(帰国後はまた YMCA 寮に戻った)、その際に海外で働きたいという思いを一層強くしたことである。

先進国、新興国での経験を通じて気づかされたことは以下の 2 点。まず世界が如何に広いのか、いかに多様な人々が暮らしているか、ということ。これを知るだけで視野は確実に広がり、人生は豊かに感じられる。またマスコミの報道が如何に一面的であるか(「売れる事象」だけを採り上げて記事にする)、それによって我々の海外に対する見方が如何に偏ったものになり得るか、ということも、実際に海外に住んでみて初めて見えてくることである。現役の寮生諸君にも是非海外に出ることをお勧めしたいと考える所以である。そしてもう 1 つは、その多様性にも拘わらず皆同じ人間だということ。現在、世界のあちこちで紛争が起きているが、政治・宗教上のエゴイズムや偏見が発端となっているケースもある。お互いが相手を責めるだけでは紛争は解決しない、互いにリスペクトの精神を持つことで世界平和の道が開けるのではないか。その意味で(やや大袈裟ではあるが)YMCA 寮での生活は、世界に出る為の準備期間であったかも知れない。

海外勤務において何よりも重要なのが、現地スタッフとのコミュニケーションとチームワーク、そのベースとなるのが相互リスペクトだ。彼らは私を通して日本を見ている。私も彼らを通してその国を

見ている。営利目的の民間企業とはいえ、同じ目標をもって苦勞し努力するところに喜びの共有がある。この共通体験があれば、たとえ国どうしが対立していたとしても、個人レベルでの信頼感はある。こういった草の根の交流を少しずつでも広げていけば世界平和につながるのではないか。マタイ伝 5 章 9 節に「平和をつくる者は幸いです。」とある。

今年 8 月にロンドンを訪れた際に、たまたま英国中央 YMCA 本部の前を通った。

<https://www.ymca.org.uk/about/history-heritage/timeline>

赤い看板に「The World's First YMCA」とあった。1844 年にロンドンでジョージ・ウィリアムズと 11 人の仲間が始めた聖書研究会が、今や世界 120 か国における青少年のための社会貢献活動に広がっている。一橋 YMCA もその流れを汲んで 132 周年を迎えるに至った。感謝とともに、世界との繋がりについても思いを馳せたい。

寮生活とクリスチャン人生

滝澤 英一(1985:昭 60 法)

1. 当時の寮の様子(1981 年(昭和 56 年)4 月～1985 年(昭和 60 年)3 月)

私は上記の 4 年間、大学生生活全般を YMCA 一橋寮(以下 YM 寮と言います)にお世話になった。本稿作成に先立ち、当時の寮母さんであった佐藤信子姉(当時は富田信子姉でしたので以下富田さんと呼ばさせていただきます)のお宅を訪問して、お手持ちの資料を拝見させていただいた。

当時の寮費は月額 17,000 円、入寮費も同額であった。富田さんは通いで、月曜から金曜までの夕飯をご用意いただいた。アルバイト先やゼミ・部活動で夕飯を済ませる寮生もあったため、寮食は事前申告制で○×をつけており、月額 800 円から 8,000 円程度を実費として支払った記録があった。8,000 円が最大とすると一食当たり 400 円程度で、鯨飲馬食の寮生を満足せしめた当時のボリュームを思えば、よくコストを抑えていたなと改めて感謝の念を強くした。

経済状況について付け加える。学生課の掲示板には、春先を中心に奨学金の募集が張り出された。私は、給付奨学金にはことごとく応募し、いくつかお世話になった。アルバイトは家庭教師が最も実入りが多く、時給 2,000 円で週に一回 2 時間程度、受験生に対する家庭教師は 2,500 円から 3,000 円で、交通費は含んだり含まなかったり(夕食をご提供いただきこれと相殺したり)だったように思う。タウン誌に広告をお願いする

と(無料であった)、何件か寮の電話に申し込みがあった。富士見通りのサンドイッチ屋さんでアルバイトをした時は時給 500 円、年末に故郷長野県上田市のスーパーマーケットでアルバイトした時は時給 650 円、残業は 750 円であった。寮生の時間のやりくりと言及すれば、兼部も多く、アイセック、BEST、ギター、コールメルクール、演劇・軽音、テニス(部、同好会)、国際部(ESS)、野球、電算研・・・に所属する先輩・後輩諸兄がいた。私は茶道部であった。尤も、教会活動(青年会活動)で忙しくしていた寮生もいた。3 年からはゼミナールが中心になった。一橋 YMCA のサークルとしてのメインの活動は聖書研究会であった。当時のレジメを見ると、1 年目は使徒言行録、2 年ルカによる福音書、3 年ヨハネによる福音書であった。4 年はテーマ(戦争、貧困等)を決めて論議していたようで、そのようなレジメがあった。

まだ小平分校があった頃で、1・2 年生は YM 寮から JR 中央線・西武多摩湖線(国立→国分寺→一橋学園)で、或いは自転車や原付バイクで小平分校へ通った。小平祭は小平分校で催され、一橋 YMCA は文集を発行した。内容は、キリスト教に関する雑感や本の感想等。私はギャグコーナーと称した笑い話の寄稿をしていた。到底読むに堪えないもので、お恥ずかしい限りである。当時の文集は手書き・ガリ版刷り・ホチキスで留めであった。

小平分校は、Lovers' Lane と呼ばれた玉川上水側道を通れば、津田塾大学や武蔵野美術大学に徒歩でも近い距離にあった。各大学の学園祭には伺ったことはあった。しかしながら、一橋 YMCA のサークル活動としての他の大学との

交流・情報交換はなかった。わずかにクリスマス祝会に他大学(女子)学生をお招きした程度である。ただ、私が 1 年生の時だったか、中央大学の女子学生が寮生会議を訪れて、交通遺児育英募金(現あしなが育英会)への協力依頼をされたことがあった。数日後寮生有志が募金活動をお手伝いした。一橋祭では、映画の上映と、文集の作成・発行(配布)をした。

聖書研究会は、毎週開催された。曜日は寮生のアルバイトの都合などを合わせて決めた。まれにゼミとかち合う寮生は、ゼミを優先することが許された。聖研はバークレー、シュラッター、フェデリコ・バルバロらの参考書を繙きつつ、聖書の文面の正しい解釈を学習した。古文や漢文、あるいは現代の問題文・テキストを読むときのような、「正しく理解する=正解を求める」という点に目が行っていたように思う。真実を探求したい、キリストの教えは今の自分の考え・行動、社会の在り方にどのように当てはまるのか、身近に引き寄せて考える・分かち合う、といった論議は少なくとも私には欠けていた。先輩・後輩諸兄にはそうした論議があったのかも知れないが、残念ながら追いついて行けない自分であった。聖書を学ぶことの面白さ・楽しさに気付かず、誠に勿体ないことであったと思っている。

当時のレジメは、手書きのものを青焼きしたものが専らであった。青焼きとは青写真のことで、青字に白く文字等を焼き付けた複写写真で、大学に行けば原紙は無料で提供されていたように記憶する。青刷りのレジメは、出来上がったばかりは濡れていた。レジメの出来上がりが聖研の直前になってしまった寮生は、まれにコピーを使うこともあった。コピー代は自己負担であった。パソコン所

有者は無く、ワープロを持つ人が出始めた時期であった。当時の卒論も手書き。一般の文系の学生は、一太郎もマッキントッシュも知らなかったと思う。コンピュータ言語:FORTRANの講義はあったが、私は履修しなかった。

当時の記録によれば、朝拝は7:30から。黙禱・讃美歌・聖書輪読。晩禱は週に2回行われていた。但し出席率は極めて低かったように記憶する。ただ、これらへの参加を通して、讃美歌をいくつか覚えた。

2. 当時の世間の様子

1981年中国残留日本人孤児の調査が開始。赤字国債ゼロを目指した第二次臨時行政調査会(土光臨調)が発足した。1982年教科書改訂について外交問題に発展した。1983年4月15日、東京ディズニーランド開園。この年、参議院選挙に比例代表制が導入された。1984年3月「風の谷のナウシカ」公開。同年、山崎正和先生の「柔かい個人主義の誕生」が刊行された。首相は鈴木善幸の後、中曽根康弘(任期1982年-1987年)。小さな政府を目指し民営化が進む。1985年4月、私の卒業・就職と同時のタイミングでNTT、日本たばこ(JT)が発足した。世界では、1981年5月教皇ヨハネスパウロ2世が銃撃を受けた。このニュースを聞いた時、私は思わずYM寮のチャペルに跪き平和を祈った。10月エジプトのサダト大統領暗殺、1982年フォークランド紛争、ソ連軍のアフガニスタン侵攻は1979年から1989年。アフリカの飢餓が深刻になり1985年1月アメリカでWe are the Worldが収録・発売された。この一事に関しては

アメリカをrespectした。1985年3月ゴルバチョフがソ連共産党書記長に就任した。アメリカ大統領はロナルド・レーガン(任期1981年-1989年)、英国首相はマーガレット・サッチャー(任期1979年-1990年)。

前後するが、1981年4月、1982年4月、1984年11月にマザーテレサ来日。私は接点が無かった。1981年2月には教皇ヨハネスパウロ2世が来日された。私は受験(浪人)と真ん中で、ニュースも見なかった。一年先輩の伊藤兄はミサその他に参加されたのだと後に伺った。

私の就職活動時期(1984年夏)には、「2つのコクサイ化が進む」と言われていた。経済の国際化と国債の大量発行による規制緩和である。プラザ合意は卒業後の1985年9月だった。男女雇用機会均等法は1985年5月、私の卒業後の成立である。一橋大学に女子学生は少なく、在学中10%を超える年は無かった。

1980年(私の入学の前年)に当時一橋大学4年生の田中康夫氏が小説「なんとなくクリスタル」を発表した。この本は意外と大きな影響力を持ったと思う。私は、「大学生はおしゃれでなければならない」といった強迫観念のようなものを持ってしまった。奇妙な背伸びをしていたように思う。カタログに当て嵌めないといけない。当て嵌らないといけない。形から入る、外見を整えることに腐心していたように思う。(マガジンハウス社から雑誌BRUTUS創刊1980年、Tarzan1986年(popeye創刊は1976年)。日本最初のフィットネスクラブは1983年)。

3. 信仰について、宗教について

私はカトリックの幼児洗礼であったので、キリスト教のどこが他の宗教と異なるのか、高校の倫理社会の時間に勉強はしたものの、実感としては分からなかった。信者だから聖書も詳しくなければならぬ、という意識があった。そのため逆に、聖書を、自らの頭で考え心に落として深読みする、ということに慣れていなかった。自分に引き当てて考えることはなかった。

「学説」があるとき、その向こうにそれを考えた個人・社会があること、自分はどうか考えるのか、にも思いが至らなかった。公務員試験ゼミに所属していたからか、学説は「通説」を理解するためにあるものと考えていた。

高校時代の同級生が統一協会(原理研)に絡め捕られたと聞き、慶応大学の近くの原理研の建物まで会いに行ったことがある。統一協会の皆さんは大変に優しく、親切であった。一橋(小平)の近くにもあるというので、好奇心から訪問し、教義について教えてもらった。7～8回目に「洗礼者ヨハネは失敗した」と教えられた。「これは私の宗教とは明らかに異なる」と直観し、以降はシャットアウトした。

1984年は、のちにオウム真理教となるヨーガ教室「オウムの会」が始まった年である。幸いにもそうしたニュースに触れる機会は全く無かった。また、そうしたニーズも全く感じなかった。エリートと呼ばれる人達が犯罪に手を染めた事件である。彼らは正解を求めたかった、正解したら褒められたかった。正解・正しさを求める中で、歪曲された「神への絶対愛」を教え込まれ、信じ込み、誤った行動につながったように思う。

統一教会にせよオウム真理教にせよ、当時(もしかすれば今も)少なからざる若い人が宗教を渴望していると思う。彼らに対して、犯罪に走る前にキリストの福音を働きかけることはできなかったか、キリスト教の良さを伝える責任がなかったか、その責務を怠ったのではなかったか、と振り返っている。

寮外への情報発信としては、アカデミックさ、先達の「悩み・思索」への同機、古典への回帰という路線を採り、どっぷりと浸かり深めてゆく方が恰好良かったのではないかと振り返っている。「親しみ易さ」という路線、それは必要なのだろうし、キリスト教がひたすらに優しさを求められる場面もある。しかしながら、その前に、発揮すべきアイデンティティがあり、その確立をすべきだったと振り返る。

YMCA 一橋寮の思い出

佐藤 公彦 (1986: 昭 61 社)

私が最初に YMCA 一橋寮を知ったきっかけは、既に国立の北口の下宿していた法学部 4 年に在学中の兄から「中和寮よりきれいな寮があるぞ」と教えてもらったことでした。私は福岡県の

西南学院高校の出身でクリスチャンではありませんが、高校の授業でも聖書の時間があり、また、週に1回は校内チャペルで礼拝や讃美歌を歌う機会もあったため、なんとなく自然な流れで入寮させて頂きました。

YMCA 一橋寮とは、どんな寮かと問われた場合、「1年生から4年生までの4×4=16人というメンバーが入れ替わりながら4年間で延べ28人と寝食を共にし、聖書研究会や寮祭、そして一橋祭という行事を通して知らず知らずのうちにその伝統をつなぎ、卒業後何年か経って突然顔を合わせても兄弟に会ったように振舞える、そんな寮である」これが私の勝手な定義です。もちろん、行事を通してというより寝食を共にして(特に食堂や居酒屋で飲み明かして)つないできた伝統の方が多いかもしれません。

さて、一橋祭で特に覚えているのは兼松講堂でパジャマを着て「ひよっこりひょうたん島」をコーラスで歌ったこと、「ブラザーサン・シスタームーン」を教室で上映したことです。パジャマを着ていましたが歌の練習は結構真剣に行い、好評(?)を博したように思います。

「ブラザーサン・シスタームーン」はご存じの方も多いと思いますが、アッシジの聖フランチェスコの若き日の物語です。この映画の圧巻は、最後に着の身着のままの粗末な恰好で、ローマ教皇に謁見し、フランチェスコが自分の信仰への考えを堂々と教皇の前で述べるところです。周りの取り巻きが非難がましい目で見ると、教皇は高い椅子から降りてきて、ボロをまとい素足のフランチェスコの足元に跪き、足にキスをするシーンでした。教皇はフランチェスコの中にイエスを見た、そ

う思わせるシーンです。しかしながら、教皇は再び取り巻きに囲まれながら元の高い席に引き戻されていく。上映スタッフですから、当然何回も同じ映画を見る訳ですが、毎回感動していたように思います。私はクリスチャンではありませんが、「信仰と権威は本来別もの。しかしながら、組織が強くなるといつの間にか権威が勝ってしまい、信仰の本質が変化してしまう。それは違いますよね。」というメッセージだったように思います。信仰の世界でなくとも、そのようなことは社会に出ると、多々あり、なるべく権威に負けずに仕事をし、「本質を変化させない、ずらさない」ことを目指していますが、サラリーマンですのでたまに「忖度」が勝ってしまうことを反省しています。

信仰と権威ということでは最近読んで面白かった本に『寅さんとイエス』(米田彰男著)があります。ご存じのように寅さんは「男はつらいよ」のフーテンの寅ですが、イエスの実像を研究する著者は分析の結果、「イエスの風貌とユーモアは寅さんの世界に類似しているという意外な発見があった」というものでした。そもそもイエスと寅さんを比較するという不遜なことをしても良いのか、と思いながら読み始めましたが、著者はカトリック司祭でもあり、20世紀後半になって発見された幾つかの資料に基づいて書かれているとのこと。興味のある方はお読みいただければと思いますが、「イエスは寅さんのように愉快で面白い人物だったのではなかろうか」「イエスは寅さんに似ている、などと発言すると、一般の人々さえ、『まさか』と思うであろうし、敬虔で上品なキリスト教徒は『とんでもない』というであろう」などと書かれており、「信仰と権威は別もの」を感じさせる話でした。

最後に、現役の寮生の時には誰にも話をしていなかったように思いますが、私が入学する少し前、というか、受験の数日前に私の父が経営する会社が倒産しました。私が兄の下宿に居候し、受験の準備をしている時に父が福岡からわざわざやって来て「会社を潰してきた」というのです。多少動揺しましたが、受験生の私にはそんな事より目の前の試験の方が大事で、なんとか集中して合格することが出来ました。しかしながら、家庭の経済状態は苦しくなり、仕送りがほとんど無くなり、生活費の大半をアルバイトで稼ぐ苦学生となりました。見栄を張っていたので、なるべくそう見えないように振舞っているうち、腹は減っても能天気な性格から楽しい大学生活を送らせてもらったと思います。心苦しかったのは当時1万8千円の寮費を度々滞納し、他の寮生にご迷惑をお掛けしたことです。寛大なYMCA一橋寮があったおかげで、また、富田寮母さんのカレーをはじめ日々の美味しい食事に支えられ、食べるに困らず、何とか卒業出来ましたことをこの誌面をお借りして感謝申し上げます。有難うございました。

One Generation

大溝日出夫(1989:平1法)

私は、1989年、つまり平成元年の卒業である。今年、元号が平成から令和に代わったが、私のように会社勤めをしていると、多くの企業においては50代半ばで役職定年となり、これまでのキャリアに一区切りをつける場合が多い。したがって、私の世代にとっては、平成の30年間がそのまま社会人生活の第一ステージに重なっている。

そして、YMCA寮での生活は、平成の社会人になる直前を過ごした、昭和最後の揺りかごのような場所であり、このタイミングで会報へ寄稿する機会を得られたことは、とても感慨深いものがある。

私には、寮生活が昨日の事のように感じられるが、私の息子と娘がいま大学生であることを考えると、実際には、私は学生から見てすでに「相当昔の人」である。現在の学生達の生活と比べて、当時あきらかに違ったのが、スマホはおろか、携帯電話やPCすらなかったことだ。

寮には、チャペルに2台の電話機があり、1台は受信専用、もう一台は10円玉を入れるピンク色のダイヤル電話だった。チャペルにこもって長電話をするのは、彼女がいる証拠であり、羨望とやっかみの対象となった。聖書研究会のレジュメは、手書で作成し、紙にコピーした。テレビゲームはあったが、ディスプレイというものはなく、ブラウン

管テレビに接続。食堂のテレビは、夕方から夜の時間にかけては番組を視聴するために、昼間および深夜から明け方にかけてはゲームをするために、休む間もなく随分と酷使された。

インターネットや SNS もない時代。能動的に情報を得ようとするならば、本や雑誌を調べるか、人に直接聞くしかない。今から思えば、恐ろしく不便な世界のように感じるが、当時はそれが当たり前であった。そして、Face to Face の情報交換については、寮にいる諸兄との交流は本当にありがたい機会であった。寮母の富田さんが作ってくれるおいしい夕食を食べた後、そのまま食堂に数時間いるだけで、同学年の崔兄、櫻井兄、山田兄をはじめ、先輩、後輩達が入れ替わり次々に出入りし、ちょっとした会話から多くの事を学ぶことができた。寮にいる限りは孤独を感じることはなかった。

世の中全体は、バブル経済華やかかなりし頃であった。寮生自体には、バブリーな者はあまりいなかったが、好景気の影響で学生にも比較的割の良いアルバイトの口がたくさんあった。それゆえ、日頃、外食したり酒を飲んだり、ちょっとした旅行に行ったりするようなお金は、みんな困ることなく過ごしていたと記憶している。外車を乗りまわす一橋生もいる中、私も車が運転したくて、バイトで貯めた 12 万円で小さな中古車を買った。色を選ぶ余地もない真黄色のホンダのシティという車で、まだ月極駐車場になる前だった寮の庭にちょこんと置かせてもらっていたが、まあ微妙な感じの佇まいであった。就職の環境は大変良く、それほど苦労することなく希望の会社に入ることができた。アナログだったが、豊かな将来を予感させる自由な

雰囲気。そんな環境の中で卒業し、時代は平成となった。

ここで、私の平成時代を簡単に振り返ってみたい。私は、信託銀行に入社し、これまでのキャリアのほとんどを不動産関連の仕事をして過ごしてきた。平成の初期は、地価高騰で、消費者がマンション等の住宅を争うように買い急ぐ姿を見てきた。間もなく、バブルが崩壊し長期の経済停滞が始まった。企業がリストラで工場を閉鎖売却するのに立ち会い、長く勤めた職場を去り行く工場長の話を聞いてしんみりした。21 世紀になると海外の機関投資家が日本の不動産を買い漁るようになり、数百億円の取引にも携わった。欧米流の大胆な見方、強気の交渉、膨大な量の契約書に圧倒された。リーマンショックの不景気を経て、アベノミクス後は、再開発ラッシュで変貌する東京都心部の姿をリサーチしてきた。不動産を通して、平成の世の移り変わりを観てきた。

最近注目しているのは、ビルの中のオフィスの使われ方が、テナント企業の働き方改革を体現して大きく変わってきていることだ。従来は、上司から部下という組織のピラミッドにならってデスクの配置が決められているのが当たり前だったが、今は席の場所を決めないフリーアドレスが普及しつつある。社員の位置が流動的になることで、多くの社員との接点や交流が生まれ、新しいアイデアが生まれやすくなるのである。

YMCA 寮というリベラルな雰囲気を満喫したあと社会に出た我々の世代は、多かれ少なかれ上意下達や管理という大人社会のルール洗礼を受けてきた。そのルールは、いまでも合理的なものもあれば、企業が新しい価値を生み出してい

くためにはふさわしくないものもある。働き方改革は、それを認めて修正する動きである。

実は、私がいくつかの企業の先進的オフィスを見学した際に、思い出したのが、YMCA 寮の雰囲気なのだ。聖書研究という共通のミッションによる結びつき。尊重される個人と個性。上下関係問わず自由に発言できる雰囲気。流動的な交流と情報交換から生まれる気付きや発想。企業がこれから必要としている仕組みが、一橋 YMCA には元々備わっているように思える。YMCA 寮で過ごした学生たちは、我々の時代と違って、これからはもっとスムーズに、そしてギャップに悩むことなく、社会で活躍できるのではないか。

私より一世代新しい現役の学生諸兄方。あなた方が、創造性にあふれる素晴らしい令和の時代を切り開いて行くことを期待して止まない。

YMCA 一橋寮の思い出

鈴木 宗徳(1991:平3社)

1. 入寮した頃

私が一橋大学社会学部に入学したのは、1987年4月である。YMCA 寮に入ることにしたのは、

母の勧めがあったからである。私の母・美南子はフェリス女学院大学の教員として YMCA の指導をしており、その父(私の祖父)・高木暢哉も戦前から学生 YMCA の活動にかかわっていたのである。しかし、私の実家は、大学まで 100 分ほどの通学時間で通える距離にあった。高校を卒業してどうしても一人暮らしがしたかった私は、一橋に YMCA 寮があることを母に教え、母は喜んで入寮したらいいと私に勧めたというわけである。母は勤務先のフェリスで、寮の大先輩である弓削達先生や中島省吾先生にお世話になっており、私も入寮してからお二人にご挨拶する機会を得た。一年生の時、一橋で隅谷三喜男先生の講演会を開いたときには、お世話になっている母も国立キャンパスまで足を運んでくれた。

寮に入ってから4年間は、とても居心地がよいという思い出ばかりである。たしかに、初めての共同生活で戸惑うことも多かった。先輩に部屋のドアを叩かれ、夜中近くになってから飲みに行ったり、あるいはその日2回目の夕食を食べに行ったり、ということもあった。私が所属していた AIESEC というサークルのメンバーが他の寮生にもいたため、サークルの先輩たちが「YMCA 寮に行ったら誰かと飲みに行こう」と、ふらりとやって来ることも多かった。プライバシーはあまりなかったが、入学してすぐに寮の内外の先輩たちに可愛がってもらったのは得難いことであつたと思う。昼夜逆転の生活になることも多かったが、ほかの寮生も似たり寄ったりだったろう。両親には「近いのだから週末は帰ってきなさい」言われていたが、実際には長期休暇以外はまったく帰省しないというパターンになってしまった。バブル絶頂期ののんびりした時代のことである。

2. 聖書研究会と諸先生方

いま大学で教員をしている立場から考えると、寮で毎週おこなわれる聖書研究会は、あまり水準の高いものではなかったと思う。とは言っても、福音書や書簡を丁寧に一文一文読むという勉強の仕方は自分の性に合っていたし、チューターの先生方のコメントにハッとして考えさせられることも多かった。私が入学した頃は、アメリカ文学の故・斉藤忠利先生が顧問としてチューターを務めて下さっていた。国立教会の穴戸達牧師が来てくださることもあったが、回数は多くなかった。同期の山本信義君が、国立教会の増田琴伝道師にチューターをお願いしてくれた時期もあり、年齢があまり遠くない増田姉の説明はとくに分かりやすかったのを感じている。

斉藤先生が退職されてからは、後任として土岐健治先生が顧問に就いてくださった。西洋古典学の最先端を研究する専門家ということで、はじめのうちは寮生も戦々恐々としていたことを覚えているが、同期の豊くんたちが一緒にバイクでツーリングに行くなど、じきに皆、好奇心旺盛な土岐先生との付き合い方を会得していった。学問をすることの怖さのようなものを私が初めて感じたのは、土岐先生を通してであった。

3. 仲間たちと富田寮母さん

寮生は、ときに羽目を外すこともあったが、お互いに敬意をもってつき合う間柄だったと思う。1年生のときの4年生にあたる先輩は、大秋英彦、福島要一、岡本誠之、丹野泰樹の各氏、3年

生は大溝日出夫、崔勇、桜井進、初海秀夫、2年生は中田一朗、杉尾昭彦、久野伸一郎、阿久津聡、同学年は川浦秀之、山本信義、豊義人という面々であった。1つ下の後輩には、橋本久二夫、古畑伸一郎、平井啓三、菅野浩生のほかに、途中退寮した久保、村田の両名がいた。

当時は就職状況がとても良かったせいもあるのだろうが、誰もが立派な進路を選んで寮を巣立っていった。一橋の学生のなかでもとくに立派な人物が集まっていたのかもしれない。その一方、寮母を務めて下さっていた富田信子さんには、私を含めほぼすべての寮生が多大なご心配をおかけしていたと思う。今から考えれば、学生同士の感覚では「適当でいい」、「なんとかなる」といったものであっても、年長者から見るとそうではないということが多々あったはずである。いま自分が学生を指導する仕事に就いてみると、寮生を身近で見守って下さっていた方々がいかに忍耐強かったかが、身に染みてよく分かる。

4. 学生 YMCA の活動

2年生から3年生にかけて、私は他大学の学生 YMCA の仲間との活動にのめり込んでいった。学生 YMCA では、毎年、夏期ゼミナールというイベントを企画し、全国の YMCA の学生を集めて講演を聞いたりディスカッションをしたりというプログラムを考えるのである。どういういきさつだったかは忘れたが、その準備を、東大 YMCA の大賀英史さん、早稲田 YMCA の坂本兵部君と私の三人で取り仕切ることになった。これに加え、早稲田 Y の卒業生の古賀博さん(現・早稲田教

会牧師)が、日本 YMCA 同盟の協力主事という立場でわれわれのお目付け役を担ってくださった。いずれも私より少しばかり年長で、彼らの輪の中でとことんまで自由に議論をする機会を得たのは、とても有意義な経験であった。

主として早稲田 Y の寮である信愛学舎に入り浸って話し合うことが多かったが、大賀さんも坂本君も、それぞれの YMCA のあり方にあまり満足していないことがすぐに分かった。一人の学生として、YMCA のメンバーとして、何かを変えたいという思いをいつも抱えた二人と議論するのは刺激的であった。早稲田に行くと、信愛学舎の近くに早稲田奉仕園があり、同じ敷地内に日本 YMCA 同盟や早稲田教会が入っている。この地に足を踏み入れるだけで何か深いことを考えた気分になったことが、とても懐かしい。慶應大や京大、鳥取大の YMCA のメンバーたちと交流したことも記憶している。慶應の武田利邦先生や鳥取の齊藤皓彦先生など、熱心な指導者に出会えたのも有意義であった。

5. 大学院進学へ

社会学部の学生であった私は、3 年次から平子友長先生の社会思想のゼミに所属することにした。それ以降、とくに夏期ゼミナールが終わった 3 年次の秋からは、生活の中心が YMCA からゼミに移っていった。単位をとるために必要な最低限の勉強しかしていなかった私にとって、ゼミで優秀な先輩や同級生に出会うことで考え方が大きく変わった。YMCA の仲間ととことん議論することに喜びを感じていた私は、今度は、ゼミの仲間との議論にのめり込んだのである。いや正確に言う

と、議論ができるつもりになっていた私は、自分の勉強量ではゼミの議論についていけず、まったく太刀打ちできないことに焦りを感じたのである。そこからは、平子先生の指導にしたがってドイツ語を勉強し、ドイツ社会学の古典を学ぶという生活を始めることになった。そして卒業とともに社会学研究科修士課程に進学したのである。

こうした事情のため、寮で生活した 4 年間は最後の方に近づくにつれその印象は薄くなってゆく。寮生活は最後まで楽しかったが、大学院進学という目標を定めた頃から、ほかの友人とは別の道を歩き始めたという感覚をもったのだと思う。私にとっては、研究に取り組むことについて楽しさだけでなく焦りや苦しみを抱えていた時期であり、あのバブル期の喧騒から距離をとり、目の前のテキストに沈潜したいという気持ちが大きかったのだろう。

卒業を機に退寮してからは、修士課程と博士後期課程の 5 年間、国立近くのアパートに住むことになった。その頃までは、YMCA での生活を含めて学部生の頃をふり返るという気持ちの余裕があまり生まれなかった。博士の 6 年目に長期のドイツ留学に行くことになるが、その直前にプレッシャーから胃を悪くして最悪の体調で旅立ったことは忘れられない。学部時代も大学院時代もすべて楽しかったと胸を張って言えるが、ようやくその時期になって、自分がずっと無理をしてきたことに気づかされたのである。

YMCA 一橋寮の思い出

岡 秀樹 (2003:平 15 社)

私が YMCA 一橋寮の存在を知ったのは入学手続きで大学を訪れた際の西校舎トイレ内の募集案内でした。寮費と寮母さんの存在に惹かれたものの、「面接あり」ということから人気があって入れないかもしれないと、ひとまず不動産屋に行こうと大学生協の申し込みをしている際、下宿について話を聞いた先輩が YMCA に在寮されている生協委員の I 先輩と K 先輩でした。両先輩からそんなに競争が多いわけではない(後から知りましたがほぼ競争はない)という話を受けてそのまま面接を受け、入寮させていただきました。週一の聖書研究会では泉牧師、山本牧師にお越しいただき、3 年間福音書の勉強をさせていただきました。(4 年次留学に伴い、私は 3 年間の在寮となります。)

実家を出て初めての一人暮らしでもあり、不安がある中で山口、野澤両寮母さんや諸先輩方には大変お世話になりました、改めて感謝申し上げます。

当時寮生活から受けた影響で、今でもよく思い出すことがあります。私にとってはかけがえのない経験でした。

・海外を身近に感じることができた環境

今でこそインターネットが発達し、世界で携帯が通じる時代ではありますが、当時連絡可能手段は公衆電話かインターネットカフェのみ、それ以外は旅行本片手に出かける、という私にとって非常

に心理的ハードルが高いものでした。しかし、当時諸先輩方は夏休みにバックパックで海外旅行に行くことが多く、9 月末には寮誌へ海外からの手紙が貼られていたり、ユーモアにあふれた旅行記が書かれており、又具体的に航空券の買い方、どのように旅行すればよいのかも親切に教えていただき、2 年次に初めてタイへ訪問することができました。ホテルを予約もせず、とりあえず空港からカオサン(安宿街)行きのバスに乗り、宿価格の交渉を行なう、ぶっつけではありましたが「何とかなるからやってみたらいい」ということを学びました。この経験が 4 年次の中国留学につながり、現在の海外駐在につながっています。奇しくも現在の会社にて中国に続いてタイへ赴任しており、当時のことを懐かしく思っている次第です。

・自省を促していただいた環境

入寮時の私は(今も?)大変生意気で、色々主張していました。その際に「才兄(当時の私の呼び名)の言うことは正論かもしれないけど正解ではない」とよく言われました。最初は「正論=正しいければいいではないか」と思っていたのですが、ある時野澤寮母さんに「誤認や先入観もあるし、目に見えること、科学的に証明されていることだけが絶対的に正しいとどうして言えるのか。マリア様の処女懐胎は信じる人にとってそれが正解であり、否定するものではない。必要なのは相手の考え、心情を理解しようとする」と教えられ、自分の狭小さを恥ずかしく思いました。現在も至らぬところだらけで日々反省しておりますが。

・自治寮という環境

1 年次の時は、16 名で共同生活を行い、一応割り振られた役割を果たしていく際に、「自分は

役割(義務)を果たしたのだから他の寮生もして当然、しないのは文句を言われても罰を受けても仕方ない」と思っていた自分がいました。理事会の諸先輩方の様々なご助力、ご寄付を知らず、大変お恥ずかしい次第ですが、当時自らが知る中の「権利」と「義務」を重視していた記憶があります。しかし聖書研究会で「富んでいる者が神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通る方が、もっとやさしい」という内容を何度も読み、また山口・野澤両寮母さんや寮生・諸先輩方と接する内に「できる人がやればいい、自分ができる状況にあり、気持ちがあればやるべき。誰かに強いることではない」と思えるようになりました。ただ、現在会社においては「部下の教育は見守ることから、いかにやらせる、できる環境を作るかが上司の役割」という考え方もあり、どこを落としどころとするかが悩ましいところです。

・寮母さんのおられた環境

当時山口・野澤両寮母さんには主に夕食を作っていたく為にお越しいただいていたという認識ではありましたが、クリスマス会や学園祭等にご協力いただき、いつの時期からかは覚えておりませんが、昼食までも甘えてしまい、東京の母のように思っていました。山口寮母さんは鬼籍に入られてしまい、お会いすることは叶いませんが、野澤寮母さんにお会いできる機会を周りの寮生が作ってくれることに感謝しております。

最後になりますが、在寮時代から現在まで兄弟のような関係となった寮生と出会える機会を与えていただきました YMCA 一橋寮に感謝し、130年史へ投稿させていただきます。今後とも寮が末永く存続しますよう祈念しております。

寮を振り返って

杉山 晶彦(2006:平 18 商)

私は2002年4月に、1年間の浪人生活を経て大学に入学しましたが、入学手続きの際に、先輩が配っていた寮のチラシを見たことをきっかけとして、入寮を希望し、許可されました。私はかつて教会付属の幼稚園に通っており、小学生の頃も主に低学年の頃ではありますが教会に通っていました。その後中学生になってからは、教会からは離れていましたが、大学生になってから再びキリスト教の寮に入ることになり、不思議な気持ちでした。毎週火曜日には聖書研究会があり、チューターの先生からご指導いただき、キリスト教の理解を深め、寮生との意見を交わすこともでき、とても有意義なものでありました。聖書研究会の後には寮生会議があり、時に重苦しい雰囲気もありましたが、寮生なりに真剣に寮運営のことを考え、議論できたのも良い思い出です。寮の生活においては、おもしろい先輩やアクティブな後輩等の個性豊かなメンバーに囲まれて、没個性的な私としては日々圧倒されていました。しかし、価値観は異なるものの、それを否定せず尊重し合える仲間と生活できたのは、とても幸せなことでした。卒業して寮を出た後も、たまに寮出身者と集まることがありますが、寮の思い出話が必ず出て、とても懐かしくなります。

私は卒業して社会に出てからは、会社で長い期間、経理・財務の業務を担当していましたが、昨年からは法務・コンプライアンスの業務を担当しています。会計学や法律の勉強を学生時代にあまりやっていたため、とても後悔しております。学生時代は、単位を着実に取得することに気が向いてしまっていたため、単位が取りやすい科目を選びがちでしたが、今思えば、一橋大学にはその方面でとても有名な教授もいっしょり、もっと真面目に科目を選択すれば良かった、と思っています。さて、コンプライアンスに関してですが、最近では業界を問わず、パワーハラスメント（パワハラ）に関するニュースが多いです。昔はパワハラなど当たり前で、被害者は我慢していて表面化していなかっただけで、最近になって「それはおかしい」という考えに変わってきたというもあるかもしれません。パワハラに限らずハラスメント（嫌がらせ）は、相手を尊重しないところに原因があると言われています。そのため、「何で自分の思う通りにできないのか」、「何で自分と考えが違うのか」という考えではなく、「相手は自分と同じ考えとは限らない」ということを認めることが、ハラスメント防止につながる、ということを会社の研修等で説明しています。新約聖書には、信仰の強い百人隊長や徴税人、病人等、当時嫌われていた人たちが登場しますが、イエス様はそうした人たちを立場や考えの違いだけをもって否定することではなく、相手を尊重しており、そのことを教えています。現在担当している業務を通して、社会でもその精神を伝えていきたいと思っています。

最後に、キリスト教と私のことに触れます。前述のとおり、私は、小さい頃は教会に通っており、寮で再びキリスト教と出会いました。寮にいた頃

は、信仰を持つには至りませんでしたが、その頃の学びもあって、2009年の夏から教会に通い始め、同年冬に受洗しました。現在も教会員として、微力ながら奉仕しております。「あなたの若い日に、あなたの造り主を覚えよ」（旧約聖書・コヘレトの言葉 12 章 1 節）ということばがあります。小さいうちに、神様という絶対的な存在を知り、神様の教えを基準に、何が悪くて何が良いのかということ判断軸として持つことは、とても重要なことだと思います。私の場合は、このことばのとおり、小さい頃、そして寮生であった頃に造り主を覚え、その教えを学んだことが、現在の信仰につながったのだと思っています。そう考えると、寮の存在というのは、私の人生にとって重要な意味を持ったものでありました。余談ですが、今年の8月に教会学校の夏のキャンプで御殿場のYMCA 東山荘に行ってきました。豊かな自然の中で、子どもたちと野外プログラム等を体験して過ごしましたが、YMCA の活動に触れる良い機会でもありました。同時に、YMCA の活動の歴史や意義についても再認識させられました。YMCA 一橋寮が、YMCA の寮として、キリスト教の精神を持った人材を世の中に送り出す拠点であり続けられるよう、願っています。

My Faith in God as the Law of Fairness

張中飛 (2007: 平 19 商)

I was admitted to Hitotsubashi University in the spring of 2003 as a full time (not exchange) international student. I joined Hitotsubashi YMCA as a freshman and stayed in the YMCA Dormitory until I graduate in 2007. After 12 years of God's guidance through the Holy Spirit and the warm support from Mrs. Hasue Nozawa, Mr. Kaneyoshi Saito as well as other alumni and students at Hitotsubashi YMCA, I was baptized on Easter Day of 2015 at Dublin Baptist Church in Ohio, United States. Two weeks after my baptism, I met my wife Iris Yu and we married in October 2015.

Born and grown in a communism country where Christianity was far away from daily life, I was much more stubborn than my Dormitory alumni to accept God. 12 years after joining YMCA, I finally realized that God means the permanent existence of Law of Fairness and Rightness that rules every mind and every being of this world. Everyone who walks in the path to honor this Fairness and Rightness will eventually be rewarded. In this article I'd like to share two discoveries that

enlightened me to see God's glory is shining upon every corner of this world.

The first discovery is that the most powerful and effective way to change others' minds is to change my own mind. The Law connects all our bodies and souls together, and no one is really "cut off" or "isolated" from this world both physically or spiritually. When two minds are contacting each other, change of one's mind will, through the Law of Fairness (or God), create a force that influence the other mind. Depends on the action taken, the force created could dramatically change the other mind in a better or worse way.

When my wife Iris and I decided to start our relationship, I was informed that the US Government cannot issue me a working visa because of the working visa issue quota is full. Iris offered me support to continue living in the US. I felt really grateful for her love and belief in me and our relationship. The force this action created through God impacted me so much that it eventually drove me to propose her for marriage. Now I'm staying in the US as a student and she is the only person who works to support us. Through discussions, we quickly noticed that the last thing we want to do is to releasing negative emotion on each other because it wastes the most energy and resource. The better we change ourselves, the better we change each other. As a result, we were able to focus on better using our resource and found several promising opportunities that could

change the current difficult situation. Most importantly, our hearts are bound closely together and filled with love and trust, we feel happy to have this opportunity to struggle together and we firmly believe that our future will be better.

The Law of Fairness (or God) does not only rule the mental and spiritual world, but also the material communications among people, namely, the business/economic activities: The best way to achieve economic prosperity is through sustaining contribution to other people. Put in another way: it is a person's job to focus on sustaining contribution and God will take care of the part that decides how she should be rewarded. Many people think that economic theories are based on selfish nature of humans and submission-oriented spirit of Christianity is the opposite of the former. To my personal opinion, these two concepts are explaining the Law of Fairness in two different aspects: the economic theories focus on fairness in transactions: In general, a person will not receive less, neither more, than the value she contributes (said in another way: "There's no such thing as a free lunch."). On the other hands and the Bible tells people to focus on loving others and contributing to the greater good, then trust the Law of Fairness (or God) before seeing any reward. I was greatly inspired by the way of considering money as "thank-you letters" when I participated

the discussions about how to Christian should look at money in the YMCA Dormitory Tuesday Bible Study Session. It demonstrates the importance of creating objective value (not subjective/imaginary value) and how the Law of Fairness plays in the part of dictating the reward.

Just as activity of one person could impact that of another, an organization with culture of contributing value could keep human resource organize and operate in a very healthy way, achieving both employee satisfaction and economic efficiency at the same time. My former employer Plante Moran is a good example. With 90 years of history in growing an enterprise system that emphasizes voluntary contribution to client and colleagues as well as positive encouragement, Plante Moran terminated no employee and ranked 17 consecutive years as "100 Best Companies to Work For" in Fortune Magazine, constantly outperforming other bigger competitors such as big-four accounting firms. The firm's amazing way of organizing people also built the biggest Japanese accounting and consulting service headquartered in the US.

To me, God means the Law of Fairness and Rightness. This Law feels as real as the laws of physics but rules over not only physical time and space, but also over life and death. God is the Path to follow, the Truth to rely on and the Life nutrition to feed on. Only

through Faith and Trust in God could our lives be realized and valued.

Google 翻訳

2003 年春、一橋大学にフルタイム(交換ではない)の留学生として入学しました。私は一橋大学 YMCA に新入生として入寮し、2007 年に卒業するまで YMCA 寮で生活をしました。聖霊による 12 年間の神の導きと、野澤寮母様、齋藤金義氏、そして同窓生や寮生らの温かい一橋 YMCA のお蔭様にて、2015 年のイースターの日に、米国オハイオ州のダブリンバプテスト教会で洗礼を受けました。受洗した 2 週間後、現在の妻のアリス・ユーと出会い、2015 年 10 月に結婚しました。キリスト教が日常生活から遠く離れた共産主義の国で生まれ育った私は、神を受け入れる寮の卒業生よりもずっと頑固でした。YMCA に参加して 12 年後、私は神がこの世界のすべての心とすべての存在を支配する公正と正義の法則の永続的な存在を意味することを、ついに実感しました。この公平さと正しさを讃えるために道を歩む誰もが最終的には報われるでしょう。この一文において、世界の隅々に神の栄光が輝いていることを知るようになった 2 つの発見を共有したいと思います。

最初の発見は、他の人の心を変える最も強力で効果的な方法は、自分の心を変えることだということです。律法は私たちのすべての身体と魂を結び付けており、物理的または精神的にこの世界から実際に「分断」または「隔離」されている人はいません。2 つの心が互いに接触しているとき、一方の心の変化は、公正の法則(または神)を通して、もう一方の心に影響を与える力を作成します。実行されたアクションに応じて、作成された力は、良くも悪くも他の心を劇的に変える可能性があります。

妻アリスと私が関係を深めることを決めたとき、私は、ワーキングビザの発行期間が長かったた

め、米国政府からワーキングビザを発行できないと通告されました。アリスは私に米国での生活を続けるための支援を申し出ました。私と私たちの関係に対する彼女の愛と信念に本当に感謝しています。この行動が神を通して生み出した力は私に大きな影響を与えたので、最終的に彼女に結婚を申し込みました。現在、私は学生として米国に滞在しており、彼女は私たちをサポートするために働く唯一の人です。対話を通して、私たちが最後にしたいことは、お互いに否定的な感情を無くすことであることにすぐに気付きました。自分自身を変え場変えるほど、お互いを良くすることができます。その結果、リソースをより適切に使用することに集中することができ、現在の困難な状況を変える可能性のあるいくつかの有望な機会が見つかりました。最も重要なことは、私たちの心は密接に結びついており、愛と信頼に満ちていることです。私たちはこの機会と一緒に戦うことを嬉しく思います。公正の法則(または神)は、精神的および精神的な世界だけでなく、人々の間の物質的なコミュニケーション、すなわちビジネス/経済活動も支配します: 経済的繁栄を達成するための最良の方法は、他の人々への貢献を維持することです。別の言い方をすれば、貢献の持続に焦点を合わせるのは人の仕事であり、神は人がどのように報われるべきかを決定する部分を引き受けます。多くの人々は、経済理論は人間の利己的な性質に基づいており、キリスト教の服従志向の精神は前者の反対であると考えています。私の意見では、これらの 2 つの概念は 2 つの異なる側面で公正の法則を説明しています: 経済理論は取引の公正に焦点を当てています: 一般に、人は自分が貢献する価値よりも少ない、より多くを受け取らない方法: 「無料のランチなどはありません。」。一方、聖書は、他の人を愛し、より良い善に貢献することに集中し、報酬を得る前に公正の法則(または神)を信頼するように人々に伝えます。YMCA 寮の火曜日の聖書研究会でクリスチャン

がどのようにお金を考えるべきかという議論に参加したとき、私はお金を「ありがとうの手紙」とみなす方法に大きな影響を受けました。客観的価値（主観的/想像上の価値ではない）を作り出すことの重要性和、報酬を決定する部分で公正の法則がどのように機能するかを示しています。

ある人の活動が他の人の活動に影響を与えるのと同様に、価値を提供する文化を持つ組織は、人的資源を非常に健全な方法で組織化および運営し、従業員の満足度と経済効率の両方を達成できます。私の前の雇用主であるプランテ・モランは良い例です。Plante Moran は、クライアントや同僚への自発的な貢献と積極的な励ましを重視するエンタープライズシステムの成長に 90 年の歴史を持ち、従業員を解雇せず、フォーチュン誌上 17 年連続で「働きがいのある会社 100 社」にランクされ、四大会計事務所などを凌駕する優良会社を築いた。同社の驚くべき人材育成方法は、米国に本社を置く日本最大の会計・コンサルティングサービス会社も成功させました。私にとって、神は公正と正義の法則を意味します。この法則は物理学の法則と同じようにリアルに感じますが、物理的な時間と空間だけでなく、生と死も支配します。神は従うべき道であり、頼る真理であり、生命を養う栄養です。神への信仰と信頼によってのみ、私たちの人生は実現され、価値あるものとなります。

（本稿は 2015 年 12 月発行会報第 64 号に掲載されたものの再掲です。）

YM 寮は「広い世界」そのものであり、その先の「広い世界」の扉だった

中村翔平(2008: 平 20 法)

私は、2008 年に寮を卒業し、広告会社の電通（現在は電通デジタルに出向中）に務めております。企画担当、テレビ局担当を経て、現在デジタルマーケティングのお手伝いをしております。妻と 2 歳半の娘がおります。

「広い世界を見ろよ。あとは自分で決めろ」。

直木賞を受賞した金城一紀さんの小説、「GO」で不器用でちょっと暴力的な元ボクサーの父親が、息子である主人公に語り掛ける言葉です。この小説の映画版を観たのが高校 2 年生。当時長崎の公立高校に通っていた私は、心から東京に行きたい、広い世界を見て、自分の可能性を試したい、と思ったのでした。

私にとって YMCA 寮はその「広い世界」そのものであり、更に「広い世界」を見に行くための扉でもありました。寮を通じて出会う方々、その方々との関わりを通じて得られる体験、その一つ一つが、私の視野、可能性を拡張してくれたと思っています。

2003 年 3 月、恐る恐る寮を訪ね、入寮面接に臨んだ際は、高校時代に勝手に頭の中で描いていたいわゆる「ガリベン一橋大生」を良い意味で裏切る先輩方（特に藤田洋平さん）の風貌に戸惑いましたが、入寮後は当時寮母でらっしゃった野澤毬寿恵さんを始めとして、とても温かく迎え入れてくださり、不安なく大学生活をスタートするこ

とができました。同期は板垣信行くん、張中飛くん、成富太朗くん、南弘毅くん。毎週火曜のカレーが特に楽しみでした。

勝手に、当時 3 年生でいらっやった萩原裕輔さんを人生の師と仰ぎ、師の言葉「タフじゃなきゃ、人生を遊び尽くせない」をモットーに、部活、ゼミ、恋愛、アルバイト、ボランティアと、思いつづまにチャレンジする毎日を過ごしました。聖書研究会や寮生会議での真面目な語らい、日々の食堂でのフランクな語らい、週末にいらっやる OBの方々との語らい、そのどれもが刺激的で、新しい視点を与えられるものでした。

思い出深いのが、大学 2 年の春休みに敢行した、アメリカ西海岸一人旅。当時ロサンゼルスに駐在されていた中村研太さんのお宅にお邪魔し、同じ時期に渡米されていた山藤竜太郎さん、高市芳郎さんと「YM 同窓会 in サンタモニカ」をご一緒させていただきました。

一人旅や、野球を通じたボランティアで赴いたフィリピンやインドネシアなど、すっかり海外に目が向いてしまった僕は、アメリカ留学を決意します。図らずも他に 2 名の同期生が海外留学をすることになり、寮の皆さんには大変なご迷惑をおかけしてしまいました(特に後輩の皆さん、本当にすみませんでした)。

アメリカではフロリダ州でスポーツビジネスについて学びました。MLB や NBA のチームでインターンシップを経験したのち、日本でスポーツマーケティングに関わりたいとの思いで広告会社の電通に就職。入社から丸 11 年が経ちましたが、おかげさまで MLB 日本法人の企画担当や、オリンピックやサッカー・ワールドカップ、日米野球のテレビ

CM セールスなど多様な側面からスポーツに携わることができています。

相変わらず思い付きで行動する癖は変わっておらず、この 5 年で通訳案内士(同期の成富くんは大学時代に取得)と国会議員政策担当秘書の資格を取得。現在は、電通デジタルにて家電メーカーのデジタルマーケティングのお手伝いと、来年に迫った東京オリンピックプロジェクトに取り組む傍ら、最も心を注いでいるのが、SCHOP SCHOOL という小中学生向けのスクール事業の立ち上げです。「感性のトレーニングジム」を標榜し、Society5.0 と呼ばれる「次の社会」に必要とされる感性、好奇心、探究心を、社内外のクリエイターやスペシャリストたちと共に学ぶプログラムを提供し始めています。

共に寮生活を過ごした方々からは、「あの精神年齢の低い中村が教育分野なんて」と言われてしまいましたが、先程述べさせていただいた通り、僕にとって YMCA 寮は「広い世界」そのものであり、更に「広い世界」の扉でもありました。そんな出会いを、これからの日本を担う子供たちに提供していくことを、自分の人生の真ん中に置いていきたい、と本気で思っています。

最近では総会などにもなかなか顔を出せず、近い世代の卒寮生との部分的な交流に留まっていますが、改めて YMCA 寮との出会いを感謝し、皆様と一緒できる機会を増やしていきたいと思います。ご連絡させていただきます！また、お声がけもお待ちしております！



2019年6月 南弘毅くん一家と野澤さん宅にお邪魔しました



2019年2月 白川嶺さん壮行会で大騒ぎ

初心貫徹と聖書のことは

～箴言とヘブル書3章、4章～

東哲郎(2009:平 21 経)

ご無沙汰しております。在寮中に信仰を持った自分としては、聖書のはなしをせねばと思い、普段、助けを受けている聖句と近況を絡めてご報告します。

人は自分の心に計画を持つ。しかし、主(神)の計画だけが成る。あなたの想いを主に委ねよ。そうすれば、あなたの想いは揺るがない。

ソロモン王の「箴言(しんげん)」16章、19章のことばです。この世界では、神の謀り事(はかりごと)だけが成るのだから、自分の思い通りになどなるはずがない。主の願いがあなたの願いと重なった時だけ、あなたの計画は成るのだし、主の願いとあなたの願いがひとつになった時に、本当の自由があるのだということ… 自分は今、ゼンショーホールディングスという「外食」を主たる事業内容とする会社で働いています。職場の人たちは尊敬できる方々ですし、仕事も楽しいです。

ですが、サラリーマンを4年半以上やった今でも時々、思うのです。「自分、ほんとは元々、何がやりたかったのかな?」、「思い描いていた30才に私はなれているのかな?」

一橋大学を受験したのは、元々、学者になりたいという志があったからでした。それが入学して半年くらいした頃、思うところがあり、大学院を出てから、企業で働きたいと思うようになりました。

大学1年頃、思い描いた計画の上を今も歩いているわけですが、強い思いがないと忙しさの中で、流されて、元々、目指していた道から遠く離れてしまいそうに思えて、怖くなることがあります。

そんな時に、先のような御言葉を思い出すのです。「忙しい」とは「心」を「亡くす」と書きます。働き

出して、自分が何かを得たかのように勘違いし出すと、酒だ、女だ、金だ、権力だ…身を持ち崩すような誘惑はこの世に溢れています。そうやって、与えられたものをムダにしてきた人々が聖書には、文字通り、腐るほど出てきます(ソロモン自身もそうでした)。

もう一人で生きているわけじゃないんだから、道ゆく人々と徒党を組んで、世話を焼かれたり、焼いたりしてみるのもまた一興。だけど、目指すべき場所、志は忘れないでいたい。もし主が願われた道ならば、それはいつか開かれます。将来ばかりを夢見て、今をなおざりにすることが無きよう…「後、少しできっと道が開けるから」と焦りと思ひ込みで、決め込んで、今を無為に消費し続けることが無きよう、明日のための準備ができるよう…初心を忘れずにいたいです。

独白のような文章になりましたが、そんなこんなです。

最後に、聖書のことばをもう一箇所…

「ヘブル人への手紙 3章6節—4章11節」

キリストは御子として神の家を忠実に治められるのです。もし私たちが、確信と、希望による誇りとを、終わりでしっかりと持ち続けるならば、私たちが神の家なのです。

ですから、聖霊が言われるとおりです。

「きょう、もし御声を聞くならば、荒野での試みの日に御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない。あなたがたの父祖たちは、そこでわたしを試みて証拠を求め、四十年の間、わたしのわざを見た。だから、わたしはその時代を憤って言った。彼らは常に心が迷い、わたしの道を悟らなかった。わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息に入らせない。」(←モーセたちの『出エジプト』の話)

兄弟たち。あなたがたの中では、だれも悪い不信仰の心になって生ける神から離れる者がないように気をつけなさい。

「きょう」と言われている間に、日々互いに励まし合って、だれも罪に惑わされてかたくなにならないようにしなさい。もし最初の確信を終わりでしっかり保ちさえすれば、私たちは、キリストにあずかる者となるのです。

「きょう、もし御声を聞くならば、御怒りを引き起こしたときのように、心をかたくなにしてはならない」と言われているからです。

聞いていながら、御怒りを引き起こしたのはだれでしたか？モーセに率いられてエジプトを出た人々の【全部】ではありませんか！

神は四十年の間だれを怒っておられたのですか？罪を犯した人々、しかばねを荒野にさらした、あの人たちをではありませんか！

また、わたしの安息に入らせないと神が誓われたのは、ほかでもない、従おうとしなかった人たちのことではありませんか。それゆえ、彼らが安息に入らなかったのは、不信仰のためであったことがわかります。

こういうわけで、神の安息に入るための約束はまだ残っているのですから、あなたがたのうちのひとりでも、万が一にもこれに入れないようなことのないように、私たちは恐れる心を持つてではありせんか。

福音を説き聞かされていることは、私たちも彼らと同じなのです。ところが、その聞いたみことばも、彼らには益になりませんでした。みことばが、それを聞いた人たちに、信仰によって、結びつけられなかったからです。

信じた私たちは安息に入るのです。「わたしは、怒りをもって誓ったように、決して彼らをわたしの安息に入らせない。」と神が言われたとおりです。みわざは創世の初めから、もう終わっているのです。

(中略)ですから、私たちは、この安息に入るよう力を尽くして努め、あの不従順の例にならって落後する者が、ひとりもないようにしようではありませんか。

末筆ですが、野澤さん、氏家さん、同期3人、先輩・後輩諸氏、落ち着いたら、また会いましょう！たのしみにしています！

ありがとうございます&これからもよろしくです！

(本稿は2015年12月発行会報第64号に掲載されたものの再掲です。)

YMCA 一橋寮で得た繋がり

宮崎祐也(2014:平26社)

今回、同期の寮生より130年史寄稿の依頼を受け、多くの先輩とともに寄稿文を並べさせていただくことに僭越さを感じつつも、この場を借りて、自身にとって一橋大学基督教青年会とはどういうものであるか、YMCA 一橋寮とはどのようなものであったか、を振り返りたいと思い、依頼を受けさせていただきました。

私の学生時代を振り返ってみると、同期寮生や寮の先輩、後輩に大変恵まれた時であったように思います。YMCA 一橋寮での生活は、私にとって、地元を離れて初めての東京での生活、さらには価値観や考え方もさまざまな学生同士の共同生活であり、当時の私には、共同生活におけるルールや他の寮生への配慮が十分に出来ないうまま、自己主張ばかりが目立つことが多くありました。しかし、率直に感じたことを伝え、時には私自身の誤りや反省点を指摘してくれた同期の寮

生や、聖書研究や寮行事のみならず、海外旅行や食事会など多くの時間、寝食を共にしてくれた先輩や他の寮生など、優しさとともに、毅然とした態度を持った人たちと寮生活を送らせていただきました。たとえば、他の寮生と2人で海外旅行に行った際には、現地でのスケジュールや予算の使い方をめぐって関係が悪くなるようなことがありましたが、その際には、どちらか一方が言いたいことを我慢したり適当に調子を合わせたりするのではなく、お互いに主張や不満を正直に伝えあい、その後は良い関係を築いて一緒に時間を過ごさせてもらいました。そして、YMCA 一橋寮を卒業して今に至り、改めてこれらの経験や関係がとても得難いものであったと感じ、当時の自身の自分勝手な振る舞いに悔悟の気持ちを持つと共に、YMCA 一橋寮の寮生と過ごした時間に懐かしさを感じています。有り難いことに、卒業して数年がたつ現在においても、当時の寮生に食事等に誘っていただいたり、折に触れて連絡をくださったり、こちらから声をかけても食事、旅行のために時間を調整していただけたりと、同期寮生や先輩方に優しく迎え入れていただけており、このような、貴重な当時の寮生や YMCA 一橋寮との関係を今後大切にしていきたいと思っています。今年は、当時の寮生2名と共に新潟・富山へと1泊2日の小旅行をしましたが、現在の状況から離れ、久しぶりに学生時代に戻ったかのような気持ちで過ごさせてもらいました。

上述の通り、在学当時の私にとって、YMCA 一橋寮での生活は、温かく、かつ自律的な寮生に囲まれての生活でしたが、現在の私にとって、当時の寮生との関わりは、自身の生活に刺激を与える機会ともなっています。学生当時には、寮生

それぞれの生活があるとはいえ、互いが同じ大学に通い、同じ時間を過ごすことが多くありましたが、現在はそれぞれが、それぞれの生活環境や職場、様々な国や地域で生活しており、学生当時とは全く異なる経験や考え方の下で生活しています。そのため私にとって、当時の寮生と出会い、関わりをもつことは、異なる環境での他の寮生の努力や変化を知り、自身が現在の環境で努力したり、今後の目標を再確認したりすることのモチベーションの一つとなっています。例えば、自身のライフスタイルにあった生活のために全く異なる業種・業務へと転職したり、一つの職場で働き続け役職を得て働いていたり、結婚を経て子どもとの時間を大切にしていたりと、それぞれがより満足度の高い生活のために努力している姿を見聞きし、私自身もそのような生活に向けて努力しているように感じます。私は来年度から新たな職種・職場での勤務を始める予定ですが、寮生それぞれが置かれた場所で咲いているように、私も彼らから刺激を受け、自身の今後の生活の目標を果たせるよう努力していきます。

以上の通り、私にとって一橋大学基督教青年会、YMCA 一橋寮とは、貴重な寮生との関係を築く場であったほか、現在においても、そこで築かれた関係は自身のモチベーションを高める機会となっています。ここ数年、私は、基督教青年会、学生寮の活動共に、参加できていませんが、当時の寮生との関係や、そのような場を与えてくれた基督教青年会に感謝しつつ、今後も基督教青年会の活動に貢献できれば有り難いと考えています。

130 年史記念 聖職者座談会

～聖職の仕事を選んだ自らの人生の歩

みを語る～

座談会開催要領

日時:2019 年 8 月 23 日金曜日 午後 2 時～5 時半

場所:如水会館 5 階 会員会議室

出席者:津村俊夫(昭 41 商)、江藤直純(昭 46 社)、阿久戸光晴(昭 48 社、昭 50 法)、伊藤淳(昭 59 商)、山本信義(平 5 法)

司会・モデレーター 齋藤金義(昭 46 経、昭 48 法、当会理事長)

はじめに 司会者 齋藤金義

聖職者といえば、大袈裟で大上段に振りかぶった言い方であるが、言い換えると、ビジネスや学者という世俗社会に対して、金銭や社会的な名声は無縁ではないが第 2 義として、「キリスト者」としてキリストの教えを広め、伝道することを人生における職業の第一の目的に定めて、それを自らの人生において実践した人のことを言う。聖人君子にして罪を犯さなかったという意味ではなく、生きる糧としての職業を、キリスト教の伝道あるいは研究の道に定めたのである。当然、世俗社会に比較して、金銭的にはどうであったか。世俗社会で失敗した人よりは恵まれたかもしれないが、成功した人からすれば、それは慎ましいものであろう。しかし、だからそれが何の意味があろうか、

聖職の道を選んだ方にとっては、如何にキリストに忠実であったか、如何にキリストの御名を広めたかが、全てなのである。

当会は、ご承知のとおり、発足以来多種多様な卒業生を輩出している。学者では一橋経済学の祖ともいべき福田徳三がおり、実業界では初代如水会理事長の江口定條、戦前の三井物産社長で日米開戦に反対し、戦後国鉄総裁として名を馳せた石田礼助、また日商岩井の社長から日銀総裁となった速水優、作家の城山三郎や政治家大平正芳など著名人は多い。しかし、忘れてならないのは、まさにキリスト教青年会の名に恥ずることのない、キリスト教の伝道あるいはキリスト教の研究に従事した所謂、聖職の道を歩んだOBがいることである。一学年で3〜4名の寮生と寮外生を入れても最大5〜6名くらいの文化サークルとして、また、キャプテンズ・オブ・インダストリーの志を持ち、ビジネスを目指して一橋の門をくぐった数多の学生の中で、聖職の道を選んだ卒業生が相応にいたこと、また、現にいることを誇りに思うものである。職業として、牧師、神父あるいは神学研究に志したこと、YMCA一橋寮で過ごしたこととが直接、間接にどのような影響を与えたかは必ずしも定かではないものの、当会及びYMCA一橋寮がこれらの方々の人生の歩みの中で、相応の働きや触媒作用となったことは、想像に難くない。これまでの当会の歴史の中で、聖職の道に歩まれた方を列挙すれば、上記座談会にご出席の皆様以外の方々と、我々の知るところでは、大正10年卒業の美竹教会、砧教会の牧師で青山学院神学部教授、旧約聖書学の浅野順一、浅野牧師の後継者で美

竹教会牧師の昭和19年卒平野保、牧師大木英二、牧師(大森教会)平出亨らがいる。

130年史は、その時に発行した時代の方に読まれるにとどまらず、今後数十年にわたって、当会のYMCA一橋寮で過ごす後輩たちが、多分、一度は目を通すものである。そういう意味から、130年を記念し、現在、なおご活躍中の5名の方が一同に会して、それぞれの方のこれまでの人生の歩みを語り、今後の一橋基督教青年会の語り継いでいただくことは、聖職の道であろうと、学者の道であろうと、あるいはビジネスの道であろうと、一橋大学基督教青年会で学生時代を過ごした全ての人にとって、自らの人生を考えるうえで、大変参考になり、考えさせられることであり、また、社会的にも意義の深いものがあると信ずる。130年史を刊行するにあたり、改めてYMCA一橋寮の存在意義を考え、当会のレゾン・デートルを確認するためにも、ここに座談会を開催し、その内容を取りまとめるものである。なお、座談会の末尾に、ご出席者の略歴及びアンケートの回答を取りまとめて掲載しているので、参照されたい。

座談会は午後2時から5時半までに及んだ。当初は、テーマを定めて、それに関する意見交換ができれば、と考えたが、テーマを定める以前に、それぞれの方々の聖職への道が一様ではなく、それぞれ個性的な、ユニークな生き方であったので、結果としては、それぞれの方の聖職への道を語ることで終わってしまい、座談会がもつ意見交換の場にならなかった。このことを初めにお断りさせていただきたい。その中で、最後に日本におけるキリスト教伝道の課題でもあり、YMCA一橋寮における聖書研究会の在り方、寮におけるキリスト教伝道の在り方について、5名の聖職者

の方の一致した提言を取りまとめることができましたことは、今後の YMCA 一橋寮におけるキリスト教伝道を考えるうえで、大変意味のある収穫であったことを確信する。

1. 津村俊夫

私は昭和 41 年の商学部卒業。3 年先輩には瀧浦さん(実際は 4 年先輩)・野原さん、2 年先輩に城取(高橋)さんがおられた。同期には渡辺徹君がいて、空手部に属し、毎日、朝日に向かって合掌していたが、数年たって国立教会で洗礼を受けた。私は中学時代に洗礼を受けてクリスチャンであった。家庭は、父がノンクリスチャン、母がクリスチャンであった。

敬虔派の保守的な教派に所属していた関係もあって、入寮した時、先輩たちが大変自由な、ある意味驚きのキリスト者の「自由」をもって喫煙・飲酒をしていたことに衝撃を受けた。一橋寮では、特に、熊田長生氏や瀧浦さんから影響を受けた。熊田氏は談論風発、博学で当時ギリシャの歴史家ヘロドトスの研究をしていたし、瀧浦さんは日本 YMCA 同盟の学生活動に積極的に参画し、ストラスブルグでの大会などに出席していた。

当時の YMCA 一橋寮で、自分は賛同しないものの、キリスト教の広い世界を知ることができた。寮の聖書研究会(聖研)では、カール・バルトやブルンナーなどの著作が話題となった。読書会では、マックス・ウェーバーの『職業としての学問』などを讀んだ。一年目の文化祭では「大学とは何か」について展示会を行った。折しも大学管理法案が国会で取り上げられていた頃だと思う。二年目は、ブルトマンの非神話化を取り上げ、ド

イツから帰日したばかりの東神大の熊沢先生が講演会の講師であったことを覚えている。1 年後輩として入寮した川勝君、栗生沢君を交えた、さまざまな神学論争の場で、私は自分の保守的な福音信仰を守るべく孤軍奮闘していた。お陰で、大分鍛えられた。

毎週通っていた教会の牧師からも良きご指導と感化を受けた。二年目から、一年後輩の改革派の松谷好明君と二人で、学内で祈り会を持つことになった。それが一橋 KGK の始まりとなり、学園祭でグレシャム・メイチェンの『パウロ宗教の起源』という本の展示会をした。

大学 3 年生の頃、献身して教会の働きに奉仕したいと考えるようになった。しかし、私は多くの人の前で話しをすることが苦手であったから、牧師や伝道の直接の仕事は向かないであろうとは感じていた。神学校に進学したいという話を父にしたところ、小さな会社を経営していた父からは猛烈に反対された。「牧師、伝道者のような非生産的な仕事は大嫌いだ!」と。母はクリスチャンであったが、牧師の生活がどのようなものを理解していたので反対した。自分としてはどうしても神による「召し」を否定しきれなかった。8 年間の留学生活では、実家から一切の仕送りはなかったが、全ての必要は不思議な方法で備えられた。留学から帰国した直後、父は不治の病にかかり、病床でキリストを救い主として受け入れ、「キリストの弟子になった」と言って喜んでいて。父が洗礼を受ける日に、病状が急変し、病院に運ばれる途中、救急車の中で洗礼を受けた。神の豊かな憐れみによるというほかない。

アズベリー神学校を卒業してから、ユダヤ人系のブランダイス大学で、旧約聖書とその背景である古代オリент世界について学んだ。その後、ハーバード大学で特別研究員をしていた時、あるアメリカ文学専門の先生が、帰国後、秀村欣二教授にお会いしてはどうかと勧められた。すると関根正雄先生に会うように勧められ、関根先生からは筑波大学を紹介され、大学での仕事をすることができた。商学部出身の私には、日本で言語学関係では何のコネもなかったが、一旦道が開かれると、神が次々とドアを開いてくださるという思いがした。

私の専門分野は、旧約聖書の背景である古代カナン(シリア・パレスチナ)の、楔形アルファベット文字で書かれているウガリト文書であった。筑波大学では、ヘブル語をはじめ、アラム語・ウガリト語・アッカド語のクラスと、比較言語学、意味論、談話文法などを教えた。しかし、筑波大学という国立大学で聖書を教えるには限界があった。大学では聖書のヘブル語を言語データとして教えるのであり、聖書を聖書として教えることは難しいと感じた。博士課程の専門教育が出来る立場にあり、弟子たちも少しずつ増えて行き、研究費も十分に与えられていたが、ついに決断する時が来た。大学を辞めて神学校の専任教師になることには、いささか不安もあったが、今振り返って見るとき、必要は全て備えられた。弱き信仰にもかかわらず、神の豊かな恵みを味わう経験であった。とりわけ、教師であり、舎監として、また、一時期、教師会議長として神学生たちと生活の様々な局面で苦楽を共に出来たことは大きな喜びであった。

筑波大学を退官してから、この世的に名の通る肩書がなくなったため、日本では専門的な本は出版できなかった。しかし、研究論文は原則として毎年英語で一本は書き、欧米の学会に出すようにした。幸い家内がアメリカ人で言語学の研究者でもあるので、内助の功で助けられてきた。(家内は、三浦綾子『細川ガラシャ夫人』の英訳[2004]をした折に、日本の暦に関心を持ち、今、英文の本を執筆中)。これらの英文論文が欧米の学会の目に留まり、英米の出版社で本が出るようになり、JBL や VT という国際研究誌の編集委員や編集顧問を仰せつかるようになった。これらも予期しなかったことである。

神学校で聖書釈義を教え、諸教会で礼拝説教をする経験は、筑波時代に言語学・意味論を教えた経験とともに、相働いて『新改訳 2017』の翻訳編集に生かされたと思う。編集の責任を負わされて、徐々に気づかされたことは、日本語文法を巡る家内との英語での日常のやり取りや、さらには、灘中高時代に国語の名物教師橋本武先生に教わった日本古典の暗唱が、無意識のうちに聖書翻訳に生かされているということであった。小学校 2 年生の秋に友達の投げたダートで右眼を殆ど失明し、その後の人生において、眼を使わなければやっていけないような仕事にいつも従事することになったことも、「わたしの恵み」(2 コリ 12:9)によるのでなければ出来ないよと、神が私を教え戒めてくださる為であったと確信している。

1994 年には、規模としては小さな聖書考古学資料館を有志とともに立ち上げ、理事長に就任した。この資料館は、聖書に関連する考古学資料を、学問的にも信頼出来かつ分かり易い教育的な情報として提供することを目的としている。教

会には敷居が高くて行けないというような人たちが、ホームページを見て時々来られる。(都庁の HP『ぶんかる』に紹介されていて、キリスト教と全く関係のない人々も立ち寄られる。月・土の午後 1-6 時オープン。)たとえば、アジアで唯一の「ブラック・オベリスク」のレプリカ(3 メートルの実物大。オリジナルは大英博物館所蔵。イスラエルの王エフーがアッシリアの王シャルマネゼル 3 世に貢ぎ物を献げている姿が、文字とレリーフで描かれている)や、聖書に出てくる貨幣の、デナリとかドラクマの実物(オリジナル)があり、これらを通じて聖書の世界をより立体的に理解できるようにしている。

若き頃に学 Y 一橋寮で過ごした 3 年間は、人格形成途上にあって、少なからずの影響を私に与えてくれたと思う。感謝をもって。

2. 江藤直純

昭和 46 年に社会学部を卒業した。入学は昭和 42 年(1967 年)になるが、70 年安保闘争を控え、大学紛争はじめ大きな混乱の時代でもあった。父は、九州女学院の教師、その後院長を務め、五校(現熊本大学)YMCA 寮、花陵会の出身でもあった。私は高校時代に堅信礼を受け、一橋に合格したら YMCA 一橋寮に入寮しようと希望して入寮した。

当時の寮は、クリスチャンは自分ひとりではなく、かなりクリスチャンがいた。先輩では 4 年生の辻本さんや川勝さん、3 年生は松田さん、永嶺さんもそうであったし、1 年先輩に山本さん、同期は、入寮時は違ったが、中村君も齋藤君もその後クリスチャンになったし、1 年下の後輩では加藤君が二代目、鈴木望君がカトリック、2 年下の阿久

戸君は教団、3 年後輩には飯島健司君はギリシャ正教で、寺師君は確かバプテスト、長瀬君は教団、が入寮時からクリスチャンであった。毎週行われる聖書研究会のレジメは皆相当力が入っていたし、今から考えても相当なものがあった。寮生全てが皆求道者であったし、小平祭とか一橋祭に向けてキリスト教関係の講演会を開催していた。求道者生活の集団、人生を如何に生きるべきか、真剣に皆が考えていたと思う。自分が 100 年史に寄稿した文の中で、当時の寮生は求道者の集団であったと書いたが、今それを読み直してみても、まさにそのとおりであったと思う。

自分自身は、牧師になれる資格も資質もないと思っていたので、教師になろうと考えていた。また、周囲はクリスチャンホームであったので、牧師の道を勧めてくれる人もいて、教会での奉仕活動を通じて召命を与えられたので、迷わず神学校に進学しようと思って、牧師になる道を選んだ。自分のような牧師がいてもいいのだ、と思えたからで、希望は町の教会の牧師になることが夢であった。卒業後、ルーテル神学大学に進み、神学校を卒業し、熊本の教会で 3 年間奉仕したあと、アメリカシカゴのルーテル神学校の大学院の修士課程、博士課程を修了する機会を持たせていただいた。町の教会の牧師になりたかったが、ルーテル神学校で教えることになり、その後ルーテル学院の院長の仕事を長年携わり、牧師を育てる仕事に従事することになった。町の牧師にはなれなかったが、これもこれで尊い仕事であり、それについての後悔はない。私が何故牧師の道を志し、その後どのような歩みを行ったかについては、巻末のアンケートの回答をご参照願いたい。

寮生同期の齋藤金義からのコメント

彼は多くを語らないが、それは彼が語れば語るほど、ある意味、自慢話になるところがあるからで、それだけ彼は、筋金入りの優等生のクリスチャンで、優等生らしく道を真っすぐに歩んだ人である。凡人にありがちの迷いとか挫折を知らない、少なくとも傍からはそう見える人である。しかし、通常、優等生にありがちな鼻持ちならない異臭はない。それは彼が自分自身の欠点になりかねない自分の強さをいつも気に留めていたからで、謙虚な気持ちを持ち常にと努めており、何よりも彼の強さの秘訣は、もって生まれたタレントのほかに、人一倍の努力の人でもあったからで、僕を含めて、多くの人が彼に心服し、彼の影響力に感化されたと思う。私の寮生時代、キルケゴールやボンヘッファーなど、自分としてはあまりやりたくない、と思うテーマでも、彼のリーダーシップのもと、いやいやついていった記憶がある。しかし、それはそれで素晴らしいリーダーシップであったと、今は振り返ってそう思う。私が今日曲がりなりにも、クリスチャンの端くれとして、それになり頑張っておれるのも、寮生活を通じて奮闘努力していた江藤君に刺激され、鼓舞されたからだと思う。

3. 阿久戸光晴

私はノンクリスチャンホームの家庭に生まれました。偶像ですが先祖を含む「神」仏を尊崇する日々を送るよう教育を受けてきました。今から思えば、イエス・キリストの十字架抜きの見えざる「カミ」崇拝であったように思います。自分の罪の自覚抜きの義ですから、自己愛の生き方そのものになります。そのため幼稚園・小学校の時より毎年クラス内で衝突があり、「子分」のようになる同級生も

おれば私を激しく憎む同僚もありました。私としては幼いながらすべての人々と相和したかったにもかかわらず、そうできない自分を嫌悪していました。そんな中で小学6年生となり、両親が私に地元の私立の受験校である開成中学を受けさせるため、東大から家庭教師の先生を連れてきました。その方が、後に東京神学大学の学長に成られた近藤勝彦先生でした。先生は私に新約聖書をくんだり、主イエス・キリストの十字架の意味を説明してくださいました。もっと聖書の教えを聴き学びたいと願い、近藤先生から日本基督教団滝野川教会を紹介されました。ミッションスクールでない開成中高は日曜日にも学校行事が多く、滝野川教会への出席は飛び飛びでしたが、やがて私は主イエスの弟子になりたいという思いが募りました。しかし、阿久戸家は仏教の家であり、長男である私の先祖代々の墓守の責任を問う両親のはざまで悩みました。いつしか高2になっていた私の耳にバプテストのビリー・グラハム師来日の報が入り、クラスの仲間たちと東京の武道館の大伝道集会へ行きました。師のお話は確かマタイ福音書13章の「種まき」の比較的単純な内容でしたが、説得力があり、私は驚く同僚を後に主を受け入れる決心の証として武道館の1階へ降りて行きました。その場でのアドバイザーの先生との話し合いで、私は今通っている教団滝野川教会で受洗を申し出ることにしました。次の日曜日に受洗を申し出た私に主任牧師の大木英夫先生も教会役員会も驚いたようでしたが、受け容れられました。今度は両親の猛反対がありましたが私は無視し、1967年のクリスマスイブに洗礼を受けました。洗礼を受けてから初めは何も変わらないよう

に思いましたが、聖書通読と祈りは欠かしませんでした。

当時の東京の受験生は長野県の「学生村」に夏に1カ月くらい籠って学習する風習があり、私もその一人でした。翌年の高3の時、当地へ行って2週間くらいして浅間山に登りました。当時浅間山は噴煙もなく、頂上には囲いもなく、火口がのぞき込めたのです。私が登った時、火口近くの火煙の奥に二人のご遺体が見え隠れしました。アメリカから来られた宣教師の方々であり、雨後の浅間山の囲い近くで一人が足を滑らせ、もう一人が助けようとしてもろともに下まで落ちてしまわれた、と後で聞きました。受洗直後の私に激しい感情が起きました。「神様が生きておられるなら、いったい何をやっておられるのか！このお二人があまりにお気の毒だ。日本へ遠路はるばる伝道のため来られながら、こんな非業の死を受けるなんて」と。帰京して教会の先生方や信仰の先輩方に問いました。満足のいく答えはなかなか得られませんでしたが。しかし私は思いました。「私は今観客席にいて、舞台のドラマにあれこれ注文を付けている。しかし私も舞台に上がって演ずる者ではないか。あの方々のことは神様に委ね、私はこの疑問を私の舞台での一生をかけて神様に問い続けよう」と。私はこのことを神様に問い続けて50年が経ち、やがて献身して現在こうして教育・伝道者に成っております。今私は思います。あの方々はお二人であったと。最初に足を滑らせた方は私たち、助けようとして足を取られた方は十字架の主ではないかと。

その後も本当にいろいろなことがありましたが、すべて神様に感謝です。私は開成高校卒業後目指していた東京大学が学生紛争による安田

講堂事件のため入試中止となり、急遽社会全般を学べる一橋大学・社会学部を受験し、幸い入学を許されました。その合格発表の際、「一橋大学基督教青年会寮・寮生募集」のチラシを受け取り、直ちに入寮応募を決意しました。前述の問題意識を含め、家族を離れ未知の寮生の方々のお話を伺い、一人で祈りつつ考えてみたかったからです。

顧みて私は学生としても寮生としてもけっして模範生ではありませんでした。生意気にも、自分が無意味と判断した大学の授業には出ませんでした。しかし多くの本を読み、寮生とは良く議論していました。朝拝と聖研はほぼ皆勤し、滝野川教会での活動も積極的であったと思いますが、先輩方の寮生各位には無礼千万でありましたし、同学年や下級生に対しても、良き仲間や先輩であったとは到底言えなかったと思い、この場をお借りして謝罪します。しかし寮生の皆さんも寮母様（天国の故松本和子寮母様）も、こんな自分を笑顔で受け入れてくださり、私の問いにも真剣に応えようとしてくださいました。特に江藤直純先輩にはボンヘッファーの全集を、齋藤金義先輩には他の多くの書物やグスタフ・マーラーの交響曲などをご紹介いただきました。それらは人生の宝であり、感謝に尽くせません。

一橋大にも遅れて学生紛争の波が襲ってきて学問追求でも不完全燃焼の感があり、また召命の御声が聞こえないため天職が見つからず、法学部に学士編入して、もう2年在学することになりましたが、後進に道を譲るべく退寮しました。

いったん目指した司法試験に失敗しましたが、大学卒業後、大阪に本社を置く住友化学工業

株式会社(法務部)に入社し、日曜日は大阪の教会で礼拝を守る傍ら、教会学校(小学4年担当)でご奉仕をさせていただきましたが、そこで決定的な出会いがありました。小さい頃交通事故に遭い、動作が緩慢になったように見えた少女が、一つのことを丁寧に真心こめて取り組んでいる姿を私は見出し(少女は心への焼き付けをするために時間がかかっていたのです)多くのことを教えられたのです。私はこの少女のようにこの世界的に埋もれているように見える若人に花を開かせるため、いつの日か、より直接的に献身する道を与えられんと真剣に祈り始めました。また会社では、腎臓病の特効薬ですが、飲料を間違えると失明するクロロキン薬害訴訟を担当しました。当時の民法では企業に過失責任が立証されない以上、被害者は泣き寝入りでした。しかし当時アメリカで‘Product Liability’法理という理論が法廷で成立しつつあり、それによれば企業が無過失を立証しない限り「被害者と見られる方々」に賠償責任を負うというものです(挙証責任の転換法理)。私は、その最新のアメリカでの最高裁判決文を次々翻訳して上層部に報告していきました。結果は、少なからぬ見舞金を伴う早期和解でした。それぞれの立場はあるものの、事実の前には皆頭を下げるものであるという実例でした。また「地の塩」の働きは、人間の常識を超えて神から来ることを知る時でした。

私は会社勤務時代ではどんなことがあっても主日礼拝は休みませんでしたし、そのままでも神様に仕える日々を送ったと思います。しかしある日滝野川教会の大木牧師より、献身をして同教会と関係の深い聖学院の大学新設業務を助けてほしい旨の呼びかけがあり、それを機会に退職し

て献身をしました。会社の上司は惜しんでくださいましたが、受け入れて入れていただき、また驚くことに両親も理解してくれました。

その後、本当に数え切れぬほどの多くのドラマがありました。何とか乗り越え、東京神学大学卒業しました(専攻は人権の神学:ロジャー・ウィリアムズの「教会と国家の分離論」)。その後、聖学院アトランタ国際学校事務局長・チャブレン、エモリー大学大学院留学、聖学院大学教授・学長、学校法人聖学院理事長・院長を務めました。また、滝野川教会主任牧師、東京都荒川区の自治体活動(自治体の職務は、「市民の幸せに奉仕する」活動や当該自治体の外国人を含む少年少女への芸術・文化体験の提供)などの職務を務めておりましたが、定年問題・健康問題から身を引き、昨年4月から福岡女学院大学学長として、日夜若人・教職員に福音の種をまく日々を送っております。今私は初心に帰って、若人たちとともに御言葉を味わう喜びを共有したいと心より願っております。また福岡県や福岡市などの教育委員会への助言活動も積極的に行なっており、国籍を超えて地域の子に平和の尊さを伝える使命を果たしております。若き日に「一橋大学基督教青年会寮」の寮生であった幸いに感謝しており、寮生諸君にもその恩寵に気付いてほしいと、心から願います。

今日あまりに多くの難問が寮生諸君を取り巻いております。諸君が卒業して暫く後に日本を含め世界各地でAIとAIに指導されたロボットが、低コストの名のもとに既存の人間の職業を奪うことでしょう。また、良かれ悪しかれ日本のキリスト教世界の模範であり導き手であったアメリカの諸教会やキリスト教学校が、現政権の登場以降、そ

の役割を問わざるを得ない現実となっております。私たちは前者の課題については、人間性の意義を問い、その意味を発揮して新しい職業の誕生を期さなくてはなりません。また、後者の課題については、日本の諸教会は聖書をとおしての神からのメッセージを正しく捉えるため、聖書を良く読み込まなくてはなりません。いずれにせよ課題は山積しております。寮生諸君は現在の恵まれた環境に甘えることなく、これらの課題に応えるべく、聖書のメッセージに傾聴してほしい、と切に願います。

4. 伊藤淳

私は、イエズス会が経営する栄光学園高校の出身で、父が一橋大卒だったということもあって、自分も一橋に入学し、昭和59年に卒業しました。これまでの諸先輩のお話を伺うと、YMCA寮の生活はきわめて求道者的なイメージですが、私の頃になると雰囲気はすっかり変わってしまいました。毎晩、誰彼なくお酒を酌み交わし、テレビを観ながら「やっぱり聖子ちゃんは可愛い」とか「ちえみちゃんの方がもっといい」とかいった話題で議論が戦わされていたことを思い出します。聖書研究会は、そんなYMCA一橋寮のアイデンティティを保つために、絶対に欠かせないものでした。同期に稲永兄がいましたが、彼は絵にかいたようなクリスチャンで、YMCAにふさわしい高潔な男でした。一方の私は毎晩のように酔余放歌してはばからないようなデタラメな男でした。その格差は、「稲永兄を見ていると、『クリスチャンは立派だな、素晴らしいな、とても自分はクリスチャンにはなれないな』と思うけれど、伊藤兄を見ていると『こんな人でもクリスチャンなんだ、大したことないな、これ

なら自分もクリスチャンになれるな』と思います」などと後輩から言われてしまうほどでした。悔し紛れに、私は稲永兄の立派な振る舞いに対して、何かと難癖をつけて絡んでいましたが、それでもキリストを長子とする兄弟でしたから、彼の通うプロテスタントの教会に連れて行ってもらったり、逆に彼をカトリック教会に招いたり、相互交流のようなことをしていました。その時の経験から、私はカトリックの中ではプロテスタント的な思考回路を持つようになったと思います。

キリスト教に初めて触れたのは、栄光学園中・高に入ってからです。中学時代はキリスト教に対して反抗的な態度をとっていましたが、高校1年の時、神父の教師に「洗礼を受けたいかどうか？」と挑戦的な質問をしたら、「それは受けてみなければ分からないよ」と返されて肩の力が抜けました。その後、高3の国語の実力テストに出題された遠藤周作の『イエスの生涯』の一節を読んで感動し、洗礼を受ける決心をしました。「ユダは救われたと思う」という遠藤の言葉に、裏切り者として忌み嫌われているユダでさえ救われたとすれば、だらしない自分のような者も救われるかもしれないと思ったからです。

大学1年のクリスマスにカトリック立川教会で受洗しました。それから卒業するまで、教会に入り浸り、教会学校や中高生会のリーダーを一生懸命やっていました。単純に楽しかったからなのですが、あまりに熱心だったので、神父たちから「お前、神父にならないか？」と度々誘われました。しかし司祭になる自信はまるでありませんでしたので、いい加減な返事をして誤魔化していました。

いよいよ就職という段になって一瞬、司祭職が頭をよぎったものの、すぐに打ち消し、一般企業に就職しました。ところが、すぐにビジネスマン失格を自覚し、転職を考えるようになってしまったのです。その時に司祭職が以前よりも大きく頭に浮かびましたが、それでもまだ自信はなかったので、カトリック教会の神父に似た仕事としてカトリック学校の教師になることにしました。司祭になるほどの覚悟は不要だし、司祭でなくてもカトリック学校の教師なら神様について語るができると思ったからです。最初のうちは生徒を教会に連れて行ったりして手応えを感じていましたが、少子化の影響で生徒募集に重点が置かれるようになると、学校の宗教色を薄めるような流れになり、生徒と教会を繋ぐことが難しくなってきたところで、再び自分の居場所を見失いました。祈りながら自らを見つめ直した時、そもそも自分は司祭職をずっと意識し続けていたのだということに思い至り、年齢を考えると司祭を目指すなら今しかないと決断しました。40歳代の遅い召命でしたが、2010年の春に司祭に叙階されました。

不思議なもので、私のことを馬鹿にしていた一橋YMCAの後輩たちが、私から洗礼を受けると言い出し、川添ご夫妻には目黒教会で本当に洗礼を授けさせて頂きました。自他ともに認めるダメダメな寮生だった私が神父になり、後輩に洗礼を授けることになるなどとは当時全く予想もつきませんでした。また、勤めていた学校の元教え子たちとの関わりは、司祭になってからの方が多くなり、何人もの卒業生に洗礼を授けたり、結婚式を司式する恵みに与らせて頂きました。神様のなさることは本当に不思議です。

5. 山本信義

1987年、昭和62年、金沢大学付属高校から一橋大学法学部に入学。丁度当会100年史が出来た頃であったと記憶している。当時の理事長は木本茂三郎氏、YMCAも神田の美土代町にあった頃で、都市YMCAの経営も難しい局面にあった。新寮になって未だ間もない頃でもあり、当時の寮生には下荒神武氏や阿久津聡氏がいた。寮生でクリスチャンは少ないので、教会に行っているクリスチャンはどんな奴か、好奇心をもって見られた。私自身は、金沢教会で幼児洗礼を受けており、入寮時は既に堅信をしていた。1987年、昭和62年、日本経済はバブルの真ただ中であつた。一橋を受けたのは、文系の東京の大学に行くということで、東大ではないけれど、それに次ぐというので受験した。金沢も田舎ではあるが、街中であり、国立のほうがむしろ田舎臭いところだと思った。

当時の寮は、ある意味、暗黒時代とも言われている。新しい寮が出来て冨田さんが寮母になっていたが、私が入ってから暫くしてお辞めになり、また、当時部長で聖書研究会のチューターであつた齋藤忠利先生も退官されておられなくなった。宍戸達先生は聖書研究会の講師をお願いしてもお断りされたし、そういう中で寮母さんをどうするか、チューターをどうするか、課題があつた。自分は、国立教会の教会学校での教師をしたりしていたが、何せ数少ないクリスチャンはどういう奴か、と良い意味でも悪い意味でも注目された。聖書研究会のチューターは、阿久戸さんが東京神学大学に入学されたこともあつて、急遽引き受けて下さった。寮生のクリスチャン比率は低く、聖書研究会もバークレーの注解書などを引っ張りながら

何とか継続していたものの、寮の雰囲気は荒れていたし、自分としても優等生、見本になるようなクリスチャンを示すことも出来なかった。そういう中で、大学生活は何と通算10年に及び、寮にも都合6年ほど住まわせて頂いた。

阿久戸さんがアトランタに行き、次はどうかという時、一橋でユダヤ教を研究し、商学部の教授としてギリシャ語とかヘブライ語を教えておられた土岐健治先生が来られた。先生は大変アカデミックで、白痴集団である一橋Yの連中とは付き合いたくない、せめてギリシャ語くらい勉強なさいという厳しい態度であったが、自分としては留年しながらも、ギリシャ語の単位を取るため授業を取った。土岐健治先生は聖書研究会でも知性の犠牲はしたくないという態度であった。当時、東京神学大学を辞め紛争を起こした側でもあり、アカデミックな雰囲気であった。土岐先生からは、学問をする真剣さを教えられた。その後、一橋大学法学部大学院に行き法哲学の道进行研究することを憧れたが、結果的には学者の道は諦めた。一橋での学びと聖書の学びは教会で活用され用いられるのではないか、教会の交わりの中で聖書と学問を活かす道として、牧師の道があるかもしれない、そういう気持ちもあって、東京神学大学に進学した。

私以外に数少ないクリスチャンに、松本空也君がいた。聖書研究会には、野澤さんのご紹介で水口功牧師が来て下さることになったが、当時、信仰を前提にしていない寮生の一部が、聖書研究会ではない、ヘーゲルを読む会を始めた。そのため、聖書研究会のグループと聖書ではない哲学研究するグループの2つに分かれてやることになった。聖書研究会では居眠りする寮生が多か

ったように思う。寮母さん探しは国立教会の婦人会にあたったが適任はおられず、結局、『信徒の友』かなんかの広告を出したところ山口さんが来られ、山口さんは筋ジストロフィかの持病があって、その関係でフリー・メソジスト教会の野澤さんが山口さんを助ける形で寮母になられ、また、野澤さんのご紹介で水口先生が来られるようになった。

私自身は、2001年に東京神学大学の博士課程を修了した時点から寮の聖書研究会のチューターとなって、その後13年間チューターを務めた。ご存知のとおり、聖書研究会は2つのグループに分かれ、福音書を読むグループと書簡・旧約聖書を読むグループになった。1,2年生は福音書(最初)を学び、2,3年生は書簡・旧約聖書を読むというような形である。私は、主に旧約聖書のチューターを担当した。2014年に千葉の八千代台教会に転出してから、国立からは非常に遠方なので、聖書研究会のチューターを辞めた。

今から丁度5年前に、国立教会の当時副牧師で旧約聖書の専門の宮寄薫先生が来てくださった。昔と今の寮生がどう変化したか、昔であれば洗礼を受けていないが、クリスチャンホーム出身が結構いたが、それも少なくなり、せいぜいミッションスクール出身がいるかと思っても、そのミッションスクール出身者も少なくなっている。日本社会全体が、キリスト教に対する関心を失っている中で、寮での聖書研究会がこうして継続されてきたことは、誠に不思議なことであり、感謝すべきことである。聖書研究会は、当然、交代でレポートの報告をするという点で、自己発言の場所でもある。キリスト教の信仰、福音に触れるのだから、聖書研究会には伝道という意味もある。一橋寮で

の聖書研究会はどうあるべきか、キリストへ導くという視点も含めて、考えるべき課題であろう。聖書研究会のチューターの位置づけも十分ではない。この機会に委嘱状なり、会として節度をもってチューターの先生にも向かい合う必要がある。

6. 最後に座談会を終わるにあたって(文責:齋藤金義)

- ここまで約3時間以上にわたり、以上5名の方から、ご自身の寮生活やその後の聖職への道に進まれた経緯などがお話されましたが、最後に山本牧師から、寮での聖書研究会の在り方について、問題提起がされたことを受けて、以下、皆さんからの貴重なご意見が出されました。
- 阿久戸さんから:寮での聖書研究会は重要で、これが持続されていることは、大変意義があり、今後もこの聖書研究会の維持と発展を、チューターの先生の位置づけをより明確にする中で充実させて行くことは当然である。しかし更に、寮での朝拝もしくは夕拝をどう復活させるか、信仰を理屈のみから見のではなく、霊的なこととして位置づけるには、寮拝の復活が必須ではないか、との意見が出された。
- 津村さんから:自分の時代にはマックス・ウェーバーの「職業としての学問」はじめ寮では自主的に読書会が行われていた。所謂、古典といわれるものであるが、そういう読書会を通じて、自らの職業選択に大変影響があったと思う。こうした読書会の復活というのも、必要ではないだろうかとのご意見が出された。

- 以上の提言を受けて、理事長齋藤から、今年、YMCA 一橋ホールが完成することを受けて、週に1回、OBが交代で寮拝の責任者として、この復活に参画することを前向きに検討したい。勿論、理事会として、今後、聖書研究会のチューターには委嘱状を贈り、位置づけを明確することも当然行いたい。
- また、津村さんのご提言に関しては、寮生によるこうした古典を読む自主的な読書会の開催は期待が持てないので、やはりこれも YMC 一橋ホールを活かす形で、こうした古典、つまり自らの人生の生き方に深く関わる、ないしは深く考えさせる古典を、順次取り上げ、「古典に学ぶ」というテーマで継続的に講師を招く形で実施することを検討したい。読むべき本、課題本、古典が数多くあるなかで、出来ればこの座談に出席された方に、最低5冊、これだけは読んでおいて欲しいという古典をリストアップして頂き、それをテーマに、4年間で一巡するような形式で、一橋大学基督教青年会必須リベラル・アーツを定め、寮生・OB がともに学ぶ機会を継続して提供して行きたい。

(2019年8月23日に5名の方の座談会でのご発言の要旨を、齋藤が取りまとめ、その後、ご出席者の方々に修正補筆頂いたものです。)

(参考)ご出席者の略歴及びアンケートの回答

1. 津村俊夫

学歴： 1966.3 一橋大学商学部卒業(商学士)

1969.6 アズベリー神学大学卒業 (M.Div.)

1973.6 ブランダイス大学大学院・博士課程修了 (Ph.D.)

研究歴：1973-74 ハーバード大学・神学部・特別研究員 (Visiting Scholar)

1986-88 英国ティンデル聖書学研究所・研究員 (Research Fellow)

職歴：1974.4-現在(宗)聖書宣教会・聖書神学舎教師(旧約学)

1975.4-1990.3 筑波大学文芸言語学系。講師、助教授。

2006.4-2011.3 慶応大学文学部、非常勤講師。

学会活動： 米国聖書学会、*Journal of Biblical Literature* 編集委員 (2010-15)

国際旧約学会、*Vetus Testamentum* 編集顧問 (Advisory Committee, 2019-)

日本オリエント学会、日本旧約学会、聖書釈義研究会ほか。

その他： 聖書考古学資料館理事長。新日本聖書刊行会理事、新改訳 2017 翻訳編集委員長。

[著書・編書・訳書] (抜粋)

1. *The Ugaritic Drama of the Good Gods: A Philological Study*. Ann Arbor: University Microfilms, 1973. [Ph.D. dissertation, Brandeis University].

2. *The Earth and the Waters in Genesis 1 and 2* (Journal for the Study of the Old Testament, Supplement Series 83). Sheffield: Sheffield Academic Press, 1989.

3. *Creation and Destruction: A Reappraisal of the Chaoskampf Theory in the Old Testament*. Winona Lake: Eisenbrauns, 2005.

4. 『創造と洪水』(聖書セミナー No. 13) 日本聖書協会, 2006.

5. *The First Book of Samuel* (New International Commentary on the Old Testament). Grand Rapids: Eerdmans, 2007.

6. *The Second Book of Samuel* (NICOT). Grand Rapids: Eerdmans, 2019

7. Richard S. Hess & David Tsumura (eds.), *"I Studied Inscriptions from Before the Flood": Ancient Near Eastern, Literary, and Linguistic Approaches to Genesis 1-11* (Eisenbrauns, 1994), pp. xvi & 480.

8. サイラス H ゴートン著『古代文字の謎-オリエント諸語の解説』(現代教養文庫) 社会思想社 1978.

9. K. A. キッチン『古代オリエントと旧約聖書』いのちのことば社、1979.

10. ヒーター C クレーギー著『ウガリトと旧約聖書』教文館 1990.

① 何故、一橋大学に入学したかったのか？

叔父が東京商科大学を卒業した先輩でもあったことがある。入学時は、将来、貿易関係の仕事をしたと思っていた。

② YMCA一橋寮にはどのような動機、目的に入寮したのか？

落ち着いた洋風・中世式の建物とキリスト教的という伝統が魅力的に見えたから。

② YMCA一橋寮ではどのような過ごし方、どのような寮生であったのか？

入寮して、予想とは違い、自分の信仰者としての歩み方とは大変異なる寮の雰囲気戸惑ったり、神学論争で孤軍奮闘する中、多様な考えを持つ先輩や後輩たちから多くを学ぶことができた。(後日、ハーバード大学の神学部にて特別研究員として籍を置いたときも、考え方が自分とは対極にあるような学者たちとも交流出来た。) 普段の松本寮母さん・寮生諸氏との交わり、オルガン伴奏での賛美、学年を越えて読書会をしたこと等々、一橋寮での良き思い出である。4年生の時、妹が上京し一緒にアパートで暮らすため、寮を出ることになったが、卒業後、留学が決まって羽田空港を出発するとき、寮母さん、渡辺君、藤原君などが見送りに来てくださった。

④ 大学卒業後、どのような道に進んだのか？

一般企業に就職することなく、しばらく浜田山にあった聖書神学舎に通い、秋に留学の道が開かれた。まず、神学大学に入り、さらに旧約聖書の専門的な研究の必要を覚え、ユダヤ人の学

者からセム語(ヘブル語・アラム語・ウガリト語・アッカド語など)を学んだ。

⑤ キリスト教関係の仕事を生涯の仕事にしたいと、何故、考えたのか？

幼いときから、教会学校に通い、キリストの救いのメッセージを一人でも多くの人に伝えたいと思ったが、多くの人の前で話すことが苦手であったので、ビジネスマンとして経済的に教会を支えたいと考えた。しかし、神の召しを拒否出来ず、献身の道に進んだ。

⑥ キリスト教関係の仕事を通じて、何が一番の喜び、充実感であったか？あるか？

神の召しに応える中で、人と比べないで、自分に与えられた神の賜物を生かして、すこしでも主と主の教会に仕えることが大きな喜びであったし、今もそう思う。

⑦ キリスト教関係の仕事を選んで、失敗したとか、後悔したことはあるか？あるとすればどんなことであるか？

これで良かったのか、こちらを選択して良かったのか、と思い悩んだとき、いつも「ここまで神が導いてくださったのだ」と考えることにしている。これまで予期せぬこと、想定外のことの連続であったが、遠回りをしたように思えるときも、神の導きには無駄がないように思う。商学部の卒論で「組織の倫理」を学んだことも、何十年も後になって神学校が直面した問題の整理に役に立ったと思う。

⑧ これまで、やり遂げたと思ったことがあるか、もしあるとすればそれは何か？

聖書の学びには「もうこれで十分」ということはない。自分の知っていることはほんのひとかけらでし

かない、と実感するばかり。30 歳の時から 45 年間、「聖書は面白いよ」と学生を教えてきたのではあるが・・・。

⑨今後、是非やりたいことは何か？

主がお許し下さるなら、あと二・三冊(『ヘブル詩の並行法』SBL 出版、『創造、戦い、破壊』Eisenbrauns 出版、ほか)英語で本を書いてから、日本語で一般向けの本を書きたい。『旧約聖書の魅力』とか『大英博物館・ルーブル美術館の歩き方～聖書の世界としての古代オリエント～』とか『聖書を読む～天皇制という宗教のある国で～』など。しかし、本を書くのは切りがない。「学びに没頭すると、からだが疲れる」(伝 12:12)とは、伝道者(コヘレト)のことば。時間を作って、ガーデニングもやりたい。再び道が開かれれば、中国の大学でヘブル語、旧約聖書、古代オリエントの授業を担当したいと考えている。これまで、不思議な導きで、中国本土で3回、香港で2回、聖書の講義・講演をする機会があった。

⑩もし、生まれ変わったら、クリスチャンにはそういう輪廻転生の思想はないが、どんな職業を選びたいか？

聖書の研究と直結した、実践的な宣教に励みたい。

2. 江藤直純

1948 年、熊本市生まれ、現在 70 歳、横浜市居住

学歴

1967 年 一橋大学社会学部に入學

1971 年 同卒業(社会学士)、日本ルーテル神学大学神学部編入學

1973 年 同卒業(神学士)、日本ルーテル神学校入學

1974 年 立教大学大学院文学研究科組織神学専攻修士課程入學

1976 年 日本ルーテル神学校卒業

立教大学大学院文学研究科組織神学専攻修士課程修了(文学修士)

1979 年 シカゴルーテル神学校(Lutheran School of Theology at Chicago)大学院入學

1981 年 同修士課程修了(Th.M.神学修士)

1983 年 同博士課程修了(Th.D.神学博士)

職歴

1976 年 日本福音ルーテル教会牧師(正教師)に按手される

1976 年 4 月—79 年 4 月 同大江教会牧師

1983 年 10 月 日本ルーテル神学大学(現ルーテル学院大学)・同神学校に招聘される(専任講師、助教授、教授)

1985 年 日本福音ルーテル武蔵野教会三鷹集会協力牧師を兼務

1986 年—88 年 日本福音ルーテル三鷹教会牧師(初代)を兼務

1991 年—95 年 日本福音ルーテル教会宣教百年記念事業室長を兼務

2002 年—2014 年 日本ルーテル神学校校長

2014 年—2018 年 ルーテル学院大学学長

2018 年 3 月 ルーテル学院大学・同神学校を退職。日本福音ルーテル教会正教師を定年退職、以来同教会引退教師となる。

この間、東京女子大学、立教大学、日本聖書神学校、農村伝道神学校で非常勤講師を務める。また、日本福音ルーテル教会信仰と職制委員(長)、宣教方策委員、エキュメニズム

委員、神学教育委員等を歴任。世界ルーテル連盟(LWF)エキュメニズム常任委員(1996

—2003)、アジアルーテル評議会委員、LWF 諸研究委員等、その他日本神学教育連合会・

東北アジア神学教育連合会幹事(Director)、日本エキュメニカル協会理事、「礼拝と音

楽」編集委員、「ルーテル聖書日課」代表、日本 FEBC 理事長などを務めてきた。

日本基督教学会(幹事・理事)、日本ルター学会、日本ボンヘッファー研究会、日本キリ

スト教社会福祉学会等に所属してきた。

編著書・訳書

『新しい町と宣教—仙台つるがやレポート』(共著、日本ルーテル神学大学宣教研究室、1973 年)

『求道者、そのなげきと喜び』(共、世界ルーテル連盟マスメディア研究所、1978 年)

Bonhoeffer's Idea of Religion: A Study of Dietrich Bonhoeffer's Idea of Religion and

"Religionlessness" with Some Implications for the Interpretation of the Christian Faith in

Japan Today (シカゴルーテル神学校博士論文、1983 年)

『教会はキリストの体』『宣教はキリストのいのち』

『明日の教会に向かって—宣教、その

考え方と実践』(編著、日本福音ルーテル教会、1992,93,94 年)

Theology and Theological Education in Asia: Today and Tomorrow (共編著、東北アジア神学教育連合会、1995 年)

『罪と恵み—神の前に立つ人間—』(共著、サンパウロ、1996 年)

『カトリックとプロテスタント—どこが同じで、どこが違うか—』(共著、教文館、1998 年)

『義認の教理に関する共同宣言』(共訳、教文館、2004 年)

『キリスト教礼拝・礼拝学事典』(共著、日本キリスト教団出版局、2006 年)

『ルーテル学院百年の歴史』(共編著、学校法人ルーテル学院、2009 年)

『人物でたどる礼拝の歴史』(共編、日本キリスト教団出版局、2010 年)

『争いから交わりへ—2017 年に宗教改革を教導で記念するルーテル教会とカトリック教会—』(共編訳、教文館、2015 年)

『福音の喜び—人々の中へ、人々と共に—』(共著、日本キリスト教団出版局、2015 年)

『「キリスト者の自由」を読む』(共著、リトン、2016 年)

『宗教改革と現代—改革者たちの 500 年とこれから—』(共著、新教出版社、2017 年)

『新キリスト教組織神学事典』(共著、教文館、2018 年)

その他論文(邦文、英文)多数。

アンケートの答え

①一橋大学選択の理由

高校教師を志望していて、広く社会科学を学ぶ中で社会学を専攻できることに魅力を感じた。リベラルな校風にも憧れていた。

②YMCA 一橋寮入寮の動機

キリスト教信仰を持って育ってきたし(幼児洗礼 1948 年、堅信礼 1970 年)、YMCA に親しんでいたの、一橋大学 YMCA が経営する寮での共同生活に惹かれたから。

③YMCA 一橋寮での生活

『百年史』にしたためた拙文(101-106 頁)の題は「求道者集団の中での 4 年間」であったが、読み返してみても改めてその思いを強くした。毎日の先輩・後輩・寮母さんとの楽しい交わり、毎朝の礼拝、毎週の聖書研究会、毎年の学園祭企画と前後の学び・・・「みな好漢だった。明るく人間的に魅力のある人々だった。・・・このグループは、つまり一橋 Y の仲間たちは『求道者集団』だった。信仰の、人生の、真理の道を求める者たちの生活共同体だった。・・・生活を分かち合いながら道を求めたのだ」、心からそう思う。

④卒業後の進路

在学中献身の思いが与えられたので、就職はせず、牧師への道を求めて日本ルーテル神学大学・神学校へ進学し、ルーテル教会の牧師に任用された。ただ、いわゆる町の教会(parish church)の牧師を望んでいたが、教会から求められ任じられたのは神学教育に仕えることであった。42 年間の現役時代、直接の伝道牧会の牧師生活は 3 年、4 年間の米国留学のあと 34 年間半は教会が立てた大学・神学校での教育による宣教に従事することとなった。その間神学教師として教会との関わりはずいぶん強かった。

⑤生涯の仕事だと選んだ理由

高校 3 年生のイースターに堅信礼を受けた。友人に献身した者もいたが、自分の欠け多い性格から自分が牧師になれるとは夢にも思わなかった。教員を志望していた(在学中に中高の教員免許も取得)。一橋大学入学後、教会に熱心に通い、青年会活動(全国青年連盟での活躍、60 年代後半のキリスト者の社会参加への関心)、教会学校(実際に子どもたちに福音を宣べ伝えその魂への牧会をする働きへの関心)、そしてルーテル教会が熱心に取り組んでいたディアコニア活動(とくに重症心身障害児との深い関わり)に打ち込んでいく中で教会の働きへの理解と関心は高まってはいたが、実際に献身の思いを与えられ、その道に進もうと決心したのは、ある重症心身障害児との出会いがあり、自分の罪深さにも拘わらず神はその御用に用いてくださるということを知ったことがきっかけであった。

⑥一番の喜び、充実感

個々の大学生・神学生の成長を助ける教育と魂の配慮の具体的な働きも、その組織を維持発

展させる責任もちろん非常にやり甲斐のある働きであった。同時に、全国各地の教会を訪れ、礼拝説教と講演をし、信徒を強める働きは絶えず力を注ぎ喜びを感じてきたことも大きな喜びだった。

⑦失敗・後悔したこと

バリッシュ・パスターを願っていたが、牧師養成および教会の教育的ミニストリーに人生の大半の時間を割くことになったが、それはそれで教会の必要からの配置であって、失敗とはまったく考えていないし、後悔もしていない。課せられた牧師養成とキリスト教主義大学での教育とその運営はやり甲斐のある、また貴重な役割であったと確信している。それに加えて、この立場だったからこそ、教会全体にとっての課題である信徒養成や信徒運動の活性化、エキュメニカルな働きなどで貢献することもできたことを喜んでいる。ただ大学に籍を置きながら研究者としての業績を計画的に多く上梓することができなかったことは反省するところである。

⑧やり遂げたこと

教育の仕事は学生の人生の展開への応援であり、教員の側で自己満足することはできないが、その務めを34年間半務めることができたこと、および直接の伝道牧会に限られていたが、その任を担う教会に多方面にわたって42年間奉仕できたことを素直に感謝し喜びたい。

⑨今後は是非やりたいこと

牧師としての働きの中で中心となる説教(葬儀説教を含む)、また教会教育の観点から有意義だったと思われる講演などを整理して出版すること。

神学者として長年研究してきた D.ボンヘッファーに関する研究書の翻訳や自身の研究の整理と出版をすること。働きの中で蓄積したことを土台に静かに社会還元できるボランティア活動をできる範囲でやること。

⑩生まれ変わったときに選びたい職業

もし神が許したもうならば、町の教会の牧師職に就き、伝道と牧会に専念すること。

3. 阿久戸光晴

1973 年社会学部卒・1975 年法学部卒 阿久戸光晴(福岡女学院大学学長)

1. 略歴

1951 年 3 月 26 日生まれる。(東京都荒川区)

1969 年 3 月東京私立開成高校卒業、同年 4 月一橋大学社会学部入学・YMCA 一橋寮入寮

1973 年 3 月同上学部卒業・同上寮退寮、同年 4 月一橋大学法学部学資編入

1975 年 3 月同上学部卒業、同年 4 月住友化学入社(大阪本店法務部)

1985 年 11 月同上社退職(住友アルミ製錬東京本社総務課)、同年 12 月学校法人聖学院(理事長秘書・大学設置担当)

1986 年 4 月東京神学大学 3 年編入(聖学院勤務のまま)

1988 年 4 月同上神学大修士課程進学)、同年 10 月学校法人聖学院理事就任(労務担当)

1990 年 3 月同上神学大卒業、同年 8 月聖学院アトランタ国際学校出向(事務局長)

1995 年 4 月聖学院大学政治経済学部(助教授・チャプレン)

2000 年 4 月同上大副学長

2004 年 12 月同上大学長

2014 年 4 月同上学院理事長

2015 年 4 月同上学院院长、日本基督教団滝野川教会主任牧師

2017 年 4 月公益財団法人荒川区芸術文化振興財団理事長

2018 年 3 月同上教会主任牧師辞任、同年 4 月福岡女学院大学学長(同上荒川区芸術文化振興財団理事長は非常勤のまま)

アンケート回答無

4. 伊藤淳

1961 年神戸生まれ

学歴: 栄光学園中高、一橋大学商学部、一橋大学社会学部、日本カトリック神学院(教皇庁立ウルバノ大学日本校)

職歴: 味の素(株)、湘南白百合学園中高、カトリック東京教区

アンケート回答

- ①父親が一橋大学卒だったから。
- ②入学時にチラシをもらって記憶に残っていたから。
- ③グラグラした寮生だった。

④味の素(株)社員、湘南白百合学園中学高校教諭、カトリック東京教区司祭(目黒、清瀬、松戸教会)

⑤キリストをいつも思い、宣べ伝えることができる環境、状況が自分には必要だと思ったから。

⑥キリストを知り、キリストを信じる人が増えること。

⑦自分のせいでキリストから離れてしまう人が出た(だろう)こと。

⑧特になし。

⑨特になし。

⑩司祭。

5. 山本信義

1968 年 4 月 25 日生まれ 現在 51 歳

学歴

1987 年 3 月 国立 金沢大学教育学部附属高等学校卒業

1987 年 4 月 国立 一橋大学法学部 入学

1993 年 3 月 同大学卒業 学士基礎法学専攻 法哲学

1994 年 4 月 同大学院法学研究科 博士課程前期進学

1997 年 3 月 同大学院 中途退学

1997 年 4 月 東京私立 東京神学大学神学部 学部 3 年次編入学

2001 年 3 月 同大学院博士前期課程修了 修士 神学 専攻 新約聖書神学

職歴

2001年4月 日本基督教団 阿佐ヶ谷教会担任教師（～2003年3月）

2003年4月 日本基督教団 牛込弘方町教会主任担任教師（～2014年3月）

2014年4月 日本基督教団 八千代台教会主任担任教師（～現在）

2014年4月 同教会附属三愛幼稚園 園長（～現在）

社会活動歴

2016年4月 学校法人羔学園 評議員（～2019年3月）4月より同法人理事

2017年4月 学校法人八千代台教会学園 理事長（～現在）

アンケート回答

① 何故、一橋大学に入学したかったのか？

一橋大学への積極的志望は正直なかった。家庭の経済状況の都合で国立大学という選択肢のもと、自分の成績に照らし一橋を受験することとなった。（私の受験年は国立大のAB日程の複数受験が実施され、東大・京大ダブル合格生が生まれた年。私は京大法学部には不合格）

② YMCA一橋寮にはどのような動機、目的に入寮したのか？

経済状況から上京後寮生活が半ば条件であったところ、一橋受験時にポスターで当寮の存在を知った。「個室、シャワー完備」の売りに惹かれ、当時すでにキリスト者でもあったため入学手続き日に、諸先輩方より新奇の眼差しを浴びつつ、面接を受けた。

③ YMCA一橋寮ではどのような過ごし方、どのような寮生であったのか？

「クリスチャンの寮」との前理解に反し、入寮時より在寮した6年間、主日礼拝に集うキリスト者は一貫して私ひとりであった。しかしながら小平で2年留年4年間かけたことに端的に示される通り、他の寮生に対しては「躰き」にしかない非常に不真面目なクリスチャン学生としてバブル真っ盛りの

時期を過ごした。他方、国立教会では2年生の時から教会学校での奉仕をさせていただくなど、多くのよい交わりをいただき、一橋寮OBの中島先生・堀地先輩を始め、多くの方々からの良き感化をいただいた。「躰きの石」ながら、火曜の聖書研究会・寮母さんの交代の問題等には、寮生唯一のキリスト者として自分なりに試行錯誤をしたことを思い起こす。そんな中で阿久戸先輩は1989年の一年間、東神大で学ぶ傍らチューターとしてお越しくださったことを記憶している。

④ 大学卒業後、どのような道に進んだのか？

国立での学部後期の2年間は反省のもと学業に打ち込み、当時専攻していた法哲学での研究者の道を目指して、修士課程に進学した。しかし、程なく挫折し、修士論文を書かないまま4年間のモラトリウム時代を再び過ごした。一橋には計10年間在籍した。

⑤ キリスト教関係の仕事を生涯の仕事にしたいと、何故、考えたのか？

学部留年時の2年目、その年より数年聖研をご指導くださった土岐健治先生の下で、ギリシャ語・（ヘブル語も？）、初期ユダヤ教（新約学と関わる領域）の学びをかじらせていただいた。極めてアカデミックな学究に触れつつ、自分にはで

きないと痛感したが、この学びの成果を必要としているのは、教会の信徒たちに他ならないと感じた。東神大へと進むに際し、「牧師の道を辞めるのに熊野先生に祈って貰った僕が、牧師になる君のために祈るとはね」と祈っていただいたことは忘れられない。

- ⑥ キリスト教関係の仕事を通じて、何が一番の喜び、充実感であったか？あるか？
3つの教会に仕えるなかで、幼子からご高齢の方々の人生のすべての折々に触れることが許され、様々な経験をいただいた。

- ⑦ キリスト教関係の仕事を選んで、失敗したとか、後悔したことはあるか？あるとすればどんなことであるか？

失敗ばかりだなあと思う。でも備えられた道であり「賜物」だと思い、後悔という感覚はない。

- ⑦ これまで、やり遂げたと思ったことがあるか、もしあるとすればそれは何か？
「12 わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者となっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです。自分がキリスト・イエスに捕らえられているからです。13 兄弟たち、わたし自身は既に捕らえたとは思っていま

せん。なすべきことはただ一つ、後ろのものを忘れ、前のものに全身を向けつつ、14 神がキリスト・イエスによって上へ召して、お与えになる賞を得るために、目標を目指してひたすら走ることです。15 だから、わたしたちの中で完全な者はだれでも、このように考えるべきです。しかし、あなたがたに何か別の考えがあるなら、神はそのことを明らかにしてください。16 いずれにせよ、わたしたちは到達したところに基づいて進むべきです。」(フィリピ3:12~16)ということでしょうか？

- ⑧ 今後、是非やりたいことは何か？
千葉では、思いもしなかった小さな幼児教育の現場での働きと責任が与えられ、その領域でやるべきことで精いっぱい。ニーバーの「セレンティの祈り」を地で行っています。
- ⑨ もし、生まれ変わったら、クリスチャンにはそういう輪廻転生の思想はないが、どんな職業を選びたいか？
やっぱり、すべての職業は Beruf なんだよなあと思う。

当会の会員について

編集委員会

はじめに

当会の会員資格については、定まった契約なり合意書は存在しないものの、伝統的には会員規則が存在し、その会則に同意するものが、当会の会合に参加し、あるいは会の行事に参加し、当会の会員であることを示してきた。その後、当会の寄宿舍が出来たことにより、会員であることは、より明確にされた。つまり、当会の会員となったものが、YMCA 一橋寮に入寮を許され、寮生活を共にしながら、会の行事に参加する形が明確になった。現在では、会員になったから寮生になったという意識は極めて薄く、寮生になったこと＝会員になった、というのが会員の共通の意識であると思う。寮が存在しない 1887 年、明治 20 年から当会の活動が行われていたという事実は、それだけ当時において、一橋大学内におけるキリスト教への学生の関心の高さを示すものであった。が、今日、それを今更言うのは、死んだ子の年を数えることに等しいものがある。

当会の名称が公益社団法人ではなく、正に、寮舎の土地と建物を示す財産＝公益財団法人という形になっていることがそれを証明している。しかし、寮舎という土地や建物に意味があるのではない。やはり、寮生、寮外生、OB 会員の存在があつてこそ当会の存在意義がある。確かに、寮舎が存在していなければ、遠の昔に当会は消滅していたことは疑う余地はない。YMCA 一橋寮は、何と言っても、キリスト教に殆ど触れたこともない多くの一橋の学生に、新鮮な新しい視点と息吹を吹き込み、そこに若者の自治的な共同生活、OB と寮生との交流、教会や基督教関係者との繋がり、触媒作用によって、キリスト教及びその文化、あるいは思想、教養あるいは人生観を一人一人に植え付けたことは間違いない。

今、ここに過去 130 年の歴史を振り返るにあたり、当会会員がどのような職業選択を行い、どのような職業人生を歩んだことか、それを振り返ることは、相応の意味があると思う。勿論、YMCA 一橋寮が一人一人に与えた影響は、それほど大きなものではないかもしれないし、直接の関係がない場合も多いだろう。しかし、当会に所属した会員がどのような生き方をしたか、どのような職業を選択し、その後どう歩んだかを振り返ることは、当会のもつ意味を考える上で、意味はあると思う。

1. 当会の年次別会員数の推移

年次別OB会員数		合計	年平均
1887～1906	明治20年～明治39年	87	4.4
1907～1926	明治40年～大正15年(昭和元年)	192	9.6
1927～1946	昭和2年～昭和21年	139	7.0
1947～1966	昭和22年～昭和41年	64	3.2
1967～1978	昭和41年～昭和53年	40	3.3
1979～1998	昭和54年～平成10年	78	4.6
1999～2019	平成11年～平成31年	91	4.3
合計		691	5.2

上記の表のとおり、当会の会員数は1887年から20年間で87名、その後20年の明治の終わりと大正デモクラシーの時代が192名と最も隆盛であり、1927年～1946年の戦中では139名となっている。戦後は、一貫して寮生の収容人員＝会員数となっており、昭和40年代は寮生の収容数が1学年3名、1979(昭和54)年に新しい寮が完成してから1学年4名であり、収容人員＝会員数となっている。昭和40年代には、それでも寮外生会員がいたので、収容定員を上回る会員数となっているが、昭和54年以降は寮外生が少ないことが分かる。

過去130余年での当会に所属した会員数は延べ691名となっている。1学年平均は5名であり、戦前、特に明治の終わりと大正時代は1学年約10名の会員がいた。つまり、寮外生が相当数いたことになる。因みに、大平正芳も速水優も寮外生であった。

2. 当会会員の職業別分布

当会の会員の職業選択を全て調査することは、今日では不可能であることから、ここでは著名人あるいは有名人として、それなりに記録に留めている人物を調査してみた。出典は主としてWIKIPEDIAに依っている。WIKIPEDIAは、一般の実業人よりは、学者や官僚あるいは作家、或いは弁護士、会計士などは比較的掲載されているので、片寄があることを前提にした上で、当会のOB及び現役を含む職業別の分布は以下のとおりである。一般の実業人では上場会社の常務取締役以上を原則として掲載している。

牧師・聖職者	9名	浅野順一、平野保、大木英二、平出亨、津村俊夫、江藤直純、阿久戸光晴、伊藤淳、山本信義
学者	26名	福田徳三、田中金司、村松恒一郎、福田敬太郎、久保岩太郎、森田優三、久武雅夫、大平善梧、古川栄一、山田欽一、桜井信行、中島省吾、弓削達、裏得郎、内田芳明、中内恒夫、高橋真司、栗生澤猛生、山本通、桜井直文、大芝亮、今橋隆、阿久津聡、鈴木宗徳、山藤竜太郎、吉永裕登
実業家	18名	江口定條、村田省蔵、武井大助、石田禮助、田中徳次郎、吉野岳三、金子嘉徳、渡辺文蔵、阪田正三、加藤曰、野坂禮三、速水優、渡辺滉、大津寄勝典、堀地史郎、中村正俊、西浦道明、寺師並夫
社会事業家	3名	山本邦之助、木本茂三郎、阿部志郎
政治家	4名	植竹春彦、北條秀一、大平正芳、鈴木望
法曹家	5名	秋山武夫、市村陽典、内藤満、桜井進、佐々木有人
医師・研究者	4名	青崎敏彦、阪中明人、下荒神武、安井禎
外交官	2名	岩谷滋雄、高杉優弘
文筆家	1名	杉浦英一(城山三郎)
合計	72名	

特筆すべきは、まず、学者が26名と極めて多いことであり、次いで名を馳せた実業人が18名と多く、この中には貴族院議員になったものも多い。それにもまして注目すべきは牧師・聖職者あるいは神学研究者が9名いることである。プロテスタント(ルーテル派)、カトリックの司祭など幅広い人材を輩出している。また、実業人になるべく一橋に学んだものの、その後、医師の道や研究者の道に転向した人が4名いる。東京YMCAの総主事が2人、また日本の社会福祉の実践的なパイオニアともいべき阿部志郎もいる。クリスチャン宰相、大平正芳は死後にその評価が益々高まった異例の政治家でもある。キリスト教と論語に深い造詣があり、語る言葉は一見不明瞭に聞こえるものの、文章にすればそのまま使えるとも言われた。また、経済小説に新しい斬新な視点を与えてくれた作家城山三郎も在寮中に受洗したと言われている。寮生活で培われた深い自省が、その作品に気品を与えていると言えないだろうか。これらの会員の生き方は、大なり小なり、有名であろうとそうでなかろうと、会員の生き方のどこかに、その影響は二重、三重にあるものと言えよう。「それを言っではお仕舞だよ」と言うフウテンの寅のセリフではないが、やはり我々聖書を学んだものとして、「地の塩、世の光」たらんとする意識があつて、生きてきたのだと思わざるを得ない。

牧師・ 聖職者	浅野 順一	1921	東京商科大学卒業後、三井物産に入社するも、東京神学社に進み、高倉徳太郎に師事、イギリスドイツに学び、1931年渋谷美竹教会を創設、後砧伝道所を開拓伝道、青山学院神学部教授
	平野 保	1941	ニューヨーク・ユニオン神学校卒業、商業高校教諭を経て、日本基督教団美竹教会牧師、東京神学大学教授
	大木 英二	1944	キリスト教大館教会牧師、日本基督教団弘前教会牧師
	平出 亨	1953	日本キリスト教会大森教会牧師として1973年 1月 ～ 2008年 3月就任
	津村 俊夫	1966	日本の言語学者、旧約聖書学者、神学校教師、文学博士 (Ph.D.)。聖書宣教会聖書神学舎教師、前教師会議長、新日本聖書刊行会理事・翻訳編集委員長、聖書考古学資料館理事長。慶應義塾大学講師。元筑波大学文芸言語学系助教授。兵庫県神戸市生まれ。ウガリット (ウガリト) 学・古代オリエント学の研究で知られる。
	江藤 直純	1971	卒業後、日本ルーテル神学校卒業、立教大学文学研究科組織神学専攻修士、シカゴルーテル神学校大学院博士課程修了 (PhD、神学博士)、他方牧会活動して、ルーテル三鷹教会などを歴任、日本ルーテル神学校校長、2014～2018年ルーテル学院大学学長
	阿久戸 光晴	1973	日本の神学者、牧師。福岡女学院大学学長、学校法人聖学院名誉院長。聖学院大学学長、学校法人聖学院院長兼理事長、キリスト教文化学会理事長、日本基督教団滝野川教会主任牧師、公益財団法人荒川区芸術文化振興財団理事長等を歴任。専門はキリスト教社会倫理学、人権・デモクラシーの神学、ロジャー・ウィリアムズ研究。
	伊藤 淳	1984	イエズス会が主催する栄光学園出身、大学卒業後味の素に就職するも、3年後退職、一橋大学社会学部に学士入学し、教職免許を取得、白百合学園高校での教師となるものの、2010年カトリック司祭に叙階、目黒教会助祭、清瀬教会主任司祭を経て、現在カトリック松戸教会主任司祭、洗礼名アシジのフランシスコ
	山本 信義	1993	金沢市生まれ、金沢大学教育学部付属高校から一橋へ、法学部博士課程に進学するも、途中中退、東京神学大学神学部に進学、同大学大学院博士課程前期終了、専攻は新約聖書神学。2001年から阿佐ヶ谷教会担任教師、2003年から牛込弘方町教会主任担任教師、2014年から八千代台教会主任担任教師 (いずれも日本基督教団)

学者	福田 徳三	1894	日本の経済学の祖、東京商科大学教授、慶応義塾大学教授、クリスチャン。社会政策学会の中心メンバーとして活躍、大正デモクラシー期には吉野作造とともに黎明会を組織し、民本主義の啓蒙につとめる。第一次世界大戦後はマルクス主義に対し批判的立場から、民本主義、自由主義に立ち、政府による社会・労働問題の解決を主張、河上肇と論争した。日本における福祉国家論の先駆者とされる。
	田中 金司	1917	専門は貨幣論、国際金融論神戸大学教授
	村松 恒一郎	1919	一橋大学教授、経済学史
	福田 敬太郎	1920	商学者、神戸大学教授、名古屋学院大学初代学長

学者	久保 岩太郎	1923	日本の法学者。専門は国際私法。一橋大学名誉教授。山口弘一の弟子。法学博士（1953年、東京大学にて取得）。
	森田 優三	1925	一橋大学教授、経済学所、内閣統計局長、日本統計学会会長
	久武 雅夫	1927	日本の数理経済学者、一橋大学教授、国際基督教大学教授、同大学第三代学長
	大平 善梧	1929	日本の国際法学者、一橋大学教授、青山学院大学教授、同大学学長
	古川 榮一	1929	日本の経営学者、一橋大学教授、経営財務論 青山学院大学教授
	山田 欽一	1930	日本の数学者、一橋大学教授、今日の一橋大学における数学教育の基盤を築いた
	桜井 信行	1941	経営学者、青山学院大学教授
	中島 省吾	1947	日本を代表する国際会計学者、国際基督教大学教授、同大学学長代行、フェリス女学院大学学長などを歴任、国立教会会員・長老、第3代当会理事長
	弓削 達	1947	歴史学者、専攻は古代ローマ史。東京教育大学助教授、東京大学教授、フェリス女学院大学教授、天皇制廃止論者、首相の靖国を違憲として主張。当会100年史編集委員長。
	内田 芳明	1952	社会思想研究者。大塚久雄と親しく、マックス・ヴェーバー『古代ユダヤ教』の翻訳・研究により1999年にレッシングドイツ連邦政府翻訳賞受賞。元比較法文化学会会長、日本景観学会名誉会員。
	中内 恒夫	1954	昭和29年商学部卒業後、大学院経済に進み、ケインズ経済を専攻、国際基督教大学教授
	山本 通	1970	経済学部卒業後、大学院経済修士、博士課程と一貫して西洋経済史を専攻、神奈川大学教授
	桜井 直文	1971	経済学部卒業後、社会学部大学院修士、博士課程に進み、社会思想及びスピノザ哲学を専攻、近代哲学者ミッシェル・フーコー研究でも知られ、明治大学法学部哲学教授
	大芝 亮	1976	日本の国際政治学者。専門は国際機構論。青山学院大学国際政治経済学部教授、一橋大学名誉教授。国立大学法人一橋大学理事・副学長、日本国際政治学会理事長を歴任。イエール大学政治学博士（Ph.D.）。
	今橋 隆	1981	日本の経済学者。専門は交通経済学。法政大学経営学部教授、ワイカト大学観光経営学科客員教授などを経て、運輸政策研究所主席研究員。ポーランド共和国インフラストラクチャー省交通功労者表彰、道路経済研究所懸賞論文優秀賞受賞。
	阿久津 聡	1991	日本の経営学者。専攻はマーケティング、消費者心理学、ブランド論、知識経営論、行動経済学、文化心理学。一橋大学大学院経営管理研究科(ICS)教授。
	鈴木 宗徳	1991	南山大学を経て、現在は法政大学教授。専門は社会学。
	山藤 竜太郎	2004	横浜市立大学国総合科学群 准教授。専門は国際マネジメント研究。

医師・研究者	青崎 敏彦	1977	大学卒業後、自治医科大学に進学、脳神経学を専攻、マサチューセッツ工科大学博士研究員、理化学研究所フロンティア研究員、東京都老人総合研究所研究室長など歴任、地方独立行政法人東京都健康長寿医療センター研究室長
	阪中 明人	1980	徳島大学医学部に進学後、医師、七色心療クリニック院長
	下荒神 武	1984	卒業後、佐賀医科大学に進学し、医師となる。専攻は心療内科、下荒神医院を神戸市垂水区にて開業
	安井 禎	1984	医師、名古屋市精神保健福祉センター所長
外交官	岩谷 滋雄	1973	日本の外交官、駐オーストリア特命全権大使などを経て、第2代三国協力事務局長。 国連政府代表部一等書記官、在インドネシア大使館一等書記官、経済協力局政策課企画官を経て、1991年外務省国際連合局科学課長、1993年在ドイツ日本国大使館参事官、1996年在中国公使（文化担当）、1998年法務省入国管理局政策課長、1999年法務省仙台入国管理局長、2001年外
	高杉 優弘	1988	外務省入省、2013年国際政策局政策課長などを経て、2019年9月官房審議官

社会事業家	山本 邦之助	1892	日本郵船統計課長を経て、東京YMCA第2代総主事
	木本 茂三郎	1927	1951年から1966年まで東京YMCA総主事、当会第二代理事長
	阿部 志郎	1949	日本における社会福祉事業の実践パイオニア。東京商科大学卒業後、ユニオン神学校に学ぶ。社会福祉法人横須賀基督教社会館館長、明治学院大学理事長、東京女子大学理事長、日本社会福祉学会会長、日本キリスト教社会福祉学会会長を歴任。

実業家	江口 定條	1887	土佐国（現・高知県）出身。1887年東京高等商業学校（現一橋大学）卒、同校教諭に就任。その後、三菱合資会社入社。同社専務理事、監事等を経て1920年同社総理事。1925年社団法人如水会初代理事長。満州事変のあった1931年に南満州鉄道の副総裁に就任したが、民政党系で、軍部に批判的な立場をとっており、翌年政友会の犬養内閣に罷免
	村田 省三	1900	大阪商船社長を経て貴族院議員、近衛内閣通信大臣、フィリピン大使
	武井 大助	中退	申酉事件の学生首謀者の一人として、専攻部に進まず、母校を退去、海軍主計学生となり、海軍主計中将海軍省経理局長となり、戦後安田銀行、昭和産業、文化放送の社長、戦後当会初代理事長
	石田 禮助	1907	静岡県松崎の漁師の家に生まれる、三井物産社長になるも日米開戦に反対、昭和16年物産社長を辞任、戦後国鉄総裁、城山三郎「粗にして野だが卑ではない」のモデル
	田中 徳次郎	1917	大正6年三菱合資に入社、昭和19年東京海上火災取締役、昭和22年同社取締役社長、35年会長を退任
	吉野 岳三	1920	日興証券社長、東京証券会館社長
	金子 嘉徳	1924	日本銀行松本支店長など歴任、東海銀行頭取
	渡辺 文蔵	1930	鈴木商店に入社、ソウル事務所長を経て海外戦略モデルを構築、1973年味の素社長、米国ゼネラルフーズ社や仏ダノン社と提携、海外事業展開を進めた
	阪田 正三	1935	戦後、セーラー万年筆社長、中国製（元パーカー万年筆上海工場）の英雄万年筆について、昭和41年にその品筆とコストについて発言
	加藤 曰	1942	三井鉱山副社長
	野坂 禮三	1942	住友信託銀行常務取締役
	速水 優	1947	府立6中（現新宿高校）から東京商科大学へ入学、日本銀行理事を経て、日商岩井社長、会長、経済同友会代表幹事、学校法人東京女子大学理事長、第28代日本銀行総裁、阿佐ヶ谷教会会員
	渡辺 滉	1950	大学卒業後、三和銀行に入社、融資部長、営業本部長等の国内営業部門を歩み、1988年に川勝堅二の後任として頭取に就任、1994年の決算で都市銀行トップの業績を上げた
	大津寄 勝典	1952	卒業後、倉敷紡績に就職、財務部長など歴任後、慶応大学及び大阪市立大学に学ぶ。大原孫三郎の経営展開と社会貢献」の著書を著す。
	堀地 史郎	1955	卒業後東京海上火災保険に入社、同社取締役副社長、あんしん生命初代社長、東京女子大学常務理事、国立教会長老、第4代当会理事長
	中村 正俊	1971	大学卒業後、川崎製鉄に入社、オレゴン大学MBA、川鉄NY事務所長など歴任、合併後のJFE常務執行役員、退職後、帝京大学教授、大学院国際企業研究を教える
	西浦 道明	1972	日本の公認会計士、税理士、経営コンサルタント。アタックス創業者・代表取締役社長。アタックスグループ代表パートナー、法政大学大学院イノベーション・マネジメント研究科客員教授、日本盲導犬協会監事等を歴任。
	寺師 並夫	1974	卒業後、味の素株式会社に入社、取締役専務執行役員

政治家	植竹 春彦	1924	栃木県の東野交通社長（現在2018年関東自動車と合併し解散）、栃木県選出参議院議員、岸内閣郵政大臣
	北條 秀一	1930	神戸高商から東京商科大学に学び、南満州鉄道理事となり、戦後参議院議員及び衆議院議員となり引揚者団体全国連合会理事長として活躍
	大平 正芳	1936	香川県選出の政治家、郷土の先輩津島寿一の勧めもあり、大蔵省に入省、戦後衆議院議員となり、内閣官房長官、外務大臣、通産大臣、自民党幹事長の要職を歴任、1978年内閣総理大臣に就任。知性派政治家として、日韓、日中の国交回復と友好に貢献、国内では「田園都市構想」など数々の政策提言を残し、今日までその提言は心ある政治家に継承されている。没後になおその評価が高まった数少ない政治家。
	鈴木 望	1973	大学卒業後、厚生省に入省、その後地元の静岡県磐田市市長を3期、12年勤め、その後維新の会選出衆議院議員となる。浜岡原発再稼働反対にも貢献。
文筆家	杉浦 英一	1952	ペンネーム城山三郎、経済小説の開拓者であり、歴史小説、伝記小説も数多く著している。愛知県名古屋市生まれ、海軍に志願、特攻隊兵士として伏龍部隊で終戦。戦後、一橋大学に入学、在学中に洗礼を受ける。卒論「ケインズ革命の一考察」
法曹家	秋山 武夫	1969	卒業後丸紅に入社、本社法務部・米国子会社法務部で勤務後、NY州弁護士となる。NYにあるピルズベリー・ウィンスロップ・ショー・ピットマン法律事務所Japan Practice Co-Leader(パートナー)、ワシントン大ロースクラー卒、如水会NY支部長
	市村 陽典	1974	茨城県土浦市出身、土浦第一高校。東京高等裁判所部総括判事、仙台高等裁判所長官を経て、初代行政不服審査会会長。
	内藤 満	1979	弁護士、スバル法律事務所代表、相続、貸金問題や離婚問題など一般民事事件を得意とする
	桜井 進	1990	前橋地方裁判所判事
	佐々木 有人	1995	一橋綜合法律事務所弁護士

3. 当会会員名簿

会員名簿(過去会員であった方の名前を掲載しています。物故、ご存命については、判断はしていません。当然古い会員は物故されておりますし、新しい会員でも物故されている会員もおられますが、あくまで過去現在会員であった方、ある方の名簿です。)

卒業年次		課 程	氏 名	卒業年次		課 程	氏 名
明20	1887	本 科	梅田 信五郎	明33	1900	本 科	大谷 英一
			江口 定條				賀集 亮二
明23	1890	本 科	津田 萬吉				前田 卯之助
明25	1892	本 科	浅野 長七				村田 省三
			大友 泰一郎	明34	1901	専攻部	神谷 市太郎
			兒島 秀吉			本 科	稲村 修三
			鍋島 熊太郎				小野 彦治
			原田 芳太郎				中越 正彰
			三宅川 百太郎				野呂 美雄
			山本 邦之助				増田 恒蔵
			山下 芳太郎				松本 茂
明26	1893	本 科	矢野 義弓				與田 作造
			今村 直蔵	明35	1902	本 科	赤谷 由助
			上領 純一				西郷 齋員
			古門 林太郎				佐久間 心一郎
明27	1894	本 科	福田 徳三				坂本 宗蔵
			茂木 新三郎				葛原 猪平
明28	1895	本 科	太田 文一	明36	1903	専攻部	中越 正彰
			太田 有 二				増田 恒蔵
			矢野 長之助			本 科	上野 亀太郎
明29	1896	研究科	福田 徳三				清水 安治
		本 科	大木 信次郎				高羽 秀吉
			鹽谷 廉				中村 義四郎
明30	1897	本 科	有吉 明				布能 平次郎
			大庭 敏太郎				松山 晋二郎
明31	1898	専攻部	有吉 明	明37	1904	予科	武井 大助
		本 科	内池 廉吉			専攻部	小野 彦治
			本宿 家全				坂本 宗蔵
			松村 吉則			本 科	遠藤 茂雄
			村井 善次郎				片岡 音吾
			湯川 兼吉				紅松 雄二
			吉村 徳之助				高岩 勸次郎
明32	1899	専攻部	内池 廉吉				長谷川 潔
			松村 吉則				福島 喜三次
		本 科	神谷 市太郎	明38	1905	専攻部	高羽 秀吉
			中山 五郎				布能 平次郎
			福原 八郎			本 科	安藤 胖
			森川 昭太				大橋 清三郎
明33	1900	本 科	飯田 一馬				笠松 勝義
			石丸 素一				加藤 正雄
							白石 入作

卒業年次		課 程	氏 名		卒業年次		課 程	氏 名
明38	1905	本 科	鈴木 美知太郎		明42	1909	本 科	大山 昇平
			田崎 仁義					佐藤 棟造
			高木 卓爾					柴田 丈夫
			鳥井 清介					田中 金之助
			原田 原					三島 三郎
			福本 順三郎					村山 太三郎
明39	1906	専攻部	片岡 音吾		明43	1910	本 科	石川 周
		本 科	石谷 貞次郎					草刈 元
			岩瀬 治三郎					小宮山 敬保
			大河内 時夫					戸田 貞次郎
			金田 榮太郎					濱野 初五郎
			櫻内 篤彌					福原 要蔵
			中村 茂男					山内 保彦
			堀 義貴					湯川 萬壽夫
			横井 半三郎		明44	1911	専攻部	浅原 大平
明40	1907	専攻部	田崎 仁義					大西 猪之助
		本 科	石田 禮助					小林 寅次郎
			大石 善四郎					本間 靖也
			金井 潤三					増井 光蔵
			笹岡 鐵男				本 科	池上 又四郎
			田中 重太郎					今山 實
			鳥山 貞雄					川喜多 忠義
			西山 勉					齋藤 和三郎
明41	1908	専攻部	中村 茂男					澤井 謙吉
			堀 義貴					外岡 松五郎
		本 科	木村 末喜					則武 貞吾
			木村 禎橘					三井 亮
			兒玉 登					松葉 重隆
			小林 寅次郎					武藤 源吉
			皿谷 廣次		明45	1912	専攻部	石川 周
			高橋 兵三		大1			草刈 元
			田中 長蔵					小宮山 敬保
			西 一雄					福原 要蔵
			本間 靖也					吉田 長祥
			松村 松次郎				本 科	石田 祐六
			三島 増一					加來 美智雄
			宗像 春城					倉田 勇三郎
			森田 文雄					二木 祥行
明42	1909	専攻部	大石 善四郎					蒔田 基彦
		本 科	浅原 大平					茂木 知二

卒業年次		課 程	氏 名		卒業年次		課 程	氏 名	
大2	1913	専攻部	池上	又四郎	大5	1916	本科	澤村 隆	
			尾上	利治	大6	1917	専攻部	伊東三右衛門	
			外岡	松五郎				金子鷹之助	
			藤谷	光之助			本 科	内田 貞夫	
			松本	潤治				内山 俊雄	
			湯川	萬壽夫				佐原 貴臣	
		本科	岸浪	義質				鈴木 善司	
			耕田	耕三				高山 雄三郎	
			逸見	磐				田中 金司	
			松尾	元顕				田中 徳次郎	
			山本	恒男				長松 佐藏	
大3	1914	専攻部	飯島	権蔵				野村 壽俊	
			石川	祐六				久持安司	
			加来	美智雄				舟木 茂	
			倉田	勇三郎				眞木 辰次	
			二木	祥行	大7	1918	専攻部	川島 浦次郎	
		本科	金井	貞隆				鹽崎 観三	
			椎木	文也			本 科	川口 巍	
			馬場	篤				佐々木 道三	
			原田	精市				佐道 徹	
			布施	公平				白井 俊夫	
			宮島	又信				富田 毅一郎	
			山本	喜幹				仁子 益次郎	
大4		専攻部	下出	義雄				堀 潮	
			逸見	磐				宮田 國次郎	
			師尾	誠治				森田 鋭吉	
		本科	伊藤	三右工門				柳沢健太郎	
			金子	鷹之助				吉田 義一	
			末成	茂	大8	1919	専攻部	高山 雄三郎	
			高谷	道男				田中 金司	
			中村	誠治				藤澤 次郎	
			中村	弘吉				舟木 茂	
			二宮	謙			本 科	岡田 榮一	
			山口	巖				小島 為延	
大5	1916	専攻部	金井	貞隆				原田 善市	
			椎木	文也				林 二郎	
			原田	精市				平川 勝彌	
			布施	公平				村松 恒一郎	
		本科	加藤	八重司				矢高 實	
			萑部	進				吉野 岳三	

卒業年次		課 程	氏 名	卒業年次		課 程	氏 名
大8	1919	本 科	小町谷 健	大13	1924	學 部	榊原 巖
大9	1920	専攻部	佐原 貴臣				須々木 卯太郎
			福田 敬太郎				遠山 不羈夫
			堀 潮				中村 初五郎
		本 科	君塚 茂太郎				西村 収市
			佐藤 武雄				野原 茂雄
			佐藤 甚一				本多 保太郎
			齋藤 茂夫			専門部	湯谷 俊美
			鮫島 壹	大14	1925	學 部	井田 世市
			中澤 慶之助				笹森 健三
			東野 純三				高見澤 平太郎
			服部 甲				高田 音吉
			藤飯 三郎右衛門				富本 保
			安間 徳勝				中村 丈夫
大10	1921	専攻部	林 二郎				森田 優三
			宮崎 力藏				藪田 克巳
			村松 恒一郎			養成所	河田 亮三
		本 科	浅野 順一				林 謙二
			石田 祐二	大15	1926	學 部	大神 謙二郎
			小菅 義雄	昭1			木村 賢治
大11	1922	専攻部	糸魚川 祐三郎				恒松 敏
			君塚 茂太郎				根道 廣吉
			齋藤 茂夫				花岡 芳樹
			中澤 慶之助				堀川 源作
			藤飯 三郎右衛門	昭2	1927	學 部	加瀬 恕
			茂木 知二				川島 東平
		本 科	稲田 龍一			専門部	木本 茂三郎
			加來 速人	昭3	1928	學 部	王 熙宗
			高山 繁				門脇 立郎
大12	1923	學 部	奥田 唯輔				久武 雅夫
			久保 岩太郎			専門部	井田 謹一
		本 科	糸永 望生				北川 進
			原田 弘				栗原 正次
		専門部	岡田 英爾				佐々木 捷雄
			久米 伊三美				福島 八郎
大13	1924	學 部	石川 勝司	昭4	1929	學 部	大平 善梧
			岩間 巖				岡本 進
			植竹 春彦				小宮 孝
			加瀬 矩郎				佐々木 芳丁
			金子 嘉徳				佐藤 朝雄

卒業年次		課 程	氏 名		卒業年次		課 程	氏 名
昭4	1929	學 部	佐藤 尚義		昭8	1933	學 部	植原 央一
			新川 傳介					眞島 信夫
			花田 榮一				専門部	志摩 良一
			古川 榮一					壽圓 秀夫
		専門部	渡邊 雄治					目良 昇
昭5	1930	學 部	縣 康					森 龍夫
			安藤 信夫		昭9	1934	學 部	梅野 典平
			小笠原 孝次					内藤 壽一
			佐藤 辰夫					廣瀬 佐一
			中村 武夫				養成所	野崎 富作
			日比野 清次		昭10	1935	學 部	奥村 徹
			山田 欽一					重藤 威夫
			山田 守十郎					武居 龍太郎
			赤崎 愛吉					横井 進吉
		専門部	小野 總八				専門部	武居 龍太郎
			星野 博愛					阪田 正三
			町田 新吉					千葉 清二
			水谷 俊雄				養成所	高崎 義秋
			芹澤 弘					田村 知彦
			北條 秀一		昭11	1936	學 部	大平 正芳
			渡辺 文蔵					清水 貞助
昭6	1931	學 部	今井 忍					長島 博
			王 士香					新里 清一郎
			奥山 誠					柳父 徳太郎
昭6	1931	學 部	木山 博精				専門部	河合 民助
			近藤 晋					木元 久
			佐久間 幸夫					塚本 卓爾
			關根 松夫					吉田 稠
			松浦 静		昭12	1937	學 部	石田 宗衛
			矢代 壽					岡野 満
			山本 二郎					木村 大三
		専門部	三好 英夫				専門部	土為 博敏
昭7	1932	學 部	今泉 仁藏		昭13	1938	學 部	秋山 東吾
			太田 文雄					金 有熙
			北川 進					正岡 敬
		専門部	川田 利雄					菅 重雄
			西田 進		昭14	1939	學 部	秋山 博
昭8	1933	學 部	猪熊 文夫					櫻内 武士
			小林 昌一					須川 浩
			小藤 新一					藤沢 三郎

卒業年次		課 程	氏 名	卒業年次		課 程	氏 名
昭14	1939	専門部	大滝 喜一	昭21	1946	學 部	中川 孝二
			野坂 泰三	昭22	1947	學 部	速水 優
			西森 気晴				中島 省吾
		養成所	広田 泰次	(昭27研)			弓削 達
昭15	1940		石井 欣吾			専門部	三浦 由雄
			今井 善樹				桜井 欽一郎
			長田 房雄	昭23	1948	學 部	新井 進
			川端 好雄				磯部 浩一
		専門部	岸井 寿一				裏 得郎
			北村 巧	昭24	1949	學 部	阿部 志郎
			杉村 武彦				中塚 誠一
			西川 雅	昭25	1950	學 部	竹田 腆
		養成所	佐山 博				辻部 俊介
			宮崎 武臣				吉村 肇
昭16	1941	學 部	倉光 和夫	(昭28学部)		専門部	渡辺 滉
			小嶋 翼	昭26	1951	學 部	金井 泉
			桜井 忠教				高林 俊男
			桜井 信行				寺田 武男
			坪田 龍夫				鳥居 聰之
			丸山 洋二				藤井 浩
	學部後期		本宮 荒砥	昭27	1952	學 部	大津寄 勝典
			松田 緝				内田 芳明
		専門部	小池 敏夫				杉浦 英一
		養成所	平野 保				成田 政俊
							八木 繁治
昭17	1942	學 部	大串 隆作				
			大庭 公一	昭28	1953	學 部	椎名 亮
			大森 證吉				原田 隆壽
			岡田 正勝				平出 亨
			金田 懋			商	森 陽
			久我 好正	昭29	(昭31院経)		中内 恒夫
			野坂 禮三	1954		経	兵藤 隆夫
			松村 次郎			社	野村 勝時
		専門部	加藤 曰				岸田 尚治
			戸叶 正巳	昭30	1955	商	堀地 史郎
		養成所	小柳 恭郎			経	廣瀬 信幸
昭18	1943	學 部	小林 正治	昭31	1956	商	野崎 正剛
昭19	1944	學 部	井上 彰二			経	甲斐 拓也
			大木 英二	昭32	1957	院	永島 敬識
			小此木 達夫			社	安岡 英一
			森永 進	昭33	1958	社	須部 浩右
		専門部	太田 政喜	昭34	1959	商	高橋 良治
			膝 岳宗			商	原 光晴

卒業年次		課 程	氏 名		卒業年次	課 程	氏 名
昭34	1959	法	渡辺 一雄		昭47	1972	社 加藤 順
昭35	1960	商	遠藤 幸男				社 千保 喜久夫
		法	湯本 倭章				商 西浦 道明
		法	後藤 省爾		昭48	1973	社昭50法 阿久戸 光晴
		法	松尾 庄平				法 岩谷 滋雄
昭36	1961	経	米谷 理功				社 鈴木 望
		社	永井 孝平		昭49	1974	法 飯島 健司
		院社	熊田 長生				法 市村 陽典
昭37	1962	経	加藤 壮三				社 寺師 並夫
		経	湯川 久義		昭50	1975	経 関屋 浩一
		経	渡部 雄二				商 永井 史郎
		法	佐藤 耕一				法 関 和義
昭38	1963	商	柏倉 誠				社 勝山 隆
		商	野原 貞夫				社 長瀬 潔
昭39	1964	経	三堀 浩		昭51	1976	法修法 大芝 亮
	経昭42院社		高橋 真司		昭52	1977	法 青崎 敏彦
昭40	1965	商	瀧浦 満				法 真野 千司
		経	松島 征一郎				法 八代 龍之介
		経	三宅 勝三				法 山本 秀明
		法	野中 宏太郎				経 宮城 勉
昭41	1966	商	津村 俊夫		昭53	1978	社 石塚 弦一郎
		経	長沢 正人				経 生原 伸夫
		経	渡邊 徹				商 藤本 政司
昭42	1967	商	藤原 尚				商 山崎 一平
		経	伊東 新祐		昭54	1979	法 小瀬 嗣雄
	経昭46院社		栗生澤 猛夫				法 佐藤 周一
昭43	1968	法	巨勢 泰幸				法 内藤 満
		社	川勝 高宏				商 野上 政郎
		法	辻本 泰久				経 諸遊 哲彦
		社	宮岡 五百里		昭55	1980	経 阿部 周一
		経	荻野 興一				経 阪中 明人
昭44	1969	商	永嶺 雄三				社 中山 泰吉
		経	松田 薫				法 安丸 徹
		法	秋山 武夫		昭56	1981	商 本田 茂
昭45	経昭48修社		鈴木 一策		商昭61修商		今橋 隆
1970	経昭47修経		山本 通		昭57	1982	経 小栗 真吾
昭46	1971	社	江藤 直純				経 多田 宏明
		商	儀賀 裕理				社 高橋 知史
	経昭48法		齋藤 金義				商 盛岡 邦夫
	経昭48社		桜井 直文				経 小林 英彦
		社	樋口 聰		昭58	1983	法 金子 衛
		社	中村 正俊				法 広瀬 武司

卒業年次		課 程	氏 名		卒業年次		課 程	氏 名
昭58	1983	経	榊田 明敏		平5	1993	法	豊 義人
		法	守田 俊之				法	山本 信義
昭59	1984	有平成1社	伊藤 淳		平6	1994	経	杉島 達也
		商	境 紳隆				社	淵辺 穰
		商	飛田 光利				社	八木 伸介
		社	下荒神 武				経	渡部 健人
		社	安井 禎		平7	1995	経	川端 建
昭60	1985	経	稲永 祐樹				法	佐々木 有人
		法	大鹿 純		平8	1996	社	小池 善太
		法	滝澤 英一				社平10修	片山 晃
		法	古倉 義彦				商	山口 威
		社	山崎 学				経	安元 誠
昭61	1986	法	川添 淳		平9	1997	社	大田 俊寛
		社	佐藤 公彦				法	加納 正啓
		法	縄田 克之				商	田代 信吾
		社	峯村 政孝				経	立入 政之
昭62	1987	社	芦田 耕一				経	松本 空也
		法	竹田 司		平10	1998	法	相沢 伸行
昭63	1988	法	大秋 英彦				経	佐藤 弘毅
		法	岡本 誠之				社	福元 洋平
		法	高杉 優弘		平11	1999	商	浅井 嘉人
		法	丹野 泰樹				法	大館 章宏
		商	福嶋 要一				商	池田 太郎
		社	藤田 慶彦				法	板倉 寛
平1	1989	法	大溝 日出夫				経	長房 勝也
		商	初海 秀夫				法	中島 祐一
		社	山田 待雄				商	本村 天
平2	1990	商	久野 伸一郎		平12	2000	社	白潟 大
		商	桜井 進				商	堀口 洋次郎
		法	崔 勇				社	吉田 護
		法	杉尾 昭彦		平13	2001	経	青木 甲太郎
		社	中田 一朗				社	磯尾 健司
平3	1991	商修商	阿久津 聡				法	久門 武史
		経	川浦 秀之		平14	2002	経	志賀 洋之
		社平5修社	鈴木 宗徳				商	中村 研太
平4	1992	商	橋本 久仁夫				法	李 文光
		商	古畑 伸一郎		平15	2003	法	秋村 康介
		社	平井 啓三				社	岡 秀樹
平5	1993	商	菅野 浩生				社	面谷 隆祐
		商	宮崎 泰介				経	片岡 敬裕
		経	川崎 啓之				経	大門 雅弘

卒業年次		課 程	氏 名		卒業年次		課 程	氏 名
平15	2003	法	高橋 伸輔		平25	2013	経	荒浜優貴
		法	林 尚宏				商	岡田健太郎
平16	2004	法	岩見 至哲				社	永井 一樹
		経	片岡 寛				商	堀内晴来
		社	門脇 拓弥				社	宮崎祐也
		経	高市 芳郎		平26	2014	社	中村 翼
		商	山藤 竜太郎				社	古橋 大佑
		商	野吾 雅史				社	村山 透梧
平17	2005	商	萩原 裕輔			商平28修商		吉永 裕登
		社	藤田 洋平		平27	2015	社	相馬 皓介
		社	松木 雄太				社	福島 徹
平18	2006	修経	秋元 寿方				商	松本 和也
		経	伊藤 泰蔵				経	満井 一成
		経	白川 嶺		平28	2016	経	岡本 政之
		商	杉山 晶彦				社	鶴井 瑛良
		経	谷口 健太郎				経	津崎 浩平
平19	2007	商	崎本 淳				社	政木 敦憲
		商	張 中飛		平29	2017	商	大崎 友裕
平20	2008	経	板垣 信行				社	田村 勝裕
		経	宇田川 量平				経	二瓶 琢也
		法	中村 翔平				経	高橋 純平
		社	南 弘毅		平30	2018	法	小谷 悠樹
		商	成富 太郎				経	仁藤 将史
		経	平山 進也				経	山田 哲也
平21	2009	経	東 哲郎		平31	2019	社	大城 幹雄
		社	後藤 俊二				社	建内 瑛貴
		商	嶋 浩太郎				商	三品 直樹
		経	平川 太一朗				法	川村 勇太
平22	2010	経中退	安藤 誠				法	祖根 昂大
		法	権藤 孝典					
		法	芳本 大輔					
		社	畠山 順丞					
		商	千葉 諒					
平23	2011	経	小原 幹康					
		経	片桐 豪隼					
		商	高橋 知治					
		商	植橋 慧介					
平24	2012	経	阿井 康平					
		社	永井 一樹					
		社	原 陽祐					
		法	宮城 康智					

在学年次	課 程	氏 名
大学院	社	大城 幹雄
4年生	商	菊岡 義洋
	経	川畑 輝
	経	前田 雄飛
	法	星 一樹
3年生	経	高橋 正幸
	経	北田 志聞
2年生	商	今川 明人
	経	小林 莉希
	商	鳥居 大朗
	社	松原 悠紀
	社	弓場 耀平
1年生	経	清野 紘大
	商	桑江 竜威
	経	下野 治
	商	橋田 陽平
特別会員		
部長・顧問	一橋大学名誉教授	田上 穰治
	一橋大学名誉教授	齋藤 忠利
	一橋大学名誉教授	山田 欽一
	一橋大学名誉教授	土岐 健治
	一橋大学法学部教授	葛野 壽之
聖書研究会指導	元国立教会主任牧師	穴戸達
	女ケ丘キリスト教会主任牧師	水口 功
	国立教会主任牧師	宮寄 薫
寮母	1935～1945	大堀 しげ
	1946～1959	馬場 尚美
	1959～1979	松本 和子
	1979～	山口 朝子
	1979～1990	佐藤 (旧姓富田) 信子
	1993～2007	野澤 琶寿恵
	2009～2019	氏家 和子
	2019～	今井 道子
		原田 典子
		村越 美鶴

一橋大学基督教青年会 会報



昭和 34(1959)年 11 月 寮祭

瀧浦 満 加藤壮三 湯本倭章 後藤省爾 野原貞夫
堀地史郎 渡辺靖夫 永井孝平 湯川久義 柏倉 誠 米谷理功 渡辺雄二 遠藤幸雄 松尾庄平
松本寮母 久武雅夫 布施公平 飯島権蔵 北条秀一 桜井信行
(敬称略)

第 50 号 2008 年 12 月

目 次

巻 頭 言

会報第50号の発行に寄せて

理事長 齋藤金義 (昭46経)1

随 想

小田切信男先生との出会い

渡辺 滉 (昭28学)2

雑 感

永井孝平 (昭36社)4

文化の狭間で ― 漢方とホメオパシー

瀧浦 満 (昭40商)5

喜びと祝福の源泉

高橋眞司 (昭40経)7

YMCA 寮と MOZART

藤原 尚 (昭42商)8

大学生活回顧、最近思うことなど

飯島健司 (昭49商)10

一橋 YMCA 寮の思い出

諸遊哲彦 (昭54経)12

これも導き？

中山泰吉 (昭55社)13

YMCA 一橋寮の思い出

下荒神武 (昭59社)16

おろかな、あまりにおろかな

伊藤 淳 (昭59商)17

日本とブラジルを結ぶもの

高杉優弘 (昭63法)19

本会議場観察の楽しみ

久門武史 (平13法)20

最近思うこと、考えること

岩見至哲 (平16法)21

海外便り

アメリカ合衆国 ニューヨークから

秋山武夫 (昭44法)22

大韓民国 ソウルから

山崎 学 (昭60社)23

連合王国(英国) ロンドンから

藤田慶彦 (昭63社)25

中華人民共和国 広州から

岡 秀樹 (平15社)27

遺 稿

日々雑感

故 樋口 聰 (昭46社)28

弔 辞

山本 通 (昭45経)30

論 考

死者の願いに耳をすますー永井隆のばあい

高橋眞司 (昭40経)31

講演抄録

人生の歩み

阿部志郎 (昭24学)35

理事会からのお知らせ

法人化の目的と具体案について

理事長 齋藤金義 (昭46経)39

編集後記

編集人 瀧浦 満 (昭40)

一橋大学基督教青年会 会報



2009年6月総会にて

第51号
2009年7月

2009 年度会報 目次

・ 巻頭言

理事長 齋藤金義

《2008 年度・2009 年度の寮活動報告》

- ・ 寮長 檜橋慧介 寮の近況報告
- ・ 3 年 小原幹康 2008 年度一橋祭報告
- ・ 3 年 片桐豪隼 2008 年度寮祭報告
- ・ 4 年 平川太一郎 一橋祭歌合戦報告

《新入生によるエッセー》

- ・ YMCA 一橋寮で大学生活をはじめて 1 年 荒浜優貴
- ・ 寮生でよかった 1 年 岡田健太郎
- ・ Random acts of kindness 1 年 堀内晴来
- ・ これまでの生活と今後に向けての指針 1 年 宮崎祐也

《2010 年卒寮予定者によるエッセー》

- ・ 卒寮にあたって伝えたいこと 4 年 千葉諒
- ・ 4 年間の寮生活を振り返って 3 年 芳本大輔

《昨年度 YMCA 活動参加者による所感》

- ・ チェコプログラム参加の所感 3 年 高橋知治 チェコプロジェクト

《1 年間聖書研究を経験して》

- ・ 聖書に触れて見て 2 年 阿井康平
- ・ 「エンジョイ！」一年間の聖書研究を通して学んだこと。
2 年 宮城康智

《OB の近況報告》

- ・ 2009 年卒 後藤俊二
- ・ 街の夜の警察当直 2003 年卒大門雅弘

《寮母さん挨拶》

- ・ 1 年を振り返って 寮母 氏家和子

《2009 年度 定時総会報告》

- ・ 総会概要
- ・ 寮生報告
- ・ 理事会報告事項
- ・ 理事会審議事項

《会員消息》

《編集後記》

一橋大学基督教青年会 会報



昭和 39 (1964)年 予餞会

栗生澤猛夫 巨勢泰幸 藤原 尚 谷中宏太郎 高橋眞司 伊東新祐
 湯川久義 津村俊夫 遠藤裕史 瀧浦 満 後藤省爾 (不明) 三堀 浩 長沢正人 三宅勝三
 渡辺一雄 (不明) (不明) 君塚茂太郎 久保岩太郎 飯島権蔵 大堀寮母 松本寮母 桜井信行
 (敬称略)

第 52 号 2009 年 12 月

一橋大学基督教青年会 会報 第52号 (2009年12月) 目 次					
巻 頭 言	理事長	齋藤 金義	(1971:昭46経)	……	1
特 集 I	学生キリスト教運動の歴史回顧		(編集人)	……	2
	回想ー日本YMCA同盟の委員会にて	中島省吾	(1947:昭22学)	……	3
	終戦前後に於ける一橋寮生活	故 裏 得郎	(1948:昭23学)	……	4
	東京基督教学生会の運動	寺田武男	(1951:昭26学)	……	6
	敗戦直後の歩みー東京基督教学生会の喜びと悲しみ	故 弓削 達	(1947:昭22学)	……	8
	荒廃と再建	後藤省爾	(1960:昭35法)	……	14
随 想	中山教授・純粹経済学を読む	大津寄勝典	(1952:昭27学)	……	17
	小人の戯言	湯本倭章	(1960:昭35商)	……	17
	キタ・レリギオニス	加藤壮三	(1962:昭37経)	……	18
	ピアノとフルート	野原貞夫	(1963:昭38商)	……	21
	一橋YMCAへの感謝と抱負	中村正俊	(1971:昭46社)	……	24
	家族の中で祈りの手を挙げる	長瀬 潔	(1975:昭50社)	……	26
	YMCA落第生	宮城 勉	(1977:昭52経)	……	29
	寮、信仰、そして職業	高橋知史	(1982:昭57社)	……	30
	東京に赴任して	浅井嘉人	(1999:平11商)	……	32
	心のさわやかた	林 尚宏	(2003:平15法)	……	33
	社会人生活4年目を迎えて思うこと	杉山晶彦	(2006:平18商)	……	34
海外便り	資本主義の勝利はこれからだーケニアで考えたこと	岩谷滋雄	(1973:昭48法)	……	36
	旧満州から熱き心で	峯村正孝	(1986:昭61社)	……	38
	サウジアラビア駐在を振り返って	高市芳郎	(1994:平 6経)	……	40
追 悼	夫、西森気晴の追憶 (故 西森気晴夫人)	西森香代	(1939:昭14門)	……	42
	速水優さんを追憶して	阿部志郎	(1949:昭24学)	……	44
	(遺稿) 教会に支えられて	故 速水 優	(1947:昭22学)	……	45
	丹野さんの悲報	大秋英彦	(1988:昭63法)	……	55
	丹野さんの思い出	菅野浩生	(1993:平 5経)	……	55
論 考	ブランドとは何か	阿久津 聡	(2001:平 3商)	……	58
講演記録	地方自治の現状と課題ー平成大合併の光と影	鈴木 望	(1973:昭48社)	……	60
聖書の世界	考古学と聖書ー旧約聖書の世界としての古代オリエント	津村俊夫	(1966:昭41商)	……	63
	主の御言葉を原語で朗読しない理由	生原伸夫	(1978:昭53経)	……	66
	OBチューターの目から見た一橋寮聖研の今(この10年)	山本信義	(1997:平 5法)	……	67
特 集 II	キリスト教の宗派と教会生活 (第一回)		(編集人)	……	70
	プロテスタントとカトリック (ローマ・カトリック)	齋藤金義	(1971:昭46経)	……	71
	教会生活:ローマ・カトリック教会 (ローマ・カトリック)	山本 通	(1970:昭45経)	……	73
	ある日の聖書研究会 (ローマ・カトリック)	柏倉 誠	(1963:昭38商)	……	76
	二つの教会 (日本基督教団)	加藤 順	(1972:昭47社)	……	78
	所属教会の教会生活 (日本バプテスト連盟)	川勝高宏	(1968:昭43社)	……	80
理事会便り	一般財団法人設立に伴う定款等の制定について	齋藤金義	(1971:昭46経)	……	82
編集後記			(編集人)		

一橋大学基督教青年会

会報



第53号 会報

2010年7月

～2010 年度会報 目次～

・ 巻頭言	・ 理事長	齋藤金義	2 P
《2009 年度・2010 年度の寮活動報告》			
・ 寮の近況報告	・ 寮長	宮城康友	5 P
・ 2009 年度一橋祭・寮祭報告	・ 4 年	小原幹康	6 P
《新入生によるエッセイ》			
・ 時計とスタ井とハードロッカー	・ 1 年	中村翼	7 P
・ 充実した生活のために。	・ 1 年	古橋大祐	8 P
・ YMCA 一橋寮に入って	・ 1 年	村山透梧	9 P
・ 大学生活での抱負	・ 1 年	吉永裕登	10 P
《2、3 年生によるエッセイ ～大学生活も半ばに差し掛って～》			
・ 僕もリア充になりたい	・ 2 年	堀内晴来	11 P
・ 大学生活も折り返しを迎えて	・ 3 年	阿井康平	12 P
《2011 年卒業予定者によるエッセイ》			
・ YMCA 一橋寮よ、永遠なれ	・ 4 年	畠山順丞	14 P
・ YMCA 一橋寮	・ 4 年	檜橋慧介	15 P
《卒寮生によるエッセイ》			
・ 卒寮生のエッセイ	・ 2009 年卒	平川太一郎	17 P
・ 社内公用語が英語になる？	・ 2003 年卒	面谷隆祐	18 P
《昨年度 YMCA 活動参加者による所感》			
・ YMCA 地球市民育成プロジェクトに参加して	・ 2 年	荒浜優貴	20 P
・ 韓国学生 YMCA 訪問	・ 2 年	永井一樹	21 P
・ YMCA 寮関係者協議会議事録	・ 4 年	小原幹康	22 P
《寮母さん挨拶》			
・ YMCA 一橋寮って…？	・ 寮母	氏家和子	25 P
《2010 年度定時総会報告》			
・ 2010 年度 YMCA 一橋寮総会講演会記録	・ 4 年	小原幹康	26 P
・ 総会報告			28 P
・ 評議会報告			39 P
・ 定款			42 P
《編集後記》			
会報担当：2 年 宮崎祐也			53 P

一橋大学基督教青年会 会 報



昭和 41(1966)年 11 月 寮祭

川勝高宏 岩本修一牧師 辻本泰久 栗生澤猛夫 宮岡五百里 鈴木一策 山本 通 藤原 尚
荻野興一 秋山武夫 新里清一郎 瀧浦 満 松田 薫 伊東新祐 野原貞夫 永嶺雄三
松本和子 大堀しげ 君塚茂太郎 目良 昇 浅原丈平 飯島権蔵 久保岩太郎 田上穰治 山田欽一
(敬 称 略)

第 54 号 2010 年 12 月

巻頭言		理事長 齋藤金義	(1971:昭46経)	……	1
		評議員会 会長 堀地史郎	(1955:昭30商)	……	2
特集 I	学生基督教運動の歴史回顧(第2回)	(編集人)		……	3
	ジョン・アール・モット博士の面影	寺田武男	(1951:昭26学)	……	4
	我が希望の根拠	J.R.Mott	(1865~1955)	……	6
	昔日のYMCA一橋寮	大木英二	(1944:昭19学)	……	10
	学問と信仰	大木英二	(1944:昭19学)	……	14
	日本の民主政治は光に面するか	大平正芳	(1936:昭11学)	……	19
	晩年に想う	中内恒夫	(1954:昭29商)	……	21
	大学時代の回想…そして、歩んできた道	堀地史郎	(1955:昭30商)	……	24
	不測の日々…昭和30年代から	瀧浦 満	(1965:昭40商)	……	27
	詩と人生	高橋眞司	(1965:昭40経)	……	29
	私が拘ってきた事務所経営	西浦道明	(1972:昭47商)	……	34
	一橋大学YMCAの将来展望	渡辺 徹	(1966:昭41経)	……	38
随 想	YMCA一橋寮とその後の私の人生	湯川久義	(1962:昭37経)	……	41
	回想:YMCA一橋寮	三堀 浩	(1964:昭39経)	……	44
	絵描きを最後の仕事に	松島征一郎	(1965:昭40経)	……	46
	駆け抜けたYMCA一橋寮	伊東新祐	(1967:昭42経)	……	48
	随想 ---妻を亡くして---	宮岡五百里	(1968:昭43社)	……	51
	「モラトリウムの日々」を振り返って	金子 衛	(1983:昭58法)	……	54
	48歳の放蕩息子、原点に立ち返る	川添 淳	(1986:昭61法)	……	55
	世界の中で、異なる価値観の中で	岡本誠之	(1988:昭63法)	……	58
	裁判における言葉の力	櫻井 進	(1990:平2商)	……	61
	オープンイノベーションのススメ	本村 天	(1999:平11商)	……	62
中国紀行	上海万博と蘇州・杭州の旅日記	永井一樹	(商学部2年)	……	64
	中国経済の現状(丹羽弘之氏の報告要約)	山本 通	(1970:昭45経)	……	65
	中国旅行で感じたこと	齋藤金義	(1971:昭46経)	……	68
論 考	B.シーボーム・ラウントリーの日本訪問について	山本 通	(1970:昭45経)	……	70
	「個人化」する日本社会	鈴木宗徳	(1991:平3社)	……	77
講演抄録	刑事罰強化と社会的弱者の受刑者	葛野尋之	一橋大学教授	……	80
聖書の世界	2010年度一橋寮聖書研究会報告	山本信義	(1997:平5法)	……	82
特集 II	キリスト教の宗派と教会生活	(編集人)		……	84
	聖公会の教会に連なって	佐藤耕一	(1962:昭37法)	……	84
	正教会	飯島健司	(1974:昭49商)	……	87
編集後記		(編集人)		……	92

一橋基督教青年会 会報



会報第 55 号 2011 年 7 月発行

2011 年度会報 目次

巻 頭 言.....	2
寮長より.....	4
YMCA 寮はキリストの御体（みからだ）!?	5
テーマエッセイについて.....	6
《聖書研究に関するテーマエッセイ》	
自分にとっての聖書研究とは.....	7
それぞれの聖書研究.....	8
聖書研究の意義.....	9
3 年間聖書を学んで	10
《学校生活に関するテーマエッセイ》	
充実学校生活.....	12
学校生活について.....	13
学校生活 3 年目.....	14
大学に居場所が無くなってきた今日この頃.....	15
《寮運営に関するテーマエッセイ》	
YM 寮はこんな寮	16
「より良く過ごせる」寮へ.....	17
イメージの寮運営と実際の寮運営.....	18
YM 寮のこれまでとこれから	19
《寮生活に関するテーマエッセイ》	
初めての寮生活.....	21
寮生活いろいろ.....	22
上京から早 3 年.....	23
寮生活について.....	24
東北での救援活動に参加して.....	26
編集後記.....	30

一橋大学基督教青年会 会 報



昭和 41(1966)年 6月 総会

(後列左から順に)

伊東新祐 松田薫 藤原尚 辻本泰久 山本通 鈴木一策 荻野興治 永嶺雄三 秋山武夫 宮岡五百里 川勝高宏

阿部志郎 秋山東吾 新里清一郎 中島省吾 渡邊徹 津村俊夫

(前列左から順に)

大堀しげ 松本和子 山田欽一 北條秀一 飯島権蔵 武井大助 君塚茂太郎

((敬 称 略))

第 56 号 2011 年 12 月

	会報第56号 目次		
巻頭言	理事長	齋藤金義	(1971:昭46経)
理事会便り	2011年度定期総会及び評議員会報告		
特集 I	学生基督教運動の歴史回顧(第3回)	(編集人)	
	在素知贅	大平正芳	(1936:昭11学)
	国立の四季	杉浦英一	(1952:昭27学)
	昭和40年代の一橋大学基督教青年会活動の回顧	齋藤金義	(1971:昭46経)
	YMCA一橋寮に関するアンケート結果について	齋藤金義	(1971:昭46経)
随 想	三夜一夜物語……死と生	渡邊一雄	(1959:昭34法)
	アメリカの110番	瀧浦 満	
	近年のキリスト教関連出版に思う	儀賀裕理	(1971:昭46商)
	一橋YMCAと起業	中村正俊	(1971:昭46社)
	教育機関に勤め福祉について思うこと	千保喜久夫	(1972:昭47社)
	新しい時代の地方政治のあり方	鈴木 望	(1973:昭48社)
	地方議会の根源的なあり方	鈴木 望	(1973:昭48社)
	紙と鉛筆の時代から	市村陽典	(1974:昭49法)
	私とYMCA一橋寮	青崎敏彦	(1977:昭52法)
	我が歩みを振り返って	石塚弦一郎	(1978:昭53社)
	日々の仕事の中で思うこと	安井 禎	(1984:昭59社)
	憧 憬	山田待雄	(1989:平01社)
	マンション管理組合の発足期における運営と課題	礪尾健司	(2001:平13社)
海外便り	「いざ雄飛せん五大州」の精神で	秋山武夫	(1969:昭44法)
	ニューヨークの『恋(しい)青空』	藤田慶彦	(1988:昭63社)
	変化@中国広州	岡 秀樹	(2003:平15社)
追 悼	阿部周一君の思い出	中山泰吉	(1980:昭55社)
名著を読む	堀込庸三『正統と異端:ヨーロッパ精神の底流』	山本 通	(1970:昭45経)
講演記録	現代キリスト教教育の現状と課題について	阿久戸光晴	(1973:昭48社)
	近代工業化社会はなぜ英国で始まったか	山本 通	(1970:昭45経)
特集 II	キリスト教の宗派と教会生活 (3)	(編集人)	
	ルーテル教会について	江藤直純	(1971:昭46社)
会員便り	会員近況だより		
編集後記		(編集人)	

一橋大学基督教青年会 会報



会報「第57号 2012年 7月発行

2012年度会報 第57号 目次

巻 頭 言	理事長 齋藤 金義	- 2 -
寮長挨拶	経済学部 3 年 村山 透梧	- 4 -
思う事	寮母 氏家 和子	- 5 -
テーマエッセイについて	社会学部 2 年 福島 徹	- 5 -
私とYMCA 一橋寮との出会い	経済学部 岡本政之	- 6 -
素晴らしき寮生活	経済学部 津崎 浩平	- 7 -
YMCA一橋寮での生活と大学	鶴井 瑛良	- 8 -
『YMCA 一橋寮』という生活スタイル	社会学部 1 年 政木敦憲	- 9 -
渡り鳥	社会学部 2 年 相馬 皓介	- 10 -
もう1次元上の自分へ・・・	社会学部 2 年 満井 一成	- 10 -
寮食と柔道	社会学部 2 年 福島 徹	- 12 -
今年も充実した1年を	商学部 2 年 松本 和也	- 13 -
今年度の寮運営について	経済学部 3 年 村山 透梧	- 14 -
広報・規則担当として	社会学部 3 年 古橋 大佑	- 15 -
設備担当幹部として	商学部 3 年 吉永 裕登	- 16 -
私を変えたふたつの体験	社会学部 3 年 中村 翼	- 17 -
私は寮のどの部分？	商学部 4 年 堀内晴来	- 18 -
多くの方々の協力に感謝して	社会学部 4 年 宮崎 祐也	- 19 -
ありがとう！YMCA 一橋寮	経済学部 4 年 荒浜 優貴	- 20 -
寮生活の意義を振り返って	経済学部 4 年 岡田健太朗	- 21 -
ヤムチャとはお茶飲みながら点心を食うこと	社会学部 2 年 相馬 皓介	- 22 -
定期総会・評議員会報告		- 23 -
総会資料		- 26 -
編集後記		- 35 -

一橋大学基督教青年会 会 報



2012 年 12 月 8 日 当会 125 周年記念会 如水会館 松風の間

第 58 号 2012 年 12 月

会報第58号 目次					
巻頭言	当会125周年に思う 理事長	齋藤 金義	(1971:昭46経)	1
理事会便り	YMCA一橋寮の将来ビジョン	齋藤 金義	(1971:昭46経)	3
論説	攘夷思想とキリスト教	齋藤 金義	(1971:昭46経)	8
	「世界子ども白書を読む」	高橋 眞司	(1965:昭40経)	12
随 想	YMCA一橋寮の将来ビジョン	堀地 史郎	(1955:昭30商)	15
	にいがた便り	加藤 順	(1972:昭47社)	16
	将来ビジョンについての意見	川添 淳	(1986:昭61法)	19
海外便り	日本がオーストリアに学べること	岩谷 滋雄	(1973:昭48法)	20
	ブラジルで知ったこと	藤田 洋平	(2005:平17社)	22
	海外からの便り ～メキシコでの研修を終えて～	後藤 俊二	(2009:平21社)	26
海外研修報告	ヨーロッパ視察研修報告 はじめに				28
	ヨーロッパで感じたこと	荒浜 優貴	(経済学部4年)	29
	ブダペストに見る近代史に対する態度	岡田 健太朗	(商学部4年)	32
	欧州視察研修を通じて学習したこと	吉永 裕登	(商学部3年)	34
	ジョグジャカルタ・ワークキャンプ参加報告	岡本 政之	(経済学部1年)	37
追 悼	中内恒夫さんを偲んで	堀地 史郎	(1955:昭30商)	41
	須部前理事長の当会へのご貢献に感謝して	齋藤 金義	(1971:昭46経)	42
	須部浩右寮長の思い出	渡邊 一雄	(1959:昭34法)	44
名著を読む	「宗教と資本主義の興隆:歴史的研究」	山本 通	(1970:昭45経)	45
	R・H・トーニー				
講演記録	オウム真理教とはなんだったのか	大田 俊寛	(1997:平9社)	49
聖書の世界	「族長時代のペリシテ人」	津村 俊夫	(1966:昭41商)	55
編集後記		(編集人)		60

一橋大学基督教青年会 会報



第59号 2013年7月

一橋大学基督教青年会会報 第 59 号 目次 (2013 年 7 月)

巻頭言・新寮の再建と寮費の大幅な値上げについて	理事長 齋藤金義 (昭 46 経・48 法)	3
寮長挨拶	寮長 満井一成 (3 年 経済学部)	4
テーマエッセイについて	編集人 岡本政之 (2 年 経済学部)	5
寮での新しい生活と大学での目標	大崎友裕 (1 年 商学部)	6
人の支えを感じて	高橋純平 (1 年 経済学部)	7
念願の一橋大学での学生生活	田村勝裕 (1 年 社会学部)	8
全く違う生活	二瓶琢也 (1 年 経済学部)	9
より充実した 1 年間のために	岡本政之 (2 年 経済学部)	11
結論から言うとなごく楽しかったです。	津崎浩平 (2 年 経済学部)	12
2年目の大学生活	鶴井瑛良 (2 年 社会学部)	13
自分を成長させてくれた人々	政木敦憲 (2 年 社会学部)	14
近世の農業の在り方	相馬皓介 (3 年 社会学部)	16
教育社会学のススメ	福島徹 (3 年 社会学部)	17
未だ夢物語	松本和也 (3 年 商学部)	18
グローバル人材にむけて	満井一成 (3 年 経済学部)	19
信仰と共同生活から学んだこと	中村翼 (4 年 社会学部)	20
私の聖書研究史	古橋大佑 (4 年 社会学部)	21
わたしにとっての聖書研究	村山透梧 (4 年 経済学部)	22
聖書研究と大学院	吉永裕登 (4 年 修士 1 年 商学部)	23
ポジティブな自己否定	宮城康友 (平 24 法)	25
125 周年記念会記念講演記録「キリスト教は現代に生きる私たちに何を語りうるか」	中川博道神父	28
一般財団法人 一橋大学基督教青年会 評議員会 議事録		37
YMCA 一橋寮将来ビジョン検討委員会 答申(案)		48

一橋大学基督教青年会 会 報



YMCA 一橋寮と
チャペル



一橋大学図書館

第 60 号 2013 年 12 月

一橋大学基督教青年会 会報第60号(2013年12月発行)

目次				
巻頭言	絆こそを大切にしたい 理事長	齋藤 金義	昭46経1
理事会便り	評議委員会決議	堀地 史郎	昭30商2
将来ビジョン	委員会答申	宮岡 五百里	昭43社5
随想	YMCA寮の建設に思う	渡辺 徹	昭41経11
	夜間神学校は元気です	川勝 高宏	昭43社12
	自由人たちの宴	境 紳隆	昭59商15
	育児休暇とりました	淵辺 穰	平6社16
	会計士としての日々	佐藤 弘毅	平10経19
	ある大学教員の一年	山藤 竜太郎	平16商20
	絶景しまなみ海道	伊藤 泰蔵	平18経22
	YMCA寮への感謝と近況報告	中村 翔平	平20法24
海外研修報告	YMCAヨーロッパフェスティバル参加報告	岡本 政之	経済学部2年28
追悼	本田茂さんの思い出について	金子 衛	昭58法32
	本田茂さんを送る言葉	滝澤 英一	昭60法33
	本田茂兄を偲んで	稲永 祐樹	昭60経35
名著を読む	フランクリン『自伝』	山本 通	昭45経36
私の本棚	山浦玄嗣『イエスの言葉』	山本 通	昭45経47
	小田垣雅也『キリスト教の歴史』	儀賀 裕理	昭46商50
講話	東女でのメッセージ	関 和義	昭50法52
修養会	YMCA学生修養会について	齋藤 金義	昭46経57
	学生YMCA修養会に参加しての感想	阿南 清士朗	九州大学4年58
	講話:一緒に聖書を読もう	江藤 直純	昭46社60
	講話:聖書の人間へのまなざし・・・「あなたは誰」・・・	中川 博道	カルメル会修道士63
	講話:アフリカを知ろう:現代に生きる私たちの課題	甲斐 信好	昭57社66
聖書の世界	聖書研究会チャペル班、2013年度を終えて	山本 信義	平5法69
編集後記		編集人	74

一橋大学基督教青年会 会報



第61号 2014年7月

一橋大学基督教青年会 会報第61号(2014年7月発行)

目 次

巻頭言	YMCA一橋寮再建のために	齋藤金義	(1971年:昭46経)1
寮長挨拶	寮長挨拶	岡本政之	(経済学部3年)3
随想	テーマエッセイについて	田村勝裕	(社会学部2年)4
	新たな生活を始めて	小谷悠樹	(法学部1年)4
	Re-Start	仁藤将史	(経済学部1年)5
	不安と期待	山田哲也	(経済学部1年)6
	1年間を過ごしてみても	大崎友裕	(商学部2年)7
	遊び	高橋純平	(経済学部2年)8
	1年間の大学生活を経て	田村勝裕	(社会学部2年)8
	I need to be myself	二瓶琢也	(経済学部2年)9
	寮生活における公共性について	岡本政之	(経済学部3年)10
	ダメ学生	津崎浩平	(経済学部3年)11
	学問と専攻を通して	鶴井瑛良	(社会学部3年)12
	やっていることが「学問」.....	政木敦憲	(社会学部3年)13
	最初の神様 相馬皓介	相馬皓介	(社会学部4年)14
	学び	福島徹	(社会学部4年)15
	聖書を読み続けて	松本和也	(商学部3年)16
	夕べがあり、朝があつた	満井一成	(経済学部4年)17
追悼	中島省吾様通夜式(2014, 1, 3)	穴戸達牧師	(国立教会)18
	中村省吾さんを想う	阿部志郎	(1949年;昭24学)22
	中島省吾先輩を偲んで	堀地史郎	(1955年;昭30商)23
	中島省吾元理事長に感謝	齋藤金義	(1971年:昭46経)25
理事会便り	第1回募金推進委員会議事録	理事会	28
	募金推進に関するQ&A		30
	募金趣意書(昭和40年以前卒業生)		33
	募金趣意書(昭和41年以降卒業生)		38
	2013年度総会・評議員会報告		41
	公益法人定款(案)		51
編集後記		田村勝裕		

一橋大学基督教青年会 会 報



2004 年新入生歓迎合宿 (於相模湖合宿所)

第 62 号 2014 年 12 月

一橋大学基督教青年会 会報第62号(2014年12月発行)				
目 次				
巻頭言	公益法人化の意義について 理事長	齋藤 金義	昭46経・昭48法	……1
学Y報告	全国学生YMCA代表者会議報告	岡本 政之	経済学部3年	……2
随想	政治の季節	加藤 壯三	昭37経	……4
	高齢者介護施設の現状と課題	川勝 高宏	昭43社	……9
	イギリスは美味しい	山本 通	昭45商	……12
	最後の2年間の子会社社長業	寺師 並夫	昭49社	……15
	『二生』を生きてとは言えませんが……	山本 秀明	昭52法	……17
	一橋YMCAの学生諸君へのメッセージ	山崎 一平	昭53商	……19
	我が半生とYMCA寮の思い出	佐藤 周一	昭54法	……21
	天野春子がキョンキョンだった頃	大溝 日出夫	平1法	……27
	非キリスト教徒がキリスト教を学ぶ意義と面白さ	山口 威	平8商	……28
	金を出しても口は出さない！?	板倉 寛	平11法	……30
	近況報告・育児	杉山 晶彦	平18商	……32
	関係という財産	宮城 康智	平24法	……33
	社会人生活を迎えて	阿井 康平	平25経	……35
追悼	滝浦 満君を偲ぶ	佐藤 耕一	昭37法	……36
	滝浦満君の思い出と当時の思い出	柏倉 誠	昭38商	……36
	瀧浦満君を偲ぶ	野原 貞夫	昭38商	……37
	「小さき愛の館」＝YMCA一橋寮と瀧浦満氏のこと	高橋 眞司	昭40経	……39
	滝浦満さんの思い出	渡邊 徹	昭41経	……42
	滝浦満先輩と過ごした寮生活	藤原 尚	昭42商	……43
	瀧浦さん、数寄者、楽しんでおられますか	伊東 新祐	昭42経	……44
	あのころのこと——滝浦満さんを偲ぶ	栗生沢 猛夫	昭42経	……47
	夫・瀧浦満の思い出	瀧浦 雅子		……53
海外研修報告	なぜ韓国ではキリスト教が盛んなのか	高橋 純平	経済学部 2年	……55
	韓国経済・日中韓三国関係について学んだこと	山田 哲也	経済学部 1年	……57
私の本棚	渡辺照宏『日本の仏教』岩波新書(1958年刊)	山本 通	昭45経	……59
編集後記		編集人		……62

一橋大学基督教青年会 会報



第63号 2015年7月

一橋基督教青年会会報 第 63 号 目次 (2015 年 7 月)

巻頭言・カトリックとプロテスタント.....	理事長 齋藤金義(昭 46 経・48 法)2
寮長挨拶	寮長 大崎友裕(3 年 商学部)4
テーマエッセイについて.....	編集人 小谷悠樹(2 年 法学部)1
沖縄と将来の夢.....	大城幹雄(1 年 社会学部)1
人との縁	川村勇太(1 年 法学部)1
成長.....	祖根昂大(1 年 法学部)1
日本にコミットする.....	建内瑛貴(1 年 社会学部)1
一橋大学での 4 年間の抱負.....	三品直輝(1 年 商学部)1
濃密な一年とこれから.....	小谷悠樹(2 年 法学部)1
深化.....	仁藤将史(2 年 経済学部)1
YMCA 寮に暮らすということ.....	山田哲也(2 年 経済学部)1
記憶に残る大学生活とは	大崎友裕(3 年 商学部)1
私の将来設計.....	高橋純平(3 年 経済学部)1
ラフティングで世界へ	田村勝裕(3 年 社会学部)1
生の哲学	二瓶琢也(3 年 経済学部)1
将来の意思決定の狭間で.....	岡本政之(4 年 経済学部)1
自己研究	津崎浩平(4 年 経済学部)1
就職活動を通じた自己実現.....	鶴井瑛良(4 年 社会学部)1
社会人になって実現したい夢(就活に毒されたタイトルですみません)	政木敦憲(4 年 社会学部)1
寮生の「目標」たる存在.....	村山透梧(平 26 経)20
研究者人生という選択肢:大学院博士後期課程に進学して	吉永裕登(平 26 商)22
大平裕様 講演記録	25
2015 年度総会・評議員会報告	26
2014 年度会計資料	30
〈～編集後記～〉	1

一橋大学基督教青年会 会 報



2003 年度新入生歓迎合宿

第 64 号 2015 年 12 月

一橋大学基督教青年会 会報第64号(2015年12月発行)

目 次

巻頭言	男と女	理事長	齋藤金義	昭46経卒	1
YMCA一橋寮	寮の思い出		滝澤英一	昭60法卒	2
	住まいとしてのYMCA一橋寮		櫻井進	平2商卒	5
随想	「よき便り」から		山本通	昭45経卒	7
	退職を迎えて学生時代を思い出す		岩谷滋雄	昭48法卒	12
	矛に旗を結び付ける		長瀬潔	昭50社卒	14
	卒業後の私の生活		安井禎	昭59社卒	17
	徒然なるままに		山崎学	昭60社卒	20
	マラソン完走記		縄田克之	昭61法卒	22
	My Faith in God as the Law of Fairness		張中飛	平19商卒	24
	初心貫徹と聖書のことば		東哲郎	平11経卒	25
論考	ハムレットと『ヨハネ黙示録』:ヨモギ文化をめぐって		鈴木一策	昭45経卒	28
	近頃、教会について思うこと		儀賀裕理	昭46商卒	40
	大分県(豊後国)におけるキリシタン遺構について(1)		佐藤周一	昭54法卒	43
	人口減少社会と地方行政:横浜市において		加納正啓	平9法卒	49
海外便り	ロスアンゼルスからの手紙		小池善太	平8社卒	53
	ブラジル(マナウス)紀行		岡秀樹	平14社卒	55
	シンガポールでのアサインメントを通して		野吾雅史	平16商卒	56
私の本棚	読書感想「哲学者キリスト」		齋藤金義	昭46経卒	59
	『ふしぎなキリスト教』を読んで		青木甲太郎	平13経卒	63
	尾原悟『ザビエル』		山本通	昭45経卒	64
	梅津順一『ピューリタン牧師バクスター』		山本通	昭45経卒	66
海外研修報告	中国経済金融研修交流会報告		齋藤金義	昭46経卒	69
	中国人民大学訪問について		祖根昂大	法学部1年	71
	上海財経大学訪問について		建内瑛貴	社会学部 1	73
	上海YMCA訪問について		二瓶琢也	社会学部 3	75
	日立キャピタル訪問について		川村勇太	法学部 1年	77
	あおぞら銀行上海事務所訪問について		岡本政之	経済学部 4	79
	国際交流の意義について		川村勇太	法学部 1年	81
	中国の現状と課題について		建内瑛貴	社会学部 1	82
	中国人のモラルについて		祖根昂大	法学部 1年	85
	中国訪問の感想について		二瓶琢也	社会学部 3	87
	中国訪問の感想について		岡本政之	経済学部 4	88
編集後記		編集人			90

一橋大学基督教青年会 会報



第 65 号 2016 年 7 月

目次

巻頭言	理事長 齋藤金義	2
寮長挨拶	寮長 仁藤将史	3
テーマエッセイについて	編集人 川村勇太	4
深みのある人に	1 年商学部 菊岡義洋	4
「初めて」の連続	1 年法学部 星一樹	5
主体性と社会貢献	1 年社会学部 堀江健介	5
新たな挑戦	1 年経済学部 前田雄飛	6
範疇、そして聖書	2 年社会学部 大城幹雄	7
一年間の出会い	2 年法学部 川村勇太	7
「成長」「継続」	2 年法学部 祖根昂大	8
寮への思い	2 年社会学部 建内瑛貴	9
進取の一年	2 年商学部 三品直輝	10
寮の仕事と私	3 年法学部 小谷悠樹	10
Rising	3 年経済学部 仁藤将史	11
幹部	3 年経済学部 山田哲也	12
寮での四年間を振り返って	4 年商学部 大崎友裕	12
寮生活で得たもの—仲間—	4 年経済学部 高橋純平	13
私と YMCA 寮	4 年社会学部 田村勝裕	14
YMCA 寮に入って	4 年経済学部 二瓶琢也	14
私の地境	寮母 氏家和子	16
聖書を読むこと、聖書に聞くこと	南大沢チャペル牧師 水口功	17
YMCA 一橋寮生との聖研	国立教会牧師 宮寄薫	18
2015 年度特別聖書研究記録		19
OB クリスマス会講演記録		23
2016 年度総会講演記録		24
理事会だより		27
<～編集後記～>		45

一橋大学基督教青年会 会 報



旧 YMCA 一橋寮 1967 年 11 月 2 日宮岡五百里 撮影

第 66 号 2016 年 12 月

一橋大学基督教青年会 会報第66号(2016年12月発行)						
目次						
巻頭言	新しい酒は新しい革袋に	理事長	齋藤金義	昭46経卒	1
	公益法人認可について	理事長	齋藤金義	昭46経卒	2
YMCA一橋寮	気を引き締めて公益法人を育もう		渡邊 徹	昭41経卒	6
	野澤琶寿恵元寮母さんの誕生会		松木雄太	平17社卒	7
随想	「よき便り」から		山本通	昭45経卒	9
	やはり厳しい僻地医療		青崎敏彦	昭51法卒	16
	「近況報告」		崔 勇	平2法卒	19
	【近況報告】		福元洋平	平10社卒	21
海外便り	英国駐在員のサッカー観戦術		中村研太	平14年商卒	23
論考	大分県(豊後国)におけるキリシタン遺構について(2)	佐藤周一	昭54法卒	25	
	大分県(豊後国)におけるキリシタン遺構について(3)			34	
特別聖研	伊藤淳氏のキリスト者としての歩み	小谷悠樹(文責)	法学部3年	41	
海外研修報告	Field Study 2016報告書	二瓶琢也	経済学部4年	43	
	シンガポール経営大学及びシンガポールYMCA	建内瑛貴	社会学部2年	44	
	AMRO	建内瑛貴	社会学部2年	45	
	GIC	田村勝裕	社会学部4年	47	
	国信証券	建内瑛貴	社会学部2年	49	
	Aozora Asia Pasific Finance Limited	田村勝裕	社会学部4年	50	
	VICTORIA CAPITAL	三品直輝	商学部2年	51	
	香港YMCA・香港中文大学	三品直輝	商学部2年	53	
編集後記		編集人		56	

一橋大学基督教青年会

会報



第67号 2017

一橋基督教青年会会報 第 67 号 目次 (2017 年 7 月)

巻 頭 言.....	理事長 斎藤金義 (昭 46 経・48 法)	2
寮長挨拶	寮長 大城幹雄 (3 年 社会学部)	3
寮生によるテーマエッセイについて	編集者 菊岡義洋 (2 年 商学部)	4
一橋寮にて.....	北田志聞 (1 年 経済学部)	5
名古屋では会えなかった人たちと	高橋正幸 (1 年 経済学部)	6
自律の契機.....	川畑輝 (2 年 経済学部)	7
一年経って.....	菊岡義洋 (2 年 商学部)	8
寮で得たもの	星一樹 (2 年 法学部)	9
蘇る初代寮、発見多き国立農業.....	前田雄飛 (2 年 経済学部)	10
YMCA 一橋寮の倫理と民主主義の精神.....	大城幹雄 (3 年 社会学部)	11
与えるものは与えられる	川村勇太 (3 年 法学部)	12
“しか”の中で見えてくるもの.....	祖根昂大 (3 年 法学部)	13
YMCA 一橋寮の意志を継ぐ者たち.....	建内瑛貴 (3 年 社会学部)	14
YMCA 一橋寮での経験.....	三品直輝 (3 年 商学部)	15
多様性との出会い.....	小谷悠樹 (4 年 法学部)	16
Rising-最後に残せるもの-.....	仁藤将史 (4 年 経済学部)	17
自治寮での生活を通して.....	山田哲也 (4 年 経済学部)	18
私 安藤誠と寮との関わり	安藤誠 (経済学部出身)	19
YMCA 寮の魅力.....	高橋純平 (平 29 経)	20
中川博道司祭特別聖書研究	田村勝裕 (平 29 社)	21
宮城さんのお話し／マタイの福音書第 16 章 13 節から	祖根昂大 (3 年 法学部)	24
YMCA 一橋寮大規模改修計画の概要と進め方		26
理事会だより		30
編集後記	編集者 菊岡義洋 (2 年 商学部)	33

一橋大学基督教青年会 会 報



(前列 左から桜井直文、江藤直純、樋口聡、齋藤金義、中村正俊)

(後列 左から加藤順、市村陽典、西浦道明、阿久戸光晴、鈴木望、千保喜久夫 1970年2月撮影)

一橋大学基督教青年会 会報第66号(2016年12月発行)					
目 次					
巻頭言	巻頭言-新しい酒は新しい革袋に-	齋藤金義	昭46経卒	1
	公益法人認可について	理事長 齋藤金義	昭46経卒	2
YMCA一橋寮	気を引き締めて公益法人を育もう	渡邊 徹	昭41経卒	6
	野澤琶寿恵元寮母さんの誕生会	松木雄太	平17社卒	7
随想	「よき便り」から	山本通	昭45経卒	9
	やはり厳しい僻地医療	青崎敏彦	昭51法卒	16
	「近況報告」	崔 勇	平2法卒	19
	【近況報告】	福元洋平	平10社卒	21
海外便り	英国駐在員のサッカー観戦術	中村研太	平14年商卒	23
論考	大分県(豊後国)におけるキリシタン遺構について(2)	佐藤周一	昭54法卒	25
	大分県(豊後国)におけるキリシタン遺構について(3)			34
特別聖研	伊藤淳氏のキリスト者としての歩み	小谷悠樹(文責)	法学部3年	41
海外研修報告	Field Study 2016報告書	二瓶琢也	経済学部4年	43
	シンガポール経営大学及びシンガポールYMCA	建内瑛貴	社会学部2年	44
	AMRO	建内瑛貴	社会学部2年	45
	GIC	田村勝裕	社会学部4年	47
	国信証券	建内瑛貴	社会学部2年	49
	Aozora Asia Pasific Finance Limited	田村勝裕	社会学部4年	50
	VICTORIA CAPITAL	三品直輝	商学部2年	51
	香港YMCA・香港中文大学	三品直輝	商学部2年	53
編集後記		編集人		56

一橋基督教青年会

会報



第 69 号 2018 年 7 月

一橋基督教青年会会報 第 69 号 目次 (2018 年 7 月)

巻 頭 言	理事長 斎藤金義 (昭 46 経・48 法) 2
寮長挨拶	寮長 前田雄飛 (3 年 経済学部) 5
寮生によるテーマエッセイについて	編集者 高橋正幸 (2 年 経済学部) 6
「私が目指す寮」	今川明人 (1 年 商学部) 7
僕らはみんな一橋寮	小林莉季 (1 年 経済学部) 8
「家族」としての寮	鳥居大朗 (1 年 商学部) 9
交流の場としての寮	松原悠紀 (1 年 社会学部) 10
大学生活と寮	弓場耀平 (1 年 社会学部) 11
国立生活 2 年目によせて	北田志聞 (2 年 経済学部) 12
寮の本質	高橋正幸 (2 年 経済学部) 13
変わる寮と自分	川畑輝 (3 年 経済学部) 14
思慕できる寮に	菊岡義洋 (3 年 商学部) 15
寮の正負の側面と自らの成長	星一樹 (3 年 法学部) 16
「あたえられる寮」から「あたえる寮」へ	前田雄飛 (3 年 経済学部) 18
共生	大城幹雄 (4 年 社会学部) 19
共同生活の力	川村勇太 (4 年 法学部) 20
「心が動く場」	祖根昂大 (4 年 法学部) 21
アイムホーム	建内瑛貴 (4 年 社会学部) 22
聖書研究の意義と最後の寮生活についての抱負	三品直輝 (4 年 商学部) 23
卒寮生の視点から	仁藤将史 (平 30 経) 24
大分県 (豊後国) におけるキリシタン遺構について	山田哲也 (平 30 経) 25
YMCA 一橋寮の増改築案について	29
理事会だより	31
編集後記	編集者 高橋正幸 (2 年 経済学部) 35

一橋大学基督教青年会 会 報



第 70 号 2018年12月発行

一橋大学基督教青年会会報 第70号(2018年12月発行)

目次				頁
巻頭言	先人の足跡を尋ねて	齋藤金義	昭46経卒・昭48法卒	1
聖書の世界	『聖書 新改訳2017』の特徴	津村俊夫	昭41商卒	2
先人の足跡を尋ねて	シリーズ第1回 大平正芳	齋藤金義	昭46経卒・昭48法卒	12
随想	随想・・・私と音楽②	宮岡五百里	昭43社卒	22
	私の隠居生活	辻本泰久	昭43法卒	26
	チョコレート産業史研究の魅力	山本 通	昭45経卒	34
	これからの世界と日本を考える	中村正俊	昭46社卒	41
	コミュニティリビングの条件	加藤 順	昭47社卒	43
	「いつも喜んでいなさい」	高橋知史	昭57社卒	47
	山高人為峯:これから社会人になる皆さんへのはなむけの言葉	峯村政孝	昭61社卒	49
	イギリス・ブリストル滞在記	鈴木宗徳	平3社卒	52
	私のグループ体験	林 尚宏	平14法卒	56
	ブラジル事情:ブラジル駐在の体験から	藤田洋平	平17社卒	57
私の本棚	白井聡『国体論:菊と星条旗』	齋藤金義	昭46経卒・昭48法卒	62
海外研修報告	はじめに			67
	マカオ市立大学	松原悠紀	社1年	69
	香港YMCA	三品直樹	商4年	70
	Cecil Wang氏講話	小林莉季	経1年	71
	香港中文大学	小林莉季	経1年	72
	University of Saint Joseph	建内瑛貴	社4年	73
	YMCAマカオ	今川明人	商1年	74
	Jakarta International Christian Fellowship Church	鳥居大朗	商1年	75
	ASEAN日本政府代表部、インドネシア日本大使館	大城幹雄	社4年	75
	PT. AVRIST ASSUARANCE	松原悠紀	社1年	78
	トヨタ スンター第1工場	建内瑛貴	社4年	79
	メルク・ブアナ大学	鳥居大朗	商1年	80
	New Priok Container Terminal One (NPCT1)	三品直樹	商4年	81
	PT. SENAYAN TRIKARYA SEMPANA	大城幹雄	社4年	81
編集後記		編集人		84

一橋大学基督教青年会

会 報



第 71 号 2019 年 7 月

一橋基督教青年会会報 第71号 目次 (2019年7月)

巻 頭 言	理事長 斎藤金義 (昭46経・48法)2
寮長挨拶	寮長 高橋正幸 (3年 経済学部)4
寮生によるテーマエッセイについて.....	編集者 今川明人(2年 商学部) 5
これからの寮・大学生活について.....	下野治 (1年 経済学部) 6
自己紹介と寮での目標.....	清野紘大 (1年 経済学部)7
待ちに待った寮生活	橋田陽平 (1年 商学部) 8
YMCA 一橋寮でこれからどうしていきたいか.....	桑江竜威 (1年 商学部) 9
今川明人にとっての寮.....	今川明人 (2年 商学部) 10
感情と正論はバランス良く.....	鳥居大朗 (2年 商学部)11
寮で共同生活するということ.....	小林莉季 (2年 経済学部) 12
一年間の変化と後輩に伝えたいこと.....	弓場耀平 (2年 社会学部) 13
自己の再発見と人間の「幅」	松原悠紀 (2年 社会学部) 14
国立三年目に思う	北田志聞 (3年 経済学部) 15
二番手の寮長	高橋正幸 (3年 経済学部) 16
私の三年間	前田雄飛 (4年 経済学部) 17
寮の貴重さ	星和樹 (4年 法学部) 18
寮生活を振り返る	菊岡義洋 (4年 商学部) 19
混沌に見出す多様性とヒューマニズム.....	川畑輝 (4年 経済学部) 20
院生による院政	大城幹雄(院1年 社会学部) 21
寮生活での学び	大崎友裕(平27商)23
講演録	25
理事会だより	27
編集後記	編集者 今川明人(2年 商学部) 31

当会のこれまでの足跡と今後の課題について

理事長 齋藤金義

プロローグ

当会、一橋大学基督教青年会の前身は、一橋基督教青年会であり、明治 20 年 1887 年に創設されたとある。これらの当会の歴史的な変遷やその後の経緯については、山本通氏による「YMCA 一橋の 132 年」に詳細に記されているので、ここではその点には触れない。ここで私が触れておきたいポイントは、何故当時の高等商業学校において、キリスト教研究を中心とする文化サークルが発祥し、戦後に新制大学として命名された一橋の名前が、発足当時の明治 20 年から使われていたかという 2 点である。このことを考えることは、そのまま、当会の源流、当会が発足当時から持っていたある種のアイデンティティを確認することに繋がるものであり、意味深いと思う。

まず、一橋大学の創立の歴史を見てみよう。ご承知のとおり、一橋大学は明治 8 年、1875 年に薩摩藩士で後に第一次伊藤博文内閣において文部大臣となった森有礼が、東京銀座に私学として商法講習所を設立したことをその発祥としている。森有礼は、憲法発布の明治 22 年、1889 年に 43 歳の若さで国粹主義者により暗殺されるが、森は米国や欧州においてビジネスマンの地位が高く、尊敬されている事実で刮目し、江戸時代、士農工商として一番低く見られていた商人の地位を高めるべく、商法講習所を設立する。偏に、日本の近代化の礎に不可欠なものとして、商業、経済の学問を国造りの基礎の一つに位置付けた。また、森は熱烈な欧化主義者としても知られており、英語の普及を国の重要な基礎と考え、英語の公用語化を主張したと言われている。商法講習所は、幕臣で徳川慶喜（一橋慶喜）の家臣であった渋沢栄一により支援されているが、その後、一橋家の跡地である千代田区一ツ橋の地に移転したことは、渋沢との関係を示唆するものと思われる。渋沢栄一は、森と同じく、事業人、ビジネスにおける倫理の確立があって初めてビジネスがビジネスたるという自負をもって実業を確立した点、森と志を同じくしていた。

一橋は、地名の一ツ橋から由来しているが、徳川吉宗が御三卿を将軍後継の家柄として、清水、田安と並んで設立した徳川家名門一橋家がその源である。明治維新は薩長が政治の中心としてリードしたものの、実務家の多くが、渋沢栄一をはじめ旧幕臣が政府や実業界の要人として支えていた。商法講習所の初代校長矢野二郎も旧幕臣であった。そのことは、一橋大学が、早くから官立となったものの、その出生を支援し育てた人材は旧幕臣であり、反政府、反薩長の雰囲気当初から強かったとも言えよう。英語を重視し、欧米の思想、価値観に早くから親しみ、日本にそれを持ち込んだという源流は、一橋の校風となっている。校是ともいべき「Captains of Industry」産業界のリーダーとなるという標語は、トーマス・カーライルの「Past and Present」からの引用と言われている。後に、辛酉事件の時、全校生徒が立ち上がり、専攻部の東京帝国大学経済学部への吸収合併を阻止した事件は、正にその象徴的な出来事であった。

さて、もう一つの課題、キリスト教研究への関心が何故、当時、高まったかである。直接的には、東京 YMCA の設立が明治 13 年、1880 年であり、1888 年には YMCA の英語教師、JT スイフトが来日、東京大学はじめ各大学での YMCA 活動及びキリスト教伝道の働きかけが始められた。しかし、そういう個別事象の説明だけでは十分ではない。やはり、明治維新後の日本の近代化、高等教育が普及す



明治8年8月	1875年	森有礼 東京銀座尾張町に商法講習所私設
明治17年3月	1884年	農商務省直轄となり、東京商業学校と改称する
明治18年5月	1885年	文部省直轄となる
明治18年9月	1885年	東京外国語学校と合併し、神田一ツ橋に移転、東京商業学校と称する
明治20年10月	1887年	高等商業学校と改称し、予科1年本科4年とする 一橋基督教青年会発足する
明治35年4月	1902年	東京高等商業学校と改称する
明治42年5月	1909年	専攻部廃止の文部省令が発布され、辛酉事件起こる
大正9年4月	1920年	東京商科大学となり、学部その他、予科附属専門部など設置
大正12年	1923年	関東大震災により、神田一ツ橋における建物消失
昭和5年9月	1930年	国立に本科、本学事務部・図書館が移転
昭和19年9月	1944年	東京産業大学と改称する
昭和22年3月	1947年	東京商科大学の旧名に戻る
昭和24年5月	1949年	新制一橋大学発足、商学部、経済学部、法学社会学部の3学部
昭和26年4月	1951年	法学社会学部を法学部と社会学部に分離、4学部制となる
		出典：一橋大学公式HPより

るにつれて、英語熱と同様、西欧近代化文明の基盤とも言うべきキリスト教への関心が高まっていたと言えるだろう。豊臣政権の末期から徳川時代に、基督教は耶蘇教として、弾圧され、長く禁教の歴史があった。江戸幕府は、檀家制度を打ち立て、家ごとに仏教に帰依するよう強制し、檀家に属さない者は耶蘇教徒とみなして、弾圧を加えた。江戸幕府がキリスト教を禁じた理由は、君主より偉い上位概念としての神＝キリストの存在を封建社会の維持にとって不都合と考えたという理由以外に、キリスト教は当時のスペイン、オランダ、ポルトガル、英国、フランスなどの国家植民地主義の手先の役割を担っていると判断したこともあったであろう。いずれにしても、明治維新によって、キリスト教禁教が解かれて、所謂エリート集団において、キリスト教への関心が高まった。夏目漱石の三四郎にも有名な台詞、ストレイシーブという言葉が出てくる。

こうしたキリスト教への関心の度合いは、当会の会員数の推移にも見て取れる。明治40年から大正時代、当会の会員数はピークを迎える。凡そ1学年10名近い会員が記録されている。当時の東京高等商業学校の定員数は、1学年数百名に満たないことを考えるとその比率が如何に高かったかが理解できる。こうしたキリスト教への関心の高さは、その後、クリスチャンが共同生活の場として寮舎を持ちたいという願いとなって現れ、米国YMCAのJRモット博士の支援により、YMCA一橋寮が建設され、それが現在の当会の財産として継承されている。

こうしたキリスト教の普及伝道は、日本において、成功したかと言えば、残念ながら成功とは言えない。それは、明治憲法が制定され、立憲民主主義というまやかしの民主主義のもとで、その憲法が「大日本帝国」憲法であったからに他ならない。「大日本」とは地政学的に、日本を大きく拡大する思想であり、国家人民の発展は、領土と市場の独占による拡張にあるとする思想である。そのための「富国強兵」であり、経済や富は専ら軍事力を強化する手段として重要視される。「帝国」とは正に天皇制国家であり、天皇の元に、大日本を更に大きくして行こうというもので、何人もこれを阻止しえないほど絶対的なもので、正に神道国家主義であった。こうした「大日本帝国」の前に、キリスト教の価値や思想は、芥子粒のごとく消え去り行く運命にあった。「大日本」に対抗する思想は「小日本」である。これは、石橋湛山をはじめ多くの心ある経済人が標榜した。小日本は、富は領土や市場の独占から生まれるものではなく、公正な自由な貿易取引によって、労働が生み出す生産物を市場経済の中で交換し、その獲得した付加価値をもって、人々の生活を豊かにするという思想である。従って、軍事力は極めて小さくて良く、必要最低限の防衛力に留め、技術や設備への投資によって労働生産性、労働の付加価値を高めることが富の源泉であるという思想である。これはアダム・スミスの「国富論」と同様の思想である。残念ながら、明治から昭和に至る近代化の歴史の中で、この小日本の思想は育つことなく捨てられた結果、日本は大日本帝国の結末として、原爆投下をはじめとする壊滅的な敗北を喫することになった。戦前、多くの一橋の卒業生は、三井物産はじめ商社に就職したが、この伝統は正に「小日本」主義の土台を作るものであった。自由で公正な市場経済の中で、貿易を通じて富を獲得することの主役は、我が先輩達の働きによると言っても過言ではない。石田禮助元三物産社長が、時の首相東條に対し日米開戦反対を、職を賭して諫言したことこそその象徴であった。

キリスト教への関心もまた、帝国主義の嵐の前で、沈黙を余儀なくされる。大日本帝国憲法発布の翌年に教育勅語が制定され、天皇のご真影を崇め奉つる偶像崇拜を強制された日本国民は、もはやキリスト教が禁ずる偶像崇拜など、全くだこ吹く風であった。こうした国家主義宗教の強制にあつて、内村鑑三を例外として、何人もこれに抵抗することは出来なかった。出来なかったことを、後世の我々が

糾弾することは、余りにもおこがましいであろう。ただ、我々に出来ることは、この「小日本」の思想こそ、キリスト教が指し示す正しい国民国家思想であり、この思想を掻き消そうとするものが、今日ゾンビのごとく復活していることに、恐怖の念を抱かざるを得ない。過去の侵略行為を反省せざる姿勢や、帝、天皇が象徴であると言いながら、象徴天皇の枠組みを無視し、憲法違反の天皇の政治利用を図り、帝の大きな存在の傘を政治権威として国民に押し付けて行く傾向に、実に大日本帝国の忌まわしい亡霊の復活を垣間見ざるを得ないのである。

結論として言わんとすることは、我が一橋大学基督教青年会こそ、この「大日本」帝国主義に対する抵抗の砦であり、「小日本」主義を経済思想、国民思想として身に着け、天皇制という日本国民に重くのしかかる呪縛から一人一人を自由にし、何ものであれ国家や権威的な権力を恐れることなく、真実を常に求めかつ語り、偶像崇拜の呪縛から自由になれる人材を育成することこそ、その使命があると考え。寮生活をとおして、単に人生の意義や価値、教養を身に着けるというだけに留まるものではない。こうした思想の強固な土台は、聖書を深く学び、西欧の思想哲学や文学などのリベラル・アーツ全般を身に着けてこそ、初めて企業、社会、国家あるいはマスコミからの影響力を跳ね除け、自らの頭で自律的に考える力を持つ強靱な精神を持つ人材を輩出できるものと信ずる。我が青年会の事業目的は正にここにある。

第1章 戦前と戦後の当会の比較について

当会の会員は全員が一橋大学の学生であり、他大学の学生はいない。その意味から考えると、当会の戦前と戦後の異なる点、或いは共通点は、大学の性格の変化もしくは共通点と大きく関係する。一橋は、その学校の設立の目的からして、欧米の商業実務、経済学あるいは経営学を学び、それを日本に導入することにあつた。それは単に商業や経営というビジネスの次元に留まらず、哲学や社会思想あるいは歴史を学ぶことであり、経済やビジネスの根底にはそれらの歴史や社会思想を学ばない限り、正しく理解しえないと考えていたからだ。戦前、特に語学力を重視した一橋は、英語、ドイツ語、フランス語、あるいはラテン語やギリシャ語なども含めて欧米の文化・社会思想及び歴史を貪欲に学び、日本における西欧近代経済史研究のパイオニア的な存在であつた。特に、歴史、特に経済史においては、三浦新七、その弟子で戦中と戦後に活躍した上原専禄や増田四郎がおり、上原の弟子に阿部謹也が続く。いずれもドイツ中世史などの研究がその中心であり、何故ヨーロッパにおいて、封建制から民主制が生まれたのかと言ったテーマが一貫して探求されてきた。経済学で言えば、福田徳三がおり、経済哲学の杉本広蔵、福田の弟子で中山伊知郎や杉本栄一らが日本の経済学とリードした。

翻って、戦後はどうだろうか？特に、最近の一橋の歴史学問の気風はどうであろうか。こうした時代がかった大きなテーマが探求されるよりは、よりミクロ的な企業研究なり、経済財政政策などが主な研究対象になってはいないだろうか。既に西欧や米国などが手本とされるモデルでなくなった意味合いもあるだろう。第二次世界大戦を戦い、焦土から一時は世界第2位の経済大国を築き上げたことで、一旦、西欧研究の目的や意義が薄れたのかもしれない。それに代わり、日本的経営の強みであるとか、課題であるとかという視点がよりクローズアップされている。

戦後の一橋の歴史研究では、日本近代史、特に日本の戦前の軍国主義がもたらした甚大な被害の責任をどう捉え、その問題をどう受け止めて行くか、というテーマがより焦点として強まった。特に、東大文学部出身の歴史研究で、戦前の日本の保守政治なり軍閥政治に批判的であつた藤原彰やそ

の弟子の吉田裕といった歴史研究者の活躍が目立つ。それは、従来の一橋の歴史研究とは視点が異なるものの、しかし、それはそれで極めて重要な研究テーマであって、歴史研究の重点がより差し迫った政治的なテーマと切り離せない状況を生んだとも言える。米国の歴史研究者も、一橋で学び、天皇の戦争責任を強く主張した「天皇ヒロヒト」の著者、ハーバード・ビックスや、「敗北を抱きしめて」の名著を書いたジョン・ダワーなどもその典型である。

しかし、こうした一橋社会科学のアカデミズムと、当会の会員、YMCA 一橋寮生がどの程度深く関与しているかは、人それぞれであろう。こうした問題意識を強く持つ卒業生もいる。1986 年、昭和 61 年卒業の峯村政孝と親しく話す機会があった。峯村は長野県出身で、満蒙開拓団を大量に出した村の出身者であったことから、満蒙開拓団、あるいは満蒙開拓団を置き去りにした関東軍の罪状を深く研究するため、近代史の藤原ゼミに入り、そこで日本の戦前の軍国主義の問題点を深く学んだ。しかし、そういう経歴の持ち主の峯村は、中国の問題を自分の問題として捉えたいという希望をもって、伊藤忠商事に入社し、中国東北部、戦前の満州で大豆のビジネスに長年携わった。伊藤忠商事という会社の懐の広さに驚くと同時に、そういう寮生がいたことは、何とも偶然ではあるが、当会の会員らしいとも言える。就職のために一橋に学ぶのではなく、学びたいテーマがあって一橋に入り、その結果、別段就職を気にせずに、自分の学びたいことを身に付けて社会に巣立つことが出来たというのも、一橋で学ぶことの恵まれた特権であろう。時代が変わっても、その流れと伝統は変わらないし、また、変わってはならない。米国の有名な投資家、ジム・ロジャーズは、ウォール・ストリートのインベストメント・バンカーとして大成功をしたが、彼は学生時代に投資理論とか経済学を学んだのではなく、専攻はイエール大学で歴史を学び、後に英国オクスフォードでも歴史さらに学び、Wall Street に入ったのであるが、正に、そのことが後に投資家として成功した一つの鍵であると自ら述べている。

こうした思想の系譜において、代表的な当会の OB に弓削達がいる。弓削は当会の『百年史』の編集長であり、専門はローマ史であるが、政治的には天皇制廃止論者として右翼から狙われるほどの硬骨漢でもあった。そうした政治的な立場は兎に角として、我々、一橋キリスト教青年会の歴史研究の共通テーマとして、戦前も戦後も一貫して、マックス・ウェーバー研究がある。勿論、東大 Y はじめ各大学の YMCA においてもこれは共通した傾向であろう。有名な「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」は YMCA 一橋の寮生の必読書の一つでもある。何故に、ヨーロッパにおいて、資本主義が芽生え、発展したのか、何故、仏教国やイスラム国においては、資本主義経済制度が生まれなかったのか、その有力な要因の一つに、ウェーバーがキリスト教、なかんずく、プロテスタントの倫理とそれに基づく行動原理に求めたのは、いかにも説得力のある説明である。勿論、今日では、そう簡単な話ではないことが、様々な研究により明らかにされており、当会の経済史研究家である山本通も、そうした経済史研究者の一人である。

勿論、こうした傾向、アカデミズムの伝統は、多くの戦前戦後の当会の会員、つまり YMCA 一橋の寮生にとって、大きな影響を与えたかどうかは断言することはできないものの、一般的に言えることは、YMCA 一橋寮では毎週、聖書研究が行われ、キリスト教を学んでいることからして、極めて自然に西欧経済史なり社会思想史、あるいは経済政策、福祉政策などとの絡みで、こうしたウェーバーの著書に親しみを持つことは自然な流れである。

欧米経済社会は、近代化を進める日本にとって、既に追い求める理想像ではなくなっているかもしれない、という漠然とした思いは、キリスト教に対する熱意や関心を削ぎ落していることも確かであろう。振り

返れば、キリスト教に対する人々の関心が高まったのは、大正デモクラシーの時代であり、戦後で言えば終戦直後の米国占領下の時代であつたろう。しかし、戦前も戦後も、共通して言えることは、キリスト教よりも、日本ではより関心の高い研究対象は、マルクス主義であつた。マルクス主義においては、キリスト教はじめ宗教は、未発達な段階における未成熟な思想であり、社会の近代化、発展に応じて、消滅すべきものとして、唯物史観に基づき、否定されていた。日本人の多くは、無宗教であり、その意味では宗教的な、奇跡の物語に象徴される事象とも折り合いを求められるキリスト教はやはり敷居が高く、マルクス主義の方が受入れ易かつたし、隣国のソ連や中華人民共和国という現実的な見本があつた以上、それに若者が魅かれるのは当然であつた。

しかし、当会に入ってくる学生の多くは、中庸的で温厚な人物がその中心であり、宗教的に神がかかることもなく、また、唯物史観に染まり革命理論に熱を浮かす者は例外であつた。宗教に対して一定の敬意は払うものの、自らその火中の栗を拾うこともなく、親近感を抱きつつも、信仰への決断はしない、一定の距離を保つ人が大部分であつた。戦前戦後に共通して言えることは、YMCA一橋の寮生は少なくとも在寮の4年間で、聖書を毎週学び、何がしかのキリスト教に対する見識をもって、社会に巣立って行ったことは間違いない。そのことが、その後、彼らの人生において、どのような影響となり、顕現(インカーネーション)したかは人それぞれではあろう。しかし、この4年間で学んだことが契機となって、洗礼を受け、教会生活を自らの生活の基本とするようになった会員は、数年に1人か2人は散見されるのである。これを大きな「恵み」と言わずに何と言うべきであろうか。蓋し、この洗礼者を出した時代と、そうでない時代には大きく差異がある。昭和40年代から50年代の前半、寮が古い洋館の時代までは、寮が家庭的で人数も1学年3名、合計12名というアットホームな雰囲気もあり、寮生の過半数がクリスチャンであり、そうでない寮生も4年後、それなりの数の寮生が受洗した。それは、今日との比較で隔世の感がある。実はこの点にこそ、今後の当会の課題、解決すべき課題がある。40年代は何故、寮生の多くがクリスチャンであり、また、そうでない寮生の多くが受洗したのだろうか。40年代は、クリスチャンである学生が多く入寮したと言え、それまでであるが、それだけに、当会における40年代OBの存在感には大きなものがある。

第2章 当会の事業目的、理念と事業内容

当会の創立とその後の132年の歴史については、山本通編集長の「一橋YMCAの132年」に譲るとして、100年の節目である1979年以降の当会の事業活動について、詳細にこれを振り返り、今後の課題を考えてみたい。

昭和60年、1985年のプラザ合意以降の金融緩和政策がもたらしたバブル経済の中でそれは始まる。1979年、昭和54年にYMCA一橋寮は新築され、これまでの1学年3人体制から1学年4人となり、それまでの少数の家庭的な雰囲気から比較すれば各段にアパート化現象が強まる。一つには、旧寮は木造2階建てであり、ホールと食堂が連続しており、人数の割に広い空間的な余裕があり、かつ木造がもたらす暖かみがあつた。それに対して、新寮は鉄筋コンクリート3階建てであり、個別の部屋の仕切りが頑強であり、また全体の人数の割に食堂が手狭で、玄関横に建設されたチャペルは食堂ホールから隔離された位置にあり、かつ手狭であつたことから、寮生が団欒をゆっくり味わう空間が十分とは言えなかつた。

新寮建設の以前と以後との間で、寮生の生活、特にキリスト教に対する姿勢が大きく変化したという

証言が幾つかある。それは新寮の建設期間が約1年にわたり、その期間、以前の在寮生が他の下宿やアパートに住むようになり、旧寮生活を送った学生が、新寮が出来た後に殆ど戻って来なかったと言われている。その結果、何が生じたか。以前は細々とではあるが、守られていた朝拝あるいは夕拝の伝統が、新寮では守られなくなり、それが今日まで継続しているという事実である。寮舎は新しくなったものの、その内容は表面の新しさと反対に、キリスト教に対する霊的な関心度が大いに低下したと言えよう。旧寮にはそういう雰囲気があり、それを維持してきた寮生の伝統が未だ残っていた。1979年以降、新しい寮が出来て、寮生の募集そのものは寮が新しく、綺麗であったことからそれほど問題はなかったようであるが、他方、キリスト教に対する寮生の熱意と関心はこの時代、急速に低下傾向を辿る。

聖職者座談会で1985年に入寮した山本信義の回顧によれば、キリスト教に関心の低い寮生を中心に、聖書研究の代わりに、哲学、具体的にはヘーゲルの勉強会が開始され、聖書研究会のグループが2つになって、それが今日2つの聖書研究が分かれた要因である、と記している。その話を聞くまでは、何故、聖書研究会が2つのグループに分かれているのか、理解できなくて、単に一同に会する広い部屋がないからだと思っていたOBも多かったのである。いずれにしても、山本が記しているとおり、寮生のキリスト教に対する関心が低下すると同時に、文化サークルとして一橋祭や小平祭への参加意欲も低下、参加してもキリスト教関係の講演会を開催することは少なく、模擬店などの出店など仲間と楽しむという趣向に変化した。また、かつて、大学祭でキリスト教関連の講演会を開催することが当然であった我々昭和40年代のものにとって全く意外とも言える出来事が生じた。学生が運営している一橋祭実行委員会に対して、キリスト教関係の講演会開催の了解を求めると、宗教色のあるものは認可出来ないという取り扱いとなる。オウム真理教による反動的な影響のためと思われるが、こうした実行委員会の運営姿勢は何とか解決すべき課題であろう。学生だけでそういう判断を行うのではなく、疑義があるものについては、大学当局を巻き込み、より高度な判断を行う組織が必要であろう。いずれにしても、大学祭において、キリスト教に関連するイベントが開催出来ない現実があることは、誠に遺憾なことである。

しかし、山本信義が座談会の最後に書いているとおり、聖書研究会について寮生に色々な動きがあったものの、山本がその後東京神学大学で学び、寮の聖書研究会のチューターとして戻ってきたときには、2つに分かれていた1つのグループで主として旧約を中心に寮生の聖書研究を指導し、それが連綿と継続していることに対して、山本はじめ多くのOBがそこに大きな意味があると考えていることは疑いのないことである。

1980年代～2000年について言えることは、1979年の新寮以前との比較で言えば、Y活動そのものは低調であった。当時の理事長は第2代の木本茂三郎であり、1991年平成3年に理事長は木本から中島省吾に替わっている。当時の理事会と寮生との関係では、毎年開催される総会が理事OBと寮生との接触の機会であり、寮舎の運営は殆ど寮生によって運営されていた。言い換えると、OBの関与は極めて少なく、毎年の総会での寮生との交流、予餞会での交流と、年2回ほどであった。

中島理事長は在任6年で1997年に後任を堀地史郎に託した。堀地理事長は、2005年まで8年間在任し、理事の若返りを図り、理事会がより組織的な活動が出来るよう指導された。中でも、若手理事によるタスクフォースが発足し、今後の当会の在り方、財務基盤強化のための収益事業の提言、法人化の必要性、寮費の値上げを含む当会の長期的な収支の検討など、当会を長期的に維持発展させて行く上で必要な事項の精査を行い、それを理事会で共有するよう指導された。キリスト教そのものへ

の関心は特段強いことはなかったが、寮生活を通じての共同生活の意義を深く自覚する若手卒業生を中心に、寮の在り方について積極的な意見や提言が寄せられようになった。一つには、寮舎は建設後30年の歳月を経過したことから、躯体は別にして、建物の内装あるいは屋根の水漏れ、外観など劣化が進み、寮舎の維持を図るために、何が必要か良く検討し、それを理事会への提言として、意見具申する若手OBが増えたことである。その成果は、2005年になって、若手理事や若手OBで構成されたタスクフォースの提言として、2005年の総会において、正式に承認され、その後の当会の法人化や再建計画の準備が開始された。具体的な提言は以下のとおりである。

タスクフォースグループの今後の当会の方針への提言(2005年総会)

1. 法人化(NPOを含む)の具体化(2005年度)
2. 駐車場収益事業の具体化(2005年度)
3. 寮会計基準の制定(2005年度)、減価償却の一部見合い分を部屋代として徴収
4. 収益事業の方向性(法人化以降)の検討
5. 後任寮母選任の具体化
6. 学生Y活動の支援強化
7. OB交流活動の活性化

上記のとおり、第一の課題は法人化である。当会が法人格を有していないことから生ずる責任の曖昧さが最大の問題とされた。寮舎の長期的な維持管理の責任は誰が具体的に、どう持つのか、法人格のない組織では、常にそれが曖昧とされてきた。法人格がないがために、土地は日本YMCA同盟に寄附(寄託)、建物については、昭和54年の再建以降、未登記のままであった。当然、法人格を持つだけでなく、NPOを含めて公益法人化の必要性も提言された。この提言は、一般財団法人を経て、今日の公益財団法人に繋がった。第二は、OBからの寄附金のみでは、寮舎の維持、学生YMCA活動への支援が十分出来ないという現実から、遊休土地を活用し、収益事業を行うことの必要性が提言された。本件はその後、トランクルームやオートバイ専用駐車場などの検討を経て、駐車場事業経営の実行に繋がる。第三の提言は、寮会計において、今後の寮舎の再建に必要な積立金を寮生の寮費の一部から拠出すべきであるという視点である。寮費は電気ガス水道や寮母謝礼金などの共益費のみであってはならず、減価償却費用の全部とは言わないまでもその一部は寮生も負担すべきという提言である。当初、毎月千円でスタートした部屋代制度は、1万円という案もあったが、それでは負担が重すぎるということで、その後月額7千円となり、現在に至っている。

第5は、野澤寮母の高齢化に伴う後継寮母をどう探すかというテーマで、その場合、クリスチャンであることや住込みを期待するなどの条件から、選考は難航したが、キリスト教関係の新聞や雑誌に広告を掲載することで、氏家寮母を2009年に迎えることが出来た。第6の学生Y活動への支援強化は、従来、寮生がYMCA同盟のセミナーやサマーキャンプに参加する場合、その補助金について、曖昧であったことを明文化し、寮生のY活動参加を積極的に支援する体制を構築した。第7の提言は、OBによる寮生を対象とする講演会を開催する、あるいはこれまで会報は寮生主体で編集発行していた形態から、これを年2回の発行とし、OB及び寮生が交互に編集を担当し、よりOBへの寄稿を積極化し、会報を通じてOBと寮生とがより緊密になることを期待した。当時、若手の理事を中心とするタスクフォースの提言は、今日の当会の事業の在り方に大きく影響を与えたものとして評価できる。ここに主要なメンバーを記載し、これらのメンバーの貢献に改めて謝意を表するものである。メンバーは、平成11年本

は、帳簿を作成し、領収証を管理する会計理事の記帳業務の働きがあって、成立している。また、公益財団の認可申請は、初回の認可時だけではなく、その後、毎年この煩雑な事務手続きを継続しなければならないが、公益専門の会計法人では、この実務を有料で代行して頂ける。費用は年間約 18 万円であるから、会計決算業務と併せて、合計 40 万円くらいの費用で公益財団を維持することは可能である。やはり、専門の業務委託制度、アウトソーシング機能は、大変有用と言える。

さて、事務的というか管理的な話題は本稿の本題ではない。蓋し、こうした事務上の問題、管理上の課題は等閑に出来ない重要なものである。どんな理念や理想もその具体的な実行を伴わなければ絵に描いた餅に等しい。当会は営利団体ではないから、報酬によって組織や人を動かすことは出来ない。全ては当会の存在意義を強く自覚する、志のある役員や評議員あるいは会員の自主的な奉仕によって運営されている。自主的な奉仕活動であるから、どうしても一定の限界がそれぞれの活動にはあることはやむを得ない。が、しかし、だからと言って、いい加減なものであってはならない。特に、公益財団法人として公に認可された法人の理事、評議員、監事は無報酬であるからという言い訳は通用しないことは、改めて確認しておきたい。

当会が公益法人化を目的とした最大の理由は、税務上の特典であったが、結果として公益とは何かを深く考えることをとおして、改めて当会の存在の意味、目的を考える機会となったことは、副次的なこととはいえ、大きな収穫であった。そのことについてもここで触れておきたい。

公益とは、特定の人のためではなく、広く不特定な人を対象とする。一橋大学の学生を入寮(入会)の対象とすることは、特定とはならない。何故なら、一橋大学への入学門戸は、試験があるとはいえ、誰にでも開かれているからである。しかし、クリスチャンでなければ入寮出来ないという規定があれば、それは特定の宗教に帰依している人だけを対象とするから、公益とはならない。特定の宗教は公益ではなく、宗教法人に分類される。当会の定款では、次のとおりとなっている。

当会定款

(目的)

第4条 この法人は、一橋大学の学生(大学院生及び留学生を含む。)を対象とする学生寮を運営し、寮生及び一橋大学の学生に対して基督教及び基督教文化等を宣べ伝え、また、学生自治による寮共同生活あるいはOB等による講演会・座談会・修養会の開催などを通じて、学生の霊性、知性、身体の健全な発達を図ることを目的とする。

簡単に言えば、一橋大学の学生に対して、寮生活という共同生活及びキリスト教を学ぶことを通じて、学生の霊性、知性、身体の健全な育成を図る、青少年育成事業がその目的である。

その目的を達成するために、具体的に以下4つの事業を行う。

- (1) 学生のための寄宿舍運営事業
- (2) 寮生等を対象とする聖書研究会、講演会、修養会等の開催
- (3) OBと学生との交流会等の開催
- (4) 国内外のYMCAとの交流又は交流のための参加支援及び運営等の事業

まず、寄宿舍運営であるが、このままでは公益とはならない。東京都の公益認定審査では、具体的には、寮費は市価よりも低廉であること、入寮の選考過程が特定の人に偏らない、公平かつ広く不特定

の人が入寮できる機会を提供しているか、具体的な寮費、入寮募集方法や選考過程について、詳細な審査が行われる。寮費は、2019年度は共益費22千円、室料7千円、合計29千円であるから、市価より十分低廉である。寮舎運営で一番問題となることは、近年、寮舎の劣化が進むと同時に、入寮を希望する学生が少なくなっていることである。キリスト教に最初から関心のある学生が殆どいないのであるから、毎年寮生総出で募集活動をして、定員か定員を1〜2名上回る応募があるか、ないかである。年によっては3月の段階では定員割れが生ずることもある。定員割れとなる場合、問題となるのが、それに比例してキリスト教への関心が高くない、Y活動に積極的ではない学生であっても、入寮を認めざるを得ないことである。結果、当会が目的としているキリスト教を宣べ伝えることに相応しい学生が少なからざるを得ない。

2番目の寮生等を対象とする聖書研究会あるいは講演会であるが、これも寮生の入寮そのものが公益を満たしているとはいえ、寮生以外の一橋の学生にも門戸は開かれているかどうか、審査の一つの基準となっている。当然、聖書研究会は寮生以外の寮外生も参加可能であるし、また、講演会の参加も寮生以外も参加可能である。しかし、現実問題として、どれだけ寮生以外の学生の参加があるかは別にして、形式的な基準としては、誰でも参画できるものとして運営している。戦前、特に大正時代は、寮外生が多かったものであり、当会が今後寮外生を如何に増やすことが出来るかは大きな課題である。

3番目のOB及び学生との交流は、これは主として、総会や予餞会、クリスマス会を通じての会合における交流と会報発行を通じての交流となる。

4番目の事業は、伝統的に言えば、公益財団法人日本YMCA同盟主催の夏季セミナーやサマーキャンプなどへの参加費用の補助である。概ね、10万円を限度に、参加費用の50%を補助している。また、ここ数年、実施しているのが、海外の大学あるいは海外YMCAとの交流事業を、学生有志が自ら企画し、それに参加する場合に、参加費用を補助している。特に、海外の大学交流では、如水会国際交流基金による補助が認められるので、当会の補助と如水会の補助を合計すると、学生の費用負担は2割程度となり、寮生の参画意欲には強いものがある。何故なら、一橋の学生として、将来海外ビジネス分野で活躍するには、実務的なコミュニケーションツールとしての英語力と海外事情に対する生きた知見が必須となるからである。勿論、一週間程度の研修旅行では、内容的には十分ではないものの、一番重要なことは行って見てくることによる動機付けを強めることが出来ることである。如水会の海外支部の支援を得て、海外における日系企業の訪問などもプログラムに組み込み、また、YMCA同盟の紹介により、海外の都市YMCA訪問のプログラムを加えている。学生YMCAと都市YMCAとの接点はあまりないものの、海外YMCA、特に香港YMCAとの交流は、学生にとって、YMCAを身近に理解するための良い経験に繋がっている。

以上、当会事業目的及び事業内容詳細に説明してきたが、2016年12月に発行された『会報』第66号に掲載した「公益法人認可について」は公益法人認可の過程、その意義を余すことなく記載しているので、130年年史にこれを掲載しておくことは、今後、当会を引き継ぐ後輩諸兄にとって、大きな意味があると思うので、これまでの記述と重複する部分もあるが、ここに掲載しておきたい。

公益法人認可について(2016 年発行会報第 66 号から)

昭 46 経・昭 48 法 齋藤金義

はじめに

2016 年 9 月 1 日付で当会は公益法人の認定を受けることが出来た。ここまでどれくらいの時間を要したことか、自分でも覚えていないほど、長くかかったというのが正直な印象である。

どうしてこんなに時間がかかったのか、やはり所管の行政庁から公益認定を受けることが一言でいえば大変だからである。大変というのは、時間がかかるという意味ではない。どのような書類、どのような内容を記載すれば、公益認定されるか、ある意味では教科書がない、どう書いてよいか、記載例を幾ら読んでも分からない、見当がつかない、だから大変なのである。こうすれば、時間をかければわかる道筋がなかなか見えて来ないから、どこをどう押して、仕上げるかの展望がないから、そういうもどかしがあったから、時間が物凄くかかったのだと思う。これは、やはりやったものでないとわからない。

しかし、最終的には意外と簡単にできたのである。何故か、それは所管の行政庁、具体的には東京都のご担当が、物凄く親切に、ご指導下さったからである。つまり、ある水準まで行くと、今度は所管のご担当の実績になるから、何とか合格できるよう、今度は先方が必至にご指導くださるようになったことで、ことが思いのほか進んだのである。このご担当が取り上げて下さるレベルまで漕ぎつけると、どんどん進むことになる。問題は、取り上げて頂けるレベルに行くまでが、実は一番大変であった、と振り返ると思える。

まあ、苦労話のエピソードは一杯あるが、兎に角、左程の費用をかけることなく、自力でできたのだから、やはり自分を褒めてあげたいと思う。しかし、そんな個人の手柄話ではなく、重要なことは、公益法人になることの責任の重さと自覚を持つこと、この自覚を組織として、これを引き継ぐため、言い換えると、公益財団法人一橋大学基督教青年会を、維持発展させて行くために、ここに公益法人の目的と事業の原点を探し求め、申請過程を振り返り、それを記録としてとどめておくことは、大変意義のある、また、大事なことであると思う。願わくは、我が後輩諸兄が当会を立派に引き継いで欲しいという気持ちを込めて、ここにその認可までの記録を書き残したい。

1. 公益財団法人の法律上の位置づけ

平成 18 年 6 月 2 日に同時に施行された 2 つの法律、一つは「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律」(以下「一般法人法」という)であり、もう一つが「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」(公益認定法という)である。当会は、平成 22 年 8 月 20 日、今から 6 年前に一般財団法人として一般法人法に基づき法人格を登記する団体となった。一般財団法人は、届け出だけで設立することが出来るという意味から、会社設立と同じ程度の事務手続きで法人格を持つことが出来る。しかし、公益認定法における公益財団になるには、行政庁の認定を受けなければならない。行政庁とは、活動が全国に及ぶ場合は内閣府であり、当会のように東京都のみで活動を行う場合は東京都の認定を受けることになる。

2. 公益認定の要件

公益認定法の第 5 条には、認定の要件が全部で 18 項目記載されている。例えば、第 1 は公益事業

を主たる事業としなければならぬとあり、第2には公益事業を行うに必要な経理的な基礎及び技術的基礎を有すること、第3には理事、評議員などに特別の利益を与えてはならないとある。具体的に言えば、当会で言えば学生寮の運営、学生を対象とする講演会、研究会の開催、また、OBと学生の交流事業などを通じて、公益事業として何を行っているのか、整理して記載することが求められる。当会の事業内容を、こうした観点から整理してみると、結構、この作業過程の中で、公益性の担保としての要件が何であるか、当会の事業内容でどういう事が重要なかが見えたことは、相当、意義があったと思う。意識しないで漠然と行ってきた行事等が、それぞれ明確に見える化ができたと思う。その見える化を整理して、それを定款に記載することにより、当会の事業の公益性を再認識できたと思う。

3. 当会の事業目的と事業内容

この観点から当会の新しい定款では、事業目的と事業内容を下記のとおり整理した。この整理に当たっては、公益財団法人公益法人協会の星田氏にご指導を頂いた。

まず、事業目的は、第4条に以下のとおり規定した。

第4条 この法人は、一橋大学の学生(大学院生及び留学生を含む。)を対象とする学生寮を運営し、寮生及び一橋大学の学生に対して基督教及び基督教文化等を宣べ伝え、また、学生自治による寮共同生活あるいはOB等による講演会・座談会・修養会の開催などを通じて、学生の霊性、知性、身体の健全な発達を図ることを目的とする。

目的では、当初、キリスト教を前面に出すことについて、公益の観点から疑念がなかったわけではなかったが、東大Yの定款で公益認定を既に認められている定款を参照したところ、「キリスト教を宣べ伝える」と明確にあったことを根拠に、この定款を継承した。これは、ある意味、当会の歴史上譲れないものであり、当会を当会たらしめている根幹でもある。この目的を達成するために、以下事業は第5条に4つ行くと規定している。

第5条 この法人は前条の目的を達成するために次の事業を行う。

(1) 学生のための寄宿舍運営事業

(2) 寮生等を対象とする聖書研究会、講演会、修養会等の開催

(3) OBと学生との交流会等の開催

(4) 国内外のYMCAとの交流又は交流のための参加支援及び運営等の事業

(5) その他上記目的を達成するために必要な事業

まず、第一に寄宿舍、つまりYMCA一橋寮の運営事業である。しかし、単に寄宿舍を運営するだけではなく、この寄宿舍を基点に、聖書研究会、講演会、修養会などを開催すること、また、何よりも学生と卒寮生、OBとの交流を促進すること、これは学生を育成することにとどまらず、この寮を卒業したOBも、生涯、当会とのかかわり、交流を通じて、成長発展することを意味する。

また、第4に挙げた事業は、従来は当会ではあまり事業としてこれを意識することが少なかったが、内外のYMCAとの交流、他の学生YMCAとの交わりを日本YMCA同盟の事業を通して参画すること、また、同盟の運営する各種サマーキャンプ等に参画するのみならず、当会が自ら交流プログラムを企画し、運営すること、これもやはり重要な事業になる。何故ならば、一橋大学の学生にとっては、単なる社会貢献、ボランティア活動という範疇では、十分、学生にとって魅力あるプログラムにはならないからであり、社会貢献は重要であるが、同時にキャプテンズ・オブ・インダストリーの精神を体现できる交流プロ

グラムも用意されなければ、やはり一橋の学生にとっては魅力がないことになる。当会はそういうプログラムも同時に用意し、学生にとって魅力あるプログラムを企画運営したいと考えている。

4. 経理的な基礎について

次に問われるのはやはり公益法人としての経理的基礎である。これは、言い換えると、公益法人の決算や税務、その他の議事録の整備等のコンプライアンスを含めて、法人の事務運営体制とその中身が問われている。

会計決算は、正味財産増減内訳表と貸借対照表内訳表、財産目録等の計算書類の作成及び管理である。内訳表の意味は、公益法人会計、収益会計及び法人会計の3部門に分割し、これを表示するものである。当会で言えば、駐車場事業が収益会計となり、寄宿舍やYMCA活動費用が公益部門会計になる。法人会計は、一般管理部門として、公益及び収益どちらにも属さないもの、例えば総会等の開催の会議費や会計法人への報酬費用などがこの法人会計の管理費として計上される。これが公益認定上どのように関係するかと言えば、公益会計部門は赤字でなければならない、また、公益会計部門の費用は、全体費用の50%以上でなければならない、という判定基準がある。こうした基準一つ一つが判定をして行くうえで必要となり、つまり、決算書を見て判定するのではなく、これらの様式に必要な数字を入れて、合否が判定される仕組みである。全部、それがWeb上の電子申請で行われる。この電子申請のシステムとやり方をマスターするだけでも相当面倒なことである。

この他、公益財団会計で重要なものが、指定正味財産である。公益財団会計では、公益事業を行うための基本財産、つまり当会で言えば寮の土地や建物がそれに相当するが、再建のための寄附金収入は、これを含めると公益会計部門が黒字になるので、再建など特別目的の寄附金は、別途指定正味財産として、一般正味財産と区分し、会計決算を行うことになる。会計上は、部門は3つになり、会計勘定としては、一般と指定に分かれることになる。その他、役員(理事、監事)と評議員に関しては、住所、生年月日を詳細に記載し、反社会的勢力でないなどの警察を経由したチェックも受けるなど、審査は厳重に行われる。但し、面白いことに、計算書類の審査は、あくまで申請した年度の着地、予想に基づいて行われるので、過去のBSや損益計算書は、当然提出するにしても、判定表上は過去のものとして、合否の対象にはならず、公益財団になる年度がどうなるか、予想の正味財産増減計算書によって、判定表を作成するのである。最初、この意味が分からず、過去の決算書で行っていたところ、当然、門前払いとなって、所管の東京都から相手にされなかった。こういうことはマニュアルのどこかには書かれてはいるのだろうが、それを見つけるのは至難であり、そういうことをご指導頂けたのが前述の公益法人協会である。こうした専門機関の指導がないとスムーズには進まない。

5. 公益法人のメリットとデメリット

何故、このような認定申請及び認定後の煩雑な事務手続きがあるにも拘わらず、公益法人の認定を得るメリットはどのようなものであるかを確認したい。結論から言えば、税務上のメリットに尽きる。税務上のメリットとしては、まず固定資産税が、公益事業分について、非課税となる。当会は毎年約90万円の固定資産税を支払っているが、公益法人後は駐車場の収益部分のみの16万円程度で済むことになる。

また、収益事業については、一般財団法人であれば、収益事業の直接費用は控除できるが、残り

の収益は分離して課税されるが、公益財団法人では、公益事業の赤字と収益事業の黒字を損益通算が認められる。但し、全額が損益通算されるには、相当の条件があり、当会の場合は収益事業の利益の50%まで損益通算が認められる。当会は、年間20万円前後の法人税を支払っているが、これが半分に軽減される。

また、当会への寄附金について、寄附者は所得控除もしくは税額控除のいずれかを選択し、確定申告により源泉所得税の還付が可能となる。なお、この寄附金の税務上の特典を認めてもらうためには、所管官庁に申請し、承認を貰う必要があり、公益財団法人だから直ちに所得税の軽減とはならない。現在、縄田理事のご尽力で東京都に寄附金の税務上の所得控除・税額控除の特典について申請中であり、11月8日にその承認が手渡される見込みである。

デメリットはやはり事務上の煩雑さである。しかしながら、この事務上の煩雑性は、そもそも独立した法人としては、所管行政官庁から監査を受けるから体制整備するというより、そもそも会員からの貴重な寄附金を管理運営するためにも計算書類の整備はもとより、様々な事業を遂行するにあたり、理事会での審議及びその議事録の整備保管は当然の責務であり、公益財団法人だからより必要以上の作業や業務が増えたということではない。ある意味、当然必要な事務であり、管理業務なのである。従って、デメリットが沢山あるということではない。今後、HPを活用し、より当会のディスクローズを積極的に行うことは、公益財団法人として求められるものではあるが、他方、当会の活動内容が会員はじめ多くの人に周知されることになるのであるから、それはそれで大きな意味があると思う。公益財団を継承していくことは、ある意味大変であるが、これを継続していくことは、当会の事業目的とその事業内容が価値のある、有意義なものであることを示して行くことになる。マイナス面ではなくプラス面が大きいことを、役員、評議員及び会員の皆様と共有することが出来れば、これはとても素晴らしいものと確信する次第である。

最後に

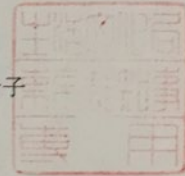
今回、公益法人申請については、殆ど私個人の一人作業であった。途中、何度も挫折し、投げ出したいと思ったことは再三あったが、堀地評議員会会長はじめ、評議員及び理事監事の皆さんのアドバイスとお励ましにより、何とか認定を得ることが出来た。東京大学基督教青年会の長島元常務理事からはご助言と貴重な資料のご提供を頂いた。行き詰まりの時、堀地会長のご紹介で訪問した公益法人協会相談員星田寛氏のご指導にも大変教えられることが多く、星田氏のご指導なくしては、スムーズな申請には至らなかったと思う。また、認定申請は東京都生活文化局都民生活部管理法人課課長代理(公益法人担当)長谷川弘氏であり、ご担当は長谷川氏で3人目であったが、長谷川氏からは大変ご親切かつご熱心なご指導を頂いた。長谷川氏のご指導なくして、公益認定はこの時期に受けなかったと思う。申請過程では、箸の上げ下ろしで不満を抱かざるを得ないことは数えきれないほど多くあったが、振り返ってみれば、ある意味、当然すべきことでもあり、これに耐えられなければ公益法人を語れないのだと改めてその責任感を再認識する過程でもあった。

これらの多くの方々のご支援とご協力があったればこそこの公益法人認可であり、ここに改めて感謝の意を表したい。

28生都管第710号
平成28年 9月1日

一般財団法人一橋大学基督教青年会
齋藤 金義 様

東京都知事 小池 百合子



認定書

平成28年6月24日付け申請に対し、公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律（平成18年法律第49号）第4条の規定に基づき、別紙のと通りの公益財団法人として認定する。

第4章 YMCA 一橋寮の増改築工事の経緯と概要

2016年に公益法人化の認可が取得できたことで、新寮舎の再建と募金活動は一挙に具体化の道を進むことが可能となった。新寮舎の建設は、昭和54年の寮舎の再建以降、長年の課題であった。その最大の理由は、16名収容の個室の寮舎は、躯体は鉄筋コンクリート造りであり、強固な構造を持っていたものの、チャペルとして建設された一室が手狭であり、OBと寮生数十名が一同に会する場所が無かったことである。また、寮生が12名から16名に増加した割合で言えば、食堂も手狭であり、寮における共同生活を営む場所として十分な共用スペースが足りない状態であった。土地330坪の中に、総床面積115坪の建物であるから、この土地の容積率80%からすれば、十分な敷地の余裕がある。

当初、寮舎の再建計画は、20年後に再建する方針であったが、その後20年後では現在の関係者がいなくなり、再建の機運が萎んでしまうので、10年後の再建がその次に打ち出された。10年後とした理由は、再建に必要な寄附金を集めるのが数年では難しいこと、寮費を値上げし、減価償却見合い部屋代を受益者負担原則として、寮生から徴収することになり、その積立金が積み上がる時間が必要であり、いずれも建設資金をどう集めるかという課題から10年という年月が必要と判断された。しかし、堀地評議員会委員長の強い提言や中島省吾元理事長の100万円の遺贈のお話が契機となり、現在の執行部が運営している今こそ寮再建を実行すべきとの意見が強まり、かつ、再建ではなく増改築により、問題の解決が図られるのではという提案が出され、増改築であれば必要資金はそれほど大きくならず、3年～5年以内に増改築が可能であるとの方向で意見集約が可能となった。具体的に

は、YMCA 一橋寮再建企画委員会が2017年6月の総会において発足し、岩谷滋雄元オーストリア大使が委員長に就任し、この委員会において、増改築の実施の方針が打ち出された。この意見書は、増改築案が正式に決定された経緯を詳細に記述しているので、ここに再掲致したい。

YMCA 一橋寮大規模改修計画の概要と進め方(2017年7月発行会報第67号)

YMCA 一橋寮再建企画委員会委員長 岩谷滋雄

2016年6月の総会で設立されたYMCA 一橋寮再建企画委員会のその後の活動状況についてはご存じない会員諸氏が多いと思うが、何十年に一度しか行われたい計画が進んでいるので是非皆様にもご承知いただきたく、ここで寮再建に関する見解、基本方針、そして今後の進め方がどのようになっているか、簡単にご紹介する。以下は委員会メンバーの概ねのコンセンサスが得られているものではあるが、私の個人的見解も含まれていることをお断りする。これを読んで、出来るだけ多くの方に問題意識を持っていただき、今後の委員会の作業に参画していただけることを期待している。

1. 背景

YMCA 一橋寮は、1887年(明治20年)と言われる東京商業学校YMCA発足の当初から構想されていたが、米国人YMCA指導者J.R. モット氏からの多額の寄付を得て、1910年(明治43年)神田美土代町に建設されたのが最初である。それ以来場所や建物は変わっても一貫して維持され、100年を上回る歴史があるが、その間一橋大学のキリスト教研究文化サークルの活動拠点として日本の産業界を始め各界に秀逸な人材を輩出してきたことは御承知のとおりである。〔「一橋基督教青年会—百年史—」参照。〕

1935年(昭和10年)に現在の地に初代の寮が建設され、その後1979年(昭和54年)に同じ地に新築された今日のYMCA 一橋寮は、当時の厳しい財政事情に鑑みれば最善の住環境を提供する施設として再建に当たった当時の関係者の英知と努力の賜物と高く評価されたものであったが、約40年近い歳月の経過の中で劣化が進み、住環境としても、またクラブ活動の拠点としてもその使命を十分に果たせない状況に立ち至っている。

長年の懸案であった一橋大学基督教青年会の公益財団法人化が成った今、次に着手すべき喫緊の課題はこの劣化した状態にあるYMCA 一橋寮をその伝統と使命に相応しい寮舎に改築することである。

2. 基本的見解

社会で役立つ実学の教育を専らとする一橋大学においてYMCAの果たすべき役割は学生達にキリスト教精神を体得させることを通じてしっかりした人生観、世界観、そして倫理観を養う機会を与える、もって大学自体の与える教育と相俟って多難な人生を生きていくための十全なる人格の形成を可能にすることにある。上記百年史には明治前半期の発足以来他大学よりも活発に活動していた事実が記録されているが、恐らく商法講習所発足当初からW.C. ホイトニー氏のような米国人クリスチャンの簿記専門家の指導を受けたためではないかと想像する。昨今の日本の大手企業における粉飾決算や欠陥製品対策の遅れ、倫理観の欠如した政治家の振舞い、等を見るにつけ、この一橋大学YMCAの存在意義は今日の日本においても決して薄まっていないことを確信するものである。

上記の目的を達成するための有効な手立てとして一橋大学YMCAは他の幾つかの大学YMCAと

同様、寮における共同生活を行うことを伝統としてきた。即ち、寮は思索、祈り、読書等を通じる文学・芸術を含むリベラル・アーツの学び、心のうちをさらけ出すような討論、といった高度な知的・感性的活動を行う場であり、それにふさわしい設備と雰囲気を有するものとすることができれば、上記目的を達成するための極めて効果的な道具立てとなることは明らかである。最近シェア・ハウスやグループホームが評価されているのもこのことの傍証になると考える。

3. 具体的方針

より具体的には、寮生の日常活動である朝拝や聖書研究会のみならず、公益法人化が成った今年6回程度は行われるべきOBとの交流討論会、年数回の広く大学関係者や地元地域住民を招いた講演会・討論会（小平際・一橋祭参加を含む）、コンサートや歓送迎会などの親睦文化行事、が行える場を備えると共に、昨今の学生の要求水準に見合うような、小平の学生寮などの競合する施設に比べても見劣りしない快適で魅力的な諸設備を備える必要がある。

個人個人に落ち着いた環境を提供する観点からは引き続き原則個室とすることが望ましいが、一方において寮生が自分の部屋に閉じこもって孤立してしまうことがないよう、自然発生的な交流が生じ、親密な人間関係に繋がっていくことを容易にするような動線を確保するなど、シェア・ハウスの要素も取り込むべきである。その意味で談話室の設置も望まれる。この寮の日常的な維持管理は寮生の自治によることとしており、その観点からも寮生間の協力・協調が容易に行われうるような住環境とすることは当寮の持続可能性を確保する上で必須の要請とも言える。

また、YMCAの性格上伝統的に男子学生しか受け入れないこととしてきたが、今や一橋大学の学生の3割を占めるに至っている女子学生を排除することは最早時代にそぐわないと言わざるを得ず、女子を受け入れるための手立ても考える必要がある。

寮母の存在は寮生達の母親代わりとして家族的な雰囲気 of 醸成に多大の好影響をもたらしてきたところではあるが、寮内に同居でき、クリスチャンでもある寮母を見出すことは昨今極めて困難となりつつある。一方において、公益法人化がなった今、法に則って帳簿類等を整備し、併せてその趣旨に沿った活動を活発化させるために常務理事を置き、そのための事務室を確保することは不可欠の要請である。予算及びスペースの制約等を考慮すると、この際寮常駐の寮母を置くことはあきらめ、通いの寮母かケータリング会社による平日夕食のみの提供を原則とし、空いたスペースで常務理事の事務室を確保することが適当と考えられる。併せて、シェア・ハウスの雰囲気 of 醸成のためにも台所は同時に数人の寮生達が利用できるようにすると同時にパーティの準備にも利用しやすいような造りとするのが望ましい。

この結果として、寮生の監督・指導は寮母に代わって常務理事が行うこととなる。また、ゲストが臨時に宿泊できるような部屋も確保できれば理想的である。

出来る限り日本の木材を多用し、再生可能エネルギーの取り込み等環境に負荷をかけず、光熱費の節約にもつながるような建物とすべきであることなどは言を俟たない。

4. いくつかの前提と制約

平成17年の耐震診断の結果によれば現存の建物は適切な維持管理を行えば今後30年前後の使用に耐える躯体を有しており、現行法の要求水準を満たす耐震構造となっている。従って、当初取り壊し・建て替えの案もあったが、この躯体を基本的に維持しつつ、その大幅改修と若干の増築によって上記の目的達成を目指すこととする。ちなみに、この建物は建設当時はやりの「モダニズム」様式で建

てられており、築後 50 年を経過すれば「登録文化財」の指定を受けることが可能とのことである。これにより具体的なメリットが生じる訳ではないが、この建物に「箔」を付ける意味はあるのではないかと。

建設資金は一橋大学 YMCA 会員の寄付を中心とする浄財で基本的に賄うこととし、現時点の寄付の受け付け状況と今後 1 年間程度以内に期待される追加的寄付を合わせ、現実的な予算額として 8 千万円を想定する。但し、募金目標金額の達成状況及び工事の見積金額によっては、当方が希望する大規模改修工事の全ての工事を実施できないことが当然想定されるので、工事契約等工事の具体的な実施及び進め方については、段階を設けるなどにより資金に見合った弾力的な実施を行うことにならざるを得ない。但し、最終的な出来上りの姿は最大限上記基本方針に沿った魅力的なものとすべきである。

敷地内に賃貸アパートを建設することは多々問題があるため行わない。駐車場については、引き続き貴重な収入源として維持することとするが、場所については建物の北側に移す等により収容台数を増やすと共に寮の表側の美観改善を図ることとする。移設費用については駐車場管理を管理会社に委託することを約束するのと引き換えに管理会社に負担してもらう、という方式も検討する。

女子用の部屋については改造費用の増大を回避するため隣接する住宅を借り受けて利用する可能性を探求する。これが困難である場合、現建物を東方向に拡大する可能性も検討する。

前回再建の際に生じたとされる「伝統の断絶」を回避するため工事は出来る限り寮生の居住継続を妨げないようにしながら行うこととする。完全退去が不可避な場合であってもその期間は必要最低限にとどめ、夏休みの時期に合わせるなどの工夫をするものとする。

5. 今後の進め方

本格的なコンペの実施は建築には素人の集まりである寮再建企画委員会の手には余り、経費的にも小さくない負担となることが予想される中、儀賀裕理理事のついで、ミームズ一級建築士事務所の田代洋志代表が候補者として浮上した。同氏はクリスチャンであり、日本基督教団根津教会及び大磯教会の改修で高い評価を得たという実績もあり、再建企画委員会として好印象を持つに至った。そこで、同氏と別のもう一社から基本計画作成作業に関する案を提示してもらい、比較検討した結果田代代表のアイデアと高い熱意を評価して、同氏に基本計画作成作業を委託することとし、6 月 24 日の理事会・総会の承認を得た。その後、6 月 30 日には当青年会と同氏の間で覚書を締結し、作業が開始されたところである。

併せて、それまではっきりしていなかった再建企画委員会の構成については、私が委員長、堀地史郎、宮岡五百里、渡辺徹、齋藤金義、儀賀裕理、加藤順、西浦道明、安藤誠の各氏とその他有志の方を構成員とするということで理事会・総会の了承が得られた。

今後田代氏と再建企画委員会と大城寮長以下寮生各位の共同作業で 10 月末完了を目処として基本計画作成作業が進められることになる。その後は、基本設計、施工業者選定、詳細設計、施工、と進み、並行して募金活動を行い、全てが順調に進めば来年秋には完成予定である。

6. お願い

会員各位からの貴重な寄付を利用して実施される今回の大規模改修プロジェクトの中身は、10 月末まで行われる基本計画作成作業の中でほぼ固まってしまうということになる。従って、私としてはこのプロセスに出来る限り多くの会員の方に関与して欲しいと願っている。この作業は主として国立の YMCA 寮で土曜日か日曜日の午後に行われることになるので、その日に国立に来るのにさほどの困難のない

方、そしてこの種のプロジェクトに関与した経験をお持ちの方や建築に関する契約の実務に詳しい方などは特に、委員会の「有志」メンバーとして参加していただければこれほど心強いことはない。それによって若手から古老会員まで全ての世代の意見が反映されれば更に理想的である。我こそはと思われる方は私までご一報いただければ幸いである。ご質問・疑問の提起も歓迎する。

この答申が出される前の当初の計画検討の時の齋藤理事長私案は、敷地の半分約 160 坪を定期借地権として第三者に提供し、土地価格の 30%の定期借地権金約 80 百万円と寄附金とで 150 坪の新寮舎を建設するという計画であった。しかし、この案は土地の形状や建物の建築許可の状況から寮舎と第三者の建物が同一の建物でないといけないう状況から、断念せざるを得なかった。結論としては、現在の建物をそのまま活かし、寮生の居室に家具を設置、シャワー室や洗面所などの水回りを改善し、食堂を拡張、手狭なチャペルを取り壊し、南側駐車場を西側に移設し、その跡地に小ホールを新築するというプランを採用した。予算は総工費(税込み、設計料を含む)80 百万円、寄附金募集総額 80 百万円で、2017 年 6 月の総会(評議員会)において増改築工事を正式に決定した。しかし、その後、建設費の値上がりもあって、工事予定金額は 90 百万円を越えるものとなった。

工事は大きく第 1 期と第 2 期に区分することが出来る。第 1 期工事は、寮室や食堂などの共有スペースの内装工事と洗面台やシャワー室、洗濯場などの水回り工事である。もともと、昭和 54 年の当時、寮は三井建設さんというオフィスビル建設が得意な建設会社さんが施工されたこともあって、洗面台などの水回りが居住用の洗面台とは異なり、あまり住宅用には適していないものであったが、今般、それを改修し快適なものとし、トイレも自動水洗機能付きの高級なものになり、シャワー室を 1 か所増設し、合計 2 か所とした。工事は、興建社にお願いし、総工費は興建社の請負金額が当初は 29,808,000 円であったが、その後、追加工事費として 1,447,200 円が加わり、合計 31,255,200 円となった。工事期間は学生の春休みを利用するとしても、一部期間 2 月中はどうしても寮生が生活しなければならないため、儀賀理事の紹介で、クリスチャンの学生寮である登戸学寮や関理事の賃貸マンションなどに分散宿泊し、宿泊施設を確保しながら工事を行った。この工事は 2 月から開始し、3 月上旬に終了した。寮生諸君も登戸や三鷹からの通学で不自由な思いをされたと思うが、皆快く協力してくれたことに感謝したい。

第 2 期工事は、念願の YMCA 一橋ホールの建設とそれに伴うチャペルの取り壊し及び駐車場を西北側に移設する外構工事である。この工事費の見積を興建社ほか他の建設会社をお願いしたところ、当方の予算と大きな隔たりがあり、途方に暮れていたが、私の知り合いの住宅建設会社の東京組が折り合い良く見積をお出し頂いたところ、当方の予算に近い金額であったことから、第 2 期工事は東京組にお願いし、目下、年内の完成を目指して、工事が進んでいる。とはいえ、台風の影響で工事が遅れたこともあって、外構工事など全ての工事が完成するのは来年 1 月にズレ込む見込みである。なお、東京組の見積金額は、ホール及び外構工事など全て含めて、総額 38,500,000 円であるが、これも工事完成後の追加費用が出てくる可能性は否定できない。なお、駐車場の移設工事に関連し、隣地西側の長野様からは、駐車場の門扉増設のご要望を頂戴している。

工事は最終的にはまだ、終了していないものの、現段階、2019 年 11 月現在での増改築工事費用の総額及びその内容については、以下の表のとおりである。2018 年度と 2019 年度の 2 年度に跨った工事金額である。東京組の工事費 3,850 万円、興建社は 3,125 万円、設計料などを含む総額は

9,355 万円である。勿論、竣工記念式費用などが諸経費に入っており、また、家具についても、まだ最終の支出は確定していない。これが実際に支出されるかは、現段階では未定ではある。総予算 80 百万円以内でスタートしたものの、結果、90 百万円を超える見込みである。オリンピックや風水害などの災害工事などの影響もあって、工事費の高騰及び工事の人手不足などによる遅れは、予想以上に厳しいものがあつた。当初バラ色に描いた増改築工事の内容も、切り捨て、切り捨てで実現できなかったものも多い。そういう中で、田代洋志一級設計士には、我々の思いを実現すべく大変なご尽力を賜ったことに、心からの感謝を申し述べたい。田代氏のご努力と豊富なご経験なしに、工事の遅れはあつたものの、今回の増改築工事は無事に出来なかったと思う。特に、建築許可を巡って国立市とのやり取りは大変なご苦勞であつたと拝察する。仕事と言えば仕事であるが、報酬を越えてのものがあつたと思う。

なお、工事費の支払いに関しては、寄附金の他に、過去に積立てた資金があり、何とか支払いは賄える見込みにあるものの、財政状態は極めて厳しい状況にある。

金額：円

2018年度実績及び2019年度増改築工事見込	
本体工事費(東京組)	
共通仮設工事	1,061,500
一部既存改修工事	4,477,000
増築工事(ホール)	19,156,500
給排水ガス衛生設備工事	5,170,000
外構工事費	3,685,000
諸経費	1,450,000
本体工事費(計)	35,000,000
本体工事費消費税(10%)	3,500,000
(a) 本体工事費(小計)	38,500,000
(b) 既存改修工事(興建社)	31,255,200
(c) 別途工事費(他家具)	6,480,000
(d) 寮室家具	1,901,840
(e) 予備工事費(本体工事の6%程度)	3,850,000
総工費(A)=a+b+c+d+e	81,987,040
設計・監理 (A)*15%(*1)	10,303,200
諸経費 (A)*1.45%(*2)	1,008,800
オルガン修理費用	251,800
総設備投資金額	93,550,840

第5章 増改築工事のための募金活動とその結果について

募金活動については、再建か増改築かに拘わらず、既に2014年に目標額80百万円で、西浦道明氏を委員長に、募金趣意書が作成され、会員に対する募金活動は実施された。募金活動の成果としては、2019年5月末において、寄附金申込総額は7,803万円とほぼ目標金額に近い寄附金募集に成功した。寄附金の年代別で見ると、昭和40年以前の卒業生から3,320万円、41年以降から3,955万円、会員以外(国立教会及び砵教会服部記念基金及びその他)から528万円である。昭和

41 年以降をさらに年次別に見ると、40 年代が 20 百万円と 41 年以降の半分以上を占めており、40 年代の寄附参加率は 76%と断トツとなっている。クリスチャンの比率が高く、かつ、YMCA 活動が最も盛んで充実していた世代であることが、このことから十分読み取れる。しかし、ここで寄附金について重要なポイントは、10 百万円以上の寄附が中島省吾と堀地史郎元理事長の 2 人、瀧浦満未亡人の 500 万円、藤原尚氏の 300 万円、200 万円が 2 人と服部弘基金から 460 万円とこの 7 人で 36.6 百万円、全体目標の 46%の寄附金が申し込まれている。大口のこれらの篤志家の寄附があって全体の目標がほぼ達成されていることは、忘れてはならないであろう。寄附金の単純平均は、寄付者数は 99 名、一人平均寄附金額は 78 万円、多くの寄付者が 50 万円前後の寄附を行ってくださった。

35 年前、現在の寮舎の建設資金総額は 54 百万円、そのうち寄附金で賄われたのは全体の 2 割の 10 百万円であり、残りは土地の売却に頼らざるを得なかったことから考えると、寄附金目標に近い達成は、大きな成果であった。過去、YMCA 一橋寮の建設資金は、もともと JR モットらによる米国 YMC A の援助がその殆どを占めていて、そのからし種の資金が土地の購入とその後の移転に伴う土地の譲渡資金として、昭和 10 年の国立の旧寮舎が建設されたことを忘れてはならない。しかし、今日、ここに来て、土地の売却に頼らず、卒業生からの寄附金と寮生の部屋代積立金で寮舎の増改築を成し遂げ得たことは、当会の 130 年の歴史から考えても大変意義深いことであろう。OB による寄附金と、寮生から徴収した部屋代(共益費を除く減価償却費の一部)の積立金により、今回、ホールを新築し、寮舎をリノベーション出来たことは、今後の当会の寮舎の維持発展に繋がるものである。130 年史にこの事実を記載して残すことは、今後、この寮舎の維持発展の責任を担って頂く後輩諸兄にとっても大きな励みになるものと確信する。

これらの成果の要因は、法人化に伴う組織的な責任体制が確立されてことが大きく貢献している。組織的な、法人ではない個人の集まりによる運営主体では、どうしても出来る範囲でのことに留まり、計画的な資金集めや資金の積立が十分行えないことはやむを得ないことであつたろう。法人、特に公益法人としての責任の重さを強く持ってこそ、初めて可能な事業と言える。また、寄附金を要請する場合も、公益性の観点から税務上のメリット及び社会的な意義を、卒業生及び関係者に強く訴求できたからに他ならない。

		寄附申込			実績(単位:万円)					2018年 度末 累計 実績	2019年 4月～9 月末 実績見 込	2019年 9月末 累計実 績見込	2019年 10月以 降
		人数	参加率	金額	2014 年度	2015 年度	2016 年度	2017 年度	2018 年度				
昭和40年卒業以前		19/33	57.6%	3,320	1,226	70	210	703	776	2,985	100	3,085	235
昭和41年以降卒業		74/183	40.4%	3,955	303	203	685	755	1,227	3,173	420	3,593	362
会員以外		6	-	528	320	0	0	0	208	528	0	528	0
上記計		99/216	45.8%	7,803	1,849	273	895	1,458	2,211	6,686	520	7,206	597
昭和41年以降卒業		74/183	40.44%	3,955	303	203	685	755	1,227	3,173	420	3,593	362
昭和 41年 以降 卒業 内訳	昭和40年代(41 年～49年)	23/30	76.7%	2,067	243	186	531	311	518	1,789	240	2,029	38
	昭和50年代(50 年～59年)	19/39	48.7%	791	5	7	50	205	404	671	55	726	65
	昭和60年～平成 5年	15/35	42.9%	743	50	0	98	195	220	563	50	613	130
	平成6年～平成1 5年	8/34	23.5%	211	5	5	0	35	61	106	75	181	30
	平成16年以降	18/45	40.0%	143	0	5	6	9	24	44	0	44	99

第6章 OB 相互及び寮生との交流を繋ぐ会報発行の意義

会報の発行は、一橋基督教青年会発足当時から発行されていたものかどうか、記録は不明である。多分、何らかの会報誌は発行され、会員相互及び OB には配布されていたものと想定するものの、当会の歴史上、明確な会報誌の発行は、1965 年、昭和 40 年の 1 月である。会報は毎年それ以降、主に寮生によって編集・発行され、最初の会報はガリ版の手書き文字で発行され、受け継がれてきた。手書きのガリ版が写植の活字となったのが、1967 年、昭和 42 年、会報の発行が年 2 回となり、夏号 7 月発行は寮生の編集、冬号 12 月発行は OB の編集による発行とし、従来の縦書き B5 判から横書き A4 判と紙面も大きした。これは、英語などの文字の多用が増えたこと、及び横書きで A4 版がビジネスなど世界的な基準で多用されていることから変更した。

この会報は、多くの OB 会員にとって、当会の帰属意識を高める働きとなったことは間違いない。特に、OB の初代編集長であった瀧浦満先輩の心の籠った編集依頼は、直筆の達筆な文面でお断りするにはあまりに申し訳ないという思いを、受けとった方々が全員、感じるほどであった。この会報に寄稿されている会員の文章は、本当は全部掲載したいほどの素晴らしいものばかりであり、読み返す価値がある。紙数の制約からそれは出来ないで、今回、この 130 年史には会報が年 2 回となった 2008 年第 50 号から 2019 年 7 月発行の 71 号までの表紙及び目次を全て掲載することで、寄稿の文章を索引として探し求めることが出来るようにした。また、130 年史の発行に合わせて、これらの会報の電子版を当会 HP 上にアップし、会員であれば何方でも読めるものに致したい。会報 50 号からのみ今回資料として掲載する理由は、50 号以降全て電子ファイルが保存されているという理由からである。それ以

前の会報は紙ベースの保存であるため、これらをスキャンし電子化するには相当の時間とコストが発生するが、資料の散逸を防ぐことや誰もがアクセスできる利便性を考えると、時間とコストをかけて電子ファイル化を将来行うことが課題であろう。

第7章 当会の課題と今後の望ましい施策と展望

この130年史が発行される丁度その2019年12月21日に、完成直後のYMCA一橋ホールにおいて、クリスマス礼拝をOBと寮生とが一同に会して実施できることはこの上ない喜びである。法人化、公益法人化、再建か増改築か紆余曲折しながらも増改築による寮舎の一新、リベラル・アーツ学びの拠点としてのYMCA一橋ホールの完成、寄附金のほぼ目標達成、これら一連の事業を何とか関係者の皆様の一致協力と献身的な努力により、無事出来たことに心から感謝したい。

しかし、これで目出度し、目出度しという訳には行かない。課題は数多く山積している。YMCA一橋寮の130年の節目は、歴史の一里塚、通過点に過ぎず、これから何十年、何百年と続く当会の未来に向けて何が課題として残されているかを明らかにしておくことは、今後の当会を考える上で重要なことである。勿論、ここで述べることは、理事会や評議員会などで正式に議論されたことではない。が、しかし、理事長というよりはこれまで12年間にわたり運営の責任を担った齋藤個人の私見として整理し、述べてみたい。

まず、YMCA一橋寮、一橋大学基督教青年会の基盤ともいうべき、この寮舎とは何か、2017年12月の会報第68号の巻頭言で述べた私論を掲載し、寮とは何かの問いかけに照らして、何が課題として、浮き上がってくるかを考えたい。

YMCA一橋寮とは何か、またどうあるべきか(2017年12月会報68号より)

理事長 齋藤金義(昭46経・48法)

寮の増改築はいよいよ来年度、2018年の夏に、着工を迎える。増改築案の決定の経緯と詳細は、YMCA一橋寮再建企画委員会の岩谷滋雄委員長ならびに設計家田代洋志氏の本号の寄稿文をお読みいただくとして、ここでは今一度、YMCA一橋寮(以下「寮」という)とは何か、そのあるべき理念は何かということについて所感を述べたい。

寮とは何か、自分にとってそれは何であったか、その問いかけに対する答えは、時代によって、また、人によって様々であり、当然異なる。しかし、世間一般にある大学寮や下宿、郷土寮などと、どこが異なるかと言えば、以下の4つの要素の中の1と2にある。我が寮は、1理念+2伝統+3共同生活+4環境の4つの要素の触媒化学反応をもたらす器(うつわ)である。他の寮は3と4はあるが、1と2ははっきりしないし、大学寮は1と2は持っていない。

現在、我々は寮の増改築案を色々議論し、大凡の方向性は確定しつつあり、具体的には4の環境に焦点を当てているものの、同時に1の理念と2の伝統に深く関係している。何故ならば、我が寮の存在意義はこの1と2にあり、1と2があるからこそ、3の共同生活に大きな化学反応をもたらすものと確信しているからである。

もともと若い学生が共同生活を過ごせば、それだけで大きな反応が生まれ、そこで育まれるものは、同じような素質と可能性をもつ同窓生ということもあって、より大きな反応と熟成がもたらされる。従って、共同生活が営める環境を整備すれば、それだけでもう十分であり、理念と伝統はその共同生活に内在し

ているから、この共同生活をまず大事にする。これは我が寮の基本的なあり方でもあり、この意見に対しては、大方の賛意は得られるものと思う。言い換えれば、クリスチャンになるならいという大上段の課題は別にして、共同生活を通じて得られる友情、人生観や生きがいの形成、あるいは青春と学生生活の謳歌というものは、下宿生活、自宅通学あるいは大学サークル活動などからは得られない無上の宝物である。勿論、こういう宝物が得られるまたは得られたことは、入寮してから或いは卒業してから気がつくことであり、入寮の動機は、寮費が安いことにあることは言うまでもない。従って、3の共同生活を最も重視し、寮生の自主的な共同生活及びクラブ活動の運営をできるだけ尊重し、我々OBはそれを見守り、それを後方から支えるというのが基本である。

しかし、言うまでもないことではあるが、我が寮、我がクラブは1の理念と2の伝統を欠いてはその存在意義はない。理念とはキリスト教に親しむことであり、具体的には聖書を学ぶことである。一人で学ぶのではなく、共同生活の場をとおして、議論だけではなく、実際の生活の場においてこれを学ぶのである。キリスト教は哲学のように頭のなかだけの論理ではなく、生きた知恵であり、それは生活態度でもあり、心の姿勢でもある。従って、口舌の輩には身に付くはずはなく、言葉と行いをとおして、自らを悔い改め、真理とは何かを追い求める者に開かれる道である。

伝統とは先輩との繋がりである。多くのOBは、後輩の寮生を心に留め、自分がこの寮から与えられたものの一部を後輩にも分け与えたいと願っている。そのエネルギー源は、寮生活で与えられた賜物の大きさに感謝し、後輩の姿にあり日の自分自身を、見出すからに他ならない。

では、この伝統は如何にして維持発展されるのか。一つは会報をとおして思いを共有することがある。しかし、何よりも大きいのは出会いである。もし、OBが寮生を愛することがなければ寮生とOBは何の関わりもない。イエスがその弟子を愛したことにより、イエスと弟子の関係が生まれ、復活のイエスは愛した弟子に顕れた。愛することがなければ何のかかわりも生じない。

愛するとはどういうことか、その人のために自分の時間を与えることである。自らがもつ限られた自分の時間を、その相手のために割いて与えることにある。家族のためや仕事のため、自分の楽しみのため、使うべき時間は山ほどある。一日は24時間、時間は限られている。勿論、家族や仕事のための時間は後輩のそれよりも優先されるべきことは当然であるにしても、家族や仕事を大切にする根源に、過っての寮生活が何かしか関係している以上、当然、その一部は後輩の寮生に向けられてしかるべきであろう。

増改築の内容は、まず寮生の物理的生活の場をより快適に、より使い勝手の良い便利なものにするのが優先されるが、もう一つの目玉に、チャペル兼ホールの新設がある。これは、現況のチャペルがもとも手狭であり、OBとの交流には利用できないという課題を解決するためのものでもある。勿論、このホールの主たる目的は、寮生の共同生活の交流をより促進し、充実させるためにあるが、同時にOBと寮生の交流を活発化し、充実させる場として大いに期待される。新しいこのホールが、これまで以上にOBと寮生の絆を固くし、当会の伝統を維持発展させるものになって欲しいことを切に願ってやまない。

この中で、慎重な言い回しになってはいるが、最も重要な課題は、理念として、キリスト教の寮生への伝道である。端的に言えば、寮におけるキリスト教の伝道は十分でない。これが課題の第一である。勿論、青少年の育成という目的、理念に照らして考えれば、キリスト教信者、クリスチャンの養成は前面に出して主張されるべきものではないが、しかし、この寮に対する卒業生の思いは、色々あるにしても、基本

はクリスチャンあるいはクリスチャン親派が今現在、OB 支援組織において主流を占めており、これらの支援に熱心な理事及び評議員は、やはりキリスト教を宣べ伝える拠点としての寮という位置づけを確信している。

勿論、キリスト教伝道以外の価値も十分あること、若き時代に自己を見つめ、共同生活をとおして、自らの価値観、人生観を養成する修練場としての寮の価値は、この寮で寮生活を送ったものの共通認識となっている。しかし、強調しておくべきは、クリスチャンの場合とそうでない場合とでは温度差があるという事実である。勿論、ノンクリスチャンでない OB、理事、評議員でも、クリスチャンのそれと比較しても、優るとも劣らない方も相応におられることは、本当である。ある意味、蓋然的なこととして、総じて言えるという意味である。しかし、現在の理事、評議員、監事が代替わりし、昭和 60 年代～平成年代が責任を担う時代になって、これがどう継承されていくか、これは大きな課題である。

そうした根本的な課題の他に、列举すると以下のとおりである。

1. 聖書研究会での聖書の学びは伝統的に維持され、守られているが、朝拝、夕拝あるいは修養会、キリスト教関連の読書会など、聖書研究会以外での、霊的ないしは主体的なキリスト教の学びは十分ではない。言い換えると、入寮の条件として、聖書研究会に出るという受け身の姿勢から脱却できていない。それは、入寮時からのクリスチャンの寮生が極めて少なく、殆どゼロの状況の中で、聖書研究会出席以外の学びの時間は、寮生の自主的な運営の枠内では、自発的には生ずることがない。
2. 一橋大学の女子学生は、昭和 40 年代は 1 学年 720 名中 10 名前後であったが、現在では約 30% 弱となっている。特に、法学部と社会学部では女子の比率はかなり高いものとなっている。当会の課題としては、大学の女子比率の高まりに合わせて、女子の入寮を認めて行くことである。同じ屋根、寮舎の中で行うか、寮舎を変えるかを含めて今後の課題となる。

	2019年5月1日現在				
	1年生	2年生	3年生	4年生	学部合計
男子	735	796	694	927	3,152
女子	294	285	314	335	1,228
合計	1,029	1,081	1,008	1,262	4,380
女子比率(%)	28.6%	26.4%	31.2%	26.5%	28.0%
出典：一橋大学公式HP					

3. 今回、5 年間で約 80 百万円の募金を行うことが出来た。しかし、内容的に見れば、7 名の大口寄附(200 万円～1,000 万円)合計で 3,660 万円と、目標の半分近い寄附が特定の方からの大口寄附である。こうした数十年に一度の場合以外では、会員 200 名の約 4 割、80 名から 1 万 5 千円平均で 120 万円の寄付が一つの目安となる。寮費を市価より低廉の金額を維持していくには、こうした再建とか大規模な工事以外の通常年で毎年の OB からの寄附金に頼らざるを得ない。こうした寄附金を毎年、着実に継続できるかが課題となる。
4. 寮生により自主的なリベラル・アーツ学習、具体的には古典やキリスト教関連の名著を自主的に

学ぶ機会をどう彼らが持つことが出来るか、寮生の自主性には任せられない状況にあることが課題である。

5. OB 名簿や消息について、十分なフォロー、管理が出来ていない。OB から自主的な連絡がなされない場合でも、同期前後では必ず消息は伝達されているのだから、こうした同じ時代に寮生活を共にした仲間の Key パーソンを軸に、年次別の横組織をどう機能強化できるかである。事務局なり年次の離れた理事が顔も知らない OB との連絡を密接には出来ないので、年次別の幹事組織を充実強化させることが課題となる。
6. 公益財団として、様々な管理上、経理上の課題をこなすためには、公益会計専門の会計法人のアウトソーシング機能を活用すれば、それほど負担はなく、公益財団を維持できるものと考えられるが、最大の課題は、毎年代替わりする寮生に毎年同じ失敗を繰り返す、継続する寮生を根気よく、愛情をもって、指導する OB がどれだけいるかである。幸い、今のところ、我が法人にはそれらの OB が理事なり評議員なり、監事あるいは一般の OB として、寮生のために自分の時間を惜しげなく使って下さる方がいることである。勿論、十分とは言えないし、あまり OB が干渉というか、寮生諸兄と近すぎるのも、寮生の自主性を損なうという観点から好ましくはないものの、やはり、OB と寮生との交流は、気楽さが優先しがちな寮生にとって、ある意味、社会を知る上での交流を早くから持てることは、それなりに、大きな教育的な効果、訓練になる。そういう OB との交流をこれからも維持できるか、現在の 40 年代の OB が居なくなったあとに、課題が残ることを懸念するのは、私がその 40 年代であるという老婆心から出ているのかもしれないが、課題が残ると思っている。願わくは、これが杞憂に終わって欲しいものである。
7. YMCA 一橋寮は、伝統的に寮母制を採用している。特に、戦後の昭和 20 年代から、大堀、馬場、松本、山口、佐藤(旧姓富田)、野澤、氏家とクリスチャンの寮母が寮生の食事や聖書研究会の参加などをとおして、親身になってお世話をしてくださった。寮母が不在の時期もあったが、基本的には寮母の存在は当寮の特色となっている。特に、大堀、馬場、松本の 3 寮母の場合、住込みの形で寮生と密接な関係が保たれ、この世代にとっての寮母は寮生活のコアな良い思い出となっている。しかしながら、住込みでかつクリスチャンの寮母が与えられるということは時代的には難しいことであり、寮生の食事を毎日(週末を除く平日)提供することは、難しい課題となっている。2019 年 4 月以降、住込みのクリスチャン寮母の氏家さんの退任後は、3 人の通いの寮母による体制となっている。一人で、週 5 日、原則 16 人分の夕食の提供は、やはり非常に負担の大きな仕事である。寮母は常勤雇用というよりは、奉仕の部分を含むボランティア精神なくしては、務まらない性格のものでもある。2019 年度からスタートした 3 人体制の寮母制度は、今後、どう維持運営して行けるか、課題である。
8. これは、極めて事務的なことではあるが、公益法人となった当会にとって、成し遂げなければならない課題は、現在公益財団法人日本 YMCA 同盟に特別財産として寄託している寮舎の土地の名義を当会名義にすることがある。公益財団法人同士の土地の移転であるから、売買であれ、贈与であれ原因はどちらでもよいが、不動産の所有権移転には、国税として登録免許税、地方税として不動産取得税が課せられる。登録免許税は、贈与の場合 2%、売買は 1.5%であるから、この場合は売買の方が登録免許税は安い。公益財団法人同士の場合でも、この登録免許税は非課税とはならない。しかし、東京都及び国立市が課税する不動産取得税は、公益財団法人の場合、

免除される余地があるとのことである。現在、固定資産税の課税根拠となっている当会の土地の評価額は、約 220 百万円であるから、登録免許税だけで 330 万円の費用が必要である。不動産取得税は本則 3% であるから、これが課税となればかなりの負担となる。今後、東京都及び国立市に対し、非課税の申請を行い、課税されない道筋の中で、登録免許税のみの費用で、当会名義に変更することにより、公益財団法人としての当会は、公益財団法人として本来のあるべき形となる。

以上の課題に対して、今後、理事会なり評議員会、あるいは会員と共有しながら、問題の解決を図っていくことになる。特效薬があるとは到底思えない。これらの課題がある中で、YMCA 一橋寮がどう維持され、発展することが出来るか、前途は多難であり、決して楽観は許されるものではない。しかしながら、確実に言えることは、130 年以上にわたる長い伝統、諸先輩からの言い伝え、諸先輩の生き様や奉仕の精神、50 年史、70 年史、100 年史、130 年史という年輪の中で、生まれ、育ち、成長発展して、今日ここに受け継がれている伝統は決して揺らぐものではない。志ある後輩諸兄は、必ずや、この伝統を守り、更に発展させてくれるものと固く信ずることで私の筆をここで止めおきたい。

「願わくは主イエス・キリストとその父なる神が、我らの願いを聞き入れて下さることを心から祈る」

アーメン

あとがき

編集後記として記すべきことの多くは、齋藤金義理事長の「序文」の中で大体言及されている。ここではそこで書かれていない点について触れたい。

まず、本書の実質的な編集委員長は私ではなく、齋藤理事長である。2018年10月に「130年史刊行編集企画方針案」を提示したのも、編集委員や寄稿を依頼する方々の選定をしたのも、齋藤理事長である。私は、齋藤理事長が困ったときに相談に乗り、励まし、あるいは気になることをご指摘した程度である。本書全体を通読されれば分かる通り、本書の編集に限らず、齋藤理事長の当会への献身ぶりは驚嘆に値する。しかし勿論、私は形式的にせよ編集委員長であるからには、本書の全体について責任を負うし、また本書を世に問うことを大いに誇りに思うものである。

もう一つ付け加えたいのは、本書の最終的校正段階で杉山晶彦さん(2006年平18年商卒)の手を煩わせたことである。本書は、当初の企画からすれば、随分分量の大きいものになってしまったので、杉山さんには大変な苦勞をお掛けすることになった。ここに記して、感謝したいと思う次第である。

山本 通(1970年昭45経)

130年史	一橋基督教青年会
発行日	2019年12月20日
発行者	公益財団法人 一橋大学基督教青年会
発行者住所	186-0002 東京都国立市東1-20-12 YMCA一橋寮
電話	042-843-0542
HP Adress	http://www.hitotsubashiymca.or.jp/index.html
銀行口座	三菱UFJ銀行本店 普通預金 普通預金 0680004
発行人	公益財団法人 一橋大学基督教青年会 理事長 齋藤金義
130年史編集員会	委員長 山本通 委員代表 杉山晶彦
印刷・製本	株式会社 平河工業社